

日本名著全集
江戸文藝之部第弐十巻

風俗圖繪集

この巻の裝幀――

背及表紙意匠　編輯部案
見返し前附・後附　編輯部案
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　渡邊新三郎氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

風俗圖繪集目錄

—(目錄をはり)—

例言

肩から腰に腰から裾と引かれた流暢な曲線と、頸及び顔と髪との持つ輕妙な筆、曲線と曲線が調和されてゐる均等美と、紅と黄、藍と紫の四色が巧みに配色されて美しい色彩を見せてゐる。色は線を生かし線は色を生かし、派手な色が用ひてあるにかゝはらず、全體として人間らしい温かさを澁味に包んでゐる。此の繪は無落欵ではあるが、何某畫工の眞筆とし毫も疑ひなく。何故ならば……などと考證したくなるかの如き外見を有してゐるこの集は、さうした要求には應じてゐない。多少でもさうした要求が滿されるならそれに對して不滿は持たないが、此集の編輯は何處までも風俗圖繪として編輯したのであるからである。

風俗圖繪の編輯方法として、例へば、祭事、男女服裝、家具、等々をいろ〳〵に分類して示す方法もあるが、そのことには別の方法を用ひた。それは餘りに小さい分類は、分類されたそのものの形や外見は示しても、その内容を示すに不便で平面的であるからである。

藝術作品は、その生れた時代〳〵の現れを示すものであるから、先づ第一に此集は目的の江戸時代の時代色ある繪畫浮世繪に求めた。それは風俗を知るためには、浮世繪の與へてゐるものが吾々の目的に一番ぴつたりしてゐるからである。

浮世繪に現はれたる、水茶屋の女や町娘、亦遊女藝妓などの同じ作者の美人畫を見ると、其美人の髪の飾や着物、下駄、持物等を除いて見る時に、あとに殘るものは作者の個性の外何ものも見出されないのである。

今われ〳〵は、その意味に於ける繪の作者の個性や特徴は暫く措き、それらの以外のものに意を注いだのである。

今まで、上流生活を中心にしてゐた文學が、江戸時代になると、その中心の勢力が次第に平民生活中心に變つて了つた。文學に於けるその變化の時の力は、繪の方面だけ置去りにはしなかつた。繪畫の方にも同じ運命は廻つて來たのであつた。

巨勢金岡以來の傳統的勢で、繪畫は上流社會で、即ち數に於ては平民の何百分ノ一の貴族の間に變らぬ夢に日を過してきた土佐、住吉、狩野の諸派に對して、民衆の中から光琳、一蝶、始興、師宣等が出た事は文學との關係に於て興味深いことで、ことに師宣によつて大成した處の浮世繪なるものは、その當時こそ尊敬も拂はれずにゐたが町の民家と民家の間に根を深くして往つたのである。

浮世繪に於て畫かれたる畫材は「貧すれど嘗て戚々を面に形はさず、惟吟詠書畫自ら娯しむ」と云ふやうな平民には理解の出來ないやうなものでなく、その點は、貧すれば直に面に形すところの、たれでも見、聞き、樂しめる處に求めた。美しいと云ふ氣持に當時の文學と同樣に民衆生活と密接に生活して來た繪畫が浮世繪なのである。

繪に對しては一ツ〳〵には改めて説明はつけなかつた。次に記す處の作者の評傳がそれに少しでも役立てば幸である。

地方的ではあるが長崎繪も亦江戸時代の風俗畫として價値を有するので最後に加へた。

評傳

菱川師宣

菱川師宣は安房國保田村の人で、俗稱を吉兵衞といひ、後に剃髪して友竹と號した。父は菱川吉左衞門入道光竹といつて、縫箔屋を營んでゐたが、師宣の幼少の頃に保田村の家を疊んで江戸に移住した。江戸に移住した初めの頃は師宣も家業の縫箔に從事し、縫箔の上繪などを畫いてゐた。元來が繪の好きな師宣は上繪だけで滿足する事が出來ず、進んで畫技を習得したが、天分は遂に師宣をして畫技のみを以つて世に立たしむるに至つた。

師宣の好んで畫いた畫材は、所謂當時の時世粧で、老若男女などの嬉遊宴飲の有樣であつた。その中でも遊女を寫したものが殊に世人の喝采を博して、日本繪師、又は大和繪師と自稱して大持てに持囃された。(大和繪師の稱は古昔の繪師に賜はる所の姓であつて自稱するのは僭越であるとの說もあるが、師宣は深く考究せずして自稱し、世の中も、別にかゝる事を問題とする程の世風でなかつたらしい。)

師宣の畫いた人物は容貌に一種の善意の稚氣を帶びてゐて、その稚氣が畫そのものをのんびりさせてゐる。ともすれば下品になり勝ちな畫材をも彼の筆による時は上品な趣を出してゐて、そこには人間らしい溫味と親しみを見せてゐる。

こゝに彼について特筆すべき事は、彼が浮世繪の大成者で、以前から版畫は存在してゐたが、版畫を藝術

の高さにまで一歩進めた事である。師宣は版畫を一枚摺にして、墨摺か又それに丹黄汁の彩色を筆で加へて藝術的なものにしたので、それが以後浮世繪版畫の盛運を見るに至つた基なのである。

師宣の墨摺一枚繪や、風俗畫譜、艶畫、繪本、挿繪など可なり多く作られたものであるらしく想像され得るが、長い年月の間に災禍に逢ひ又いろ／＼の事由で亡失されて、一枚繪の現存されてゐるものは僅少なものである。現存の師宣作畫と稱せらるゝものにも眞蹟でないものや、判然としないものも多くあるらしい。

それらについて一々論ずることは此の集の目的でないから、今こゝには省く。繪本、風俗畫譜、挿繪なども同樣に眞疑論は他日を待つ事とする。

たゞこゝに師宣筆と傳へられてゐるものを擧げてみる。

『觀學院物語』『獸太平記』『仙人龍王威勢諍』『私可多咄』『新野郎花垣』『吉原大雜書』『江戸雀』『奈良名所八重櫻』『吉原戀の道引』『古今役者物語』『百人一首像讃抄』『餘景作り庭の圖』『卜養狂歌集』『ちよの友鶴』『貞德狂歌集』『狂歌たび枕』『竹齋』『美人繪盡し』『若本繪盡し』『大平樂』『日本繪盡し』『浮世繪盡』『和國諸職繪盡』『姥男なさけの遊女』『公平武者執行』『好色一代男』『月次のあそび』『金平千人切』『和國百女』『正直ばなし』『姿繪百人首』『京今宮本地』『四天王女大力手捕軍』『百合若大臣』『石山記』『留理姫』『金平戀の山入』『宗論誕生記』『金平六條通』等々まだ多數にあるが爰には省くこととして、本書に入れた『和國諸職繪盡』は土佐三筆の一人土佐光信の七十一番歌合の中の四十三番を拔き、歌詞はそのまゝにして中の繪を師宣が今樣に畫いたと傳へられてゐる。

『和國百女』は家庭敎訓と記して當時の中流以下の女の樣々なる狀態を畫いたるものである。これは當時の

風俗圖繪として多くの參考になるものを見せてゐる。

『卜養狂歌集』『貞德狂歌集』は本全集狂文狂歌集にあれば參照せられたし。

師宣の生年、歿年は判明してゐない。たゞ師宣の鄕里保田の林海山別願院に師宣が寄進した鐘が現存して、その銘に『寄進施主菱川吉兵衛尉藤原師宣入道友竹　元祿七甲戌歲五月吉日』とあるので當時存命してゐたことを知り。『姿繪百人一首』の序文に故師宣の記念に云々とあれば、右の本が元祿八年出板されたものである故に七年か八年頃を歿年と認められてゐる。

鳥居清信

鳥居清信は大阪の人で、通稱を庄兵衛と稱してゐた。父の清元に伴はれて、貞享四年に江戶に移り難波町に住んだ。父清元は以前役者で畫技を好んでゐたが、後年は遂に劇場の繪看板を畫くのを業とするやうになつた。清信も畫技を好んで父に繪看板の技術を學び、父清元が元祿十五年に歿して以後は、その家業を清信が繼いだ。

清信は江戶に移る前、大阪に居た頃から師宣の感化を受けてゐた事は、彼の當時の畫風が物語つてゐる。繪本『色の末衣』の挿畫は、師宣風を帶びてゐる、と研究者の間に評されてゐるものである。

然し清信は間もなく浮世繪に於て彼自身の特色ある道を見出した。清信の畫く線は、一種勇健な線で美人畫を畫いて、所謂鳥居流を大成したのである。

後年は專ら芝居の繪看板を畫き、彼の繪は當時の世風に適合して喜ばれ、今日に至るまで芝居の繪看板と

云へば鳥居派に限るもの丶如く思はれて居るのは清信の藝術の大きさを示すものである。

享保十四年七月二十八日、六十六才にて清信は歿した。

鳥居清倍

鳥居家は代々家業の繪看板に從事したので清倍も同樣繪看板を畫いた。畫技は父に學んだ。清倍に二代目があつて、閲歴に關しては、初代と二代とが混同されて明らかでない。初代は父清信の存命中に年若くして歿し、清倍の墓として傳へられてゐる淸巖院宗林日淨信士、寶暦十三年十一月二日歿、とある墓は二代目清倍の墓で、世に清倍として記される事は多くは二代目淸倍の事である。

二代目淸倍は十人の子女を持つたが、多くは早世して淸滿が家を繼いだのである。

鳥居淸重

鳥居淸重は淸信の門下で、作品は版畫を多く見、肉筆も往々あつて、それらは享保から、寶暦九年までの間に作畫されたと云はれてゐる。

奥村政信

奥村政信は鳥居淸信の門下で、俗稱を源六、又は源八とも云つた。江戸通油町の書肆で書技を好んで淸信の門人となつた。芳月堂、丹鳥齋、文角、親妙、梅翁などといろ〳〵の別號を用ひ、それを芳月堂正名根元奥村文角政信筆と數多く重ねて用ふる事もある。彼は作畫上紅繪の用法、効果に於て成功した。彼の繪は世の好評を非常に博して、其頃既に彼の僞版が出來て、彼はその區別の爲、赤瓢簞を印としたり。その說明を

畫面の下に入れたりして、世の人の爲に注意をしてゐる。

政信の歿年は明和五年說と元年說との二說があり。いづれにしても七十五歲以上で歿命したと云ふ事は言ひ得る。

鳥居清滿

鳥居清滿は享保二十年に江戸浪花町鳥居清倍の次男に生れた。畫技は父清倍に就いて學び、清倍の歿後、家業である芝居の繪看板の仕事を繼いだ。その傍ら、黑本や黃表紙などの挿繪を畫いた。

清滿の特色は、役者繪、若衆、女方を畫くに流麗な運筆と構圖にあつた。裸體美人などに至つては妙の至りと云はれてゐる。當時はさうした繪が世の人氣に適してゐたのであつた。

天明五年、享年五十一歲にて歿した。鳥居派の三筆と稱す。

鳥居清長

鳥居清長は寶曆二年相州浦賀に生る。江戸に出でて、白子屋市兵衞と稱して書肆を開業してゐた。(一說に清長は關市兵衞と稱し、書肆白木屋市兵衞の男とあり。)鳥居清滿の門下として畫技を習得したが、所謂鳥居家傳來の芝居繪の方には嫡統でない彼は手を出さずにゐられた。

清長の特色は、堅實な寫生より出發しそこに立脚してゐた。遊里の女風俗を描くとき其處に描かれた美人畫は如何にも彼の特性を持つて光つてゐる。

湖龍齋、春信、文調、春章などの影響も相應に受けたが、決してそれによつて清長の特色を示すに至る道を見失ふやうな事はなかつた。

清長は一時、師の清滿が死んだので、鳥居家を名乘つて家業に從つてゐたが、清滿の外孫清峯に讓つて師家に盡した。文化十二年六十四で殁命した。

鳥居清經

鳥居清經は淸滿の門下で、芝居繪販元の中島伊左衞門の子で、俗稱大次郎と云つてゐた。淸經は淸滿の門人中では有望な門人であつた。役者繪を特色としてゐた。明和から安永にかけて挿繪をも書いた。

窪俊滿

窪俊滿は姓を窪田、俗稱を安兵衞と云つた。寶曆七年江戶に生れた。父と幼にして別れ、伯父に養育された。幼年時代から繪を好んで歌人として有名な揖取魚彥に畫技を學んで春滿といふ號を受けた。後に北尾重政の門に入つて浮世繪を學んだ。また狂歌を石川雅望に習つた。

文畫の才分を有してゐた彼が、黃表紙を自作自畫した事も當然な事で、いかにも多才多能な人であつたらしい。

多才多能な人の一生は樂であるべきに、藝術の道は反對である。それだけに人知れぬ、一見無駄に感ぜらるゝやうな苦しい修養をした。結果として彼の繪は賢實で、浮華艷美を避けてゐる。當時浮世繪の世界は勝川派の全盛時代で、そこに彼の如き人物の存在することは時代の表裏として面白い對照である。彼は晚年を狂哥師として終つた。

彼の號には窪俊滿、一節千杖、黃山堂、尙左堂（彼は左筆に巧であつた）等數々あつた。春滿は自から勝川派の人等と紛れやすいので、春を俊と改めた。

文政三年九月、六十四歳で歿した。

石川流宣

石川流宣は、通稱を伊左衞門と稱し、號を流舟と云つた。流宣の生存の時代は元祿前後であることは彼の畫風で想像する事が出來る。江戸淺草に住んでゐた外彼の傳記は詳でない。本書に入れた大和耕作繪抄は彼の筆になるもので、その頃の風俗を知るによき繪である。

石川豐信

石川豐信は、通稱を糠屋七兵衞と云つた。號を明篠堂秀葩と稱した。江戸馬喰町（一說に小傳馬町）の旅人宿糠屋の婿養子に入り、旅人宿を營んだ。畫は西村重長の門人で紅繪より錦繪に亘つて多くの制作がある。彼の販畫の特色は遊里の情調を畫き、男女の情緒纒綿たる戀の場面を描き出したが、彼自身は一生娼門酒樓に遊んだ事がなかつたと云はれてゐる。『繪本江戸紫』は彼の筆で晩年の作である。

豐信は正德元年に生れ、天明五年に享年七十五年で歿した。彼の子に後年狂哥師として有名な石川六樹園雅望、戯作名宿屋飯盛がある。

鈴木春信

鈴木春信は享保九年江戸に生る。兩國米澤町に住み、俗稱を治兵衛（一說に次兵衛と稱し長榮軒と號した）と云ひ、西村重長の門下であつた。若年の頃の繪には石川豐信や鳥居清滿などの影響を受けてゐるが、後年の作品に至つては、春信自身の個性が强く出て、特色ある畫風をなしてゐる。明和の初め頃から吾妻繪を畫き出して、後の所謂錦繪なるものゝ始祖となつた。

彼は好んで當代の美人畫や風俗繪を作つたが、春信は俳優を賤しみ『我は大和繪師なり、何ぞ河原者の像を畫くに堪へんや』と云つて終生役者の繪を畫かなかつたといふ事である。

版畫制作上の技術及び、新しい工風を彼は試みた。紙そのものゝ白さを利用して、雪中の美を作り、から摺、ふきぼかし、亦多數の色を摺り合すことなど、皆春信に至つて始められたのである。

彼の畫中の美人に、一言に言へば表情を生に出さず、無表情の表情である。そこには深い靜かな美がある。それが彼の美人畫の特色である。

明和七年、享年四十七歲で歿した。五十三歲で歿したとの說もある。

北尾重政

北尾重政は、本姓は北畠と云ひ、俗稱を太助（一說に左助）と云つた。紅翠齋、花藍齋、北峯老人、醉放逸人と號した。

重政は春信の門下と云ふ說と、別に師に就かなかつたとの說もある。

彼は多作家の方で、京傳、通笑、全交などの黃表紙の挿繪などを書いてゐる。本集に入れた繪本吾妻抉（アツマカラゲ）は

寛政九年の出版である。

元文三年に生れ、文政二年、八十二歳で歿した。

北尾政演

戯作者として知られて居る山東京傳は、北尾政演の畫名である。本姓は岩瀨、又は灰田、名は甚太郎又は傳藏と稱した。畫技の道は北尾重政に學んで、葎齋政演と號した。遊女を多く題材に用ひた。本集に入れた四季交加は政演の繪に重政が加筆したと云はれてゐる。『青樓美人合自筆鏡』も有名な作である。又彼は圖案家として才能を持つてゐた。『小紋雅話』はそれを示してゐる。彼も多作の方で一生の前半は繪に、後半は文に力を用ひた。

寶曆十一年に江戸に生れ、文化十三年に享年五十六歳で歿した。

東洲齋寫樂

東洲齋寫樂は江戸の人、八丁堀に住んでゐた。俗稱を藤十郎兵衞と云つて、阿州公の能役者であつた。浮世繪の中で、東洲齋寫樂ほど、ことに彼の役者繪程、目につくものはない、彼の描法は特殊な個性描寫で、その鋭さは近代人の尖つた神經にすら內心同感出來るものがある。

寫樂がその當時喜ばれなかつた事も想像出來る。彼が最も制作に全力を擧げたのは寛政六七年の二ケ年と云はれてゐる。彼の歿年は不明である。

磯田湖龍齋

磯田湖龍齋は江戸の人、兩國藥研堀に住んでゐた。俗稱を庄兵衞、名を正勝と云つた。土屋家の浪人の子で、畫系は西村重長の門人だとの說もある。然し春信と交友であつたことは、彼の畫系の上に特別の意味がある。何となれば彼の畫風に、明和安永の頃は春信風の作風を見る事が出來るからである。

湖龍齋の浮世繪の特色は圓味のない絲の如き眼と、眉の鍵型なことゝ口や手足の細い事である。春信の歿後は湖龍齋は彼の個性を出して特色ある作品を殘した。

彼は肉筆畫にも長じてゐた。四條風の草筆の畫を畫いて、遂に法橋に叙せられた歿年は不明である。

一筆齋文調

一筆齋文調は、狩野派の畫家石川幸元と云ふ人の門人であつた。後に轉じて浮世繪畫家となつた。湖龍齋と同じく、明和安永の頃、春信風の版畫を多く作つた。彼は畫材を美人畫や芝居繪に求めて優れた技倆を示した。狂哥なども作つた。歿年は不明である。

勝川春章

勝川春章は俗稱を勇助（祐助？）と云ひ、勝宮川春水の門人であつた。初めは勝宮川を姓として居たが、後に勝川と改めた。李林、旭朗井、縦畫生、西爾、六々庵などの別號がある。

彼の作品は美人畫、役者繪を題材とした。彼は寫實主義を以つて過去の芝居繪の改革を企てた。彼の畫いた役者繪は文字說明がなくとも何某の舞臺姿だと一見してわかる。作品の筆法は謹嚴であると同時に溫雅

で、少しも浮々した處がないのが特色である。
彼は人形町の繪双紙屋林屋七右衞門に寄寓してゐて、店の仕切判である壺形の印章を用ひた事があるので壺春章と呼ばれてゐた。寛政四年、享年六十七歳で歿した。

勝川春英

勝川春英は江戸の人、明和五年の生れで、春章の門人、本姓を磯田、通稱を久次郎と云つた。九德齋と號した。
彼は役者繪に巧であつた。細繪、團扇繪、摺物繪、繰り芝居の看板など畫いた。文化元年彼のある種の繪が風俗壞敗の掟に觸れて、豐國、哥麿、春亭、などと手錠五十日の刑に處せられた事もあつた。文政二年七月、享年五十八歳にて歿した。

勝川春好

勝川春好は春章門下で優れた人であつたので小春章と呼ばれてゐた。春章の用ひた壺形印を用ひたので、小壺ともいはれたが、若くして中風症に罹つて右手の自由を失つた爲に、左手にて畫いたが、遂に病の爲め畫事を續ける事が出來ず麻布善福寺内に隱居した。
寛政年間の人で、歿年不明。

勝川春潮

勝川春潮は、俗稱を吉左衞門と云つた。號を俊朝、吉左堂、雄文堂、東紫園、忠林舍など別號を用ひた。

春好、春英と共に春章門の優秀な門人であつた。彼は當時評判の高い美人などを畫材にしたり、市井の風俗を多く畫いてゐる。後に畫事から狂文狂哥の方面に轉じた程であるから文才にも富んでゐた。
文政年中に歿す。

葛飾北齋

葛飾北齋は本姓を中島、幼名を時太郎と呼び、爲一と云つた。後改めて中島鐵藏と改めた。三浦屋八右衛門と自から名乘つた事もある。勝春朗、叢春朗、菱川宗理、辰齋、群馬亭、雷斗、戴斗、錦袋舍、畫狂人、卍翁、卍老人、北齋、などと多く號を改めた。（これは號は門人に讓る習慣があつたからだ）

父は幕府御用達の鏡師であつた。少年時代は彫刻を習つたが後に勝川春章の門人となつた。性來自由人である彼は他派の畫を學んだので破門され、摺物を畫いたが生活が出來ないので、柱暦を賣り、轉じて七色蕃椒の行商となり下つた。それから間もなく、生活のため狩野融川院の門下に入り、日光廟修繕に町繪師と共に日光に向つたが、融川の繪のまづいことを指摘して又破門。九十年の生涯に居を轉ずること九十三回、奇行數ふるに遑がない。彼の外面生活變化は、彼がいかに自己の藝術に對して忠實であつたかを語つてゐる。外面生活を繕る爲に決して自己の本道を忘れる行爲はしなかつた。彼は九十年の生涯を赤貧の中に辛苦を重ねて藝道に邁進した。

北齋の畫は一見して、あの誇大にして實景とは似てもつかない表現が目につく、が彼は決して高い意味での寫實を忘れ怠つてゐるのではない事が理解出來る。彼は藝術的情熱の炎で畫いてゐる。その力は觀者の心

に充分感じさせるものである。
彼は肉筆彩畫は色數に制限のある版畫に彼の佳作が多い。
寶曆十年に生れ、嘉永二年九十歳にて淺草聖天町遍照院の假寓に歿した。

菊川英山

菊川英山は江戸の人で、父は英二と云つて造花業を營んで、狩野派を習ひ、浮世繪に轉じた。英山は名を俊信、通稱を近江屋萬五郎（一說に佐花屋萬吉）と云ひ、號を重九齋と云つた。
最初は父に畫技を習ひ、後に鈴木南嶺に習つた。北齋門下の魚屋北溪と交友の間がらであつたので、彼の畫風は北齋風の影響を受けた。美人風俗役者繪草双紙の挿繪などを畫いた。
慶應三年八十一歳で歿し、晩年不遇であつた。

長谷川光信

長谷川光信は大阪車町に住んでゐた。繪本御伽品鏡、繪本家賀御伽の著作がある。松翠軒、梅峯永春、などの畫號がある。享保から寛延の頃の人と思へる。歿年其他は不詳である。

歌川豐春

歌川豐春は、俗稱を但島屋庄次郎と云つたが、新右衞門と改めた。外に昌樹とも稱した。一龍齋、潜龍齋、潜翁などの號がある。豐後國臼杵（いろ〳〵說がある）に生れたが、京都に出て狩野派に學び後江戸に下つた。彼は何人の門に入つて繪を修業したか、鳥山石燕說、石川豐信說、西村重長說の三通りあるが石川說が

確かゝと思ふ。歌川は芝の宇田川町に住居したのに因んで自稱したのだと傳へられてゐる。豐春は描線に達者であつた事と、また浮世繪再興者として、歌川派の始祖として有名である。

彼に就きて書くべき事は、西洋畫の遠近法を巧みに浮世繪に入れた事である。

文政十一年、享年八十歲で歿した。

歌川豐國

歌川豐國は江戸の人で、芝神明の木像彫刻師倉橋五郎兵衞の子で。幼少の頃豐春の門下となつた。俗稱を能吉、號を豐國と云ひ、一陽齋豐國と號した。

豐國は美人畫に特色を持つてゐたが、役者繪も得意であつた。晩年の彼の繪は下り坂であつた、讀本黃表紙の挿繪なども畫いた。

文化元年繪本太閤記中の繪を錦繪にして出版した爲に、手鎖五十日の刑に處された。

文政八年、享年五十七歲で歿した。

一立齋廣重

一立齋廣重は江戸に生れ、八重洲河岸定火消同心の安藤德右衞門の子で、幼名を德太郎、後に改めて重右衞門また德兵衞と云つた。歌川豐廣の門人となつて、歌川豐重の名を得た。別號を一幽齋又は一遊齋と云つたが後年は立齋、一立齋とを併べて用ひた。狂哥も作つて東海道歌重とも云つた。

彼が幕府の内命で京都に赴き、八朔御馬進獻の式を拜觀した時に、その道中で得た東海道五十三次の錦繪は彼の名を高からしめた。其他自然の妙趣を畫嚢に盛つたものが次から次に出版され、前人未拓の道を開い

た。

廣重の風景畫を見てすぐ思ひ出すものは北齋である。廣重と北齋はその趣を異にしてゐて互に特色ある妙味を出してゐる。北齋は動的美で廣重は靜的美だと評いはれる。彼もやはり美人畫や黄表紙などの挿繪を筆にした。

安政五年九月傳染病に罹つて年六十二歳で歿した。

歌川國貞

歌川國貞は姓を角田、通稱を庄藏、また庄三郎と云ひ、後に肖造、一雄齋、五渡亭、香蝶樓、月波樓、富望山人、桃樹園、富眺庵、北梅戸などと號した。武州葛西郡の人である。歌川國貞は前半生の號である。種彦の田舍源氏挿繪で有名である。彼の畫いた當時の上流風俗や、また室內裝等は風俗史上必要である。

元治元年、七十九歳にて歿す。

喜多川歌麿

喜多川歌麿は武州川越に生れた。幼にして父を亡ひ、母と共に江戸に移つた。少年の頃鳥山石燕の門に入つた。

姓は北川、名は市太郎、後に勇助と云ひ、更に改めて勇記と稱した。畫號は豐章と號した。天明二年頃歌麿と改號した。別に石要、木燕、燕岱齋、紫屋、などの號もある。(綾丸と號して狂歌も作つた。)

初め忍ケ岡に後に通油町版元蔦屋重三郎方に寄寓した事もあつた。神田久右衞門町、馬喰町三丁目、神田

辨慶橋と轉々した。

彼は浮世繪師中の美人畫に於て畫技の巧な事で有名である。特色として彼の美人畫は形を見ると一見不自然かの如く見ゆるが、それは歌麿らしい美化であつて、其處に彼の藝術があるのである。描寫が周密で、殊に顏の表情に於て明白にそれを見せてゐる。線も色も共にその優雅な美しさは驚くべきものである。

文化元年「太閤遊觀」の圖を錦繪にして、三日間入牢し手鎖の刑を受けた。その二年の後、文化三年に五十四歳で歿した。

鳥文齋榮之

鳥文齋榮之は姓は細田、通稱を彌三郎、狩野榮川の門に入り後に文龍齋に浮世繪を習ひ、後鳥居風を慕つて鳥文齋と號す。

彼の特色は狩野風の墨畫の中に浮世繪風を取入れた處にある。

文政十二年歿す。

門人に榮理、榮昌などあり。

西川祐信

西川祐信は西川派の畫家で、京都の人である。幼名祐助、後に右助と改む。自得齋、文華堂等の別號がある。狩野派に學び、後に浮世繪師となつた。彼の畫の特色は、生氣と情味ある美人畫にあつた。

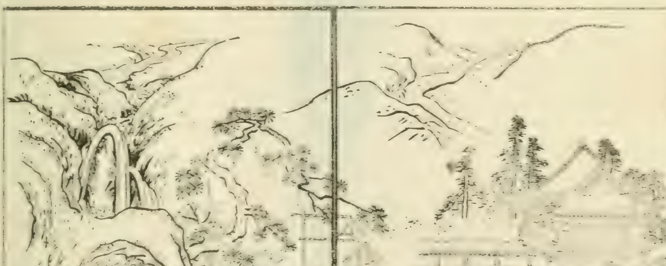
寶暦元年、七十四歳で歿す。

下河邊拾水

下河拾水は西川祐信を慕ひ、畫風は祐信の影響を受けてゐる。狩野派を學んだ事もあると云はれてゐる。
繪本滿都鑑は安永八年出版と稱せられてゐる。
安永天明の頃の人であるが、歿年其他は不詳である。



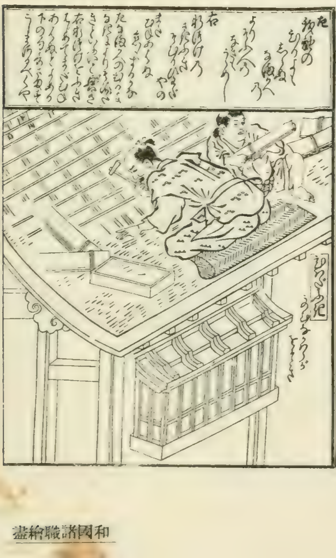
[illegible]




ぎんざ


うち師


かべぬり



三番





四番





五番





六番

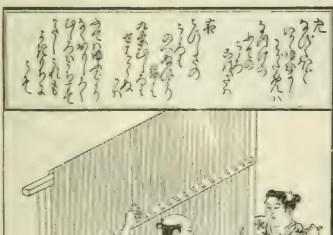





七番



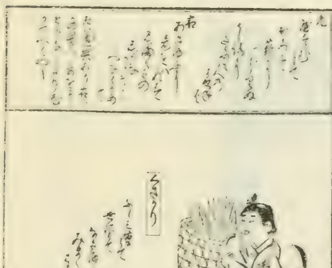

八番





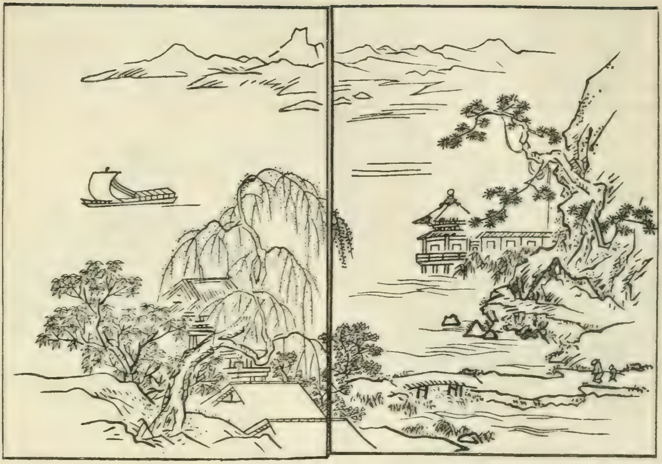




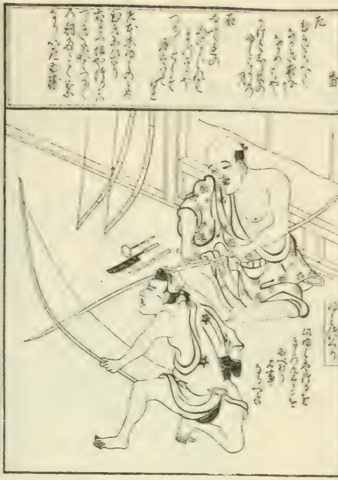




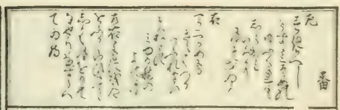

和國

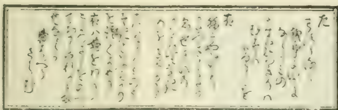






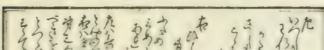


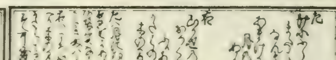


















文道




番




番

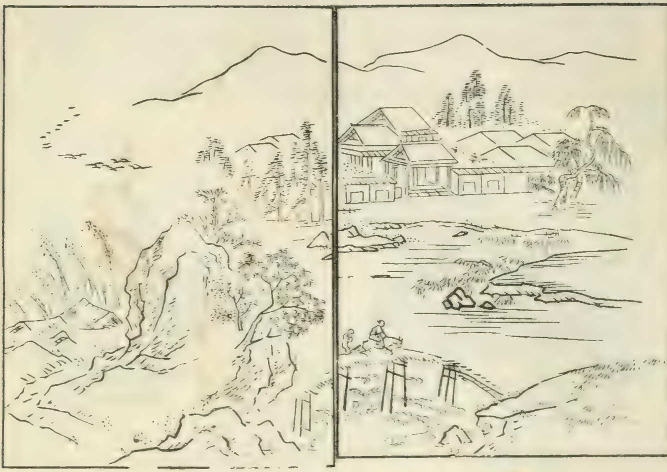


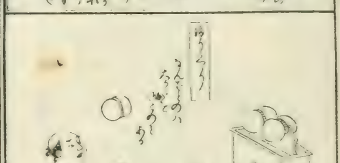


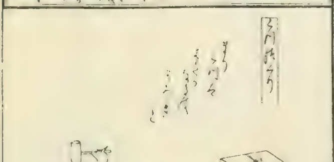
畫





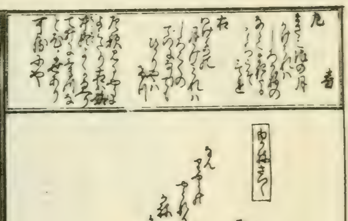


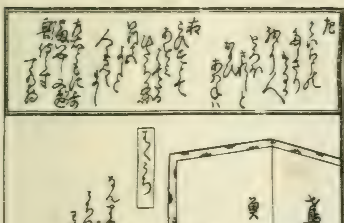






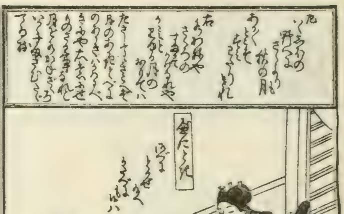


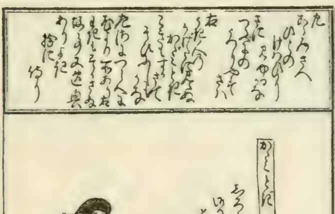














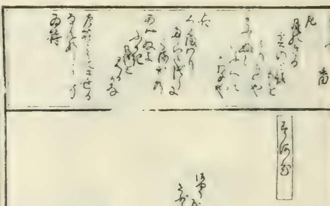


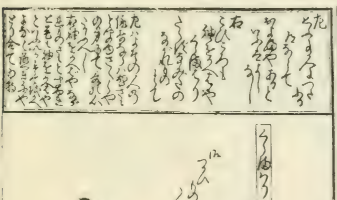










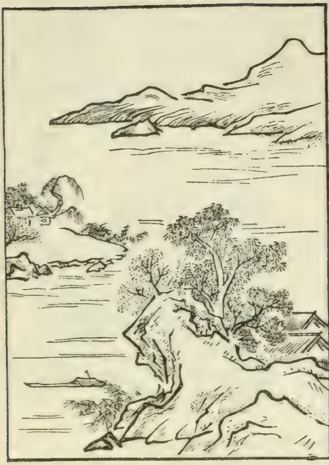





福帳







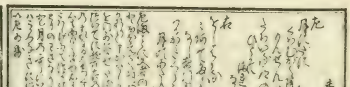


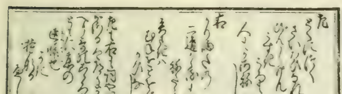














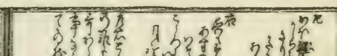


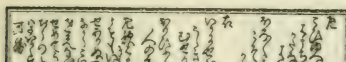

でんがく


さるがく





















右此諸職繪盡ハ菱河氏師宣といへる
やまと繪師の新集書なりしを三帖にあつ
め梓行者也

貞享貳年乙丑二月吉日

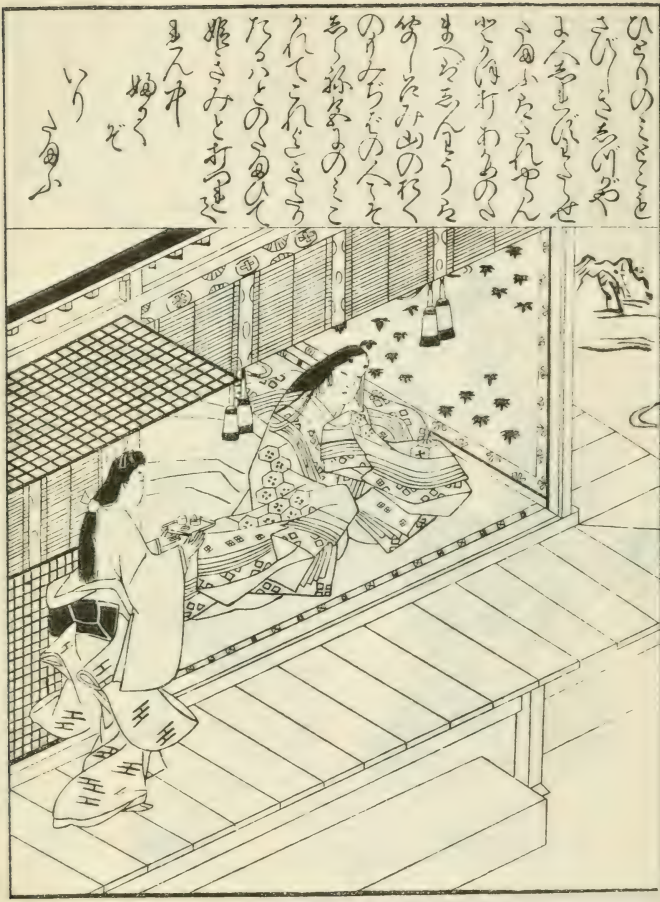
繪師 菱河師宣

和國百女

傳曰許氏者善傳神繪以
朱桃推而置肆中取千錢
頃菱川氏某以畫鳴時暇
日繪百女圖令書林松氏
朔旦以其圖欲干鏤版斎
永久尓云

○なうけのたゝ
これをかくしいと
やことなき人の
こゝろとしかさを
わかひつかそれ
まのふせわかて
まんかへばさぐさうけ
おとのひめこして
二八ばかりなれや
花とあざむく
よそほひを見る
まれなりなど
くおもかげ
あづまのせる
まへぞ姫君は
わらんありられ
ざりみせのひはく





○よしわらハ人乃
ひとり娘ハ海ざ
またちやうあひの
あまりにハなし
すゝ山二つまうの
琴をかゝハさま
んどそ上手にて
よしとよびあつ
めそけりこあつま
つまをとけさく
ひさしまへバ母
笑ハ母ひていそ
ぎ娘ゲござふ
もらはうかすぐ
さめんとそめし汚
うひのふみろし
ゆとうちつまる









○このさ御作く
わそばされて沙
御すのうらさとし
さのまゝあすぐさ
みちさわにさそ古
今方紫しせるの
ごりげんじ義
思ひぐさのぞう
らしはらさうに
あるさうしを書
うつす御せられ
すかひうれつま
くぐさかど也れ
うゝりさの沈うう
かりしのめずつ
とおりうく
御りせん





○桜のたれ給くと
さくら咲ぬよのもれ
皆けさは氣を
いかりも花見んとて
もよほしゆく人多
し弥生の花ざかり
めいめいの遊
山の花奇なるを
ちりまのふ花の
よし野たつの野
山などのことも
都のわしいざや
よし野へ都の書
ともあそびちれ
清水やとまりがり
ざくらこそ花見
せんとてさひしと






○むかしより人の







○こゝろひいち日まち
ふさくしやうらわれ
たれも少そむつかしう
ますることいへとかり
神の女乃きようやう
ござりませうおそらく
そのさ自まいあん
まつさましその心
わらそのいくさ
のすそをうけて見
つとませうといやる
さそく
こしやうか
るすや
おあ入を
ふりくるい
との、





○あいやうれはまさ
かゐらに一まいう
かさりくあひられ
まけまじばかぶく
じやれしてらみ
まいうとうられ付
ありよそじろ
まぞあそびのみ
どまのけあいさ
ないうられてから
めのとくあづけ
そぞそのちやあれ
ちんじやうれして
すれるもふそく
なみすらんせ
とうく身ぞうよ
びむうほされた





○たくげのわき
るひむしなをのれ
女房つまにむつ
まじくいふひしう
おりとちがさえ
らず給をそのうち
のなどりをれしを
ころくとあんじ
られしむ内にされ
ききりてなりと
ねどりの袖をる
すそふびだちをる
をうのしとひとり
とに今らいづく
いうす衣をさう
ぬらんとあり八づ
きの宵ふそさび



しくろしたが
ひさいひらせて
るとわのひ様よ
ちゝかりんなどれ
ぞゆくるゝご
をとゝの人すよ
おさりちゝた女房
さらいざやめく
なぐさめんとくむ
もあらしをさきに
大形あるまし
仰と
召まひ
く
ゆく
なり



花に百花あり菊に百菊あり季のかはり
其つねとうつろはすしけきをいらんとく
爰に畫工師宣和國の風流を
託して歳まくあまた家の物不可勝
計今更よ百女一まきと畫彼數と
切ノこゝろあらましけれいさらふ乃こと



こ河くれはき
づら事とのえて
身のかざとなれば
するもしさうく
りのぬはざる女は
その身一生のは
ぢ
かなべし
よりあひて
人のよし
あしなど
いはん隙より
くりそめゆきを
針を
とらち
ならぬ
ぞかさるく



○ごふく屋にては
めしやうなどをば
とりわけてはやり
りのこのみしこんや
ぞ染などもかゝる京
とのさそ上まの
てをそろへてあつら
好るするなり其
おり目いと細ろ
ゆがみなきわるさか
もりとのやかやく
ちゝそうに紀れ
めを見とゞるやれ
地のりもやくふ
そめいろのむらを
人とは今ちとふ
けんぐくのりも



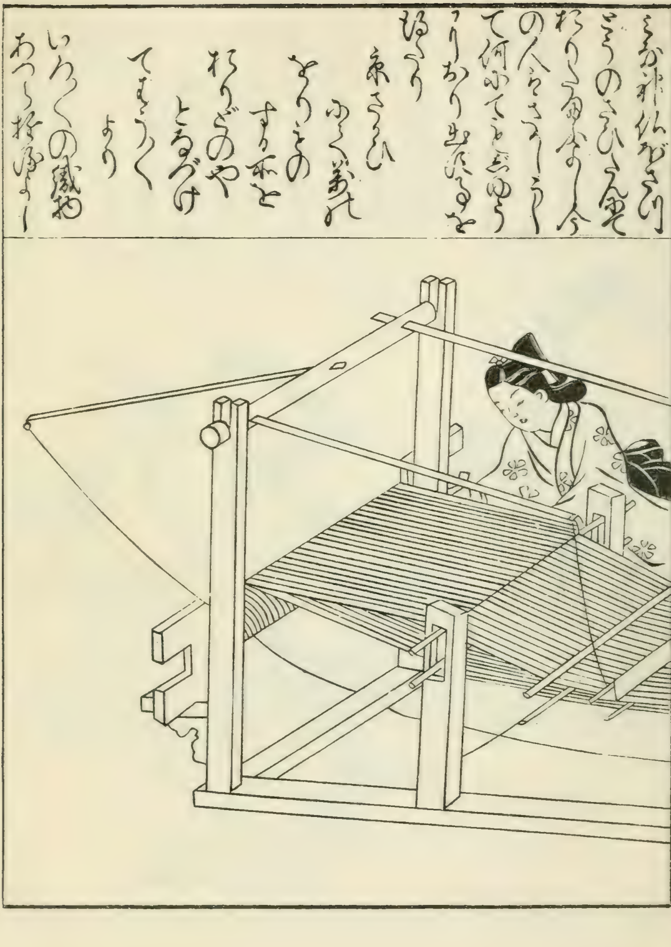


○人ハこゝろのもち
わりすぐなれば
ざはとかちほどの
ふわりきのもん
のめいりいくく見と
にわくた目ゝく
ふわくた命ゝふ
おくちなりをして
いふくなどのおくつき
こ身をわくひさま
見さればくびひと
はともり事かぞ
らくせんくに命く
はなさそもぞよ
そのごうつりそ
せちわくひのころ
しもるれがそぞ



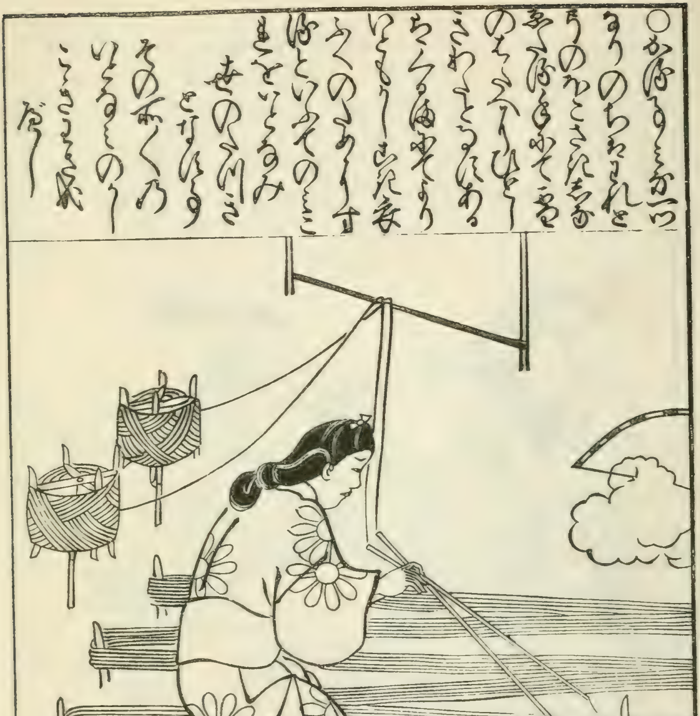






○今もむかし河内
の国山の根ざ所と
いひし所はもめん
の出所にて諸国へ
うりひろむる此所
の女はたよきことぞ
いとやさしきここ
ろばえもむまれ
あづかりてこれ
ともするぶとやれ
アとのみちかく
たよりてこれあし
ゆさをなげまた
あしうれたる人ある
いゆふべはたてよ
りうさてはされ
するをきかそのむ



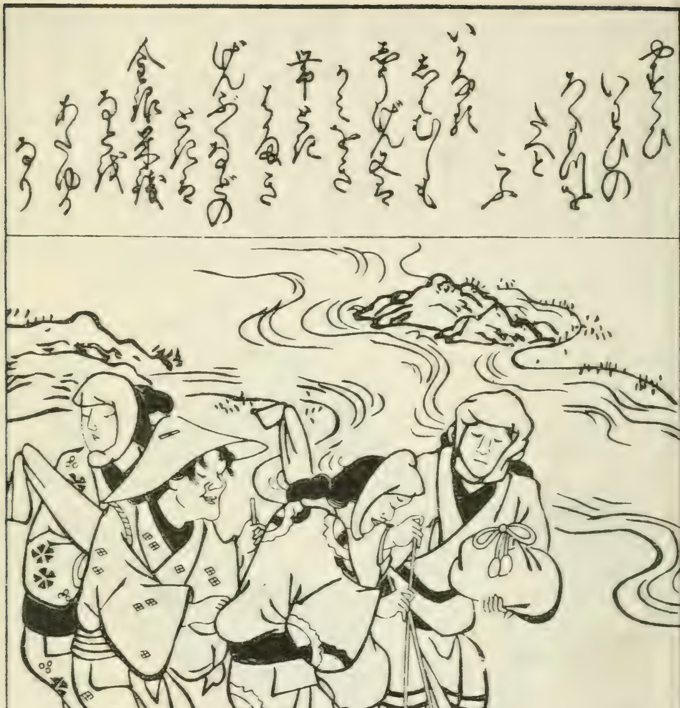






○女の盲りくそ
なもしせん琴春
げいとおもうされど
う人ばくのなぐ
何ごゆもかなしば
いとりてさもと
あれむすめのさま
だこうやうしふ
こそりかそ
うるさきる
いろくの
ともれと
はつけく
さ
たちひまみ
して
門かとけち





いなかの里女
野人といへども
さびしきふるさとを
すくなけまゝならん
くまなくせてかど
なさつましあまり
おひむつなす
気しいとひぞ
そのさへ新穂る
番代の女かゞと
つけて風かゝの代
くゝりをしさらばり
りしなまそても祝
の方へれ礼義よ
とそゆくされるを
ひるぞうの馬
くりたまのとら





○なかのこゝろし
みちのくのよね乃
志やうまつわらび
ゆいがうまゐらせる
おうちのくだされ
さくのゆめして
ちかをやれゆるぎ
のむごとをそれこと
みつひねそれきさ
めうすゑ男みのさ
しこりとうらうじ
うしろをうらまへ
げぞもれやゆへと
のりかあづまから
げの志やうごをる
わひひまてかすれ
あん　さゆなり





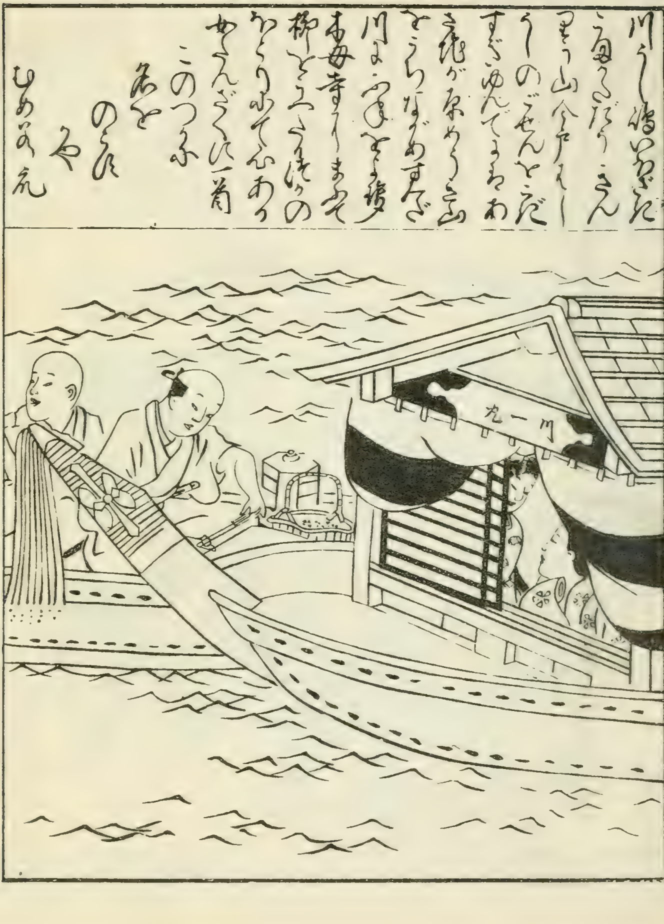
○さらし布くしか
らそのやまとあらはせん
布かなしくはうう
あちどぬのちぐゝ
みちのくにきのゐ
すらもより代布
ありちぐくわゆし
さらゝや加ざらし
加ざりて名物の布
ありいゝの出せりさ
山おかますそも吉河の
女の志のさうしあさ
のなしとうこ事れ
れは、さんとふかうり
しわがへてよまさう
うそだとすりわゝ
こさ女こむとめハ





形(カタチ)を画(ヱカ)けハ吹(フ)香(キヤウ)のも忽(タチ)チ香(ニホヒ)色を
いろどりハ無(ム)影(エイ)の月速(スミヤカニ)照ル樹(キ)を丹(タン)
青(セイ)すれハ鳥来りて鳴(ナキ)雲を呼ハ
詠りて吟(ス)雪をかけハ寒く氷
と青ハ濃し是清ハ心と目の媒(ナカダチ)と
いふものも





○かくれもやなき
う世女たちすかた
ぎんじやうにつみを
きらひけしやう
ゐごすかたにひま
なかりておけしき
らん月と見のよ
てりかゝやくせん
だんはなびんに
ぎうせんのねはな
あんてんはまそ
かひらあん山の
ゑまのことくあ
あつかさえを竜
てりなばねかどの
上﨟しなたせの
すくなれらやゝ





○らう人はさつやう
すぎてはれは
ミうむすめをと
ちくら琴やさし
せんねざりうさ
こまひあうひら
能をまひならを
ならはせてその
のげいにさせう
みずれら何さ人
めし出されるぜん
のおわてうひり
あげりらためく
ありさまとおもり
ちくにむすめら
のれやざをこれを
うやしありひく



そのうちの師を
りとめておどり又
もこまひたゆさ
せりぶるどやうの
けいこさせてい
さぎりやしくかざ
つきたり
やりこの
此子此
ちわ
よひやか
さうてし
よひすや
さよのすや
とかめ?さ
ここり
う郎





○町人の女房その
身のかゝりもちよくむ
まれつきうつくしき
うゑあんづけその
法師やのすまゐを
のかしん細いの事へ
もちぶんはかりをを
わるゆへかくされ
そとはうりのやう
ぞくしてへりは
あるまでいて行ひ
わざとも
うちゆく
行きく
らうく
志河のほ
行也



○わかけ女さそれ
りんきのおさだ
わらかうとおほ
女ゐ衣めくすぐし
まつがんりやうく
りわさうしそうの
ふうぞくやの三男
にのくわんおうやう
のさりなりとかり
そわやもまるある
ある中なるとも八丈
ドにつまとけ立
引きれぞを
かんさひり
盛さとるまて
ごとやらいやし
〳〵





○上方よりくだめ
てんぐりしかうさう
人めかさとみそれ
たさこぞそのころ
このことあかし
かどの・さかゆう
よし庭ちのを
かせもえやふとも
おかへさらいさ姿
及びみしさんや
私のしくさと見ん
相せんさそうちつ
まつぶらもあるよ
これそのしくさせ
て太门はくさし
かくとえ添ものめ
てゝ八てうきた時





○み月のすゑを
ゆふぐれしておもて
をまちしまう
あゆみさにうし
うらけてきん
ぞうにむかひて
いへばた
たゞの
かさやくハ
あられ
ころの
つまみて
よれなれる
ドや
おりかさなるを
ちそうして
くしやまとき





○さくらどくねぐ
られそくせもせぐ
かつぼうらせつむ
まねわふしそあう
がらけまいつさやむ
そお偏こだでれ
つまでてぶん西寺
あすりり。おぶんざさ
どさうんらそさうそ
ひゆくれさそく
たゝわら
ありがられ
きうぬ
寺ゝ参すまば
おし
もうね
やく



○わかきを見ては
とおもふもあはれ
らくかとのみすひ
あらさこれはかを
とはれ事とも
ちらしれりは
ざつまし、ぐへまうれ
そしよりうれど
とのおらそびを
いはかぐふいてや
みりてゆきあを
いへた

中どりの
いつはりを
あえがをて
ぜひしんなると
いかさ



○さつきのころは
いづくのくにまで
もさなへとるわざは
よ所でなりけるに
日かずもよしとて
吉日をえらびて
田をうゑる事は八
乙女たちであつまり
出から二つまう方
ないのとうだんを
のべうたうたひ
たまとていとまか
すくうたいくさ
わらは田をうゑ
さわとめりけりや
くさわとめかし
の部山て花の

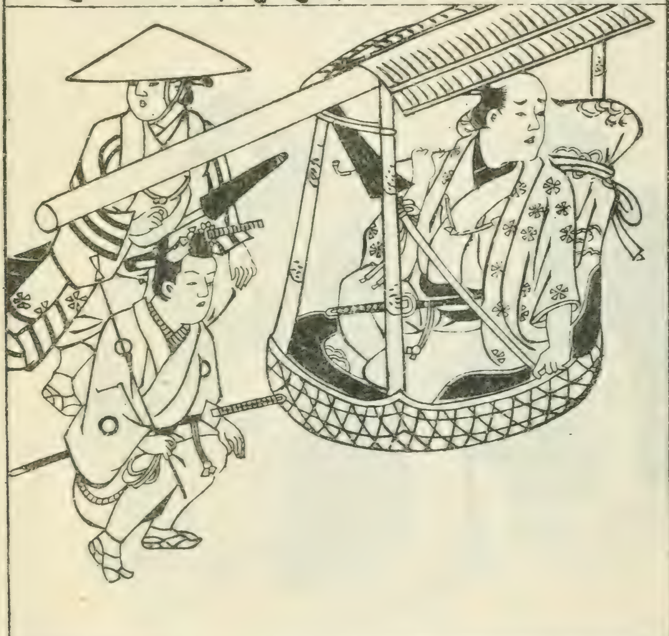




○あたごまいりは
祓をひとれさらふ
ぜきれゐりのゐ
ありて六月廿四日
千日まいりとてを
貴の男女さんけい
す谷は一のとりゐ
よりうの[illegible]はさうね
まそみ千河の方
けんそれ山たるん
西よりやおうの
人々こさのそれの
ちや屋そこ茶屋は
色ミしのたかち
まはうち波ひ
りとかてうちるゝ
けて山をくゞ[illegible]



こゝろやすめ妾あり
よろづよき所あれど
久しのくるまおとこ
なじみも女の手紙
りやくしも多し
月にいくら遣はす人
すゝむるけふとども
そうり姫の代るとも
ゆへしも女のてより
取もちてひとつをき
られることのわび
ものとはありて
られしかるこの
ゆるしもやう と
その名めくてびき
もまづびよろこぶ



○びくにとハやさ
よしあしのわかる
まさちやしさ
かみもそそのごと
はせがひちぐの
んぎしうそ色そ
うろしさそ色との
びくにがだしおる
られ川さざらひ
まいよらに色び
らまされふやかく
ぞうすこれさと
まよさうさきび
りとが川くずのれ
きあのかたさまよ
ひく人すくへけ道
てらうハびくまき

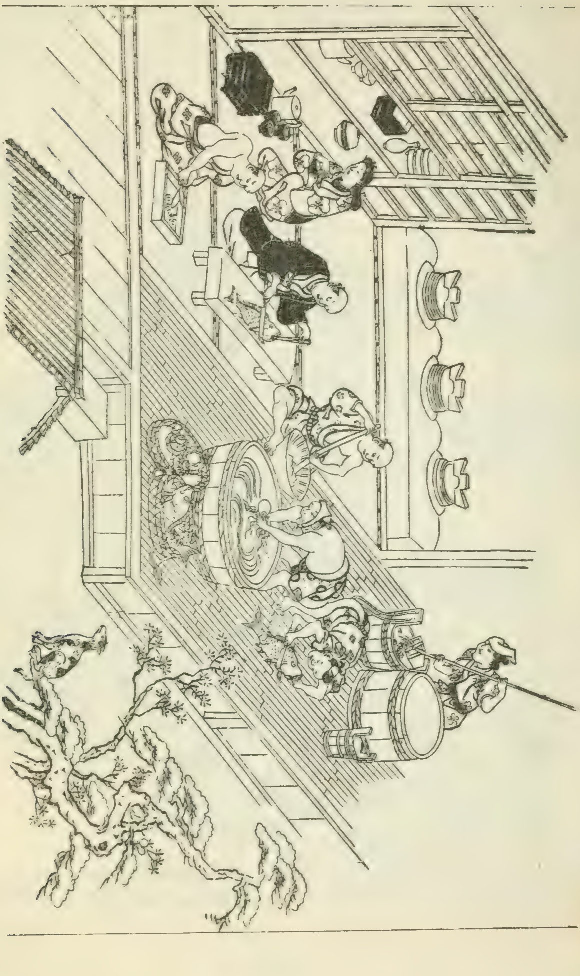


つれさと心をたむ
しのゆとうすき
ねともありまいらすみ
すゞのこゑにさそ
さすれ我よりくり
とくまこちずれと
そそくさとあひ
らくのふちよ君
まちずれてきさと
ましみともありぬ
まふ
ふれをきりて
ゆめとや
りえん
うれしや
せん
あかりしこ



元禄八乙亥歳
正月吉辰

畫師 菱川師宣
書林 松會朔旦



豆腐



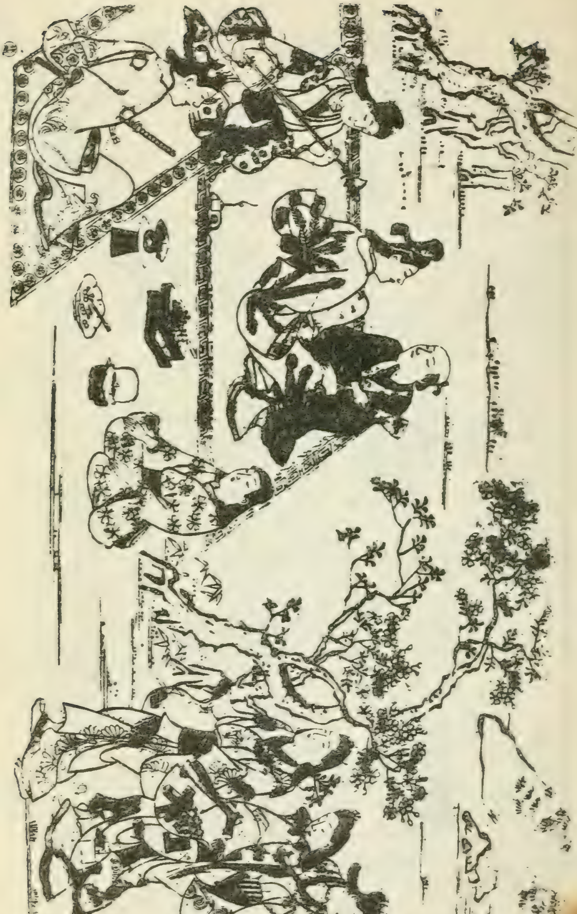
師宣

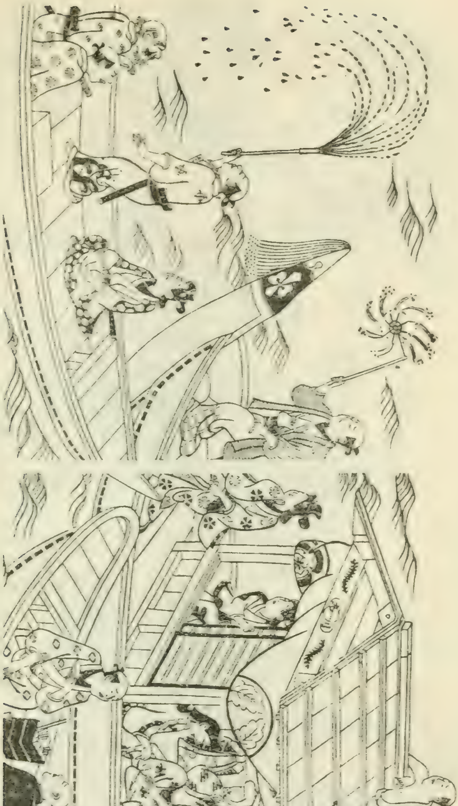


師宣

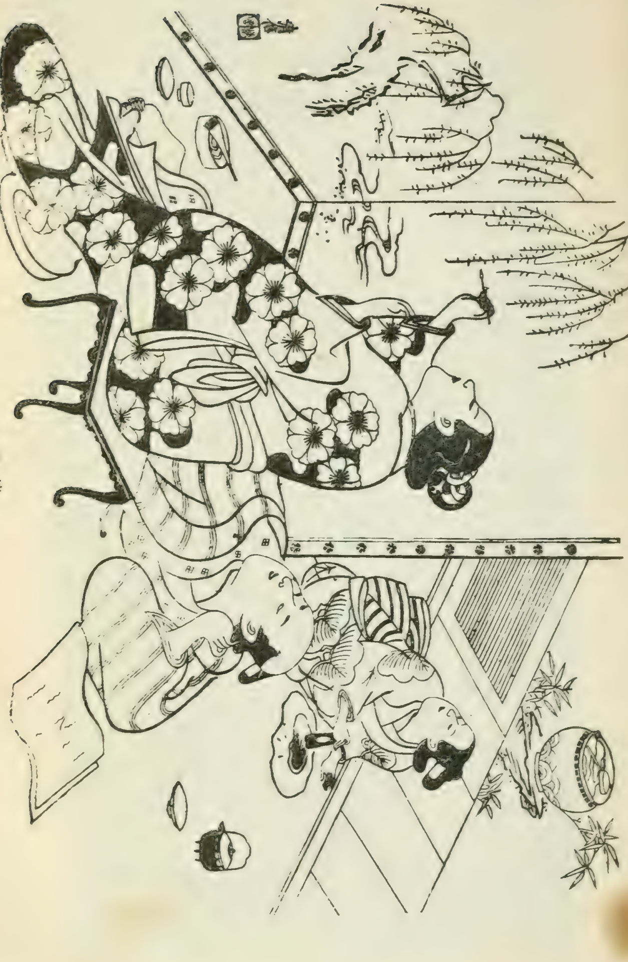


師宣





師宣



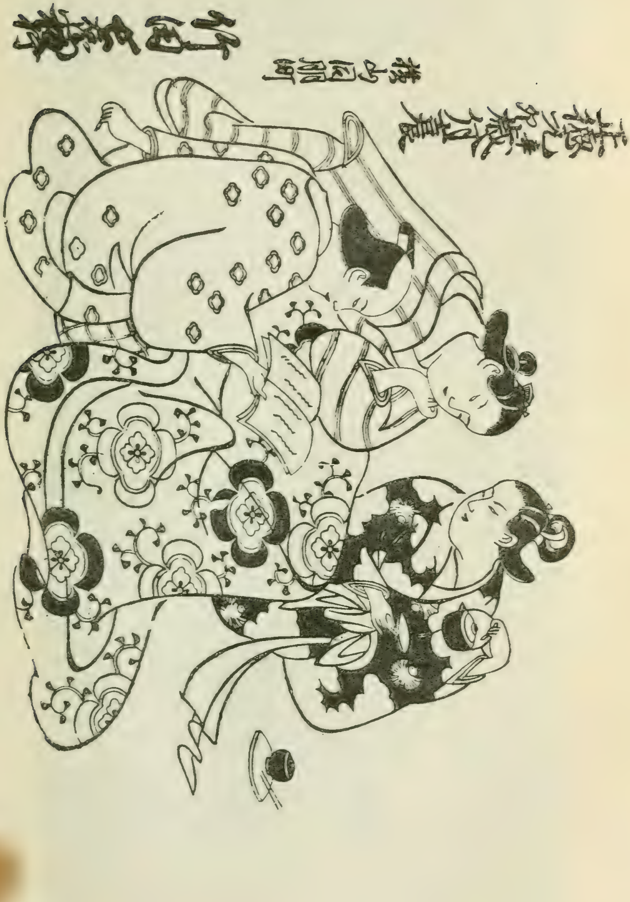
信清



清信



清信



清信



清倍



清倍



清重



清重



清重



政信



政信



政信



清滿



清 滿



清長



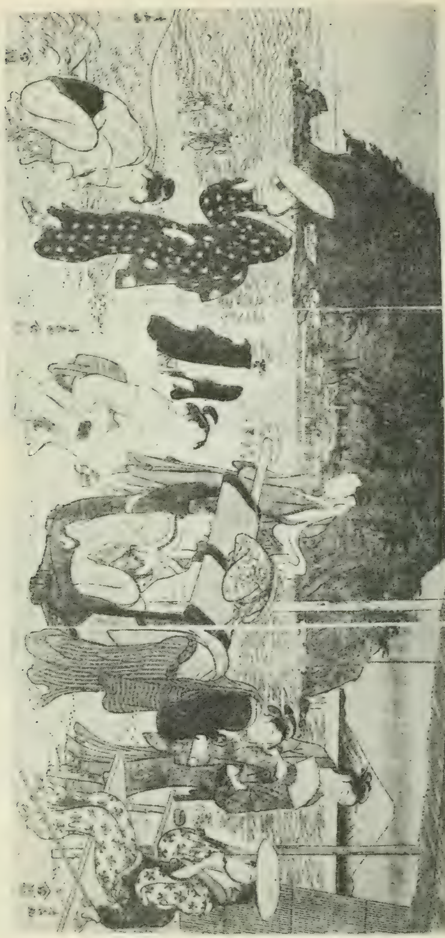
清長



清長



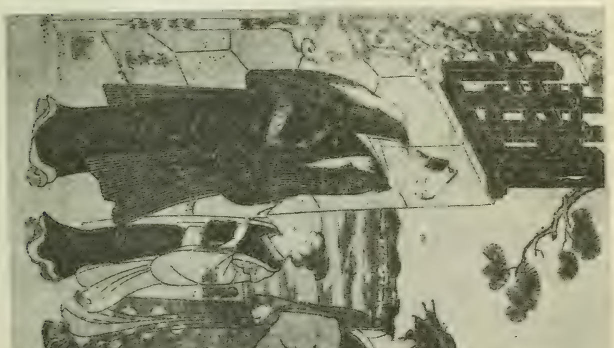
清長



清長

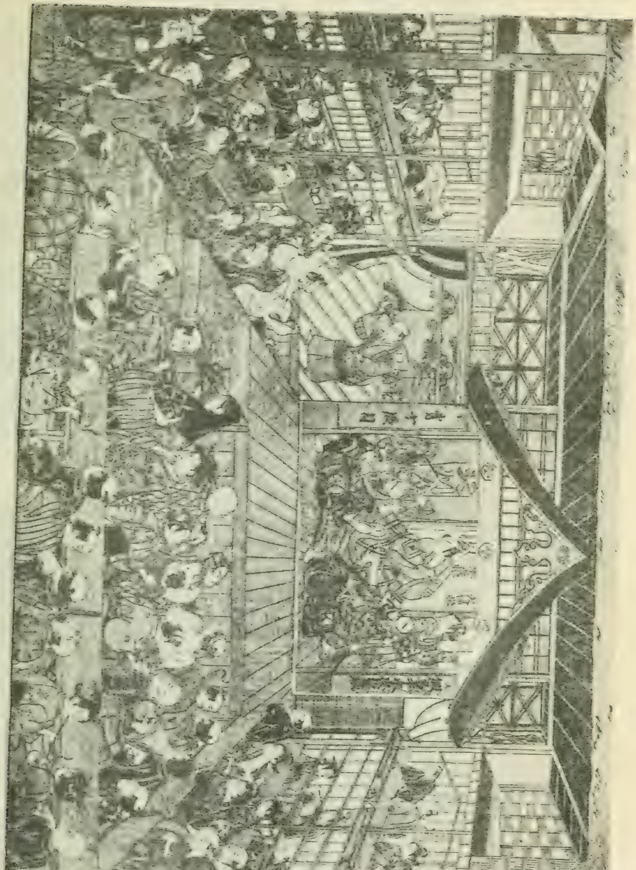


清長

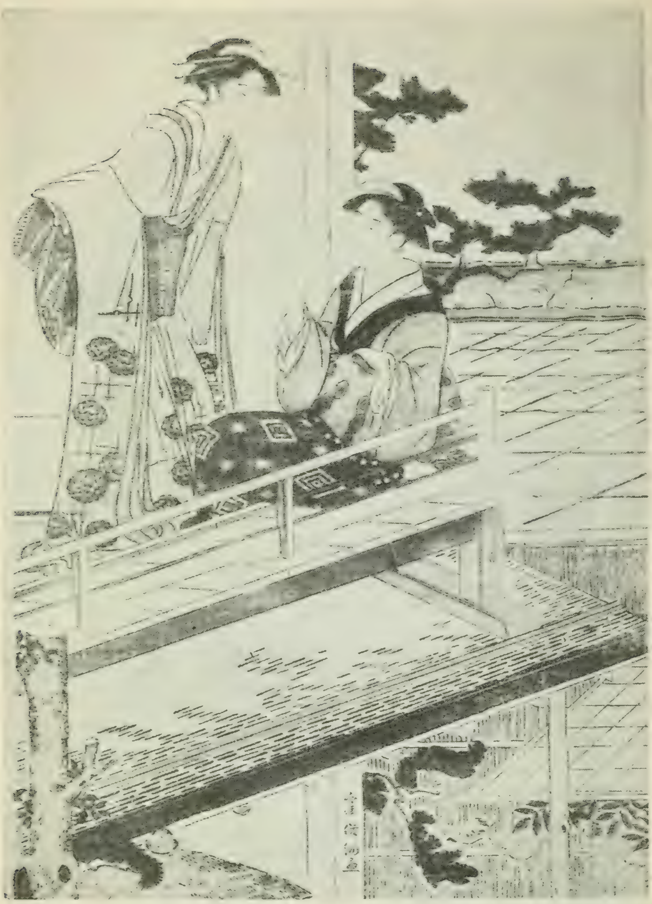




清長



浮繪



俊 滿

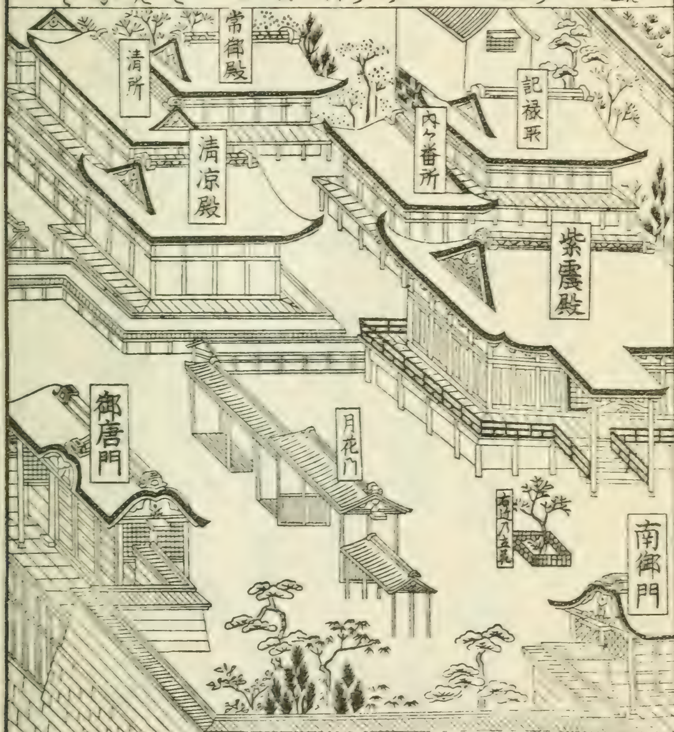


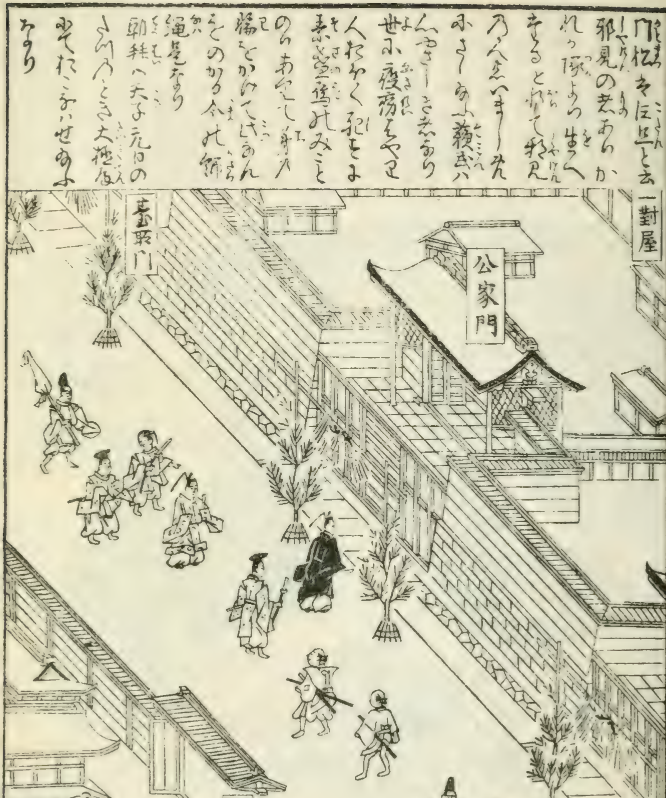
俊満

大和耕作繪抄

士農工商乃中に田作は壽なる家務
なれバ貢具を捧まれど京にも五穀とか
しけきまた国うかもの世まへ福あやとて農
へふいのり故よ春分に耕し盛夏ふかりへて
西顥まで荊しくいろく秋壯は收藏をなして業
切のあつらを盡し猶それ時節乃物を交
て四季北粉をまろうする而已

元日
紫宸殿にて元旦
朝の礼式あり是
南殿と云是より
元日節會始る
なり
屠蘇白散は二日
度嶂散は三日なり
四方拝元正のとら
の時主上属
星をとなへ天地四
方の山陵を拝し
給ふなり
元三とは年の其
しも日のはじめ元
月のはじめなる
ゆゑに三の元と
いふ義なり



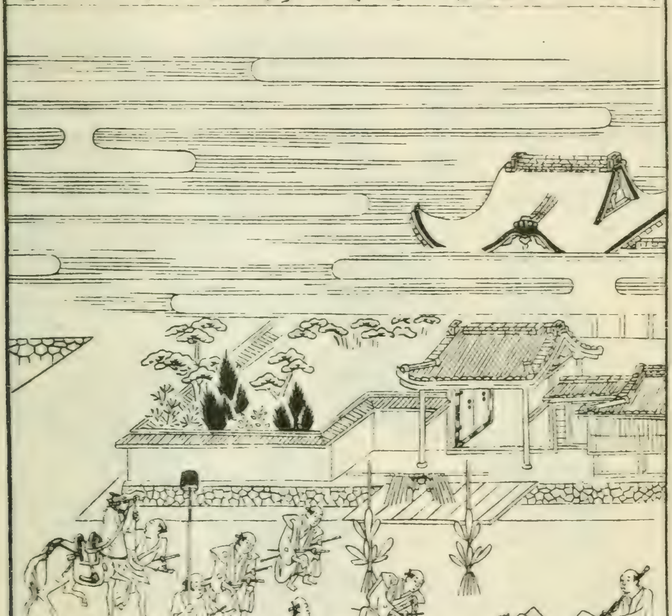

一對屋
公家門
臺所門

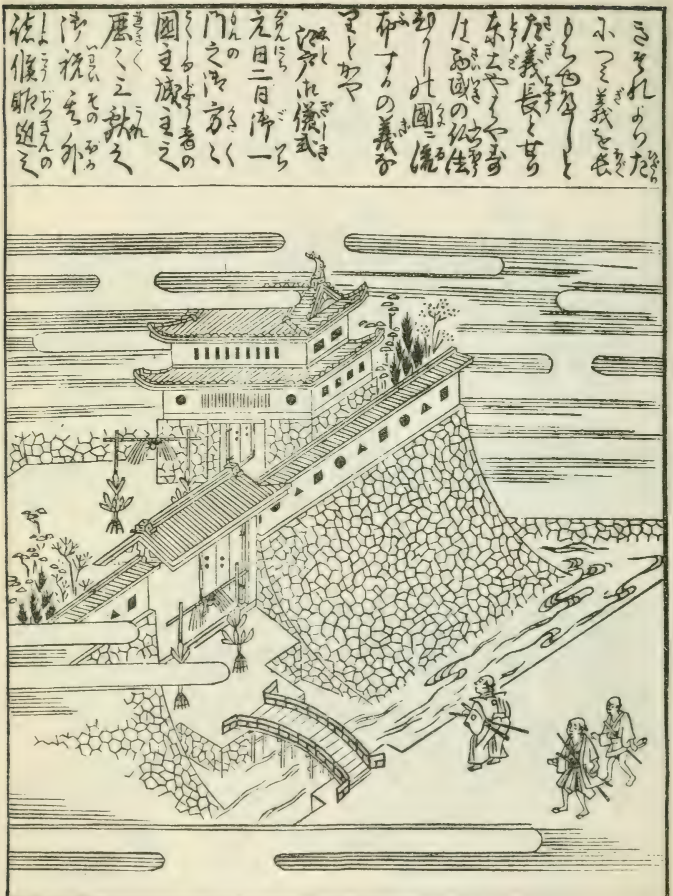


まづ寛平年中に
はじまりしと
いふ。のち七種の菜
を
せりなづなご
ぎやうはこべらほ
とけのざすゞな
すゞしろ是ぞ七
種はわかなの
羹とする人もあり
おしもの
子日の遊とは
正月上の子の
日野辺に出て
人々小松を引
あそぶなり
是を子日
の松千代八



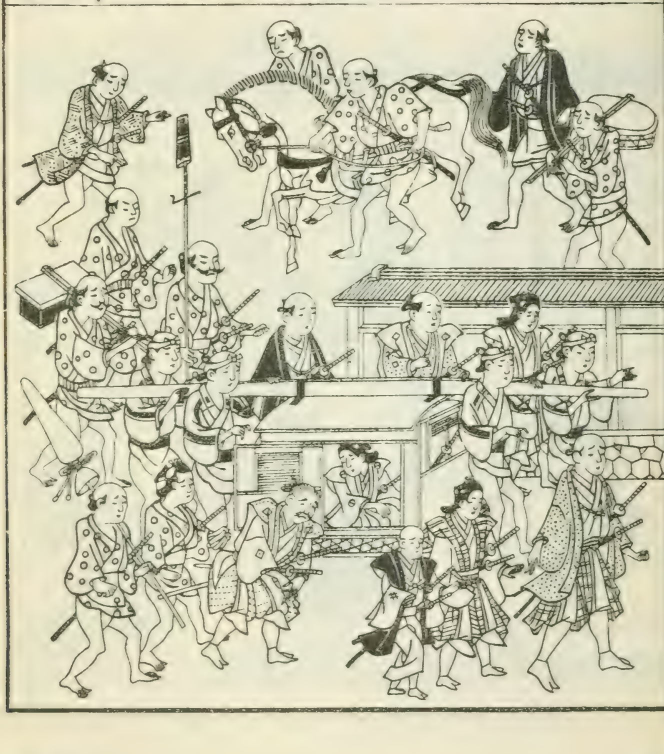
みな我朝の代よ
り定めしなり
小豆
十五日御粥ハ
とろろし此粥
望と云老の古
事あり此日こ
れを食すれ
ば年中のわざ
はひを除となり
三毬打ハ漢乃
明帝の代儒
佛の二教を
論じて此日
尼太にそえて
火にかくる儒
書ハ焼失て
仏経ハやけざりし







蓋聞經之
白ニ 諸大名
之息子並侍衆
官乗法者并
之僧人出仕
開帳町人等
参詣之群作
同日周魁大廣
間 出御御儀
初五日ぜん寛
永寺之僧侶
六日は諸侍諸
山家社人山
外輩充満す

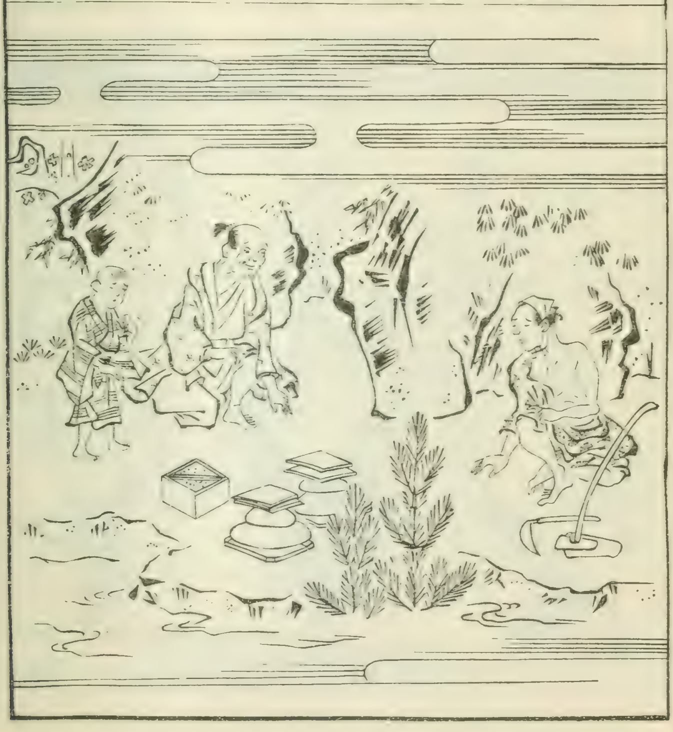




日を別る被段
御装束を臣
長柄御幣代
並之勇士二行
列お持之鉾
侍者衣冠帯剣
の太刀帯之又
歩射之大紋風
折烏帽子也
是御先祖之御
崇敬仏神之御
信仰理世安民
の御政永代不
易之旧義也



耕作
國はじまりて
天照太神人を
して農業を
なさしめ給ふに
牛馬乃二つ能
あるを用ひ給ふ
秋をしらしめ
金をもつて鍬
と名づけ
わり草を刈て
肥とする也
華るの農具
なるによつて
金をかぬるれ



文字くかやさ
出て伊勢九條
中納耕家を
傳へしのみ也
丸木乃種笠
笠屋なりまさ
鋤鍬犂ハ社を
祠貴一ちん寶
揃ゆて御内般
殿小ねさ個書
星故ふ農夫
乃式法ハ元朝
寅申卯天ハ
西國ハ東ひ
東國ハ南ニ



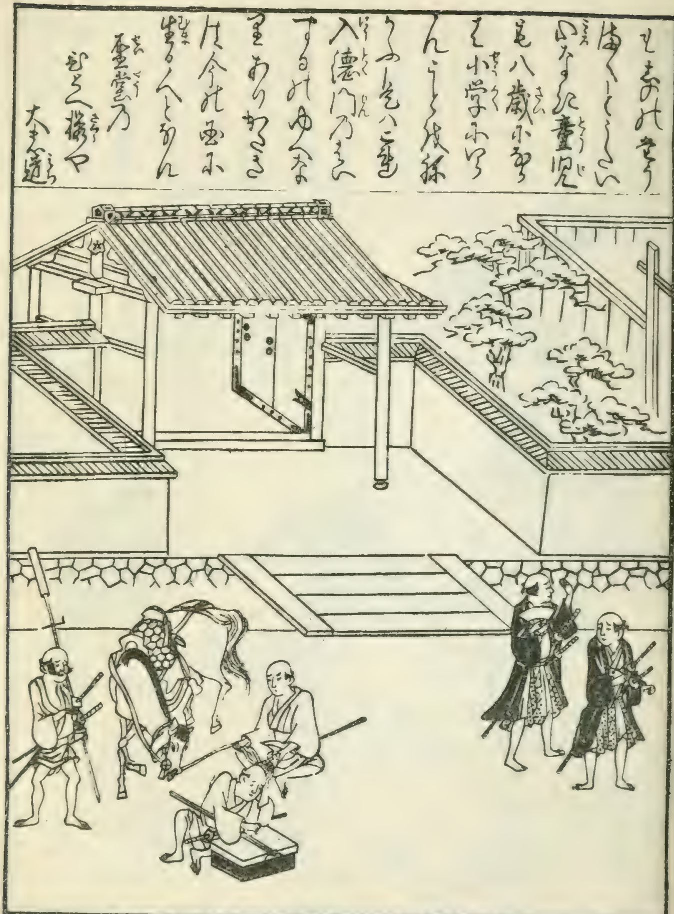
むかしより天照太神を祭りし二日ハ田乃神畠の神三日に山まん神を海はる四日は女れ礼とさ男あ五ん日六日そうう七日正月迄海ことれあそひ日とうるとはさ海りとて八日は山乃神



野やらうとてのせまへ出るといふ十四日繭玉を調ひ夜ふ入て樹木をさしてきそ菓の吉凶をさとるむ十一日式八十五日勝へとて三合まわり松を立ていはふ廿日年中の仕事初め縄をなへ若菜を夷講と云




聖堂
二月上乃丁の日釈奠とて孔子および十哲を祭給ふ。我朝文武天皇大宝元年よりありしとかや。いま江戸湯嶋の聖堂は



さてや二月は
溜る爲鬱と
作り彼岸
すぎて種をひ
たしもいろ
くゐ粳糯
や早稲晩稲
いまだそめて
ん種案はさ
わさはきわく
嫁娵飼ふる
者をむと
みつかるを孫
やうした鳶
菜小鳥なそ



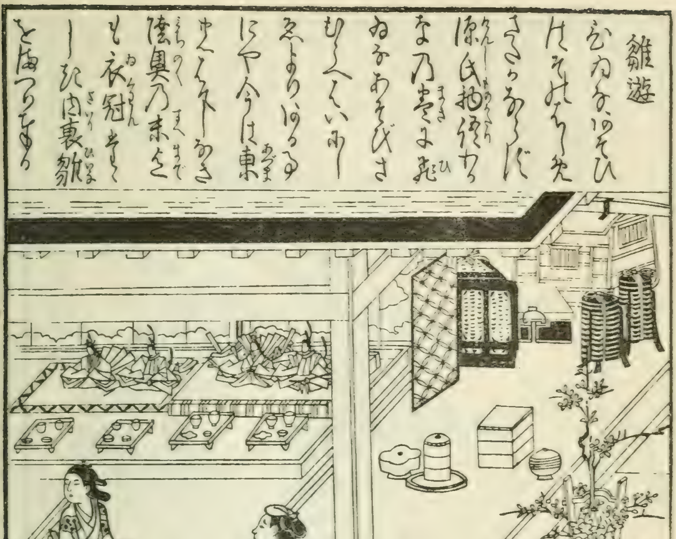


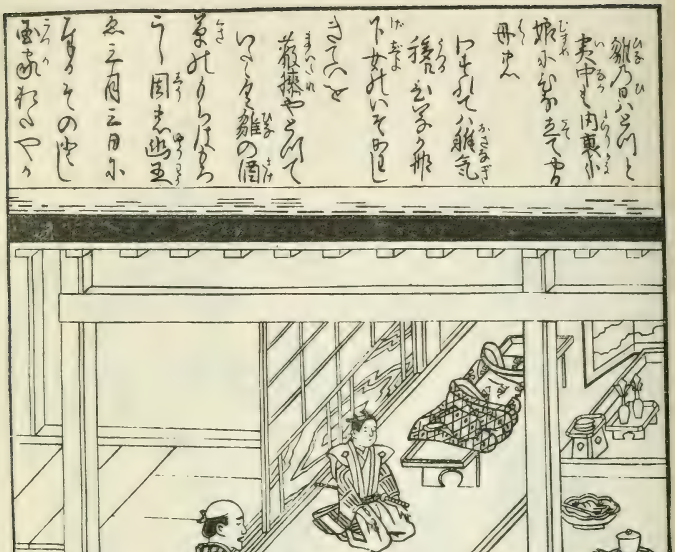
芋をうへ苣を
うへ茄子乃た
ねやとうがらし
すいくわうりまで
も植きたらし
蓼は紫蘇蒜
菜わひきうる
いろかもさく梅ハ
ちりはてし山
吹小米花辛
夷海棠山桜
んとうかうし
百姓も悲小
はそゆるは菜乃
若気永き日を



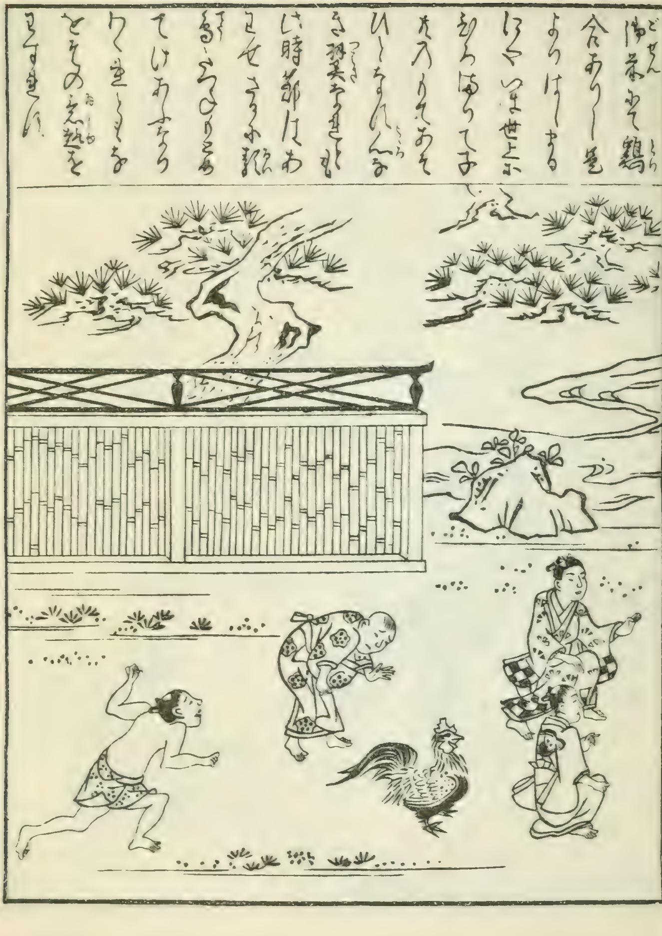
さらくにおろち
鳥へをいとはせ
つまるや籾し
も種かつてま
くなれわりも
きにならし代を
みおして一粒を
まんといふこそ
唐土にからる
うしも正月まん
赤みたる西にいき
事とりし白鷺を
ゆりて水口に
烏牛あとさ
しそある



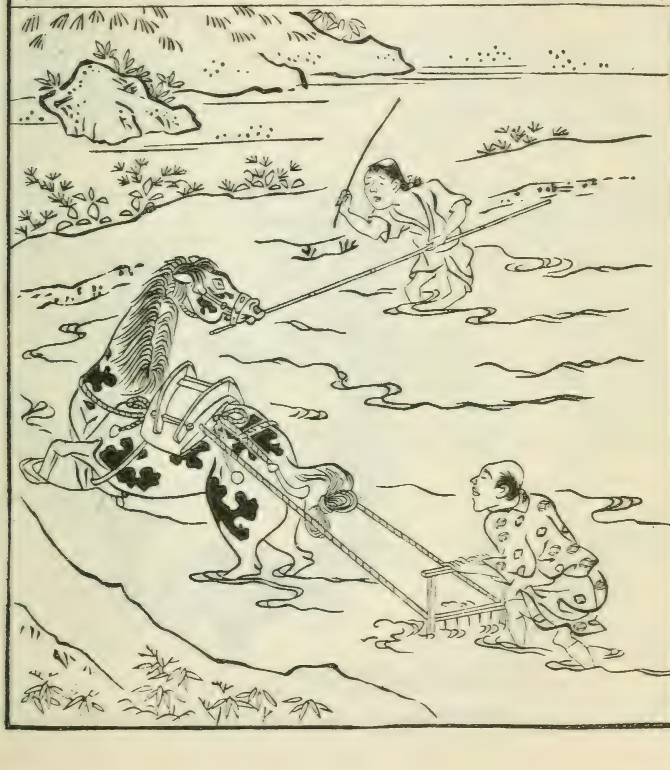

雛遊







田舎へ入ん
ましれは山
こゝろの花
入雲霞雪
やとゆる夕
も山くのけ
しきみの海
遠く奥とお
しれも小鮎
若鮎かとゝ
おく中ずみ
里てたのし
むらや茶摘
をわりわかり
茶釜茶と種





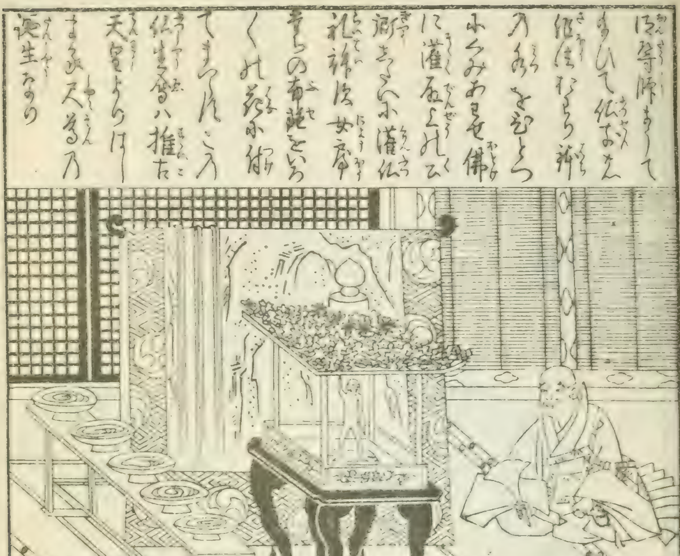

花の宴
花見




井筒屋板


更衣


灌佛
卯月八日乃仏

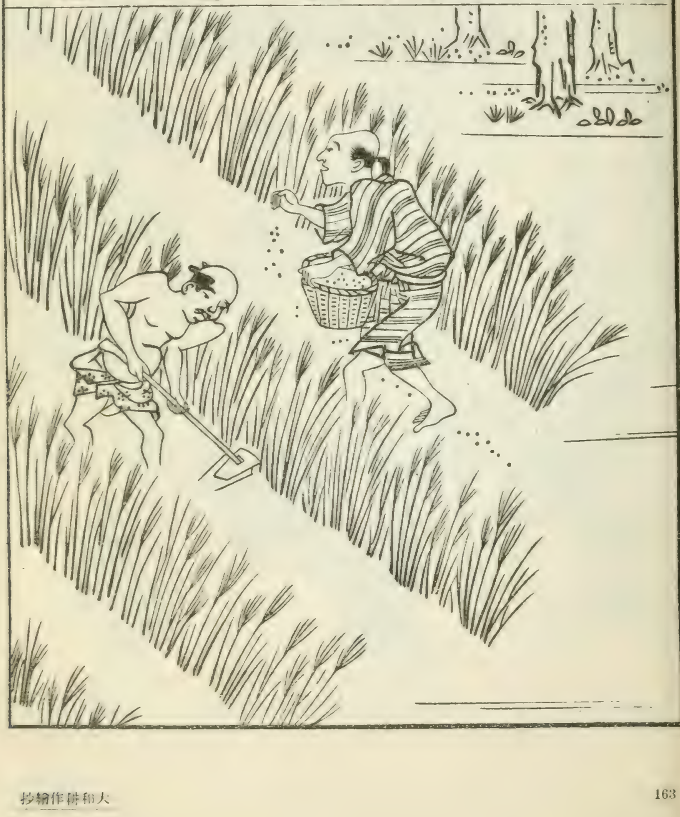


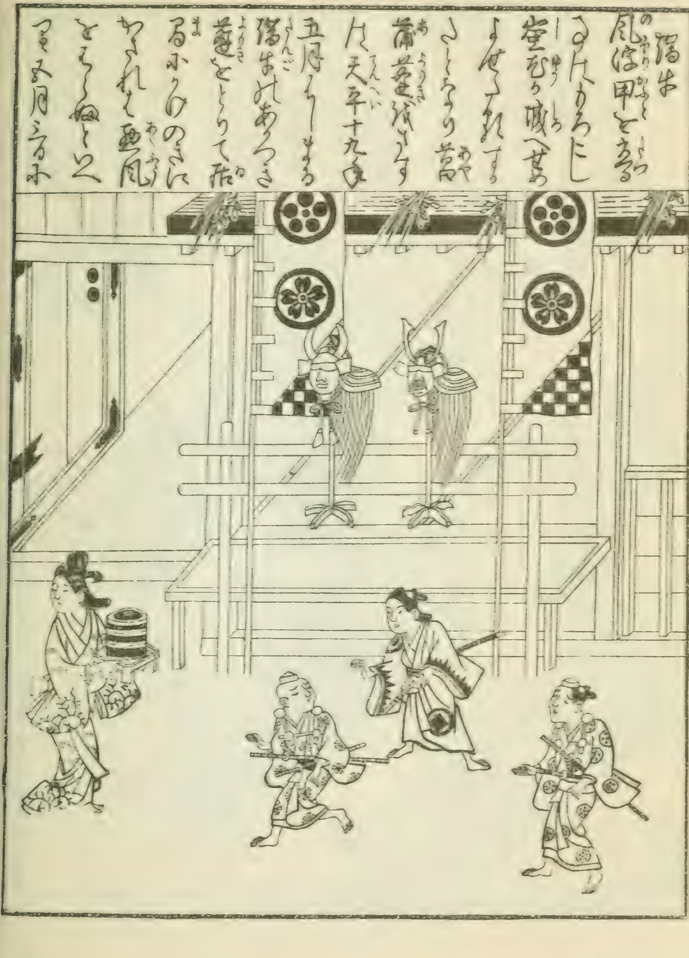
首蓿

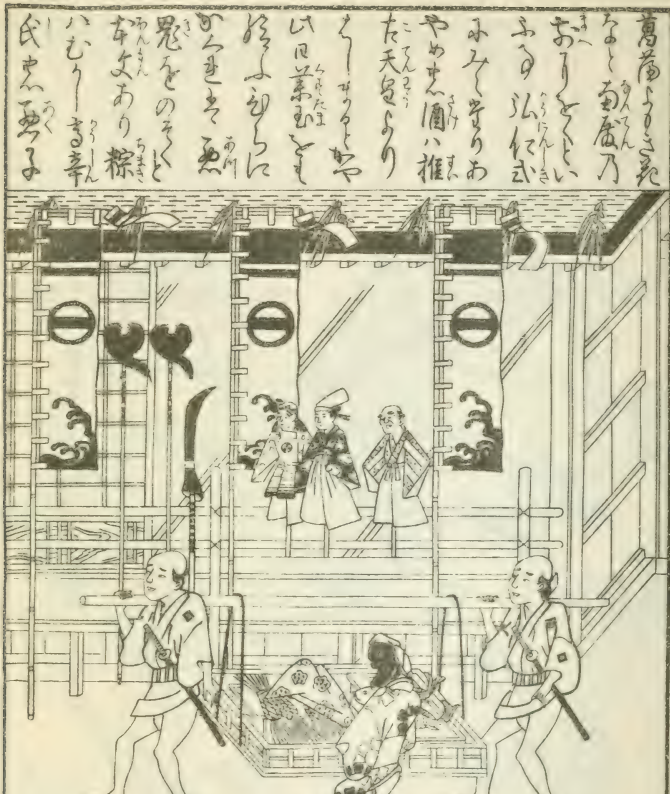
田をかへし
なる春なれ
てゝさすれハ
跡をならいそ
かゝりきたる
わけなり
百姓は
跡そ家なり
かれこゑ
麦さしれ苗
うゑひねこ
して大豆小
豆をすき木
綿胡麻など



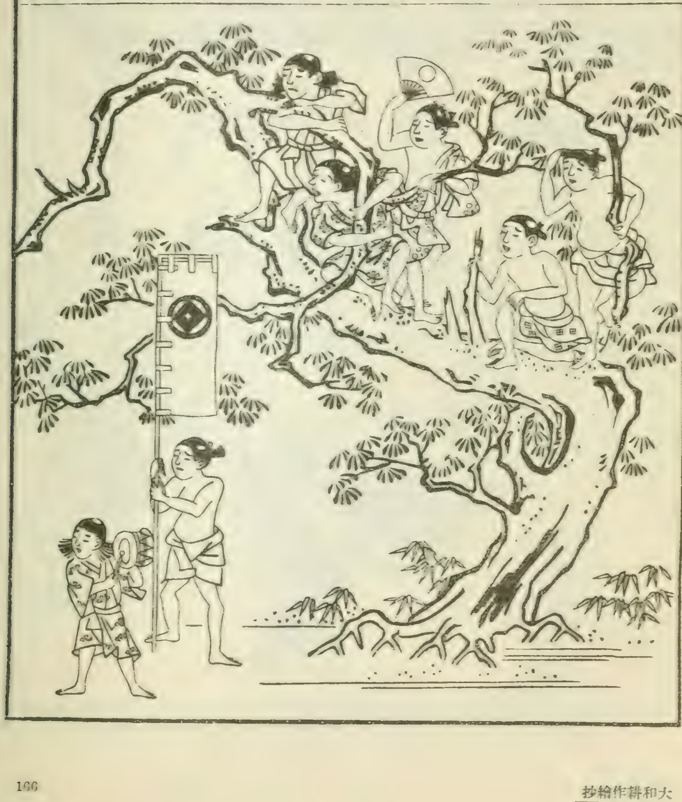
ともくろや朔(つごもり)
のすへになるハ
麦(むぎ)れ秋風(あきかぜ)に
にまきてあり
こみやきに迎
て農人(のうにん)年(ねん)
中(ちう)の金(きん)をな
れハこれなり
本上田(じやうでん)白田
乃ふしてうん
になる田れま
きよりとまき
お苗代(なはしろ)をとし
らゆるふ門を海
なり




端午



あります五月小満
とゝるよ悪
風吹きたりて
舟を危くし
海に荒川の水
神とかりて
そよ人根な
やまお是を
まつらんとて備く
初をちの繁に
住みくみえ七
条機もく弦
うくにたつめし
うしは神人
とるや満さ浪



五よりちまき
あしやり菖蒲
まれはかみし
四人菖蒲をとるか
禁中よ八飾粽
世よ名乃糸也
五かゆかすり
印地打
中比より菖蒲
打といふて田舎
は村を分江戸
八町を分て礫
礫うつてあそも
討合いまはま
止たり



競馬

五月洛陽かも
賀茂大明神乃
神事なり祢
宜亜久装束
をあらため白
馬のるところ
へ二人づつ
あらそいかけとく
を鞭をうつ
てせむるに
あまた見物の
諸人声をたて
ほめさわぎて
しばしやまず



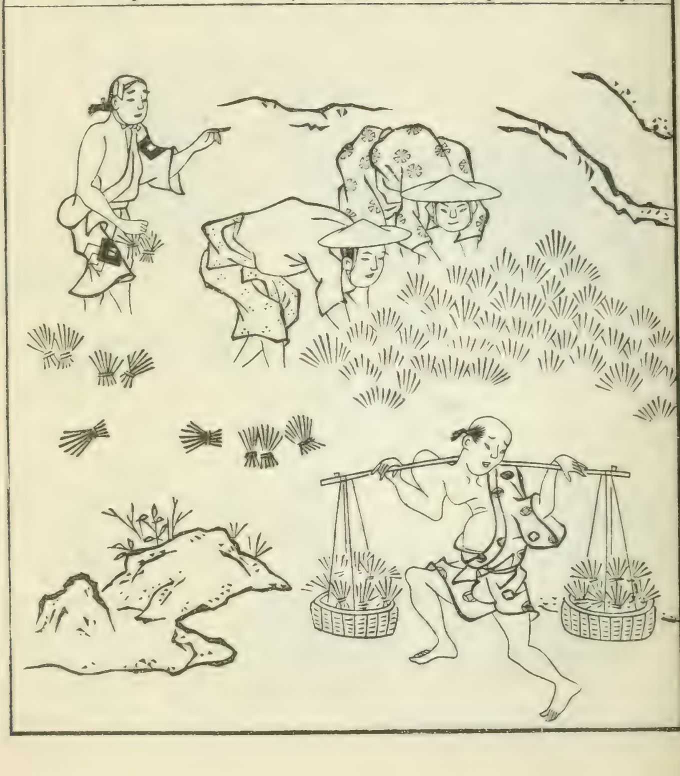


田植

妻子もとも下女
けも田に入まう
抱えそれく
ようらんかと
なりて早乙女
風流に装ひ
植るなり人乃
嫁むすめを田も
ひて嫁さけ嫁
よめを田植に
たくはへさせ
しくするなり
まいその日う
ゆる苗をとく



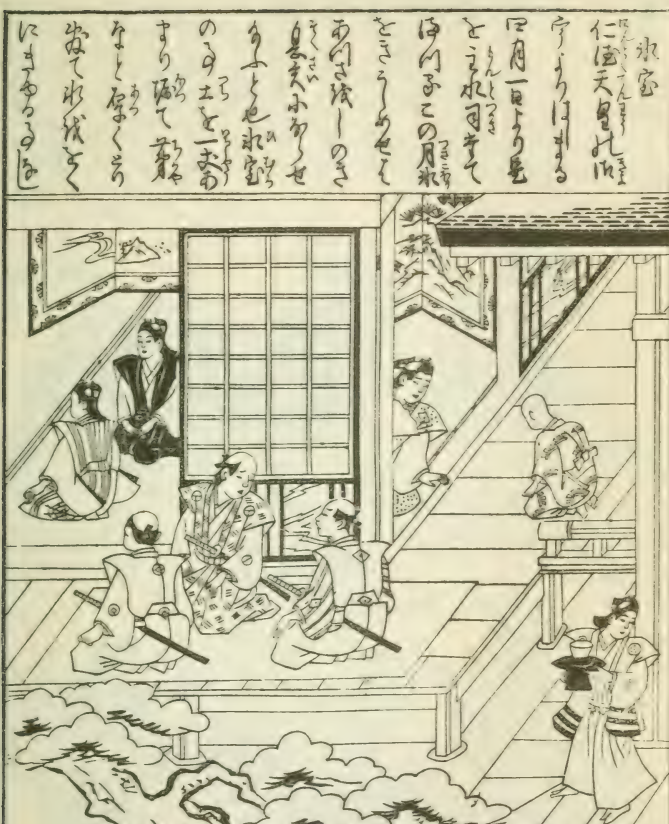
にしうるを祈ふ
◆家に住む。百姓は。
早苗とられてい
かぬせん
◆さなへにすゆる。
いなごもとられ
植田に糸よ
田鳴は出くぞ
かまりかしまる
里くゆかる哉
一大うさはこの
悔うなり
◆年れなり花の。
わうらへも。田
作りど喜ぶき



◆ほうりとゝとり
そへ子夜京をとい
ひねふ
◆新公乃ちうえ
きくにお代も
つうえ
◆時るれ声より
おをたりしろさ
早乙女
◆何のろふかとえ
らあるよろおく
通ふ稲妻
◆彼ぶいしつかふ
きやげふうつし
く光る影




▲小春めでたき。
百姓らが門
に花さく
▲金乃蕾かな。

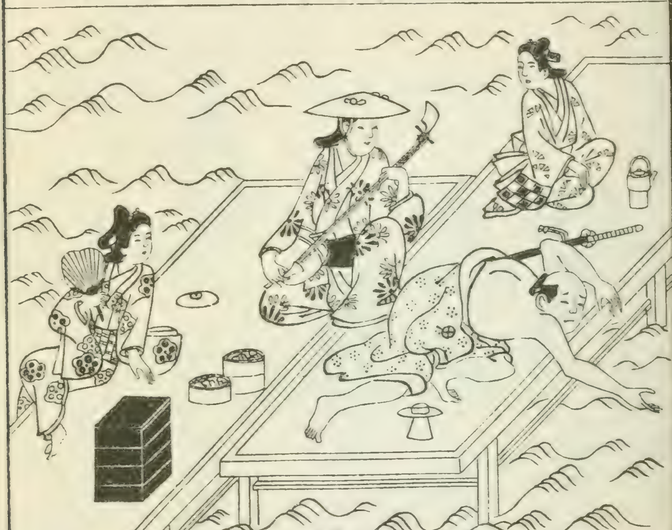

氷室

順徳院の御宇
にかゝりわれしハ
富士山にゆきの
きゆる日もなき
氷室山より下
して
例によつてひ
て武家にも
六月一日雪氷に
まず氷餅を賞
翫あり 下万民
にいたるまで
氷餅ハ鏡餅の佳儀
よりはじまると云
つたへたり




賀茂川涼み

ある人凡のむ
きあるとなれむき
てたのしめるを
見て
賀茂川で鮎に
ぬけ荒の卯
あらひ八曲水れ
なかれをなれひ
出てれき上を
盃をならてた
のしむもあり
月のあふう
さて
涼しにう賀茂川
おゐ集れ月



両國涼舟

武蔵と下総の間にあるゆへに両国橋と申よし
下総浅草川流れて海に落る長さ百六十間あり
夏の夕涼には諸人いくらともなく出てすゞむ
此川ハ江戸第一の大河なり
遊山舟通ひ
涼しき太鼓琴

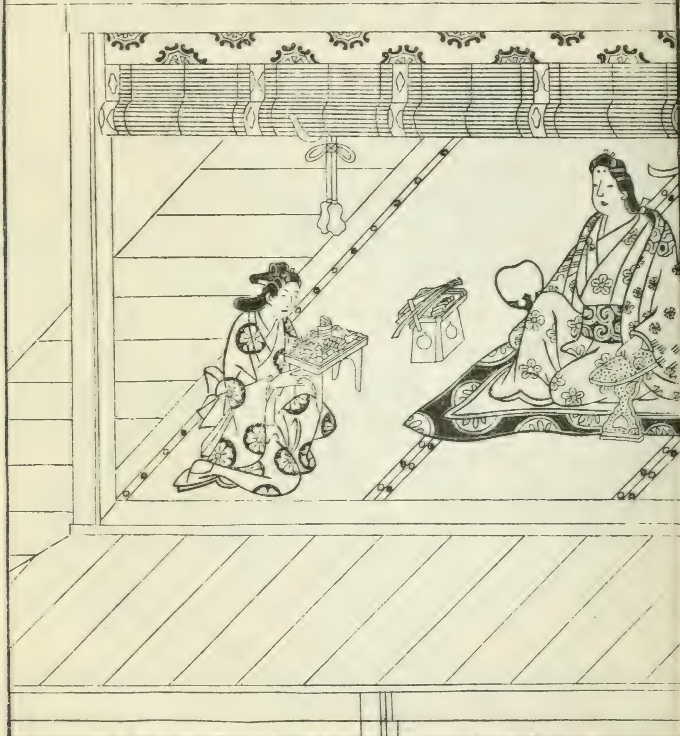


さみせん枕こゑ
をたらしまする
此春京より
在里へ三挺を
乃舟また行
東の人わたし
お作り風流也
むと蝉をかへる
なれもありまする
今様乃さまる
みなと黒を添
せくらふもは
里て此国八三雲
一乃世両つ添と
有り





嘉定ハ大
うち奥より始
なりさふらふは
大暑にて極
熱の時節ふ
体すり食あれ
ば暑気を入
そこねければ
ほとおり寿は
うらほ気をま
添てめくるはあ
るひハ飛桃を
をかふて是
るゝよりたのし
むなり

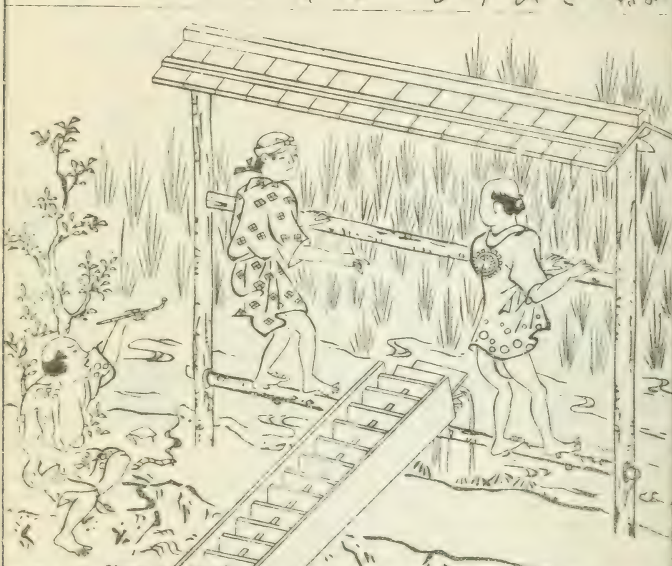


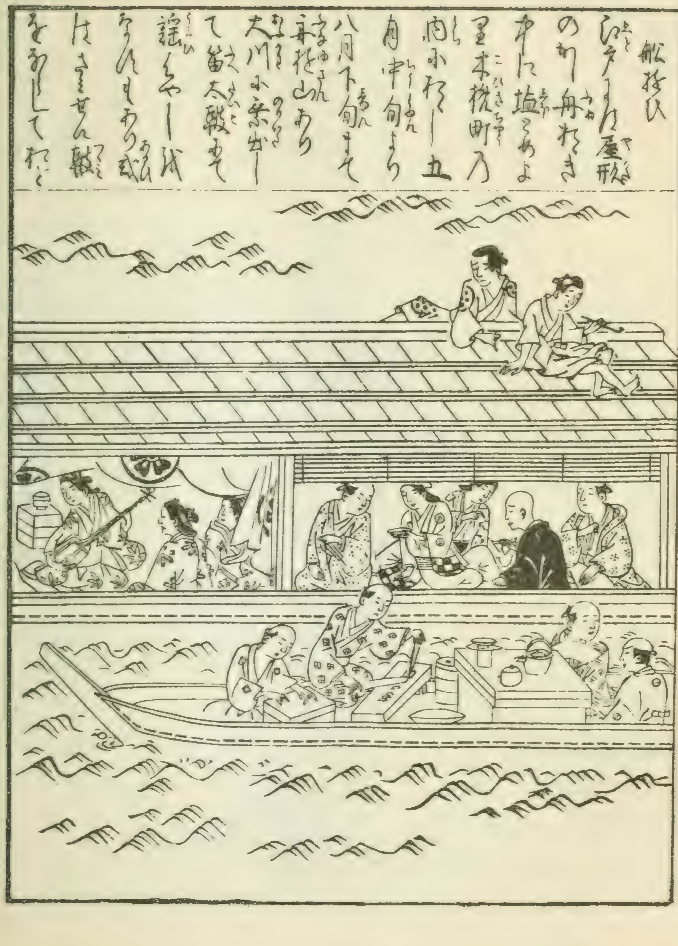
懸水

用水なきたより
をもとめて田
にかの口をきし
らへ水を入るに
田地ハ高く有
かゝる時は流
れ川へ水龍
越といふ物を
こしらへて水を
せき上ていて
あまり小田へは
桶なとにて
汲みて水を
あくるなり



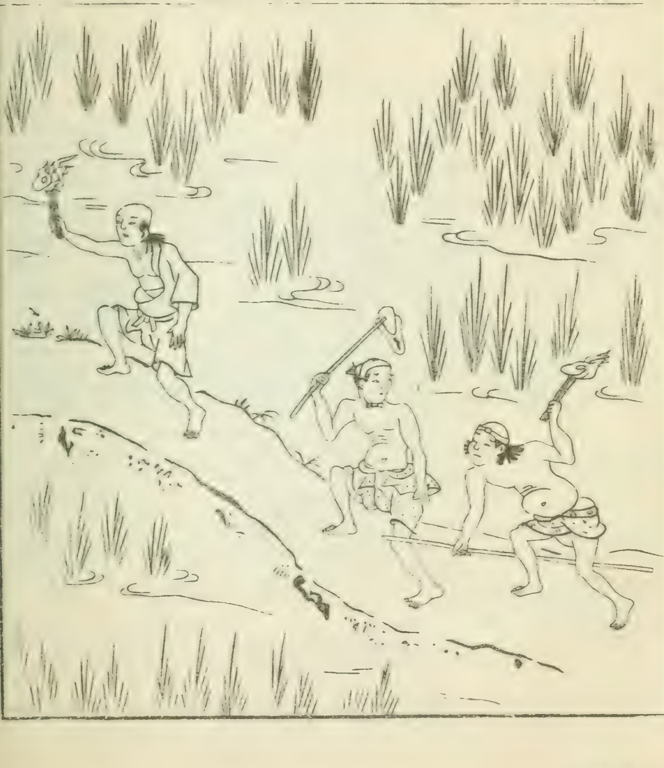
稲入水に靡
乃倒るる時
は虫生てくさ
りかひたりまた
日葉枯などを
をせんとする
中にも回ひへ
といふ稲は実
黒穂のごとく
にて米はいけ
てものにまさ
もよく稲に附
是を来
一ふさふりといい
なり



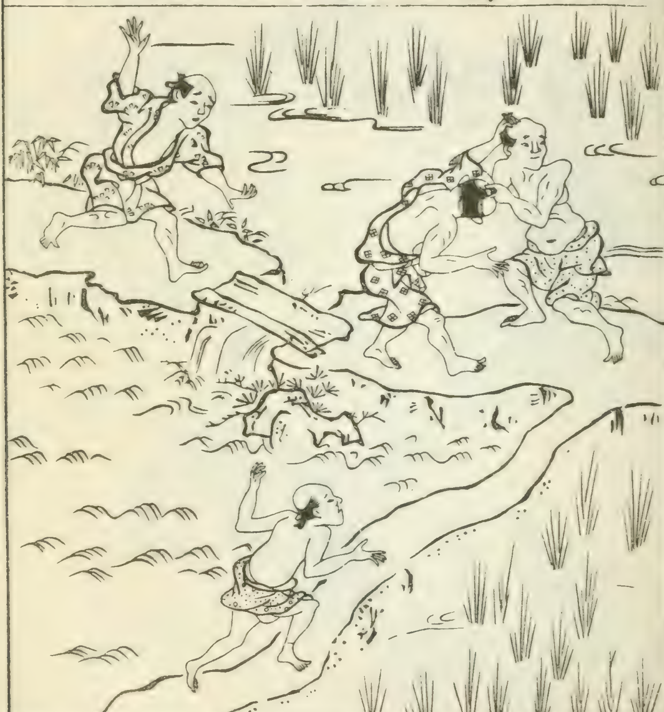



角田川へ
隅田川
住田川
都鳥
江戸や東乃

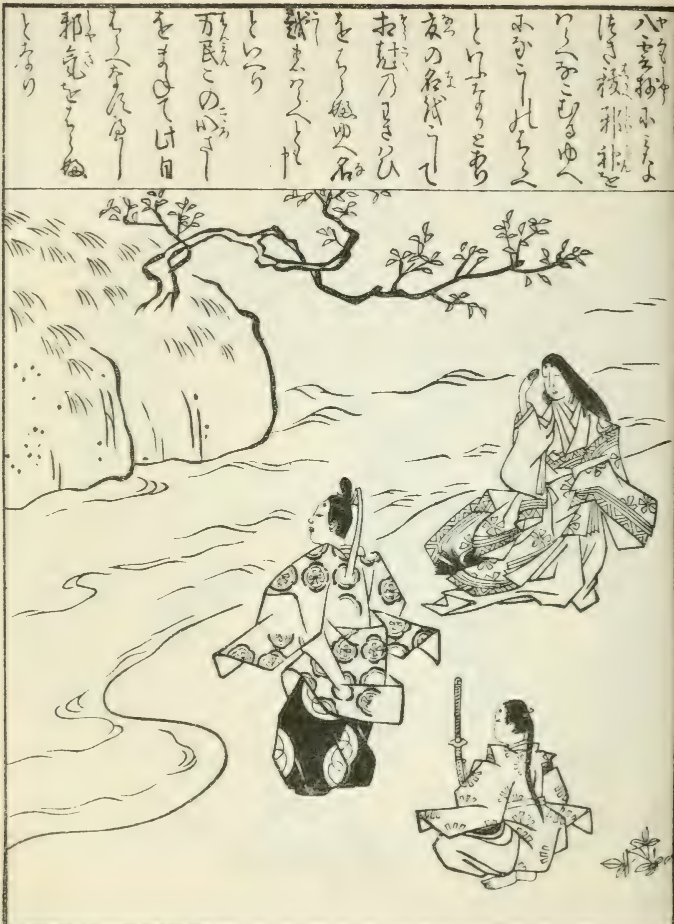
野寝蚊
野田へ出は蚊虻をますますあつまり人の身へ取付をはらう草懸火といはるゝものなれゆへに夜すから寝ねんとすれとも かの余一のあたをさめてはらふ事への我かほとまさ人も鬼とおもつろふ事わさと見なけて捨しあいとりはへつゝを



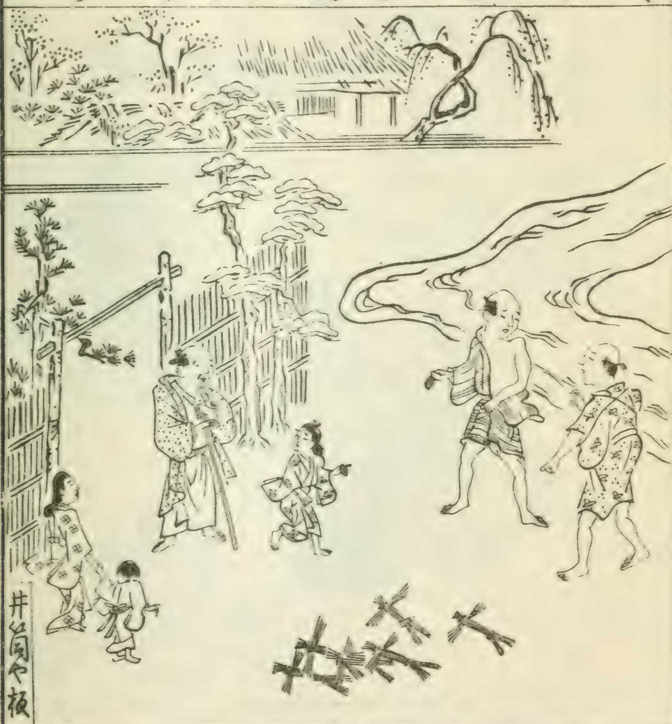
あふさきとて
稲乃あたりかん
そまなれてなら
ひふ初さける
あとにはえい越
おしわ田へゐ
をかけるのとは
れこりなる縁
なきて是をかれ
かなふんといふ
まりて農夫
は耕作にかん
命をつなぐち
業術をはむと
なりん




六月祓



六月晦出羽と
奥州にてはわ
ら人形をこし
らへ獅をまけ
村をよせて七
とつに舞につゝ
て所の法するよ
里社家をとも
ない幣をたて
はうた太鞁を
うけてうち
うちひてわら
れなるなり
余国にもある
といへり

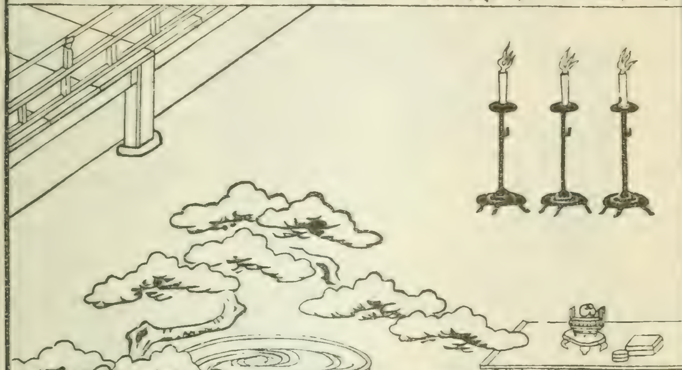


七夕

七月七日の夜
御殿の庭に机
四脚をすへ燈台
九本ともして
はなかつらには
色々の物を手向
琴を机にそへて
二つの笙あり常
は絃しき調ず
呂律秋の声
へ奉り乞巧奠
夜もすがら火とり
に夜も深くまで
[illegible]



盥ふ水を入
てれいそろれ星
とう像して牽牛
織女婦ろの
川しあひの夜よ
なの香花をそ
なへ供具残て
のくこのみちしを
庭にわきさなれ
れたらにな色乃
糸をかけ一縷
諸いのる冨をい
のり壽をいのり
まる子をまんをぞ
いのる一絃をこ






今日素麺食
高辛氏の人
七月七日ニ死





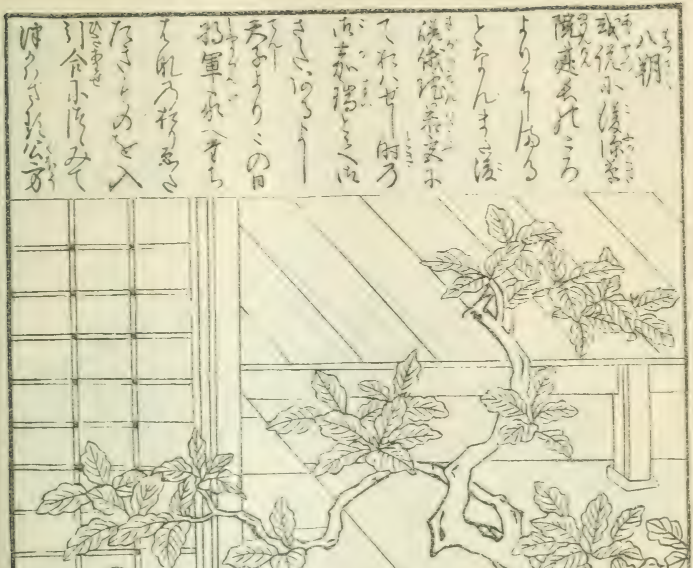


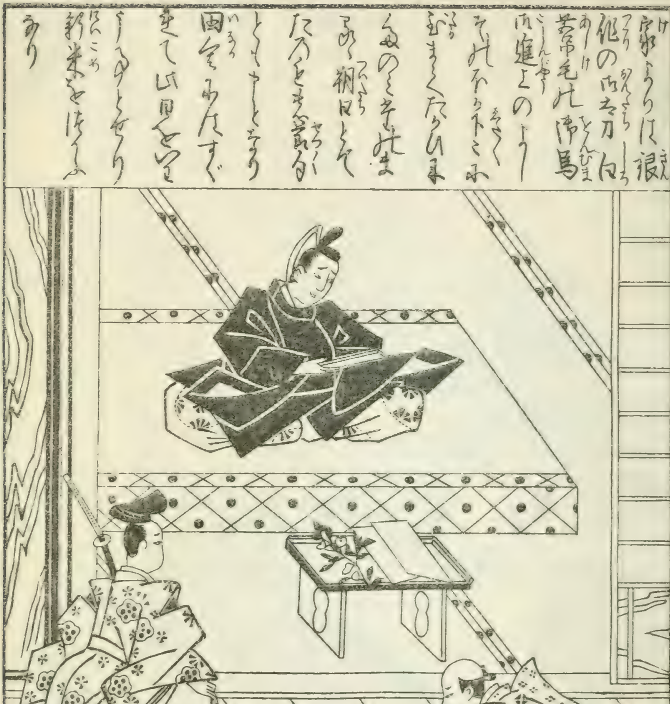
中にわかせしを
出しくはんゐこの
苦をすくはんと
とりもち給ひ
しかして七月十
五日自恣の僧に
供養せんと
解脱衆をも
経をひらきし
盂蘭盆経にあり
みへたり
上古は玉祭十
二月大晦日也
そのゝちこの月
十五日にうつれり



渾脱丸と見ゆへ
乃名なり鳳尾
草萬りくれとれ
むかしの喉の唱
をとむる業なり
ゆへとぞ
躍は女の兒乃
わざりけるなり
是は陸ぶりて
男をかどりける
をとこ江戸繁昌に
あらひ大おどり
とゆふて世にさ
後への風流を
わざるなり




八朔



農妹

風稲葉をあらさば雨穂垂をうこかさねば代こそ民も月出れ七夕盆の業もなく八朔十五夜風をおし二百十日もおさまりに穂みいるころなれほうし新刈ん稲の竹きをふまむ百姓のなるみかさうれ





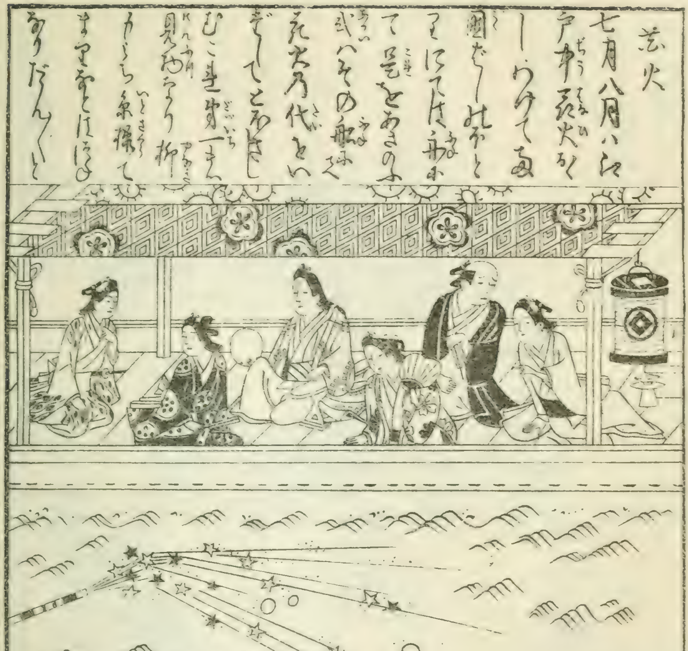




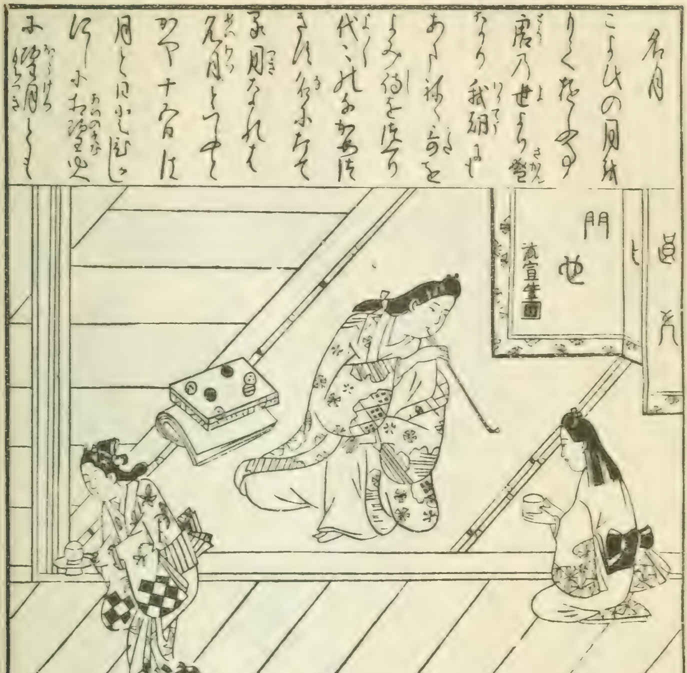
搗こきしとは
たなつくれ業
あまり稲をその
まゝ籾こさき
たくはへしてふ
かゆへにまつ所
田にかりて合
是をくこひ笈
とつゝ物をこう
らへてこくらう
ますきにかりて
白にいれのひをゝ
ねしてみに入
てふるく粒に
して俵に入る



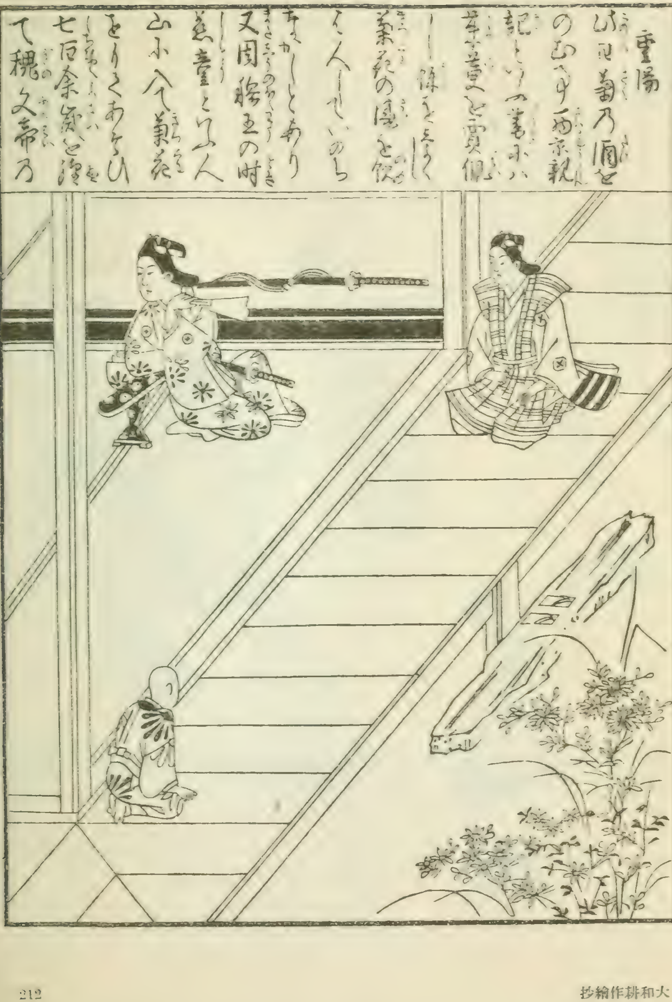



花火




名月




重陽
此日菊乃酒を
のむべし西京雜
記といふ書に八
茱萸を佩
菊花の酒を飲
又周穆王の時
慈童といふ人
山に入て菊花
をとりくらひ
七百余歳を經
て魏文帝乃



月見

十三夜八月ハすゞしからではださむく又のちも我朝にていひし事よりも見ゆるにや菅亜相宰府にて九月十三夜此月残みて詩の句をさるらく宋から十五夜は異国本朝にもそれゆへ名月とす

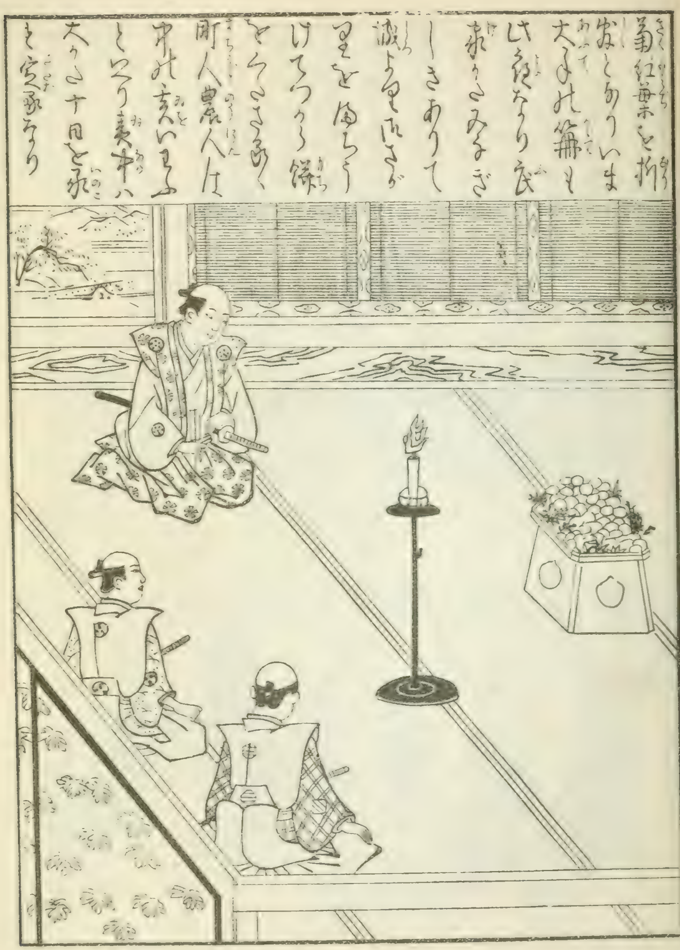




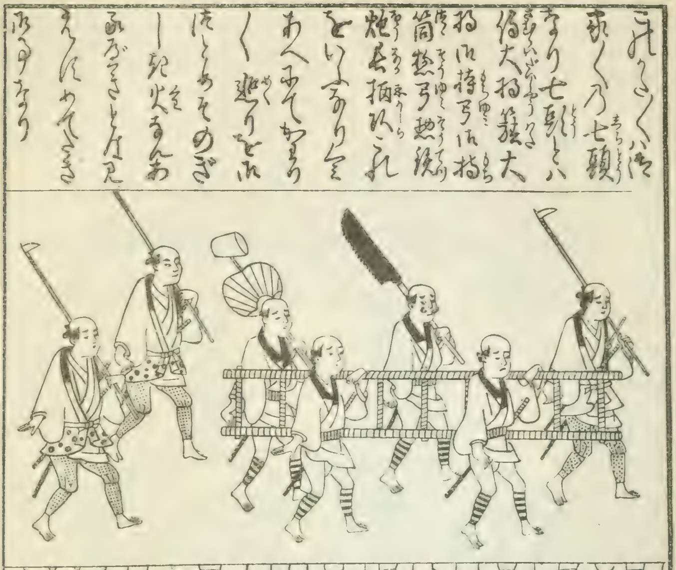



神無月

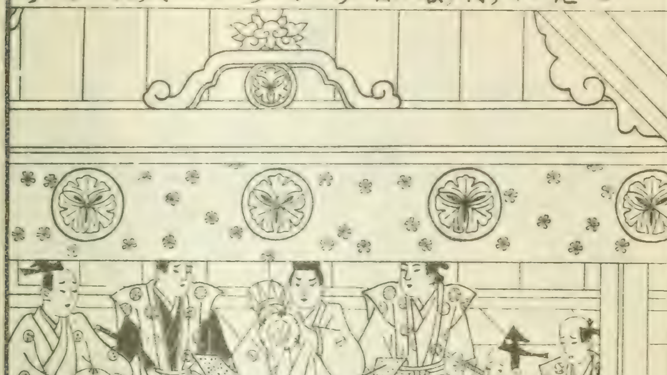




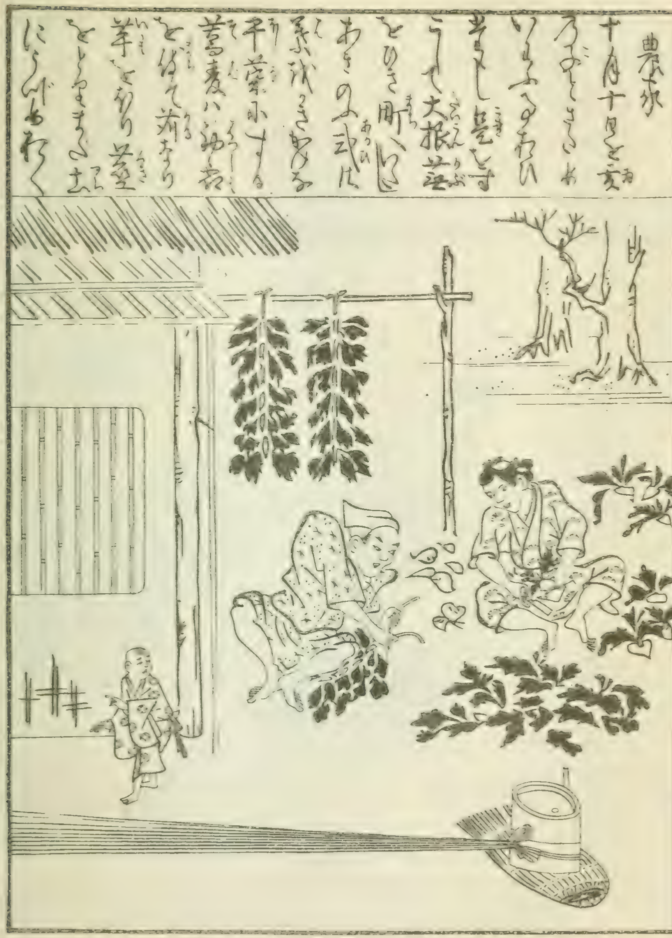




顔見せ
霜月朔日を
芝居乃はしめとえ
せとする中
村勘三郎市村
竹之丞山むら長
太夫森田勘弥
はかり上るより
ゟ家も、ゆう十
月末に出替り
け日を役者の
狂言をしめ出そ
する所年々紀
あらたむる
例とはくすなり







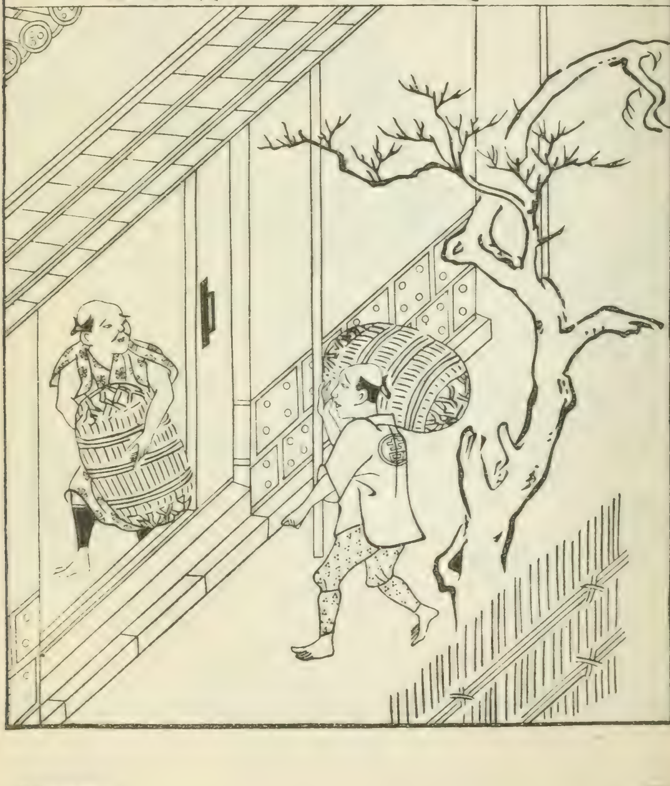


貢

私領も公領も大なる小有
納米代金も
ありといへとも
かくは村々に
蔵を立て代
官わつかにて
手代庄屋立
合村におさて
百姓われくく
番をいたしも
のちに俵を
ハ地頭小納
戸領ハ御蔵



かくてはるおり
ちまたにて
千秋楽や
田舎の家
此のふまんゑを
よろこべは大は
ふゝて関東
たはらに出し
て商人へむ
くするなり
農人の業は
国民にすぐれ
労り多かく深
生まてとれの
しむとなん



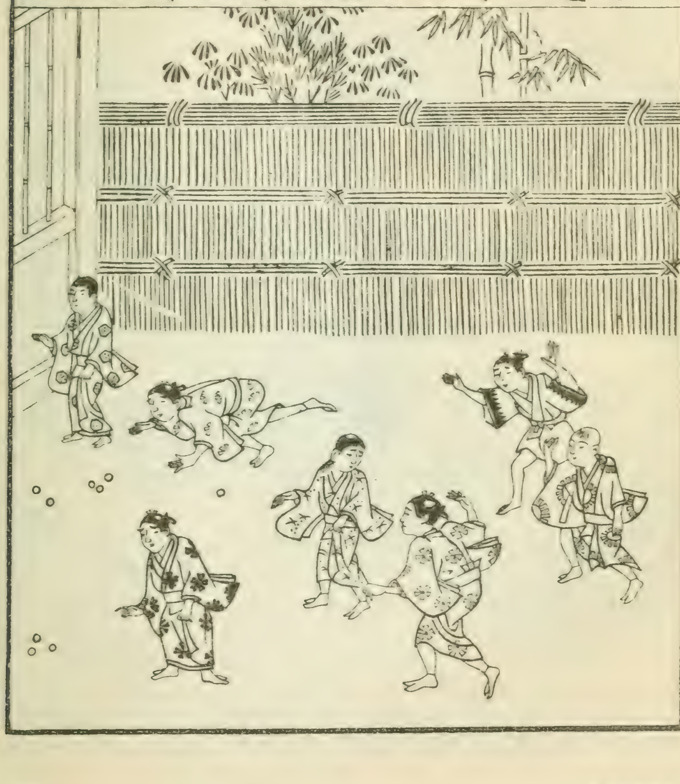
五節舞

五節は十一月中の丑寅卯辰の日なり今ハ大嘗会の時のみ行はるゝ事なり舞姫ハ五人なりそもそも五節のまひはじまりおこりは昔し天武天皇よし野の宮に御まして琴をひき給ひしとき前の峰より天女あま





吹革祭(ふいごまつり)
霜月(しもつき)八日ふいご
まつりとて凡鍛冶(かぢ)
乃古代(こよ)より
うけ傳るとも
たまそうらう
これ三條(でう)宗近(こ)
鍛冶(かぢ)むねちかが
小狐丸(こぎつねまる)をうち
たる日なりと
ゆへせんあり
此日をかうや
のふいご祭(まつり)と
よびそへて稲荷(いなり)
をまつるなり






髪置
十一月十五日

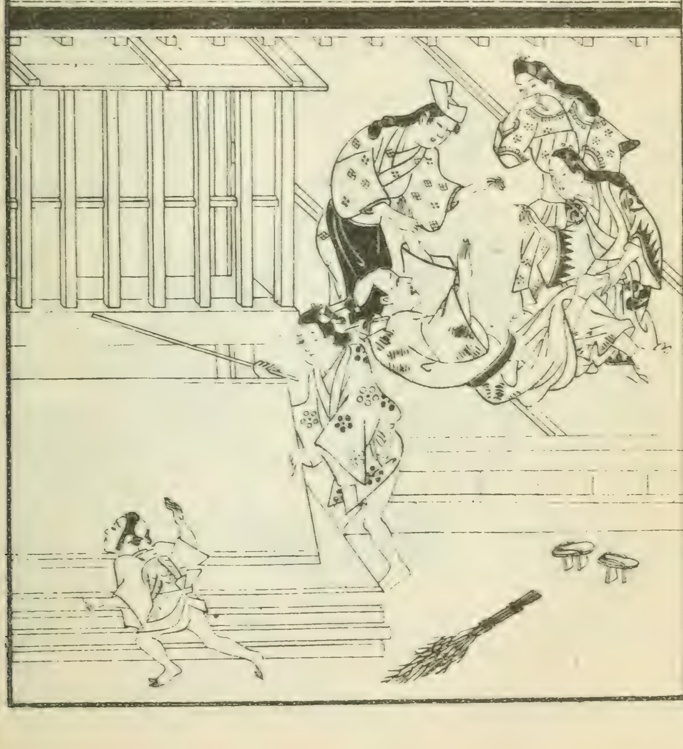






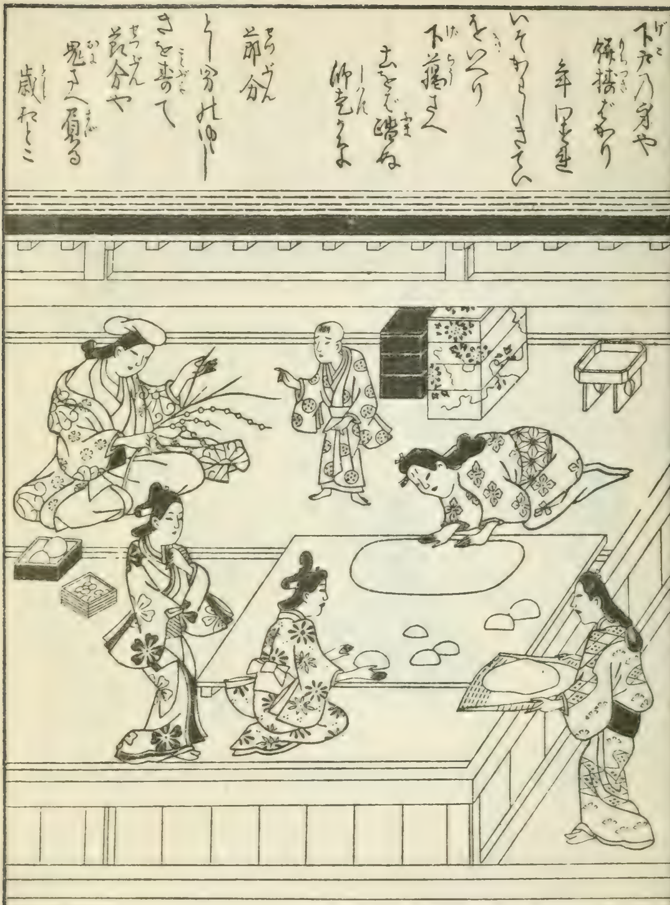
煤掃

師走八日をことはじめといふて今年の禍災をおさむる九日より春のよそほひをとゝのゆるゆへまづ家をときよめると煤掃をすること上下おしなべて尊位ある貴人おりしも表紙とて言紙



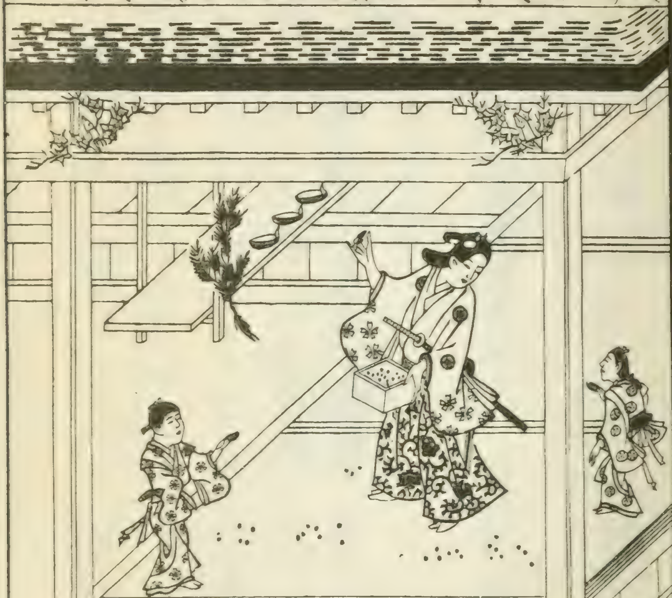

煤掃


餅搗の





鬼神供御散消滅と唱へた
めさへ鬼ハそと
へとらち右恵方へ
福ハうちへと打て
中ゑてめくハうら
とらち納るせ
此豆をとらし此数
ふひろふ毎歳との
とも尼蔵豆持
ほして年男日をと
うき男ハ左女ハ右
の手より身を撫て
懐の中より下へ
落すなり



畫は萬方の寶なり異國本朝
まあるゆゑ象として一紙の中にいつ
はれぬ筆なり今四民の業残
書き見せよとて野山農耕をあらはし
しきを越向して四季をあらはし先
かゝみなりんとし

書畫筆工　大和絵師　石河流宣圖

板本　通油町　井筒屋三右衛門

絵本江戸紫

序

新玉乃年乃はし免門ゝ松竹
をたつるも壽を祝ふなりまた栽
人としてを粧ひするはあしめけさて
婦をいつそかり美くとも脂粉事を
室乃道なり志らハあまとよそほひ

保とせ過まハ粧ひうえ川ミ中
川佛乃うかまき女ま似らし雅も
はすし流保祇乃唯おんなの
礼なりとするおそむべきなし縁の
天津雲の上ゐを紫を色乃第一と
定まるを粧ひふこ光流くさ総ふ乳

清るを縁本江戸紫と題せしを
集を奪ひいふ粧ふしと光をふ
かこうほしと志らいふ
寛暦戊未の冬總月
沼善免尋子識



















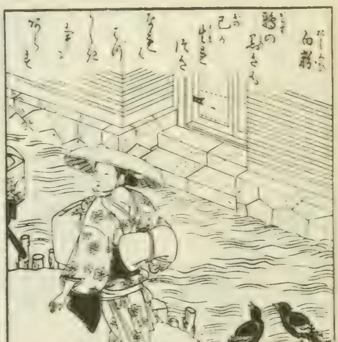








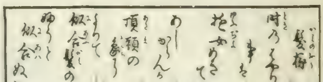


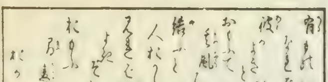






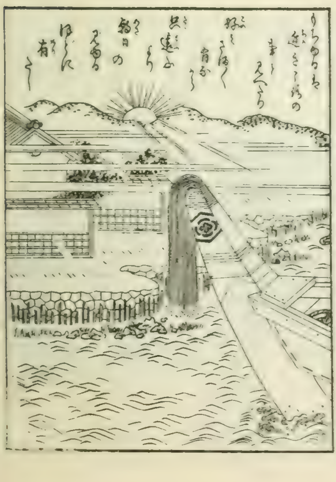




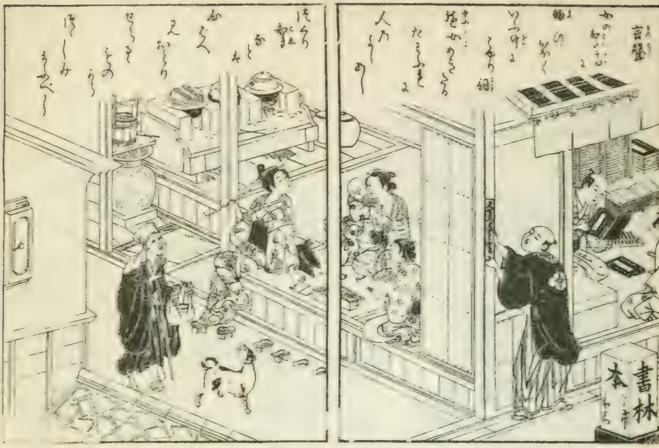











書林
本





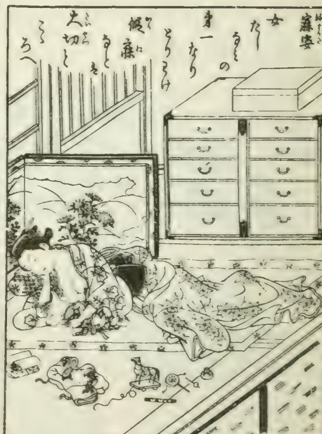






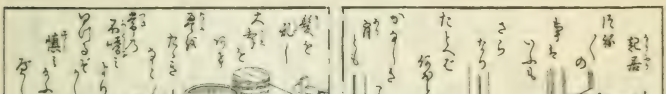








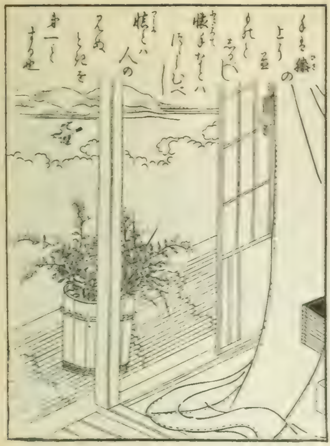

起姿

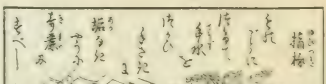

起居

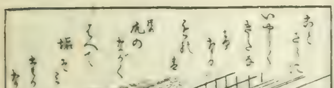










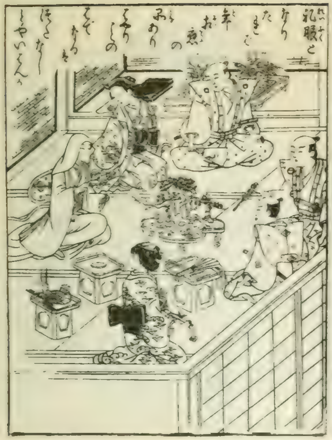


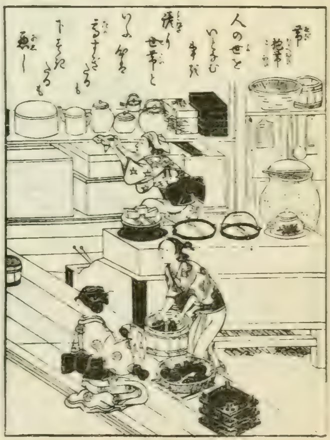






















畫工　石川豊信筆
作者　浥花秃帚子

明和二年春正月

京都書林　梅村三良兵衛　發行
大坂書林　大野木市兵衛　發行
東都書林　須原屋茂兵衛　新版

繪本花葛蘿

序

夫和歌ハ敷嶋の道とて正しく絶

心を種とせるなりてにや三百篇の

詩も思無邪にして雅頌和哥

乃意味深長きをしるしきはだいた

まで唯言葉に正しき道を志

しれんして画を鈴木氏に請ひ

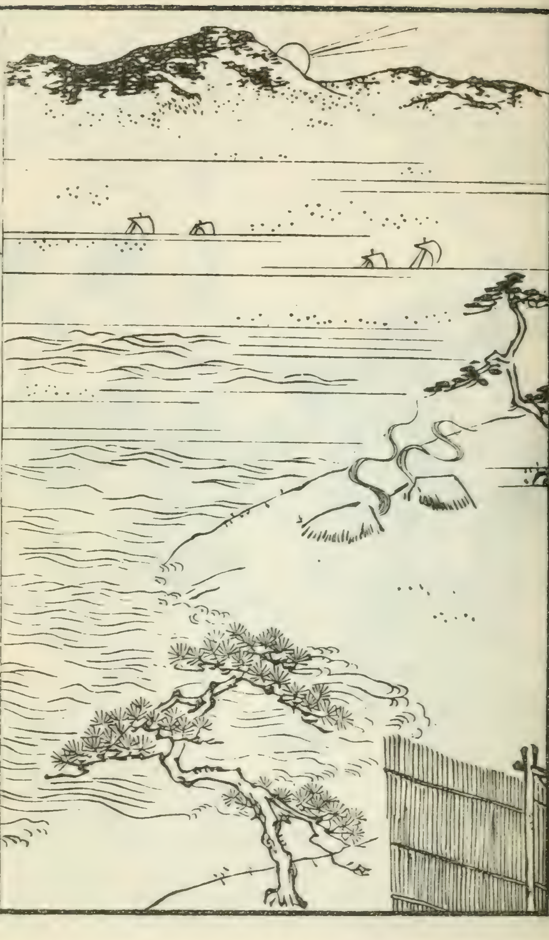
こゝろめ傍り請成書くろく

思無邪和哥は写し書典
金山堂に而ふ読て梓にり
まての是にならへ書せよのかしふ拙
我が才は短きさは何て長き
春の日の翫ひ備しぬ

きはとの
酉のとし
初春
須新兵衛子識




柿本人麿
ほの〲と
あかしの浦の
朝霧に　しま
かくれゆく
舟をしぞおもふ



利になれいふ人の舩ともふる実よ詞なきをしれる品を那し情まで律

さむしさるぞよれ舩の仕ようまえて、なまへたりのふきあへ縁ど毅雾

ふかのく勝り、くまえ中方ふく、むうしむ風情あるがごとし

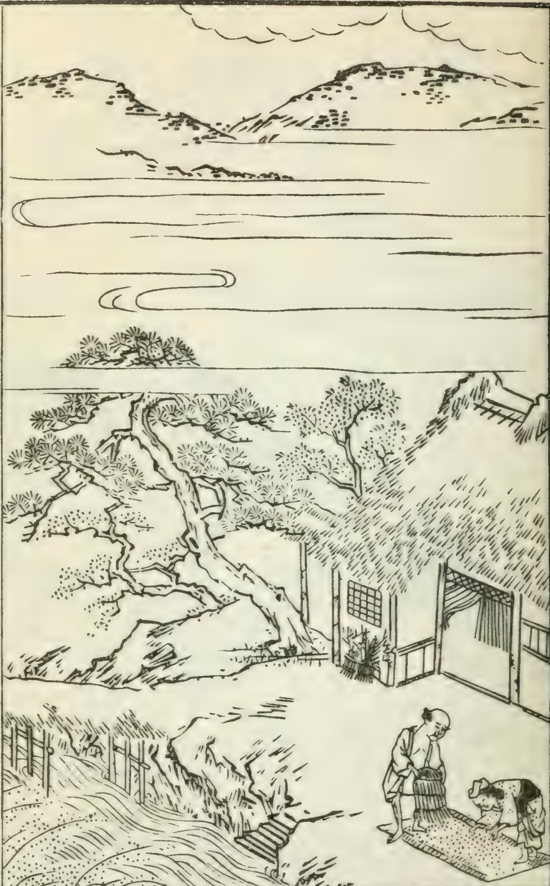

さくら
紀貫之



雪(ゆき)とゆへても雪ふかゝざれば乞(こじ)とりて涙たとへ我をいやしさ卑(ひ)しめてなり
ともがらかゝざりきでなんぞいやしとせん下郎(げらう)といへどもかきも御さ
人の子なりまる貴(き)の御方を驕(おごれ)れ人を侮(ぶ)くまれまへうし

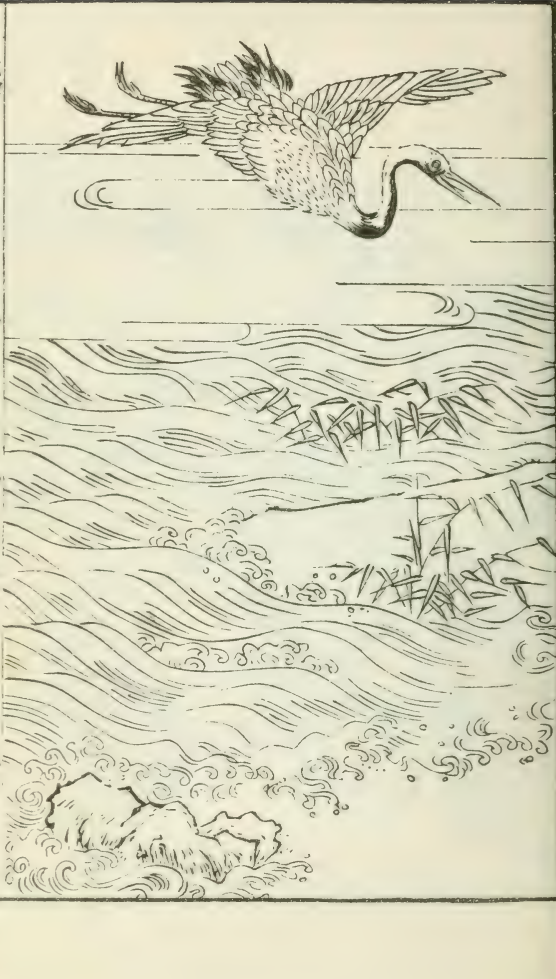


人は運をもとめ富貴を稼ぐものなれど時のいたらねハ浮世のありさまなり是乃
日のひかりにうけざるてハなけれどもまどみよし世のふを雪踏るがごとし
なすぐれしぬ人乃榮るをみてうらやむをおろかなる人といふべし




和哥の浦に汐みちくればかたを浪あし辺をさしてたづなきわたる
山辺赤人

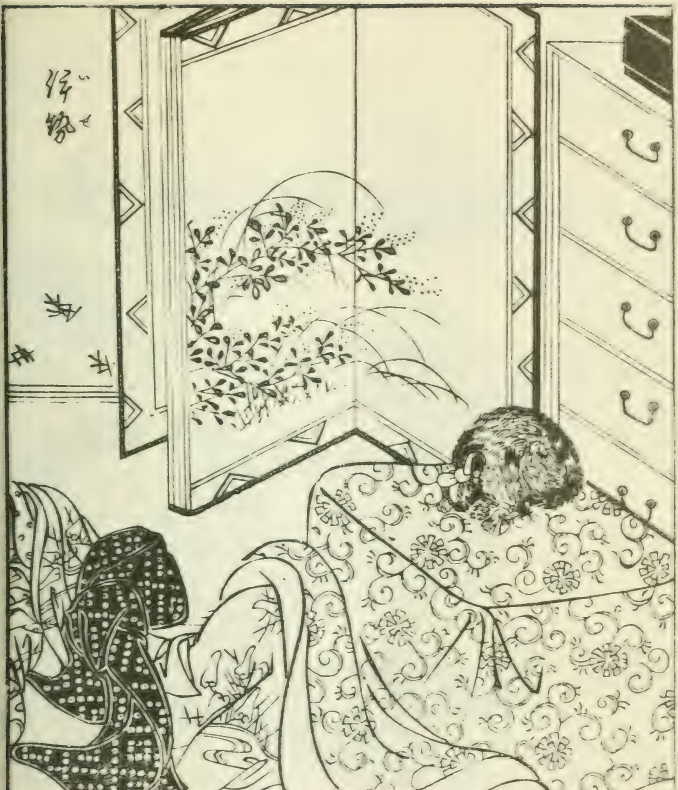
人乃癖としてうこゝろよく言つゞせしるを言されど後は八相にすく拍子ぬけらく
いとのんきなりし女はたとへ風情なくむさ苦しからせしを恥しき事なり
物毎に気をもちて能白浪能引浪能立浪のごとく詞は延らまぬ風情ありと云




中納言家持

おもひ内にあれば色外にあらはれ人のこゝろハよきる言ても心をふしく陸
ざまに戯言にも其かゝるをかも返らず言すごして禍をもとむるハこれ
によりて初る諺に雉子も啼ずハうたれまいといふ実に口ハ是禍の門慎ミますべし








世の中にたえて
桜乃なかりせは
春の心はのどけ
からまし
ありはらのなりひらあそん
在原業平朝臣




僧正遍昭

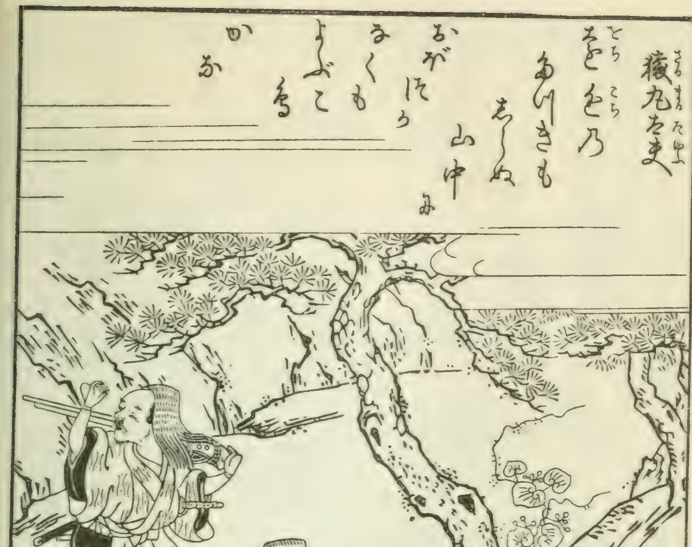


堪忍がならぬといふより事おこるもの也 堪忍さへすれハ嫁が姑と成る世の中 何ごとも日日におもしろくして 其業くをたのしむべし 世の中ハ堪忍して居よといふたとへに 石の上にも三年居れば温まるといへり



歌(か)まくに嘲(てうせう)する人をあれ人ハいやしき人をいやといふと佞(ねい)ふ属(ぞく)き家来(けらい)とすく友(とも)となる人もありけりのすり柳(やなぎ)をみどり花(はな)をくれなゐの色(いろ)くある世の人ごころを合点して交(まじは)るべし君子(くんし)ハひろく人を愛(おほやけ)すといふ


紀友則
夕されは
さほの
河原の
川風に
友まど
はせる
ちとり
なく
なり
人をゆびさすに礼儀を正してむつまじくをべきことげなる世を礼より
年をはじめは猶なふくそるへ礼儀をけさまへぞ身勝手をいふ
おゐる人として礼なくんば鳥までも劣るべきならんやといふ

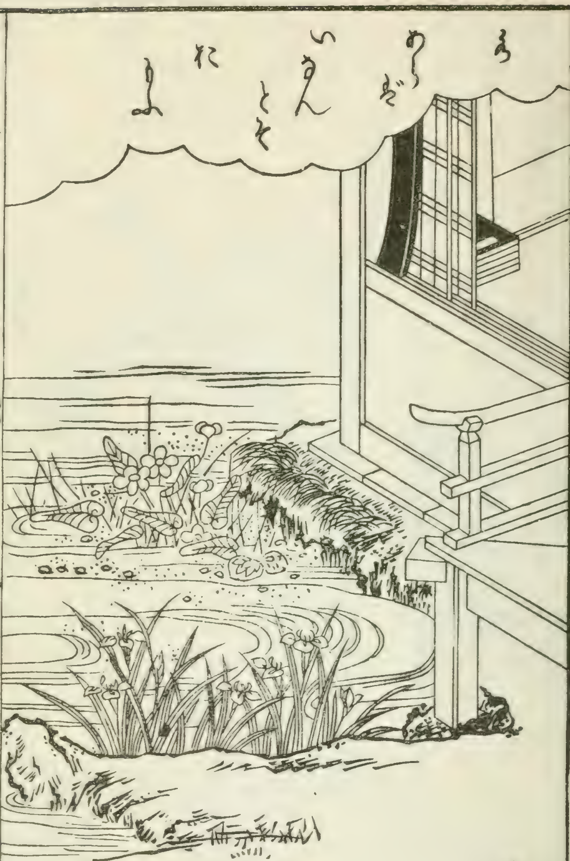

猿丸太夫
をちこちの
たつきもしらぬ
山中に
おぼつかなくも
よぶこ鳥
かな

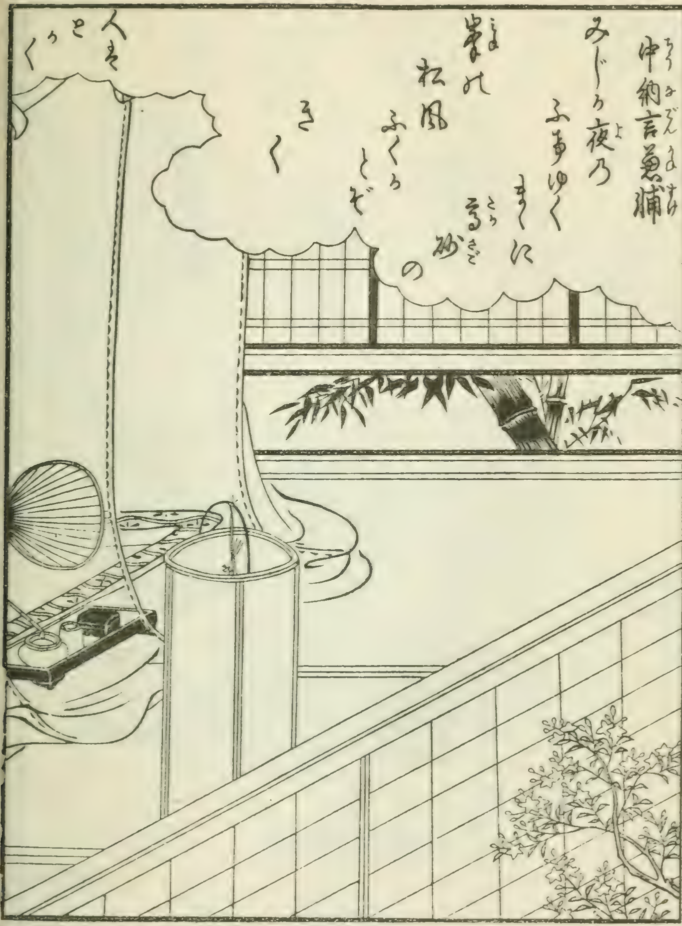
世の中に貴きもの賢きなり智ある人大なる人富貴ある人
竟に勢ありといへども世界ありまれたとへば家門の道を
同し枯ては用たゝず必捨べし况諸よ禄を受ては世は情とも




小野小町

世の中の事ハかくさよふる物より貧賤として悪きも善と云なれバすぐ
皆かくさよる物なり心ちて水のごとく清くもちてかりそめにも
根ふかく物おもふハ愚癡なり孔子の君子ハ周而かくよらずといふ




中納言兼輔
みじか夜乃ふけゆくままに
高砂の峯の松風ふくかとぞきく


曽子曰
日に三たび
吾身をかへりみる



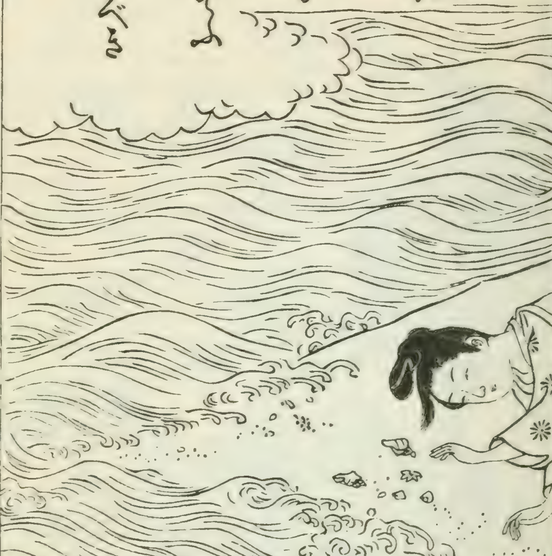
繪本花葛蘿


朝忠
あふことの
たえてし
なくは
中くに
人をも
身をも
うらみ
ざらまし

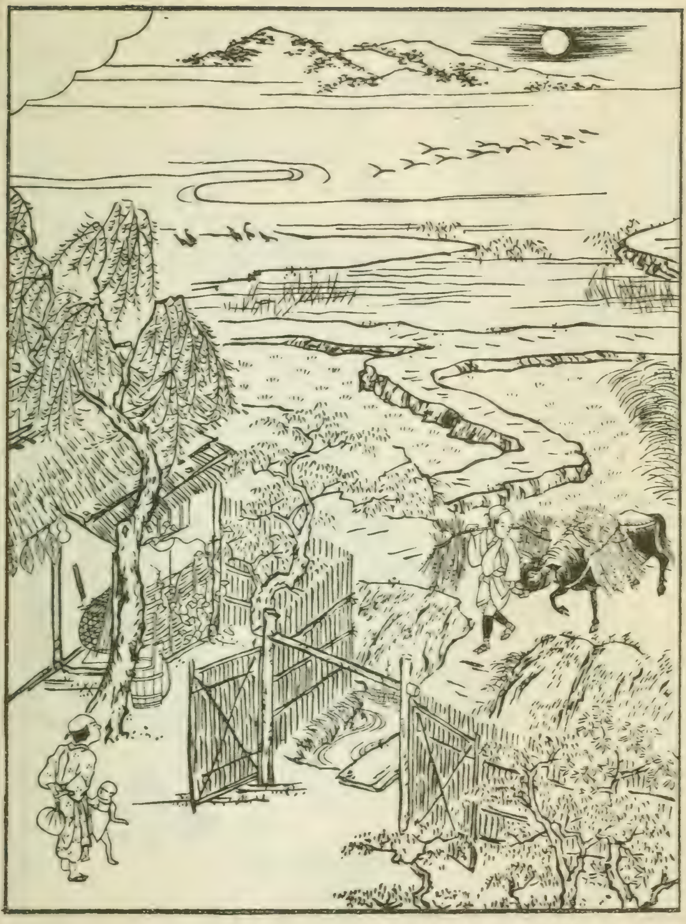

檜垣中納言

敦忠

いせの海ちひろの濱にひろふとも今はなにてふかひかあるべき



世の中に不思議なるといふに世を欺き人の金銭を奪ふ徒ありかゝるぞ縁ぞ侍らし然たとへば病を薬を以て癒し運を求めんとならば正直を守るべし貝に色々有も不思議なり不思議といふて別に不思議なし



藤原高光

かくばかり へがたく見ゆる 世の中に うらやましくも すめる月かな



人は万物の霊なれば明らかに世をさとるべし天地恵ミ甚を耕し秋実のみのり自然となる理あきらかなるを見ながら凡ならぬをねがふはまことにむかしの月うらやまるゝとやいはん

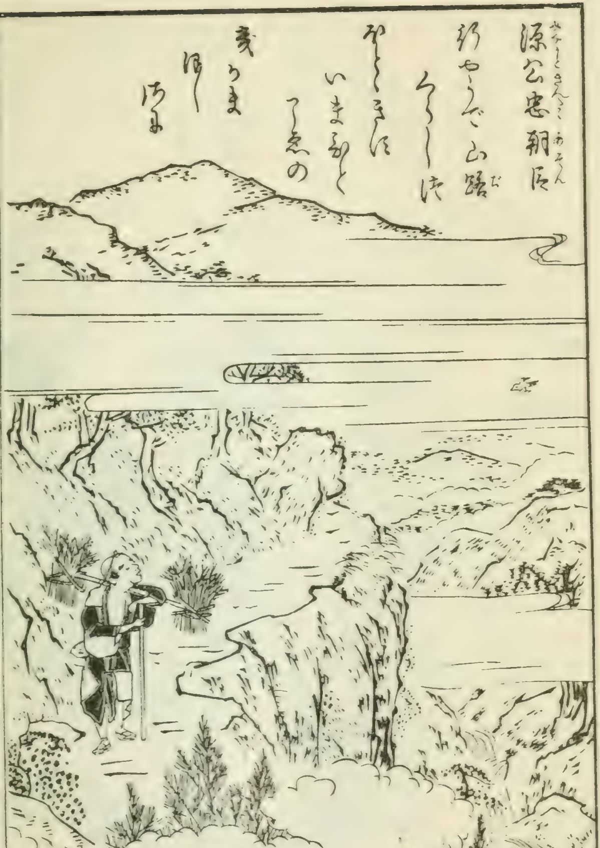

斎宮女御
琴の音に
みねの
松風かよふらし
いつれのをより
しらべそめけん

幼よりの行儀よく育てぬ人を語りのがらうなどをるふをくう
云せど家のうち習り親まいふのこゝろへの分れうへとかへるゆへ友と
する人なりなる者なりこれぞ調子が合ぬといふ勝くまあべし




大中臣頼基朝臣


若き時
よく勉て
おこたらず
餘力あるときハ
道を学び
老て楽しむべし
身の内乃
財を朽さぬ
事なし



従是志川之坊至に極楽がありといふ何事も能加減よさりとて
いつもおしまくほどに有し面白き事も毎日ハあかしぬものへ

壬生忠岑

子の日する
野辺に
小松の
なかりせば
千代乃ためしに
なにを
ひか
まし



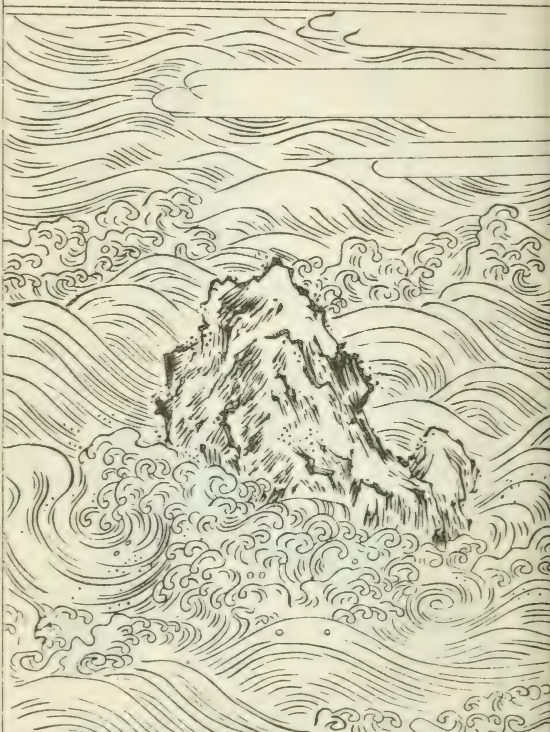
とり合せよく挨拶するも一座の興をそふれどもあまりはやく
しかれハ都て言語おかしくもれすまでほどよきほどに有べし
まことしかゝひ者に似ざらんも口惜かるべし



藤原敏行朝臣
秋きぬと めには さやかに みえねども 風の をとにぞ おどろかれ ぬる
人は律儀正直にあれば神明佛陀の感應によりて心やすし
感應はいつとなくいたりて目にはみえねどもあるべし

源重之

風をいたみ岩うつ浪のをのれのみくだけてものをおもふころかな



諺にあるひはくだけよはきはふとあり心を水のごとくすなほ
なれば人も善悪の友によりてかはるとなり
常に友をえらぶべし水も方角の器にしたがふと比す


源宗于朝臣
常盤なる松のみとりも
春くれはいまひとしほの色まさりけり




藤原興風
たれをかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに
老たるを敬ふは父母のごとしとの本文あり依てことに老人を
敬ひて古きをたづねて新しきをしるは是則学文なり

清原元輔(きよはらのもとすけ)

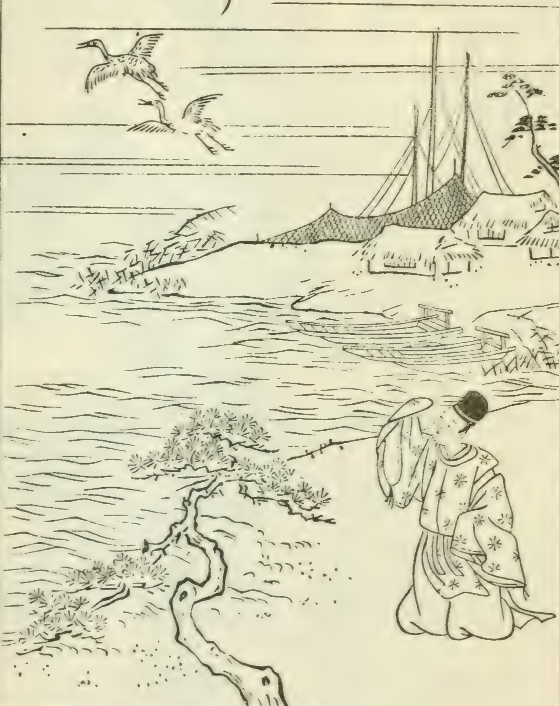
秋(あき)乃野(の)の萩(はぎ)のにしきを
故郷(ふるさと)に鹿(しか)の音なから
うつしてしかな



人まじはりしてこゝろざしをうしなはぬやうに心がけてたとひ
人に仕ふれども はじめの忠(まめ)をわすれずして錦綾(にしきあや)かざるといふとも
なく志(こゝろざし)をうしなひ身を損(そこな)ふ人多し よくよく慎(つゝし)むべし

藤原清正

天津風ふけゐ乃
浦にゐるたづの
なとか雲井に
かへらざるべき



人の学ぶにかくべき事あり古は曰その人の善悪をしらんとおもはゞその友をみるべしといへりいかさま愚者も賢人とならぶ人は善よくまじはれども悪をこのむものなり余を是にすぐらくなるべし


源順
水のもにてる月なみをかぞふればこよひぞ秋のもなかなりける




坂上是則


三條院女藏人
左近



光陰矢のごとし月日くるハよのつね幼より何事にても芸能おのおのが業くをたしかにおぼへざれば老てのちくゆるといへども帰らぬ月日なれば心がくべきの第一なり


大中臣能宣朝臣
ちとせまでかぎれるまつもけふよりハ君にひかれてよろづ代や経ん


壬生忠見
やかれとも
草はもえなん
かすがのを
ただ春の
日にまかせ
たらなん





東都

畫工鈴木春信筆

作者滄花禿帚子

明和甲申臘月大吉祥日

京橋銀座町壹町目西側

東都書肆

山崎金兵衛板



春信



春信



信春



春信



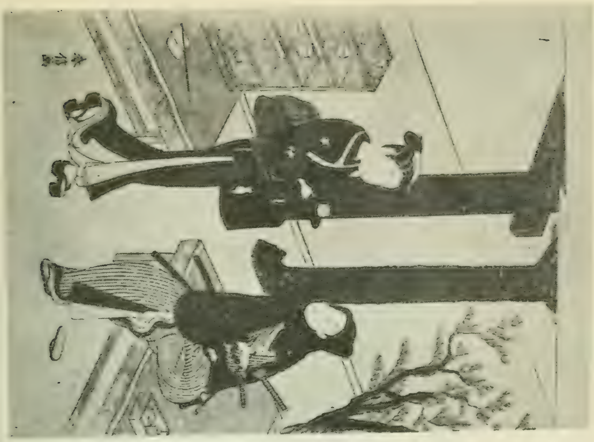
春信



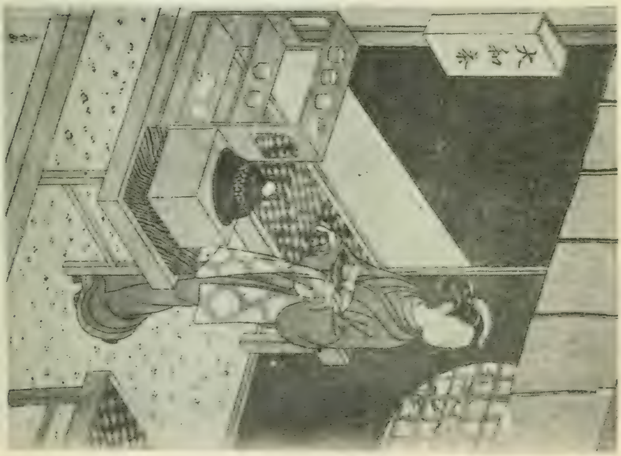
春信



春信



春信





春信



信 春





信春



春信

繪本吾妻扶

序

飛鳥屐足鬪牛豎尾雲中芭蕉ハいづれまも
画家の虚妄みだりに金罔亞槐乃馬の稲ぐ
そゝく貞信公の郭公聲を發せしたぐひハ
能画の真より出て川成が人をまどはす形
僧正の訢詔をうそしハ画家乃滑稽なる
歟し今や東都繪吏さんうれ狩野家ぶ入

さる程ハ雪舟土佐よ合しハ英ふ入てむのく
其後ハうそふうきぞ中ふ北尾の一氏ハ其
よるところ行門戸をあてゞ滑稽のうちなの
づの其真を寫して營城のゆくところ具
ありぐへとももつとも丹青家の規矩をまもと
まず其名時ふいちもつし書林からすらて
江都の名をうずらふくをかん寫さしむ時めく

諸家の狂哥をこひうけ櫻木に壽し号て
吾妻からげとよぶ費長房が術ならでこれを
ひろげバ江戸四里四方をひと目に見るがごとし
お稚衣まけ八二色の冊子となすものより
畫ハ心の歌哥ハ心の画なれバ即遊乃鑑賞へ
何ものかこれにまさらめや

唐衣橘洲誌





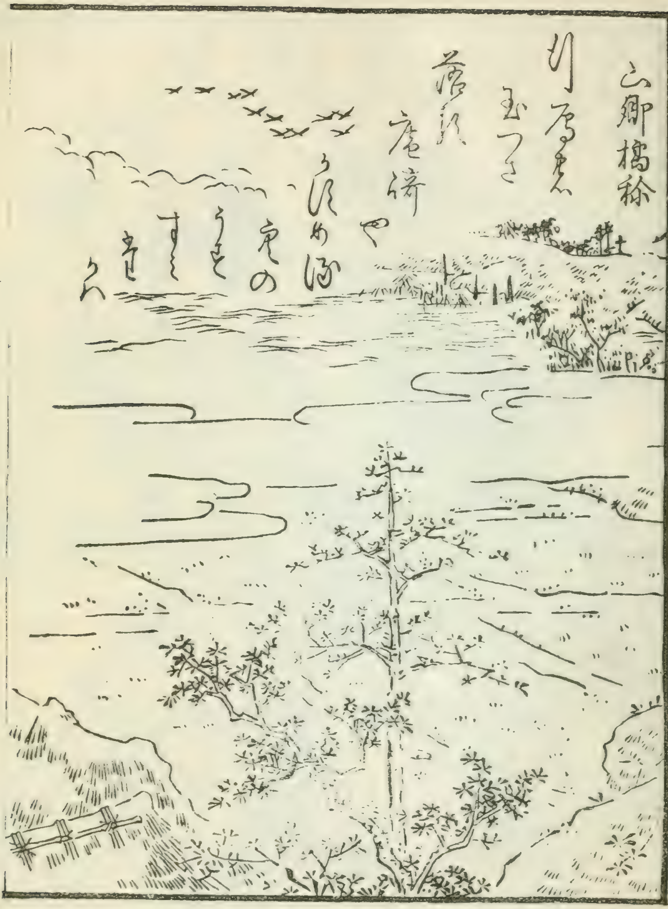



花乃
王子なり
圖南女


















灌佛
小川町住

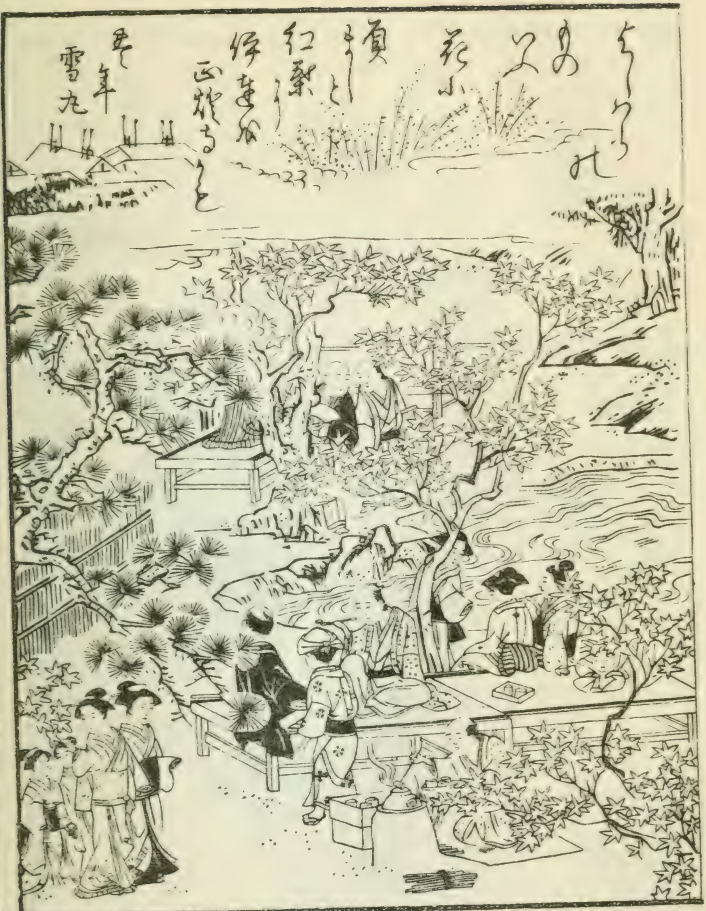





花の
富貴ハ


白川与布祢

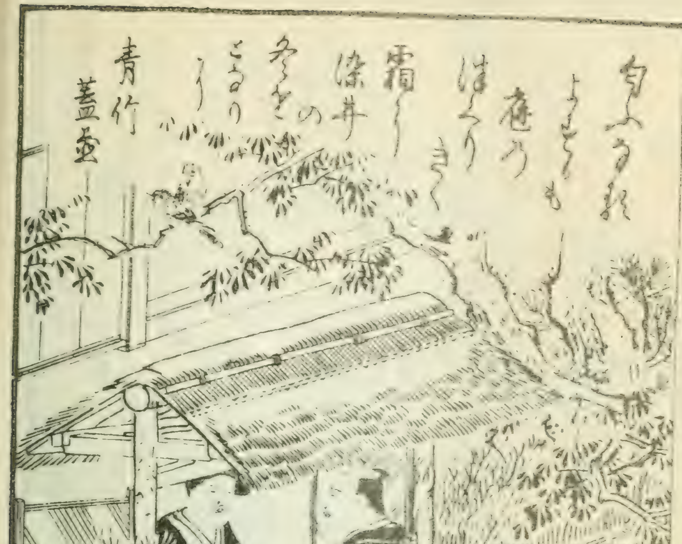

松風蘿月





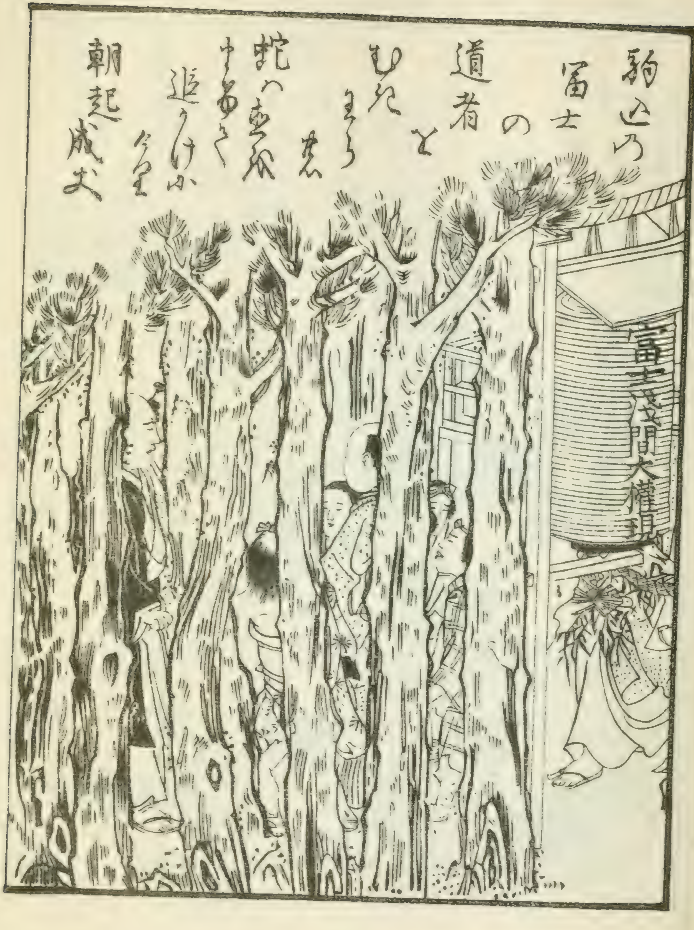

谷水音



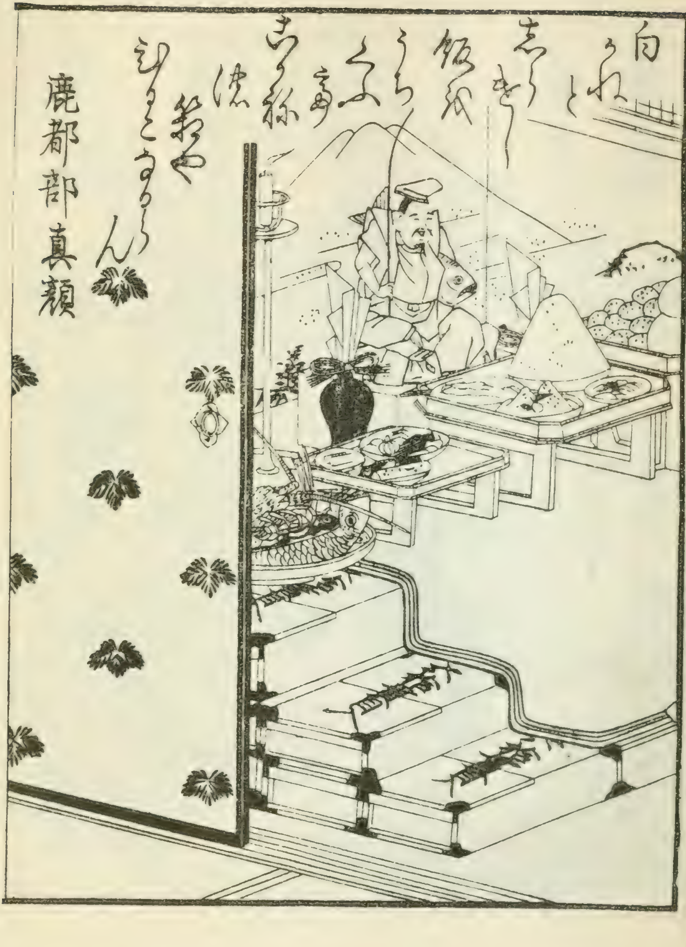







富士淺間大權現


賣買
商人の
豊年雪丸

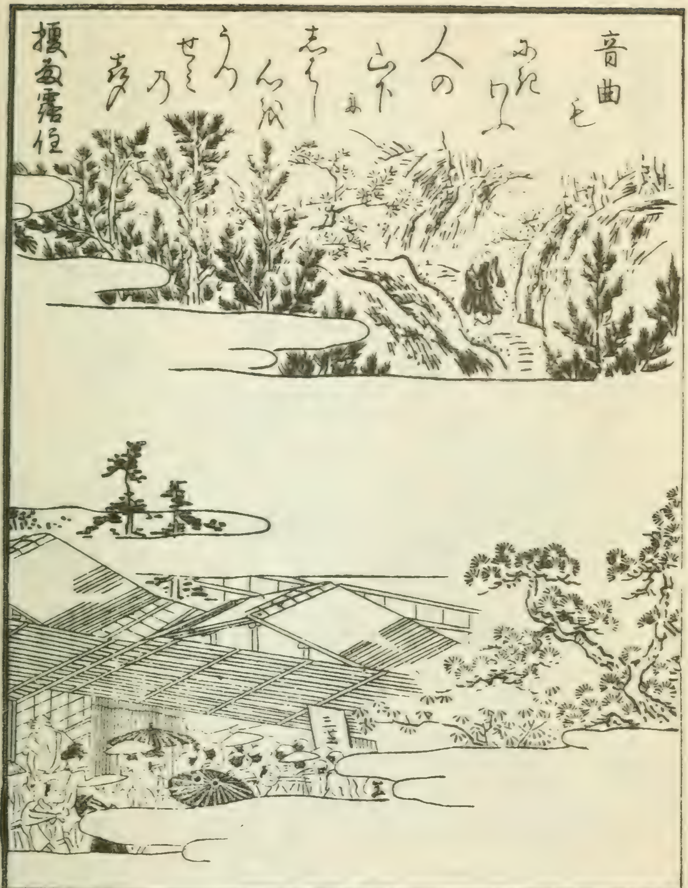

鹿都部真顔

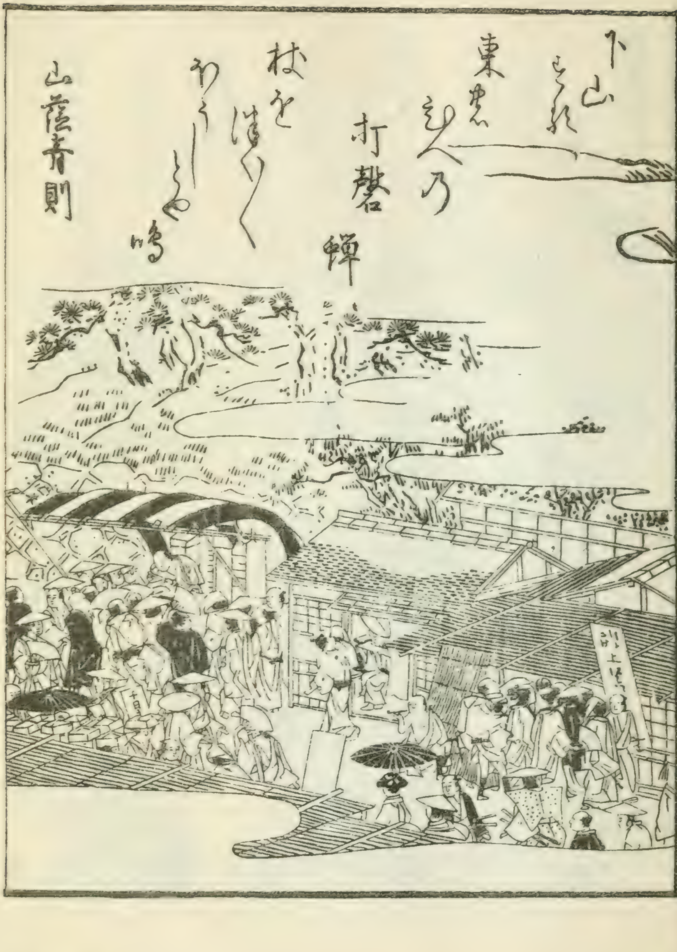

柳枝也








音曲を

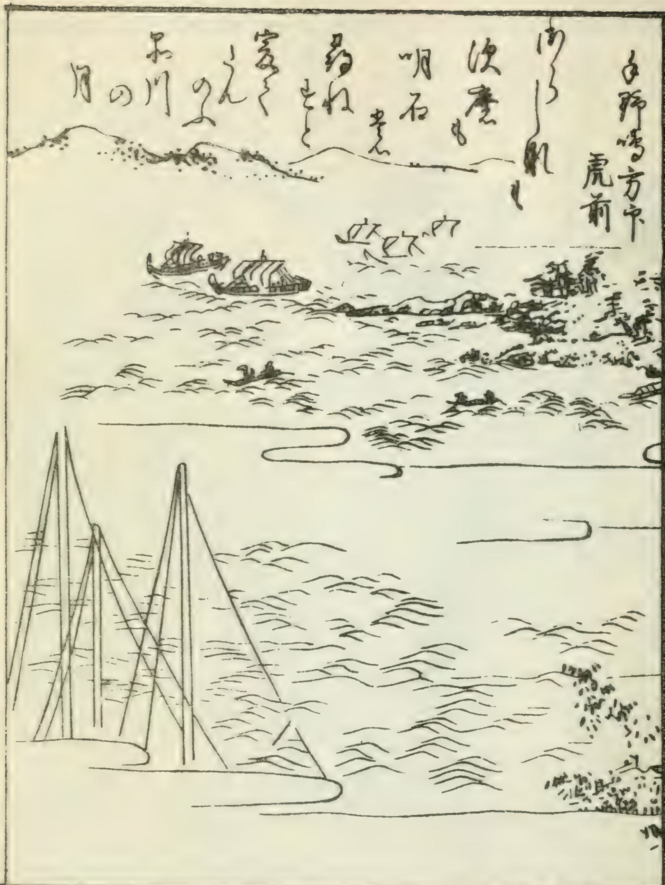

東叡山の打磬
杖をはやく
山蔭青則



豊年雪丸

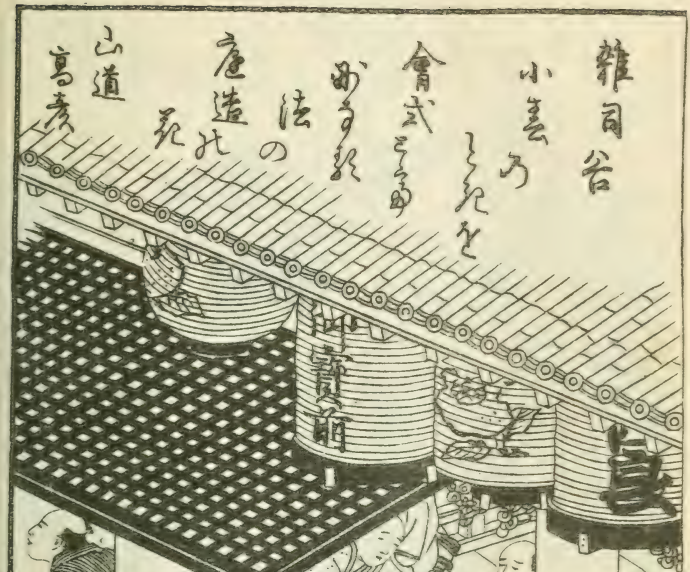






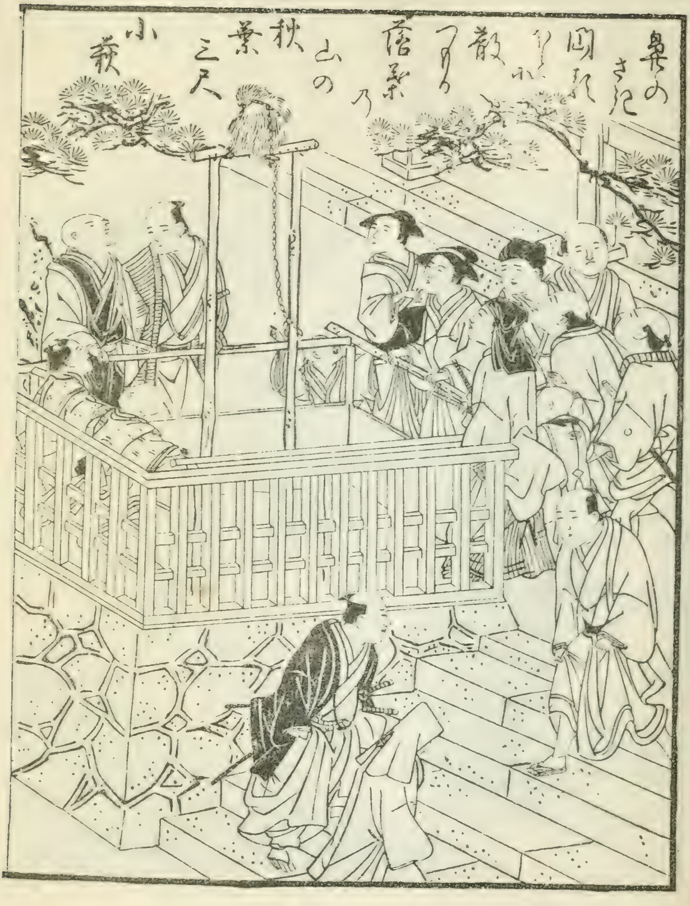

澤辺帆足



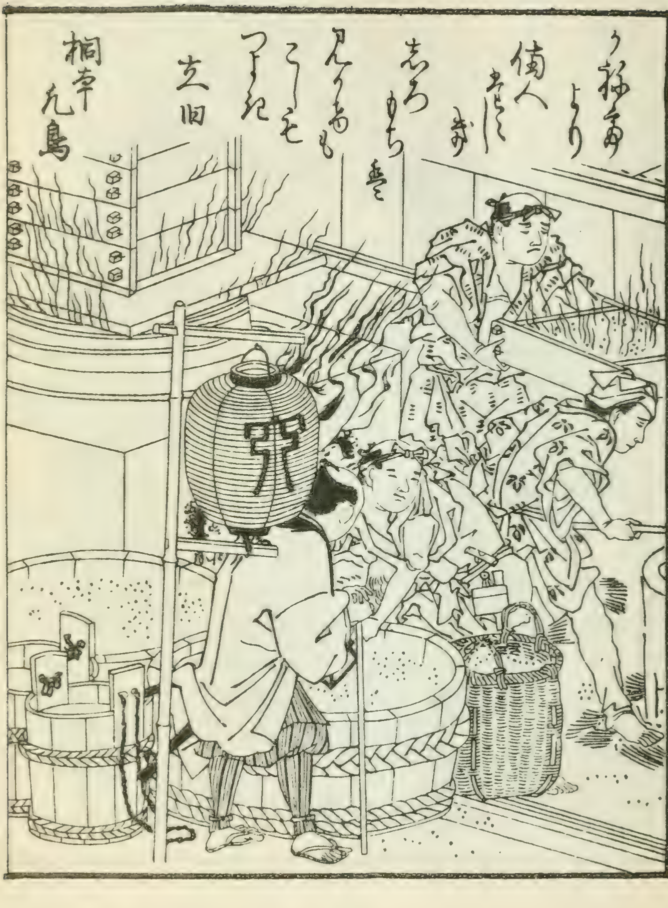

雑司谷
山道
高彦


便々舘湖鯉鮒




落葉乃
山の
秋
葉三尺
小萩


紀有安




池田澄
壽



政演



清長

四時交加

序

余嘗學丹青於紅翠翁以為業
近頃換移其業鬻烟包烟管身
處世營紛冗之間志在江湖間
靜之裏時時偷間讀書棲遲于
東都要路罔朝罔昏觀貴賤混
駁士女老少綿綿絡繹而交加
也平常在舖中凭梧偶漫画夫
貴賤士女老少等所交加于大
路以別四時月日尚之以讃詞
遂為二卷書舖僊鶴堂時余之
不在探几邊懷此草稿而去託
紅翠翁直曲補麤以潤飾之遂
上梓所以公于世者雖未觀東
都蕃昌人物藪澤山妻野孃展
見則歷歷乎如迎眸注目是所
以恵於山妻野孃也予其恕宥
仙鶴堂謝罪云故聊題其端

東都　珊洞散士京傳識

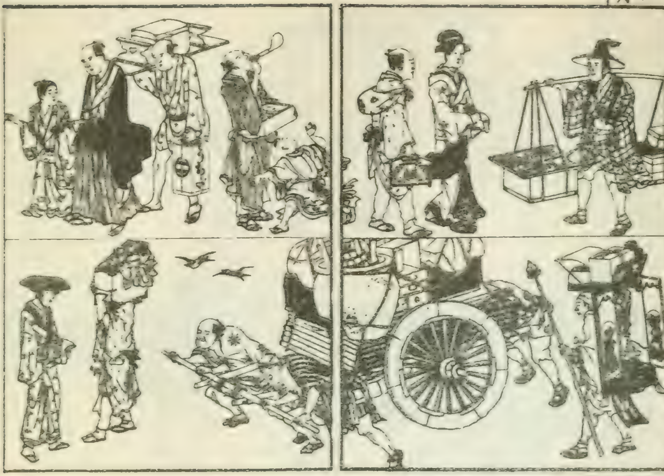
旹寛政戊午春正月

翠袖三千樓上下
黄金百萬水東西
五更市販何曾絕
四遠方言總不齊

正月



二月



三月



四月



五月





春

可憐兒女喜年芳。更製新衣換舊裳。
況復春風花發日　欺花羅綺共飛香。

夏

尋涼夜夜倩樓舩。花炮如星星映天。
人影動搖虹勢裏。艶歌狂發萬家邊。

蘭洲散人題

春　　　京傳子著

僕年ごろ大江戸の通衢に居住して。旦よりくれに至るまで、往来老若男女たちかはりゆきかふの光景を日々親く士農工商路に聯り車馬闐集し。東よりも西よりもたち紛々として賢愚を辨せず。擾々として貴賤を分たずある。恰も影燈乃転るに囲両あつまりて繞りめぐるて人跡多けれども小車の支るに似る支ありく環のめぐるためしさらにちかきに見知れる人ハまれなり。識ふ大都會の繁昌。何をもて例てかこれに喩へんや。

ゆたかく初春ハ大路ゆく人もさすがに鶴ぞ歩みを
なし。虎さへこゝろやすく若きハ益さかんなる萬歳ハ
屠蘇に酔て踉く蹌くとゆく。才蔵ハ雑煮に飽て
腹鼓うちならしかなるもハ礼者と変じ。節季候ハ
手追と化し。百千鳥の囀ぞかしましく。物喰ふ
皆あらたまれ年男ハ上下のあさまりのむきのうるはしき男
どもえらむ門にもてアウンの赤鰯を挿し鬼ハ外へとさけび
豆ハ雨霰のごとく田村麿が矢さきよりもはげしく払ひ。
扇くのちらしきこまたたえくの商人も氣を取りまはす

宝船売ハ素初音猪牙にのりてやく走りてとく
六實ハ街を繞りて八ツの穂をもてあそびし。
手わたりけく削氷をあきなひ。雪花を踏みて薺
を売。傀儡師ハ哈カあやつりて忘る猿曳も
機橋のなかきなる波。福寿草を買ふてかへる
人相見ある日ハ鎗梅とふからぬ剣術者ある
笛売ハ楼なる宿ゆも学びたる音を吟す。鏡磨ハ
池なれ家ゆ新月の影をうつし鳥黐乃袖とまる
生くかへらまでハくるを知らぬ宴なれ軒にさむゆハ

傘の古骨のうんとよびたる声にも景色ちかの級
こゝろしなりまた壽島舊林をあさりて。雁ハ北に飛び
紅糸貞操をなつかしみ。燕も古なるかへる。稲荷祭
乃太鼓ハ天にひゞきて川雷の絹を打つ給ふ
坂に車をおしのぼせて。初登山ハ寺子を打し伸
釘線売の腰蜂のごとく陽のにほひを見て。懐く
売ハ浮世の夢をさまして。錫売れ声を唇しあぐ
いとなみを見てハ鍬まへ立し戸ざされ御代よ
ありがたき盛ん。命蔦を風にひるがへして。列子

がたりもきんとおもひ出づる女のこゝろすみかへるかと思ひてけ補
とうしなる仙人を偲びて杏黒れ高山も麓のちかきに
ちり起る。鐘建立も煙管の大頭よりなれる。錦ゆゑ
売れぬ日ハ恥しくすみたる理なるをかし
春風にやはらかき吹き来る。人これ花を賞しく野
山しあそびこゝろしなれて。飛鳥山。清厳山。墨田堤
茶の木村。大井村。上野なんど。三月の一ト月ばかりてらす出あそんへ
くもえなくさまよひ茶の給。若和布売のこゝろあき
おたちも千太郎の。くるまで足をとどめく。花のかげに立

寄。若鮎の鮨売もまだ。人を押しまく蒸をなすみえ。
薬種屋の幟ハ、ふかぬ桜乃ゆふべより鰻鱺屋の妻あ
いかで桜なこのけよやぞらむ伊勢櫻を名し神ぞあれ
た毛深さるゝ悟ふ書あら歌人ハ人丸桜と云ひ
隠者ハ西行桜ふるへめぞ。繪屋ら浴衣櫻きたる。書匠ハ
家桜をみぬ。堂頭も兵さるゝ訓様を申しをかゝく
はなみよ志しみ緒さるゝ太神楽いらぬ。氣桜を
機関ハ乱る花るぞらへを下て飛のへ花見の賑ふ是
せよ寿る人ハ出まるゝ人老もおく口の多あるく下こと

なく上戸と郁く坐々の狆葉の花の陰。何を
こゝ川ゝの書流れ書へらんや。

夏

はしら春の去行を志らし浪ふし吉野の花更
あらくなる様を人のおかしまる處らんけ。昨日の様子引
あけ。寛ぎしくまでもましてす。住居ちれ風のみゆく
るまうらし藍染の簷帷をの花笠の標識ゆかゆる
ハ青葉ゆまし乃邦のいふ清、雪る川しく凉しき
邪しく。輕粉賣家の招牌ら。若楓乃くるまの下。

色紙あるを始めとし。迎梅雨のまれなかなる子
規の声情緒をそまらひ。松魚売のいかめしき聲を
美人ハ初耳ふ聞く。佛生会の甘茶ふりそゝく開
乃花新茶を包みし紀蟹。一枝鮓争初茄子。牡丹。
葉子花なんとかのおさめく持出し売行てふまでも。
蓼をはしらく深川ちりちらに待居の夏山の景
色をこうらるその自由ある。僊境ゑ居るごのすくく。流れ
掛錢樹生の園のはまほしなき端午へいとま人家
にも粽柏餅を作らり。菖蒲刀。上り胄とつくる軒端

菖蒲ハ風とそよぎ。幟の音ハ浪ぞのせ行る鯉の
おしく門を見る毛鑓ハのぼせん松林を見ある
之飾る君の姿行列と似かよひ。流鏑馬ハ坂
を登れども街を渉く扇売る風をあしらう人や
想ひ家相茸れならぬでらなき紅ハ早乙女の
すゞる何さゝんや神あき合羽ちらく持しかる紙ハ。
早松茸のうらしく備らひ傳らく来る面こ。今宵
信然ひきを。つんぬ世の人を友とさる蚊帳やの
くの書をむら来て慰め。三絃ハ役や眼をさく音

あふらく零丁をの夢枕に沖こぞの花垢づきて
囈鼓るお霞の歯いれハ清らかに鈴の音嵐と。
冷かの歯乃こぼまつハ補ひなく。梘竹売の聲々
しき喉声ハたゆるて雷鳴ゆる。しばし凉に
隠者の門をたゝき流れ含蝉ハ閑居の耳かし涼の
金魚まいのらハ硝子をもちて暑ハ乃ひくく
皂羅まつもれ價ハ涼より高く草凪が甘さしとる
異なる盧橋の袖まれ香千日傘乃こらさし
のぞまる細織れうしく動かたしみ扇のあふぐつれ

てらふれされハ。魂あやむのかつらしまつる夕立の
牛車も山が成かく夏木立をさけし戸板千
ラ瓜の捨ふ舟とらのみ出るらくこさう峨せる峰
ら宮すゑ山あ成豆を。打おく地く虹をうつす三伏
乃暑さ成るもむちう。人も笑をはらくのごとく犬の
舌を出けくあかすくとあゝまさるかくれ中ハの蚊
ゆ焼食の声まざしくしぬ。蒸子も雷を却くらけ
ふ涼られ聲むやかうして。清水ちうふ柳の陰
と居るかごし。椽とやるゝ石菖鉢ハ。十の音

んたのにかのひ売の皿そ玉あをとさく喜すゞをれ金
貴金扇と翠雲紙つさげ。機関と見るものゝ壷
中の仙とおすれ硝子細工さうの飛人ハ夏の氷柱の
とあやまち。香具屋の額と呉るゝて天女もおの見成
ちら蒲焼店の芬くさ竹匂ハ観音も鼻を掩ふ
べし。僧しらく。俗しれく。町人とあく百姓となく。
旦より夕まで。交加人のゆへ酒飲く。絹川の流れ
のごとく。さぶまつらお秋ども。志す業をらぬし人の
あらぞ。うつかりまあつと似とらいはく亦き人のづまる

類し窓を沽す志の物草ハ宝珠ふ座し。茶挽ハ
汗をぬぐ〆て。路後なゝゝ漆うるいゆ涼の状あ
背とつかれ焼継ハお越の温公よ嘯と竹樋うち身
京位の手代彦すやらるれ。掛子を欺く玉蜀黍
珠み高れ苦蔵店。鯉乃雛子焼。都の涼み人龍
子ゆへの闘せおやらハ成めうりよまぐつ西瓜ら奴
ハ髭となりるあ。蟷螂うるハ蒲の穂とつけれ足留店の
礎に。秋を高うくあかるゝ力をのくらびあく角力
の稽古附あり。売声ゝハ又面ゆうあふる。茄挂卵あり。

同じく屋しん。まうとこ縁を売て稼ぐ。
書肆所々[illegible]〳〵蔵。

四時交加上之巻 終

經緯不斷曳踵行
塞巷填街車馬轟
接袂連襟相陸續
紅塵萬里襲裳縈

七月





八月



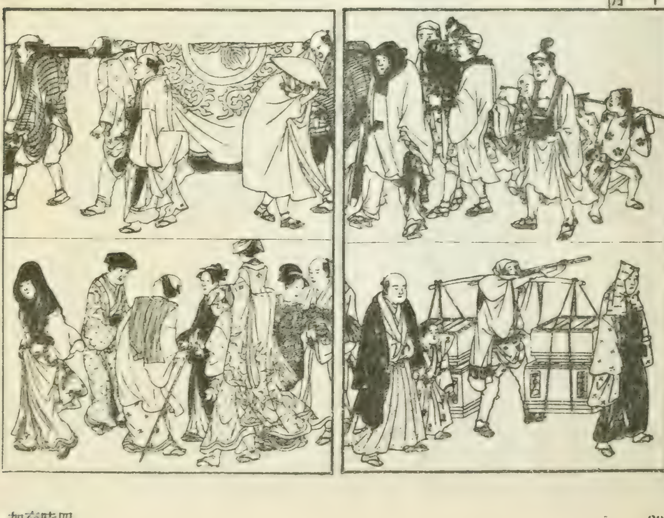
九月



十月



十一月



十二月



秋

炎威些去起秋風。燭影連軒望不窮。
花怕紅羅連袂出。高歌齊唱遠街中。

冬

淺草寺前開市連。共求春器待新年。
街衢衖衕紅塵起。絡繹猥攘人践肩。

蘭洲散人題

秋　　京傳著

たのしみもむなしきに。庭の朝顔もあしたをまたず
きく露あやうくなりゆきて。玉はかなくその哀しむべし
乃云の葉を折れども根ざしはあはれなりしと。
書きしもおもしろき哉。秋来ぬと目にはさやかに見えねども。
眼鏡賣も風の音におどろかれ。桐の一葉に行末をぞ思ふ。
下駄うりも露の継のおもき紙衣折にもその餘のはかなし
井戸にまふ乃硯をあらひ。あふぎ團扇も竈にくべ
て捨てられ。人家に短冊竹をおしたてて。ほしを祭る。

立琴にハ石川雁をかく縁願系にを揚蝶をとゝのふ。
草市の繁昌にハ神農も指をくはへ盆躍れふきみふ。
陽何も舞をとらむ。墓参れ夜姿ハ罪の祥者絹色を
おぼえ、棚経の坊様ハ荷葉の露こころを濡し一節
の秋にぞふ売あれど世帯の園にある燈籠売
あり十七日にハ観音草をおさむ。八日にハ薬師如来
同国の尊佛を白毫より稲妻をもらし鍋の綴け
の嚢籥ハ風穴より石川嵐をふき浅草なの四萬
六千日の縁る。この形くもいふおもふ。酒さけ似のと

人につふ砕ふ。白玉餅を彩綿の白き似盛て七色蕎
麦を花野れ餘をこのむ。桔梗刈萱女郎花菜飯
田楽二八乃新蕎麦。煮賣の篷帷萩似涼茶店
茶碗蕣に似たり。赤情棺ハ天より糸をもらし。
蛍を地に星をとぶ次。白の色の襦袢れ白小袖を
あつれぬ雪をあへ薄の島臺なるむ。琵琶を弾
きてよねふハ良夜の酒をおもかん盃洗滌ハ童謡ある
を思ひ出し放雀ハ陰徳楊寶が故事を引。薫を
零れるの入り蛇ハ穴に入り。初茸売の声もきこゆ。東山子

の腰まがりて。月見えうしろれをかれし四家にも。鋏
いろいろ野辺の雑系も代ぞれきぬの名おつきあれ
まぐむしおり行虫の声の如く。かぞへ眺ぶよう多ぶし。
外面の麻名書を妻よぶ夜半の二つ夜くとりわし
て待つ姫峰のあれ系乃雨。まつりに踊くと書し
おちとなるを。されば鄙乃あむ千秋の気へて都會の人ぶ
ハいぼくもおぶれど秋のあはれをしる哉。本物のいろね。
菊の酒。甘露なりと似るみ。后の月を賞よくハ。
栗くふ女も異様なる哉。柿ハ珊瑚を集め。葡萄を挂悟

をほり。月宮殿の光景もめぐりて見へ出てと無く遠
て撞かも何ら衣をうつ砧の声く霧しぐれあり秋きまや
とたがそれ蜻蛉うちつくハ竃馬れ髭の長きを見と知。
蟷螂のふぶ道かりんとよびを出り。ひねりめなき人の
吟る新美をうし。雑貨店を實の市をあけ細絹舗
あて野山の錦似をつる山くれ粧ふ光景をみつゝ。
龍田姫も茶みぎ歩こゝろけ霜乃何ぞも粧ひおちむ
みじくの筈日似移しもては野分もあれしく折とめぐりて。
風を足を乍くとくぶ歩。造化もこれ人情よこうら新しく

なし大工ハ高作く戒にて弟まされ。供養音をかけらま
みむねくる生み。しつきふしれ竹の葉かけしをやるあ
まりーく世そくわかせもしき中にも浮世の塵をのがれ
寺ふ人ありて真間の紅葉八幡ま鹿陽田の枯埜。
先崎の雁。詩を賦し影を誦し。酒をこまがいに入る敷
いぶらむ舟よそをあそばかう翁らそ。ふら山しきき。

冬

岩根ふみみそふれる山も眠るやうに。枯樹も綿を
きふのごとく風吹きてきれ頂ともれて晴れ行るの
潰瀉ととこつ米から漬菜納豆賣れてあら骨を
しくく宮ら残杉かえん。大根付馬ふも雪さら積れ。
招解まかむしも枯柳まなびくし八手の花ハ山藤の
咲早さ武蔵の妻ハ窓のくちふ立ふる哉。み雪きといふ。
みふ行く人ハ腹まで伊丹を携しゆくて。月を仰ぎ
夜の空を佛しら。あつさを吹ふる蔵で保きの家

氷まくらふの炭賣に化し。旦より夜ふかくまで八夕えん
油ふりてと変じ。十夜ハ佛を極楽國へつ。
ろつて佛菩薩と頭痛をもまし。恵比須の賣買ハ
喜見城まぶ見事。寺社ももつてお成か
躰ら作。猫ハ火鉢ふ眠り。犬ハ門を外し暮ま
の塵ゑを頭巾をかぶる寒。白鷺の鳴も足袋で寝つ。
冬ぶまれさく残りひくらし。手焙をまちかうし。
盆か宮熱のごとく生て。古都蕉の洞ぞ咲れし。鼻
ふるハ氷柱すなぶしくまれ摺て火ふふあきらか。

巨燵ハ膳をあたためし。氷れる酒を名とよんで。
薪たく鍋にて時雨を催し。鴨も箸みーかしを
いへさき二つ橋をあたさ寿。芹の根も長しよへつとを
鍋ふ屋千銚縁。河豚汁ハ若まる不らくハ（葦簾
魚汁ハ朝をまつ川よ炙。此所より昨でも暮の気よ
茶の根をつき穂。塩屏の松もしと千家の野象の
契りをむもぬ數し。玄猪の重盒を黄ま成蕊ら
うけ。御命講乃餅をもてまつ。いけ縛ふる。汁彌陀
の甘きまき。石花菜をよだつをとるかし。醴酒のなさ

はきゝ奈雪の蓮葉も香りちもゐし侍講斎
其帽子ハ霜妹あしらぬ鳥さへ慨く徒なれあり。
芝居見の女中ハ雪み板の面白ればくかしのほ
柳東都哥舞妓の年衍とくて霜月顔ふう
狂言ちとこをよそしきすむ積りて顔見世に稿ます入
のはり流行の役者附四きにちらし雪ふれ漢
夜かきさて志を一陽来復きる川此地よりる初顔
役看板よハ甲乙段あらそし請姿蔵れいろまきを
志らし提灯ほしたるる定紋まを中へ祈燃ある

そりすて趣向をはくえ積もれ嬉しや志しため。
山よ言く張れ翩翻としく雪のちらくをる
おち紙く書しもむ屋あり。作者ま高まる新古
を論し。役者も扮粧も銭とうちち上下
の上使言き千原れも。広袖も善悪分説
戯らし形乱。黒衣来の轩人宝物を集めて
筋隈も忠臣。後をあて始て走て薮そして
幽霊白く皐くとしてる悪人紅なるも三角の
雲ハ小曲ふまてぶんて像り銀る月ハ積ありき

急しくつらそそ釘づて梅紅白よ咲張り抜乃
叢緑青を事見物の男女或ハ勇。或ハ笑或ヒ
喜或ハ悲。現在冥舞台の上て眉を落事
楽屋とあり思事も仁義ありしを児女
も古人の姓名就おむゆ豈勧善懲悪よたら
形おもんや。禅と古来の盛衰とくをるべし。襷も
帯解の初むれ子ゆへの闇路黒羽二重をつきれ。
初ま鶴の模様を染出し商人も是れ衣装きるを
いおそすもとおもむは扇よたひさる姿ハ桜よ桜ま

寄まし。夕み顔のゐとゐしし。ゑ雛ハ変婦の軒よ
出され薫子代よを嫉し拂の頭中よ郡里債錦あ
賓客の桃よ赴く黄百冥悪鬼乃角よ生る。
とし忘れまうはまた儀も猪あとくあまよ對し
宴縁も唉を始めんて蹴走ふる形生出案のちに
幸銭も深よ落市おきハ年の後乃道志る鍋
まほ番事敢あ生涯掌とし此市の続きハ代締
の人ま目を近拾ふ続の柴売りれハ雀にしてう地よ
みち山海の産物をおくよほく寿ある斡ひ紅塵

[illegible]

[illegible]

四時交加下之巻終 大尾

檀畫 北尾紅翠齋 [illegible]

繪本燕都櫻 重圓北尾紅翠齋 評餘山東京傳 [illegible]

[illegible]

昔寛政十歳戊午春正月

書林 御江戸常磐橋御門本町筋下ル八丁目通油町
鶴屋喜右衛門梓



政 重



重政





寫樂



寫樂



寫樂



寫樂



寫樂



寫 楽



寫樂



寫樂



湖龍齋



湖龍齋





湖龍齋



湖龍齋



湖龍齋



湖龍齋



湖龍齋



文調

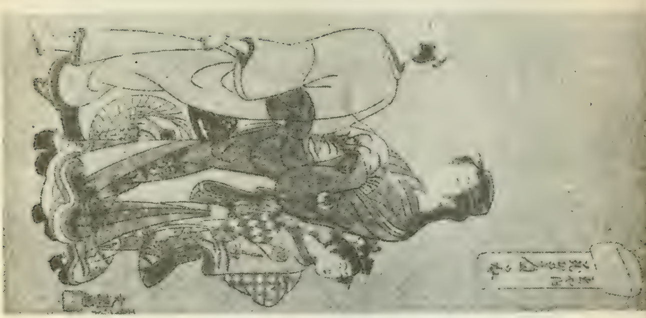


圖 文





文調



文調



文調



文調





文調

役者夏の富士

序

小野の小町は歌に面白げのことはをつくし身の
はかなさを命に限りあるとても其
ありげのさかるが役者の業なれば
高位高官より下々の下は人にいたる
それぞれの趣に綴り娘方と親仁のうちに
定めあれども立者に大振袖を立てそのと
いく六十九や廿なるもおしなれども初恋の

しどろなくさゝる偏屈な人は芝居を
若き人の見物を毒のように思へども
人の心の情けなきところより甚だ益ある忠義の
ためなく堪忍をもつて身を修め国を治めん
礎命を義のごとくおもひ孝の
道はまた君傾城を欲し又悪は奢るに止まり
栄花によらずとも大切にしあれ善は
てあるきよふなれども終に太平に治む

さうなれば鎌倉の御大名は不行跡は
狂言とおもふがよし能き事をよしといふ
いふはそのはなし思ひなす所も能といふ
のが贔屓なりその為に贔屓のかく
そうして役者夏の富士と題す

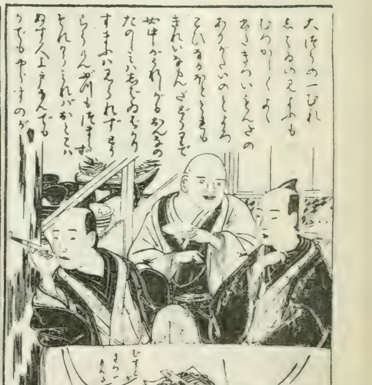
通笑述



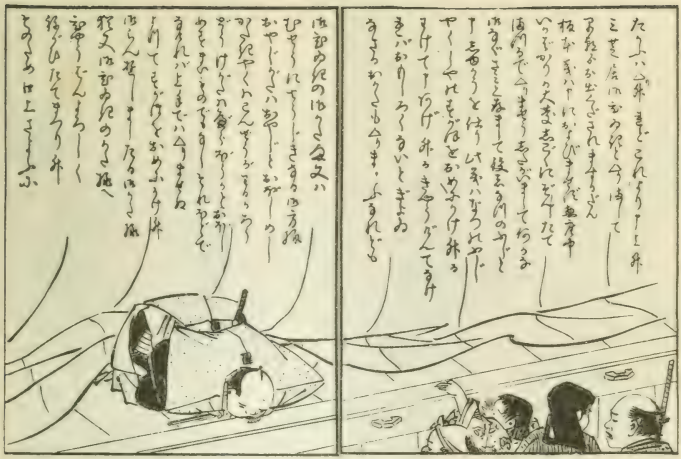












序

年々歳々業相似歳々年々曲不同

言ば歌妓の形容を画店にゑがくに任せて

圖を作るものハ丹青濃淡乃隈どりありて

髣髴似たる所もあれども今や通笑

例の一作して役者の尋常乃容色を

圖せよとしきりに勸む余従来戯場を好み

見物するの癖ありといへども役者の知己

あらざれば其平生をしらず如何で容易

真容を寫すことを得てんやと固辞

侍れども似ぬ所ハ又一興あらんと

頻りなる需に應のミ

庚子冬　勝川春章画





役者夏の富士


水







士富の夏者役










でハや
中村屋





秋

月雪花も四時の樂しみ有が中にも
春狂言の曽我その語るゝ新是世ハ師走
顔見世より新春中之の似顔の繪を
贔屓し〳〵て賣るゝ其たくひなし在通笑が
新作して御評のさのおかしみあらはす
役者の素顔を一冊となし出つる
おせ話もくわまが如 勝川氏乃
筆をもとめ是 夏の冨士似顔役者
乃三芝居去つをしらしめ
を見もおなしく役者と今年の
仕合しハちぶふきそいま

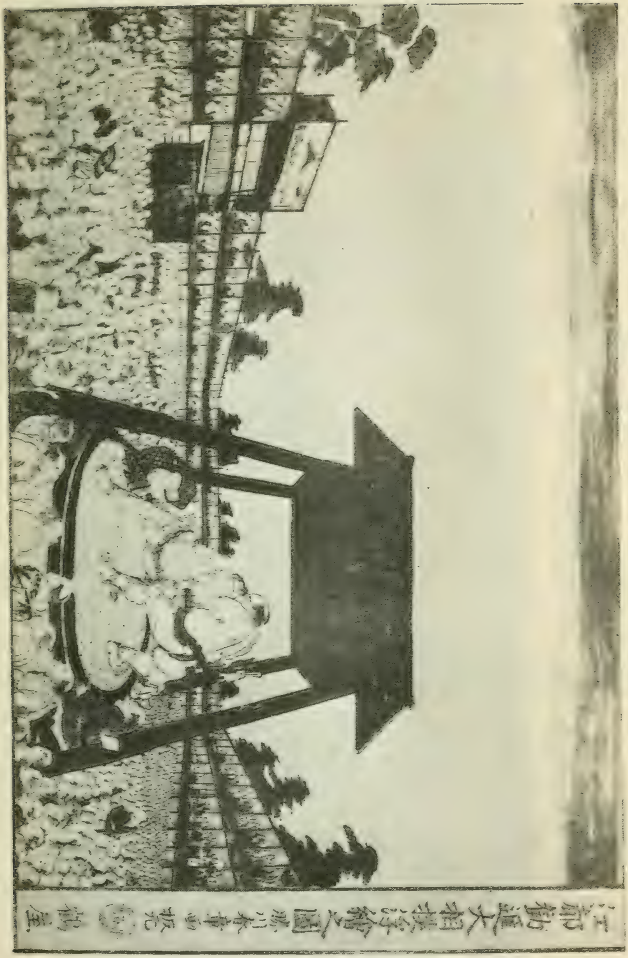
嗚呼津鴨内

作　　通笑
画工勝川春章
彫刻森　吉五郎
板元奥村源六
仝　松村彌兵衛

此外惣座中子役を追て出し
御覧に入可申候



春章



春章



春章



春章





春章



英 春



春英



春英



春英



春好



春好





春好



春潮



春潮



春 潮







湖 公



春潮





春潮





春潮



湖 米





清 長

繪本滿都鑑

繪本満都鑑序

尭天舜日乃和にやすらふ民

あそび〳〵といはれ時をうつむ其

中に月花は騒人の多かれ又

琴唱は婦女の楽となり兒童

偏きたのしみすゝむや絵本

満都鑑是なりけれ代乃久し
うつべきを見しにいるゝをそこまた
鑑といふも志るす
安永八の春　高古堂主人題



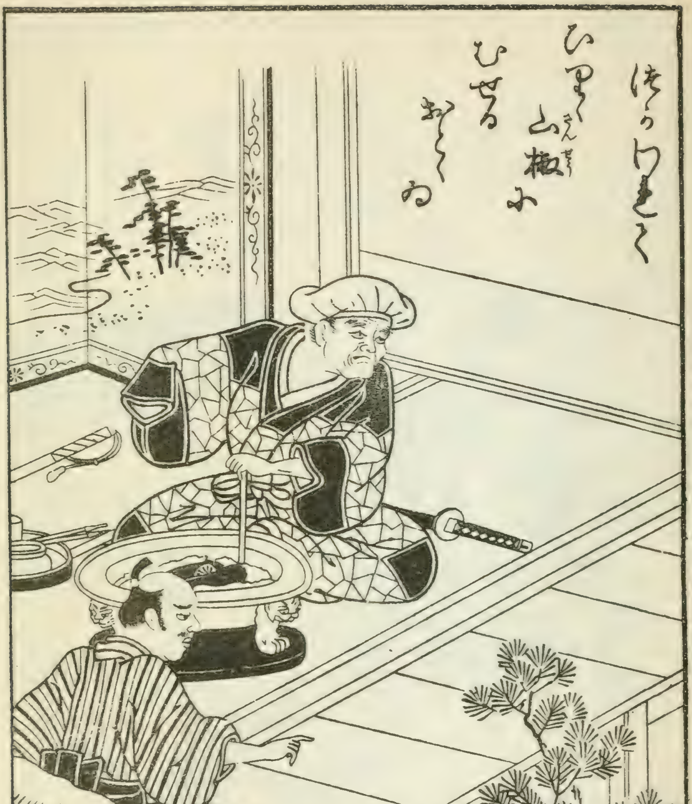


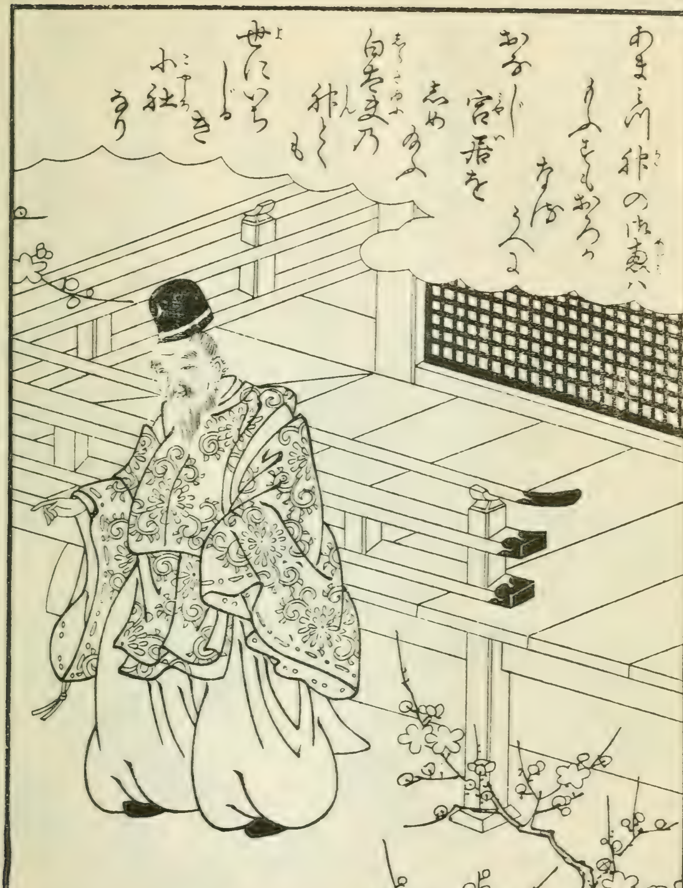



五十鈴川の流をきゝて
神乃恵に
その民
世の業ハ
正直の心を
人乃
福の
四方に


御扇子所
涼風軒








後の世に


四条河原の
夕すゞ
売物みせもの
すきまもなく




浄瑠理の一ふし
作り乃本末

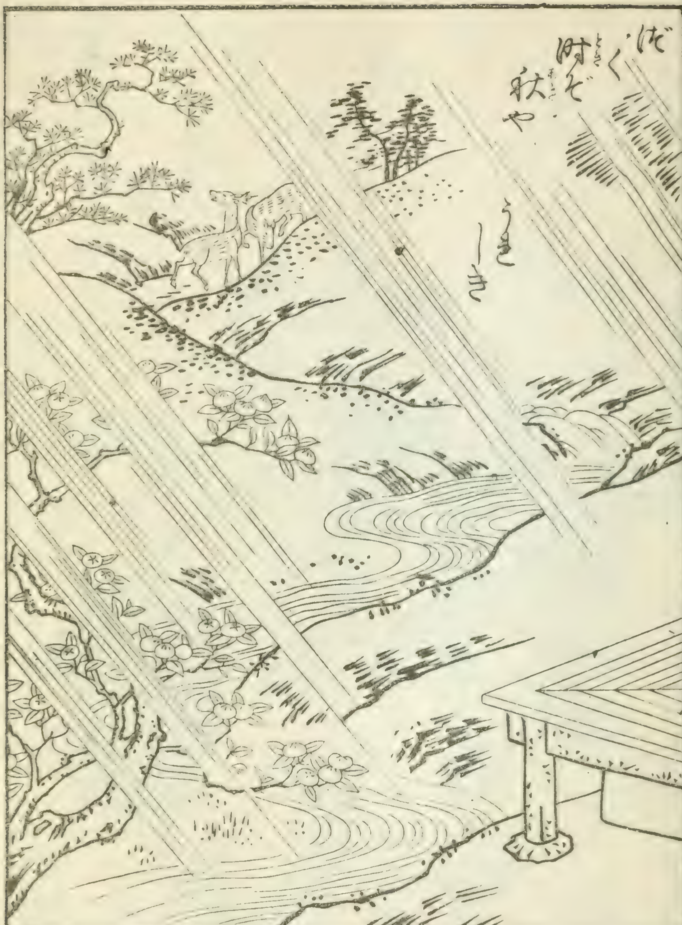




大功ハ細瑾と
小のむしを殺ゝ
大乃虫成
いふもむべなり
思案して
おもひ侍る
浅瀬を

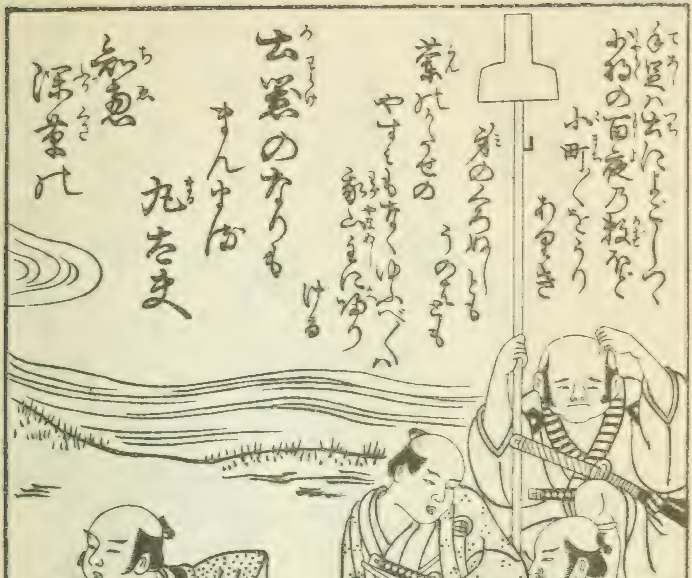





ばく
時ぞ
秋や
うき
しき




わしが
この宮河町ハ
命ぐも
とんと野郎はれ
花のすゝきに

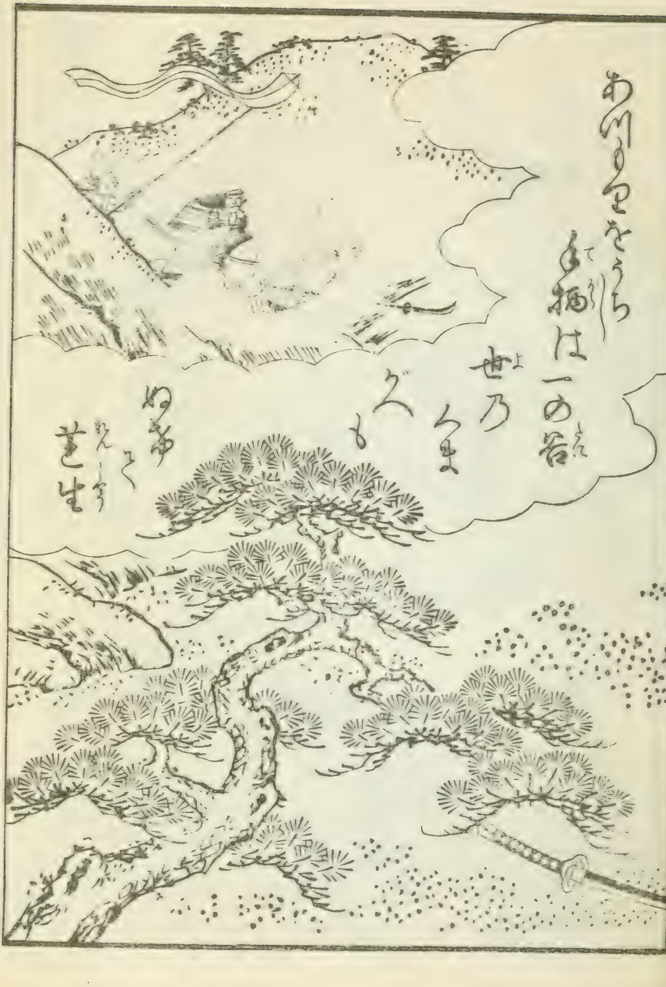


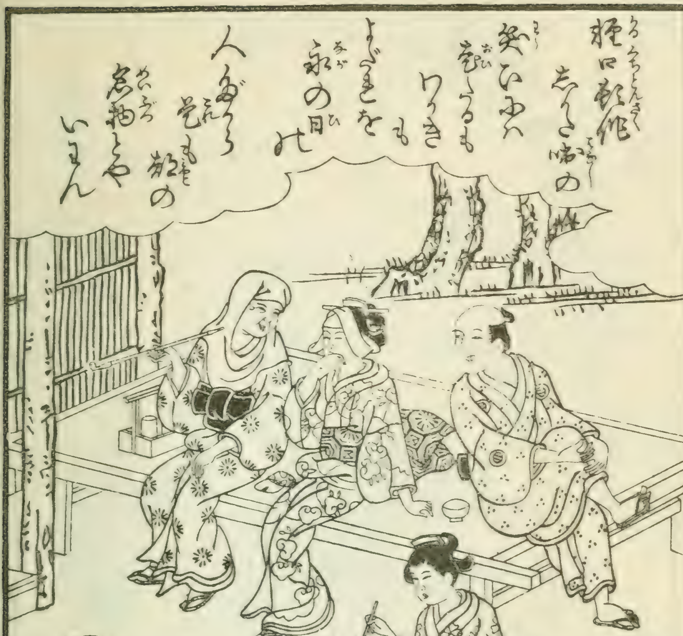

親父分（おやぢぶん）








手柄は一の宮
蓮生







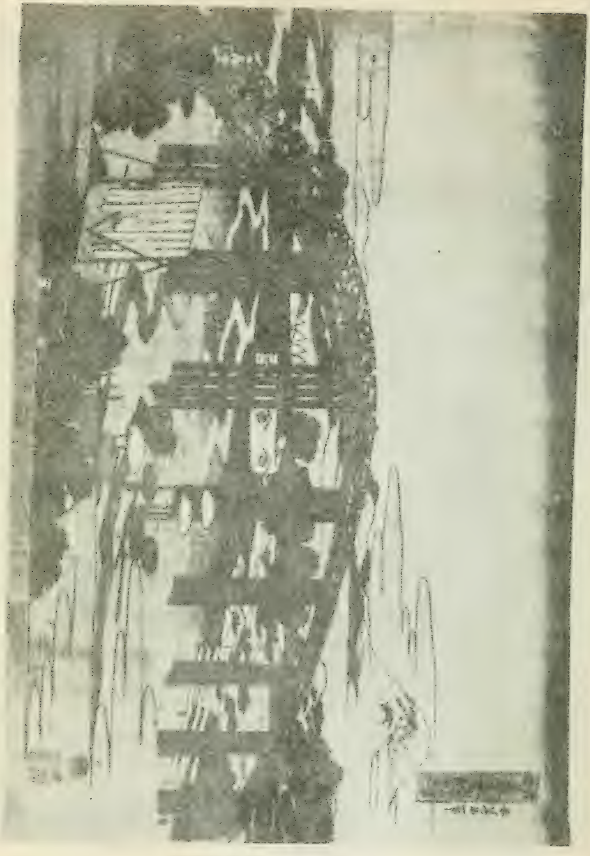
北齋



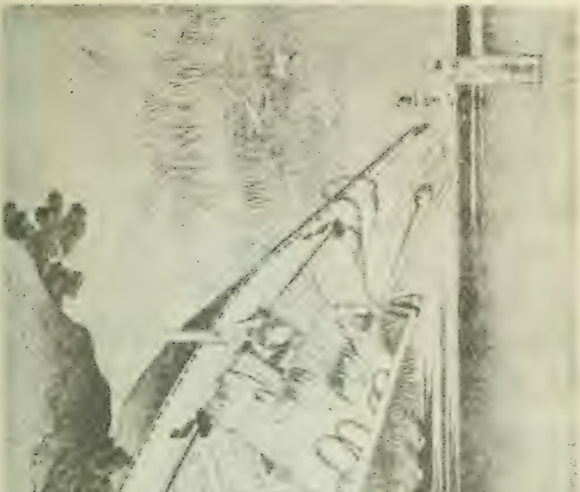
北齋



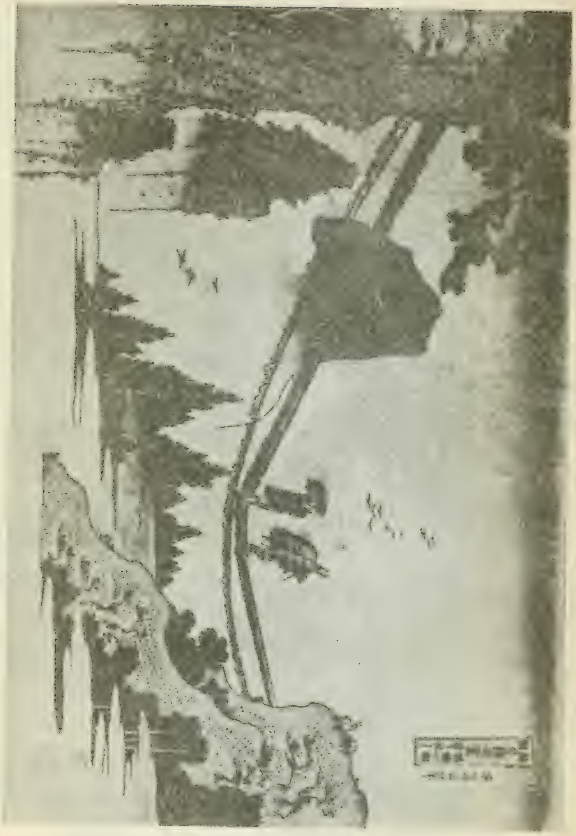
北斎



北齋



北齋



北齋



北齋



英山



山 美



豐春

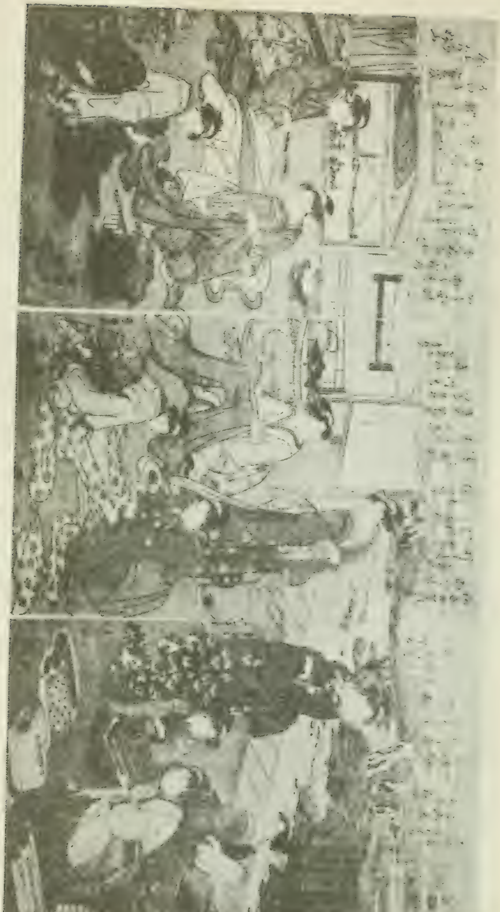




図 繪



圖 [illegible]



画 帖



豐國

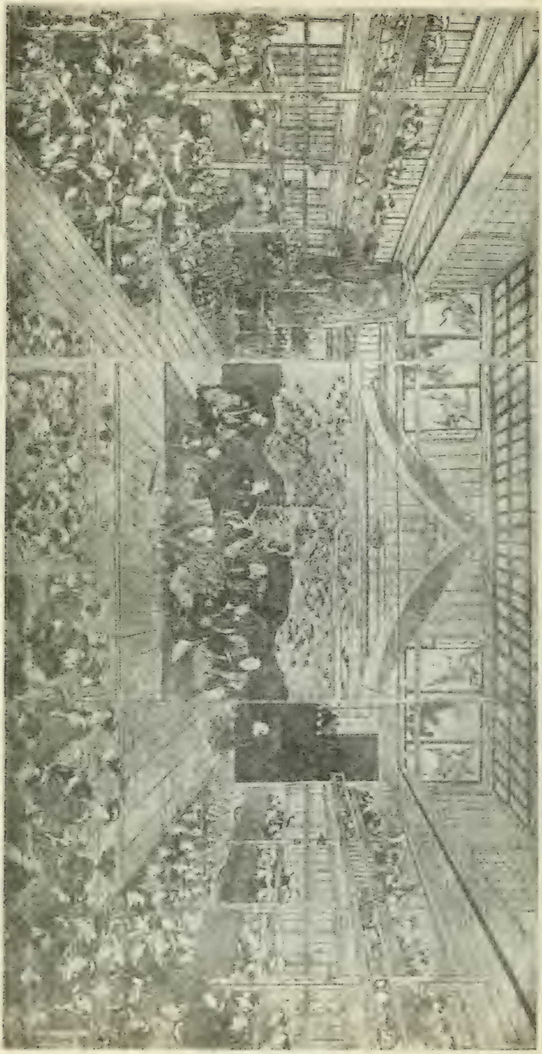


図 [illegible]



豐國




畫本
江戸土産
初編
廣重筆
金幸堂梓

叙

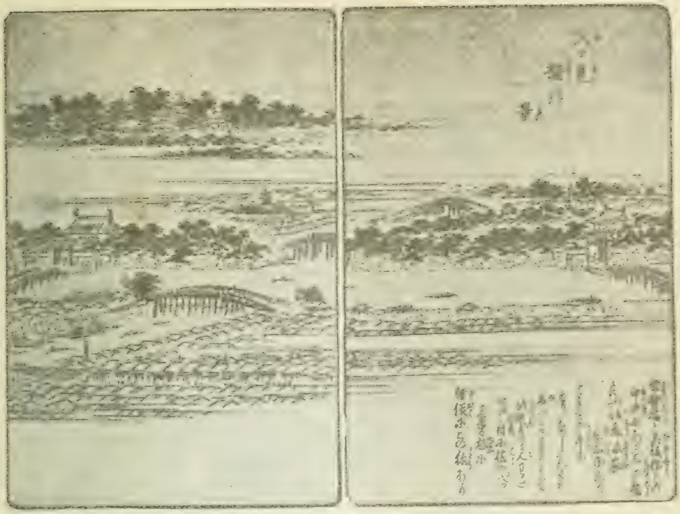
維昔江戸古代の風致ハ今猶岩谷にして一百年宝暦
明和のむかし書肆名所を画にして西村重長[illegible]
名所図会を追て数編ハ絵本[illegible]画工の筆を
開きしかども其後大小流行して絵本の[illegible]
一年流行の[illegible]作り彫板[illegible]して鳥有と[illegible]
[illegible]此書の出現来[illegible]の繁華なるを[illegible]中古の風俗を

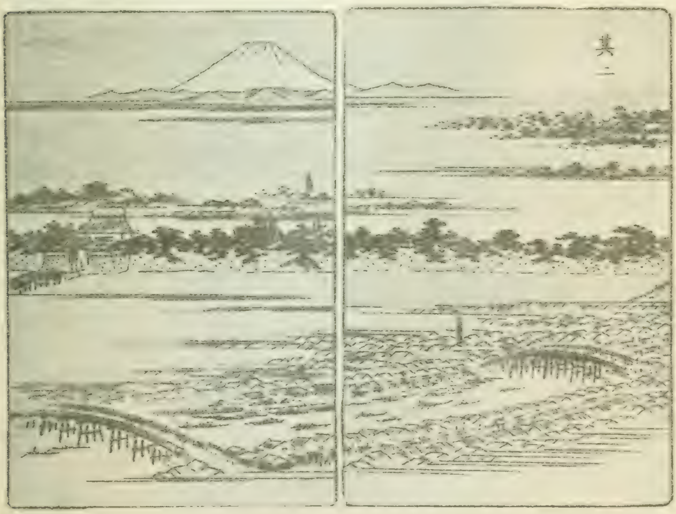
見ん事を思ひ然[illegible]名所古跡且名の[illegible]
[illegible]流行華[illegible]還面類を思起し人に[illegible]
[illegible]現存の在と[illegible]を画せ再刊[illegible]の時[illegible]
[illegible]の册子[illegible]遠く絶郷の[illegible]
時[illegible]を[illegible]の一助に庶し再刻成の日余に序を請ふ余
遂に[illegible]その[illegible]を述てもて端書に[illegible]

庚戌初秋日

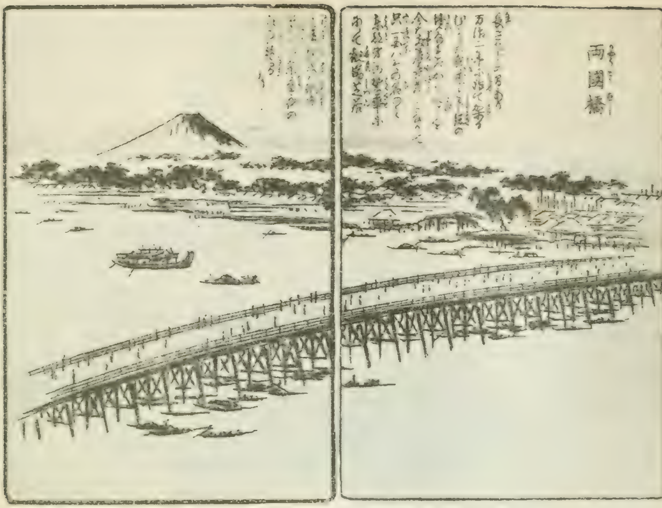
金水陳人 題

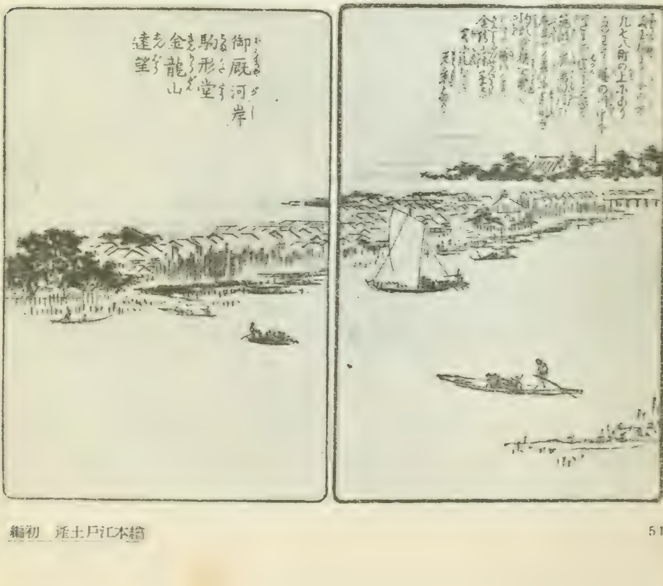


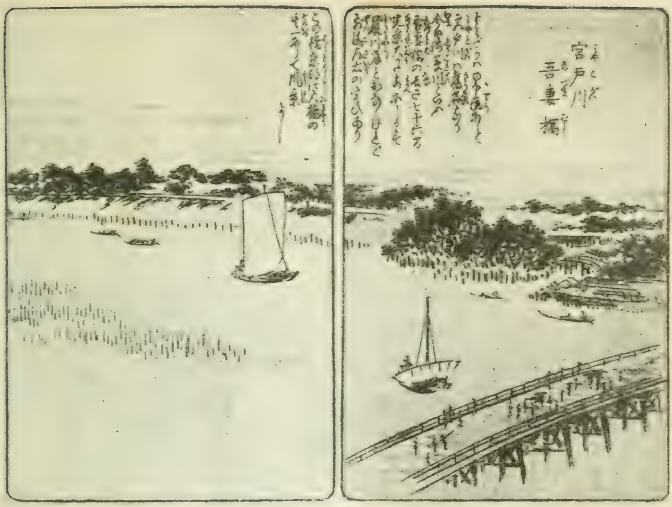


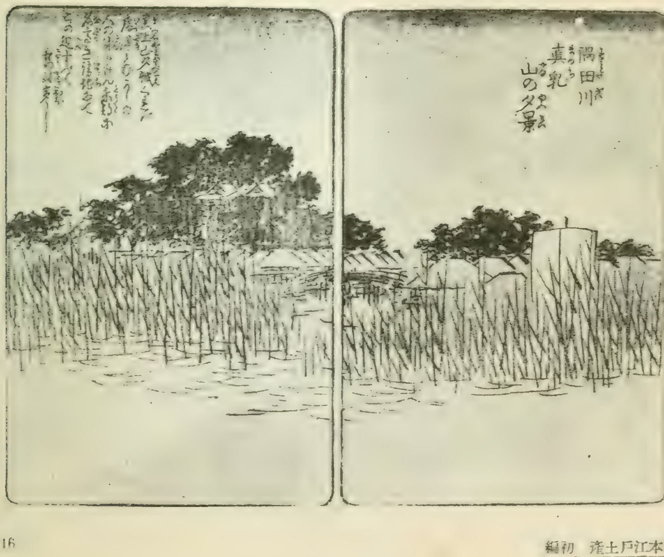


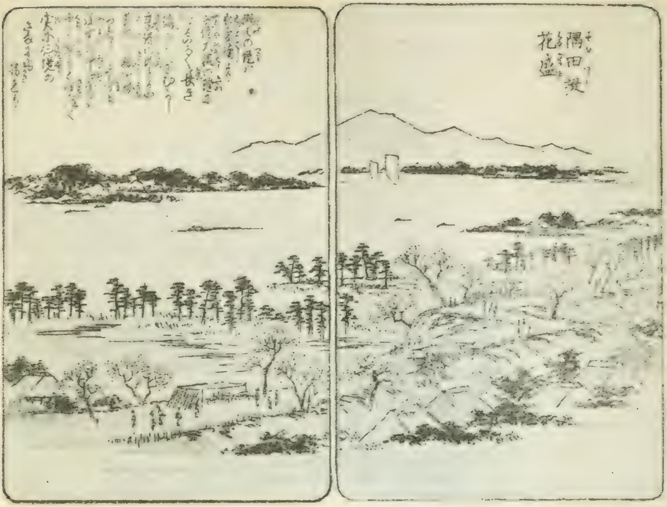
其二

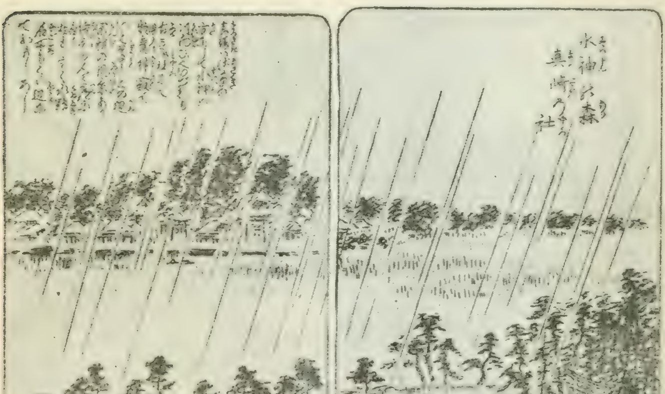

両国橋

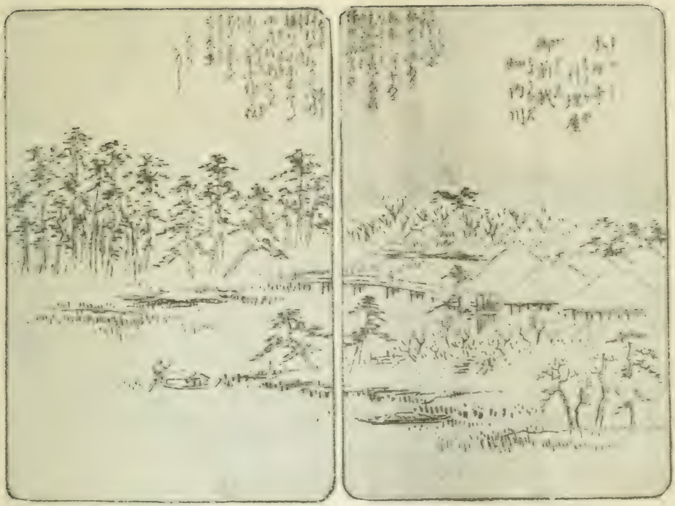

御厩河岸
駒形堂
金龍山
遠望

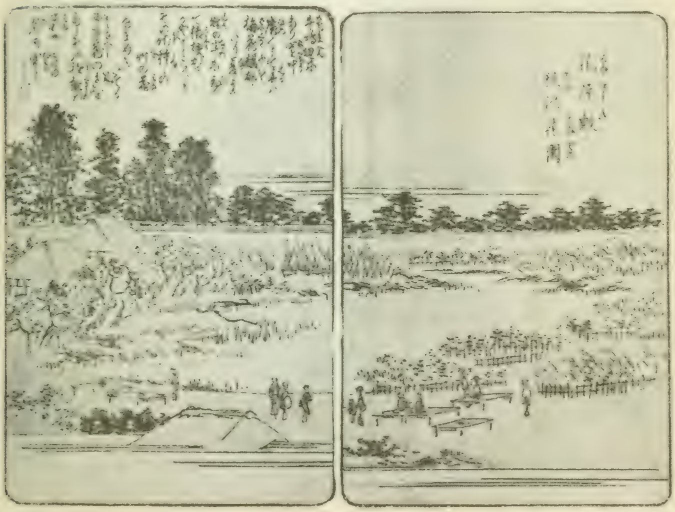

宮戸川
吾妻橋


隅田川
真乳山の夕景


隅田堤花盛

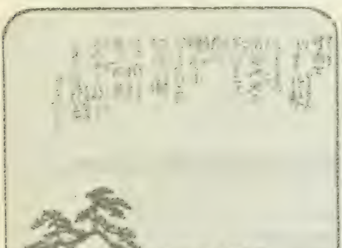

水神の森
真崎の社

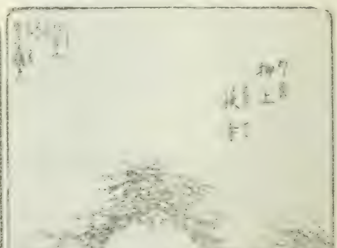


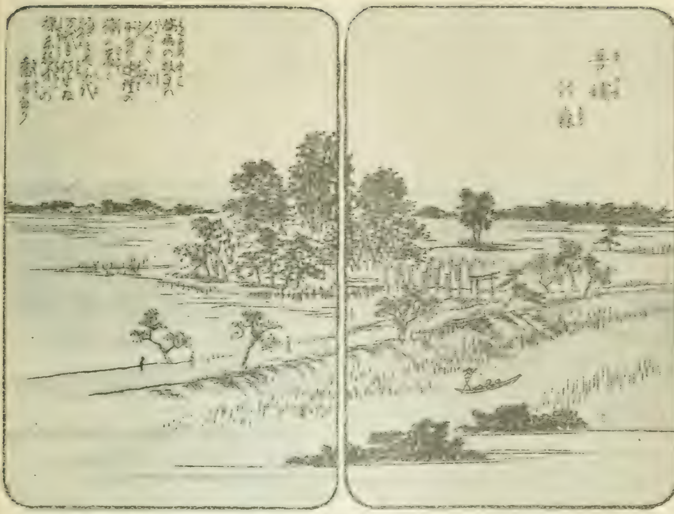


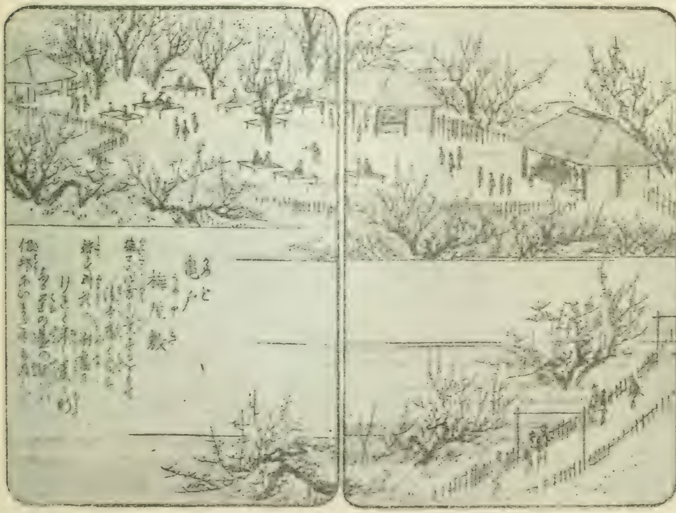


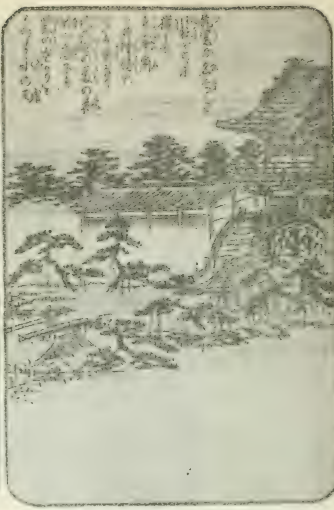




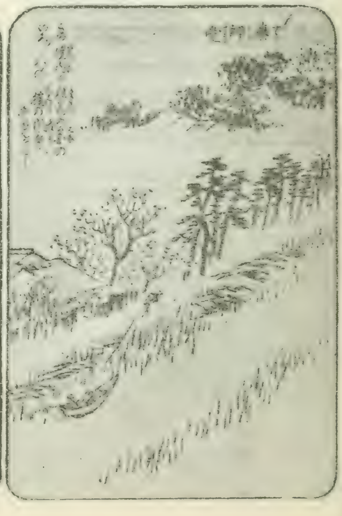





亀戸 梅屋敷

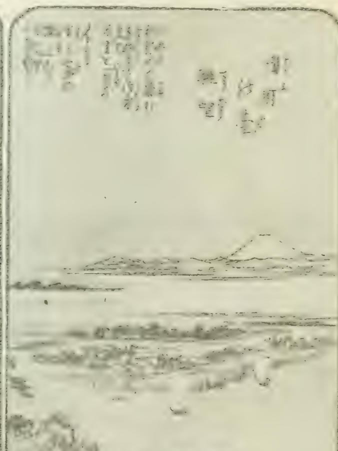


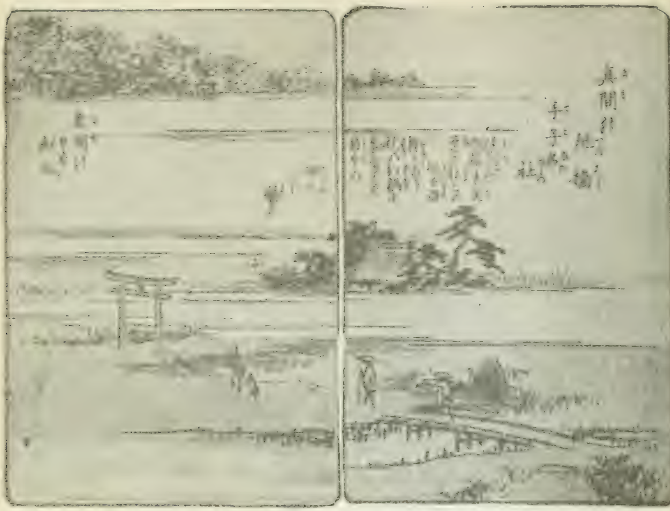


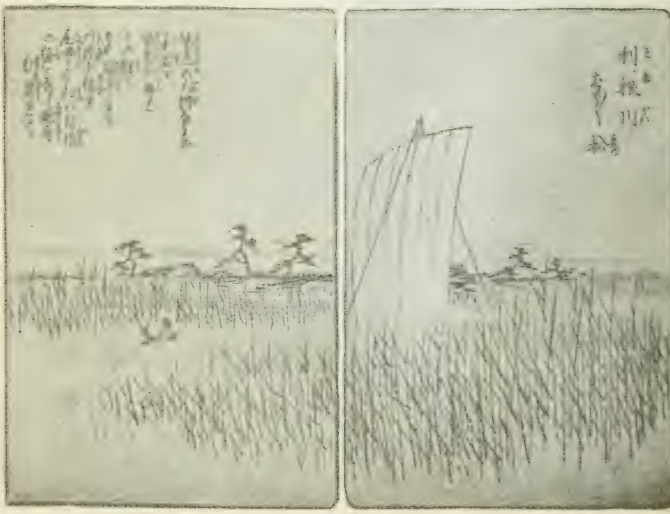


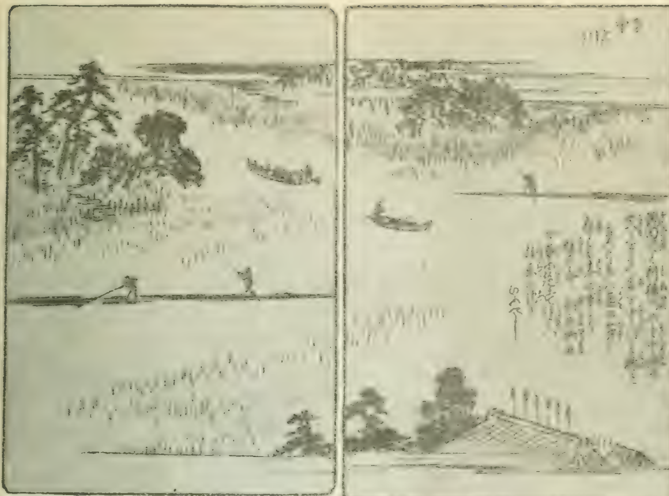


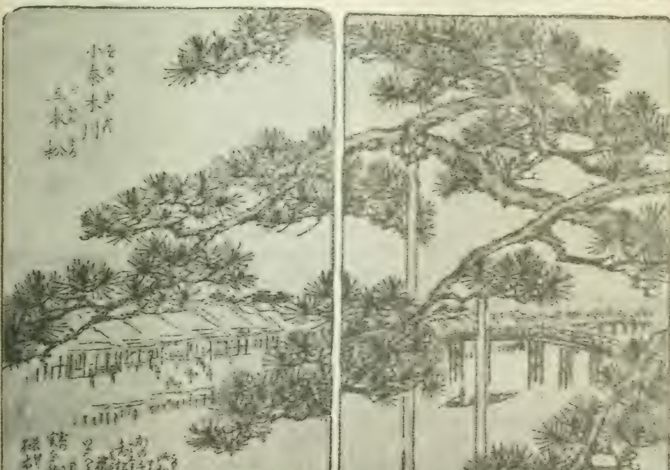


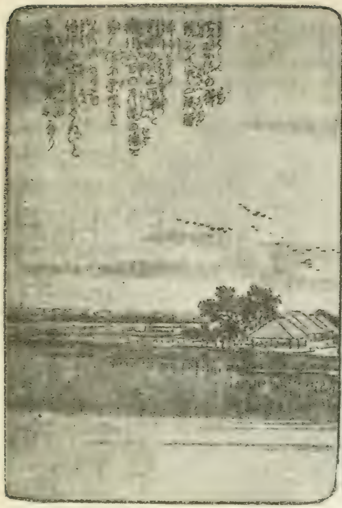










小奈木川
五本松





京都書林

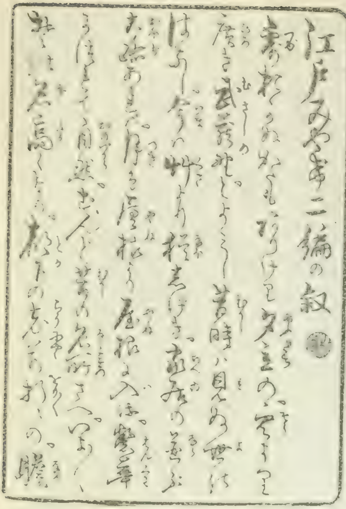
大坂書林

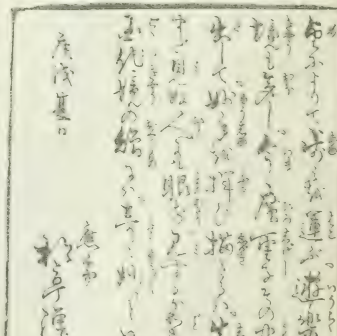
東都書林

蔦屋幸三郎版



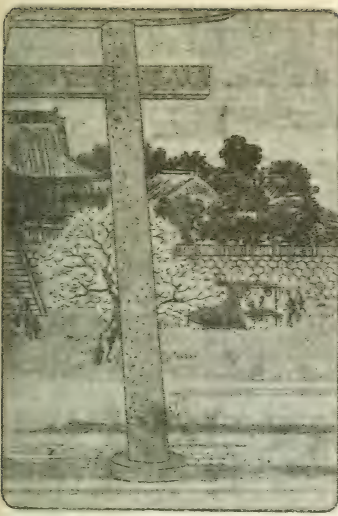


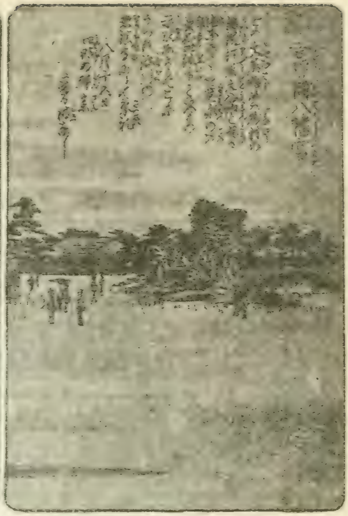




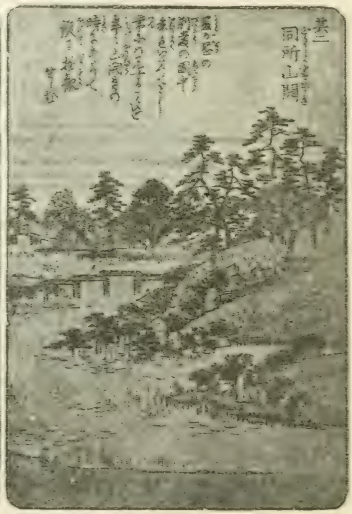


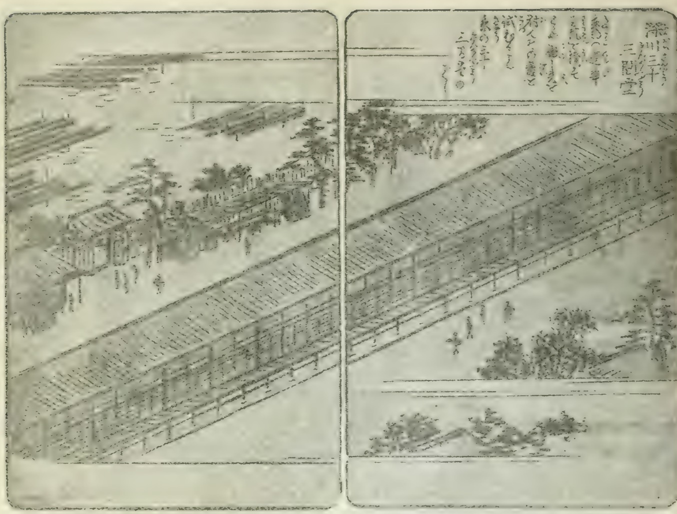
繪本江戸土産 三編

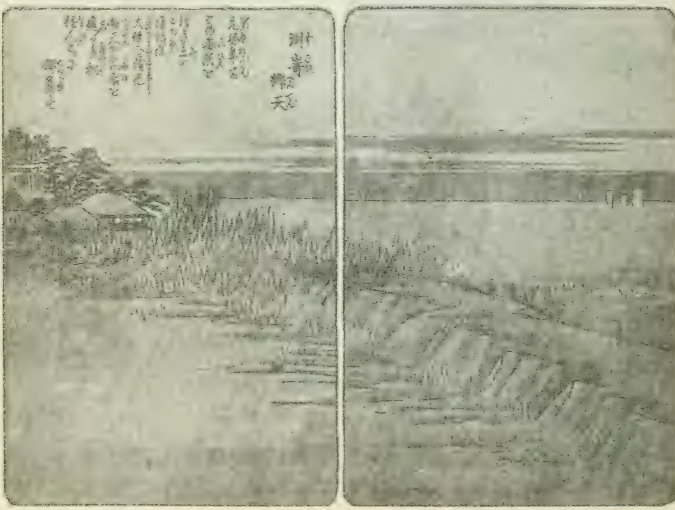


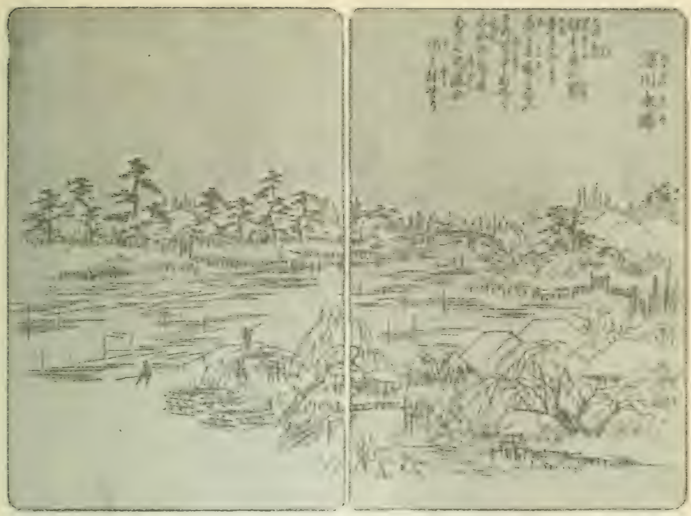


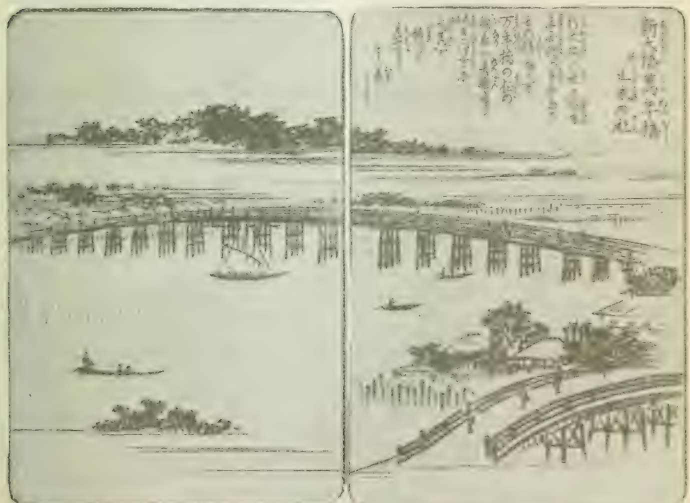


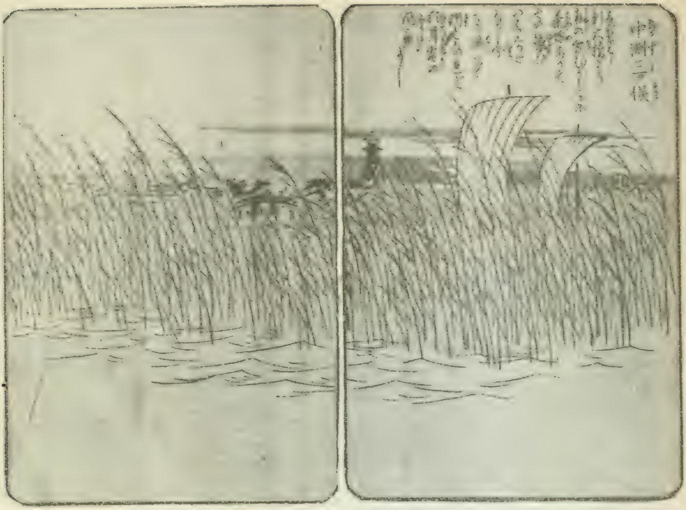

其二
同所山門

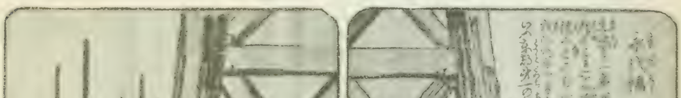

深川三十三間堂

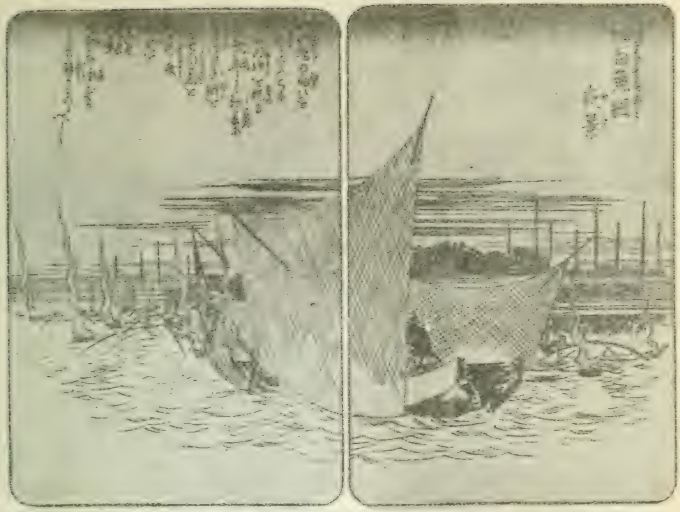

洲崎弁天

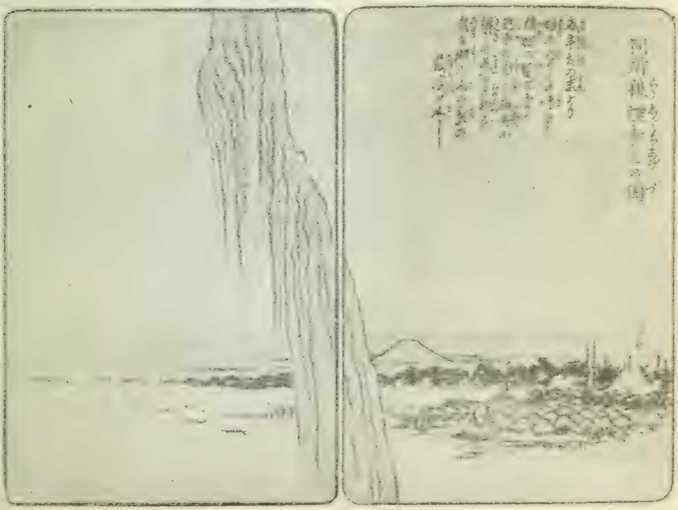


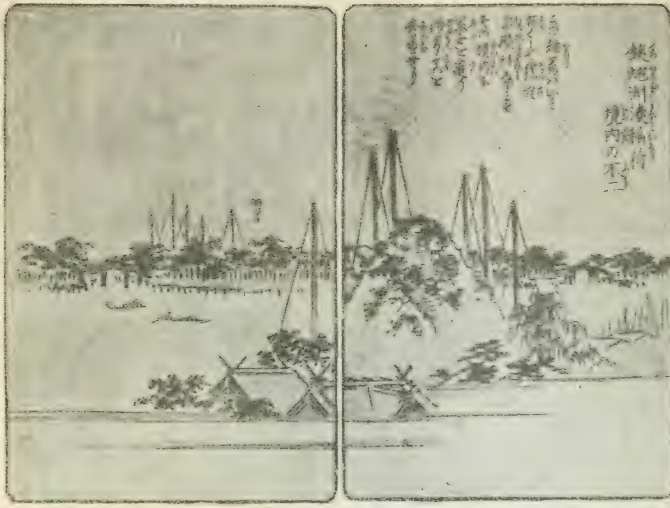


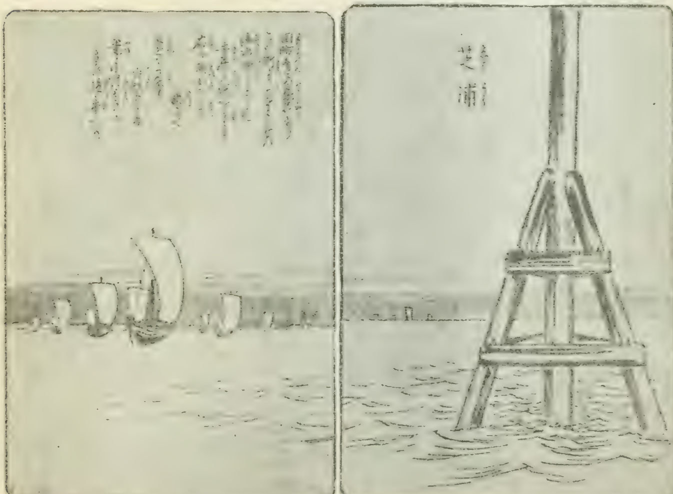

中洲三ツ俣

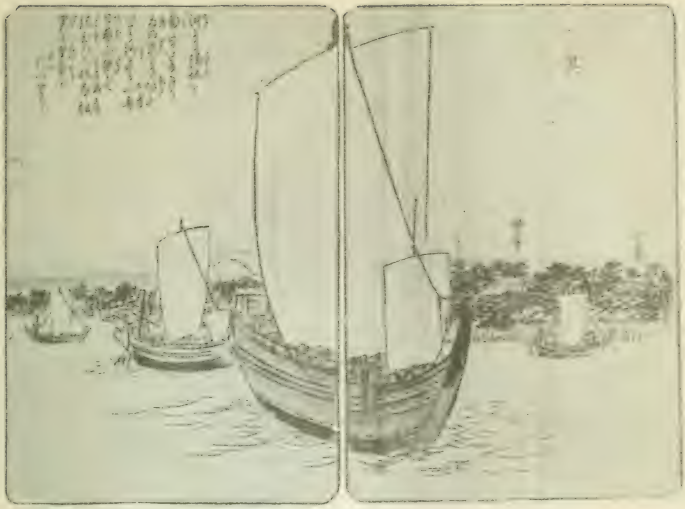

永代橋

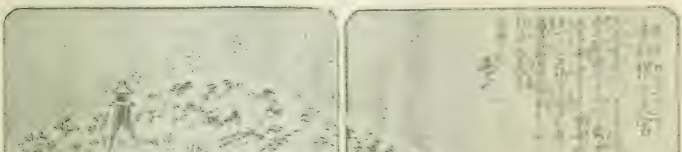


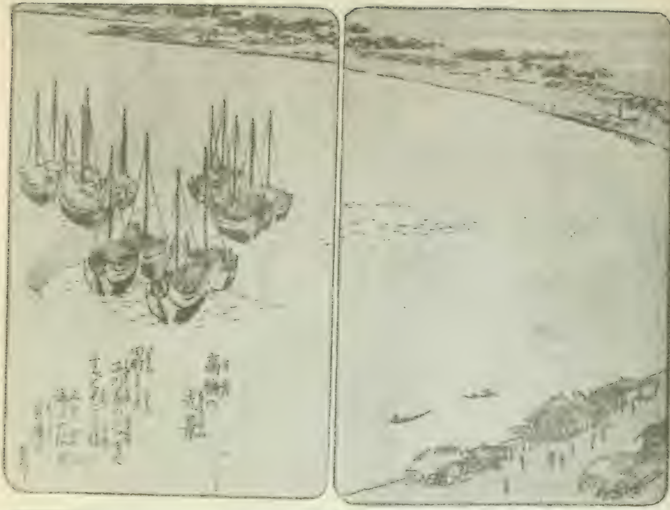


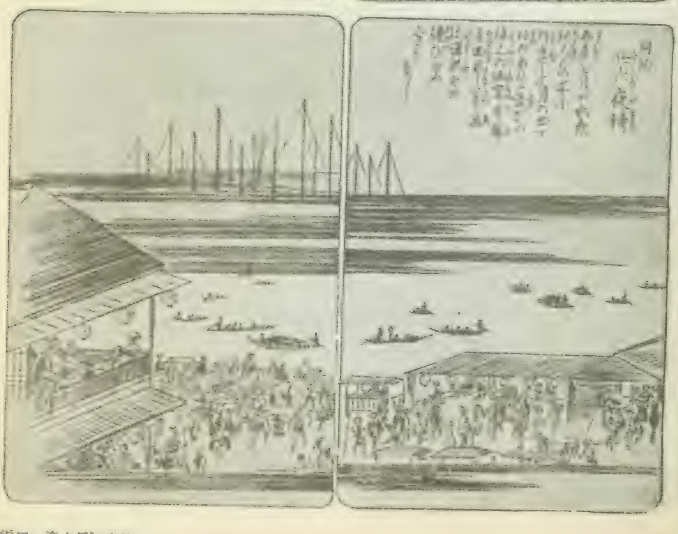

鐵炮洲湊稲荷境内の不二

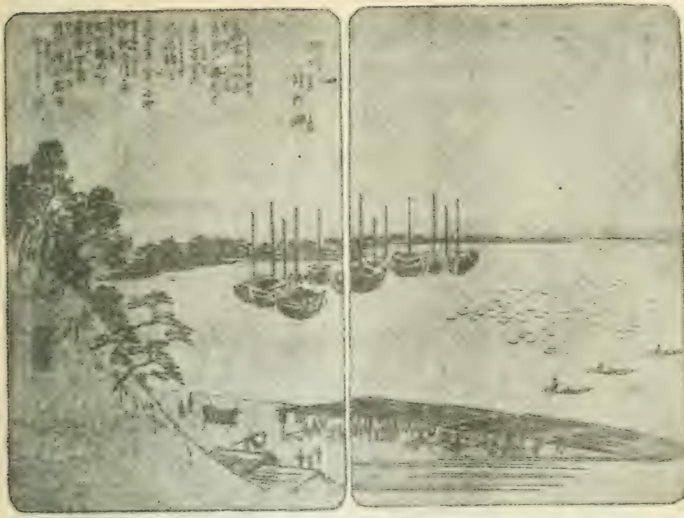

芝浦

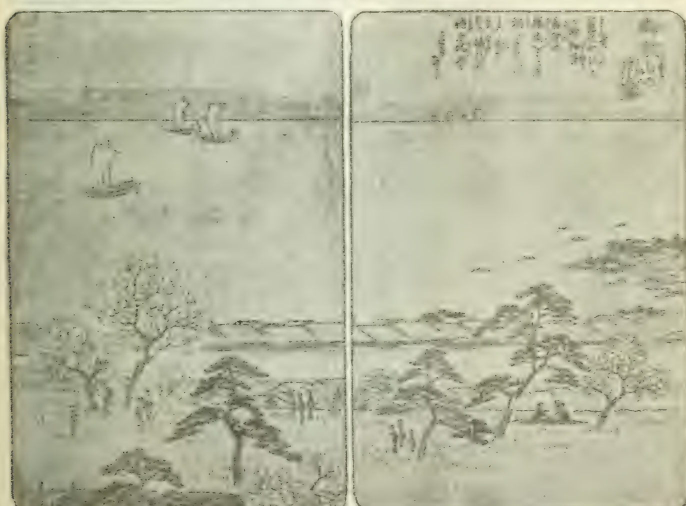


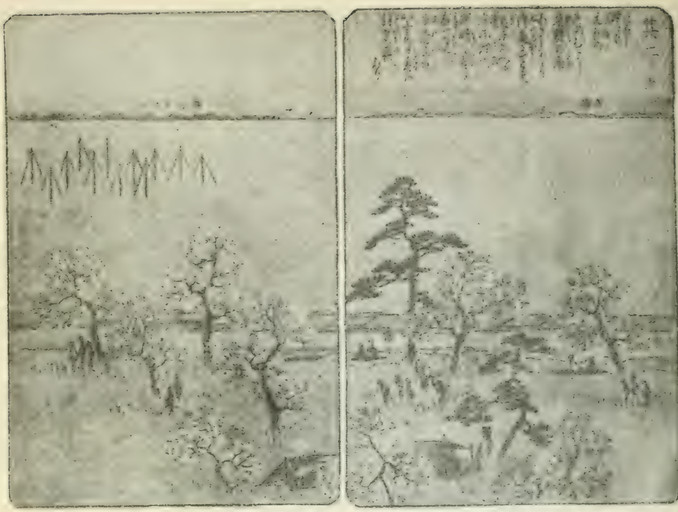




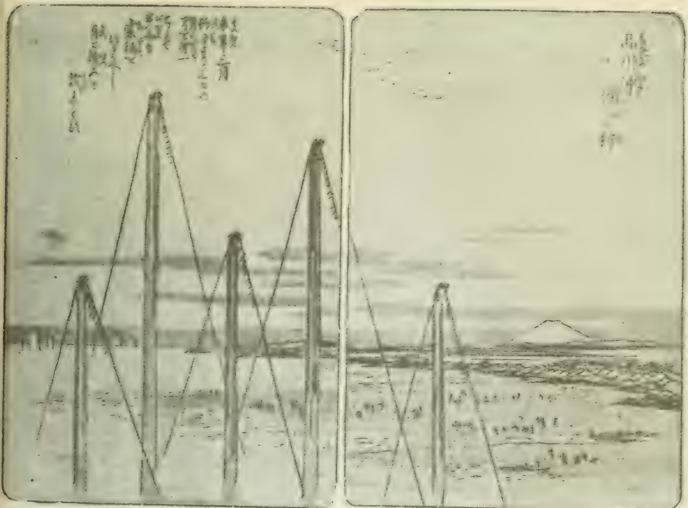


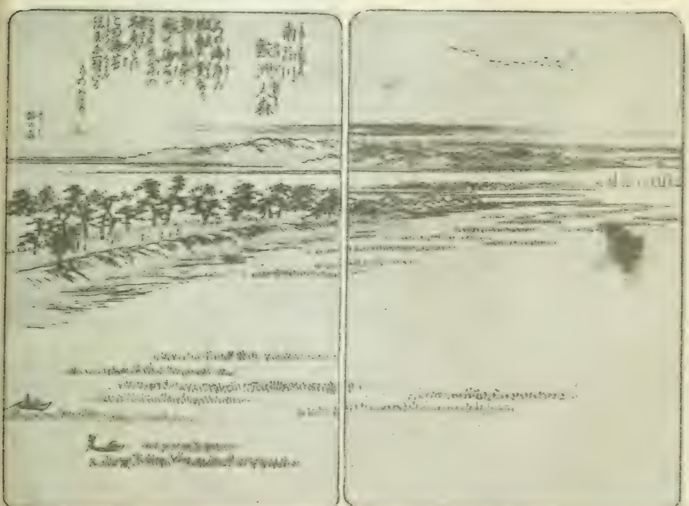


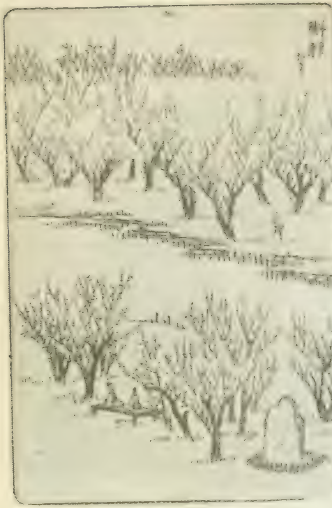


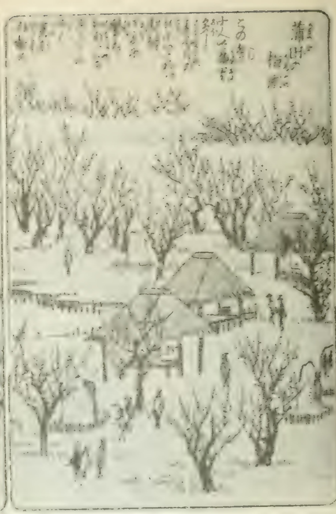



品川 海晏寺の紅葉











京都書林

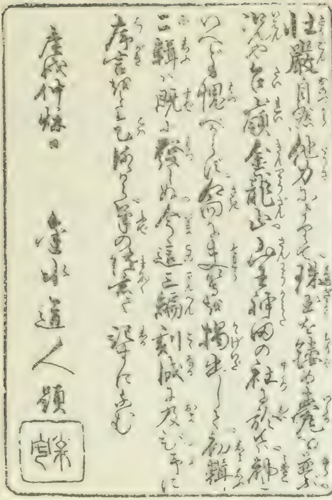
寺町通松原上ル　菊屋七郎兵衛
同　勝村治右衛門

大坂書林

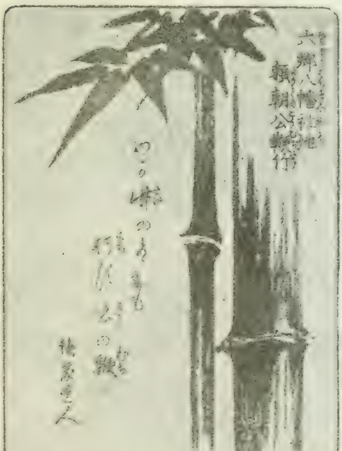
心斎橋南壹丁目　敦賀屋九兵衛
同　河内屋喜兵衛
博労町　河内屋茂兵衛

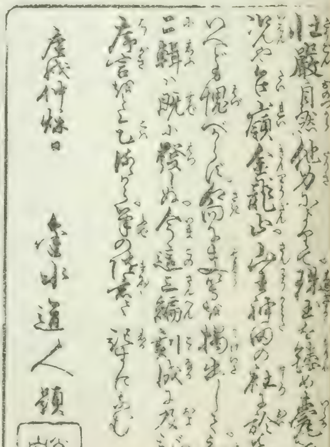
東都書林

横山町壹丁目　出雲寺萬次郎
日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　通二丁目　小林新兵衛
同　山城屋佐兵衛
芝神明前　岡田屋嘉七
浅草福井町　山崎屋清七
馬喰町二丁目　菊屋幸三郎

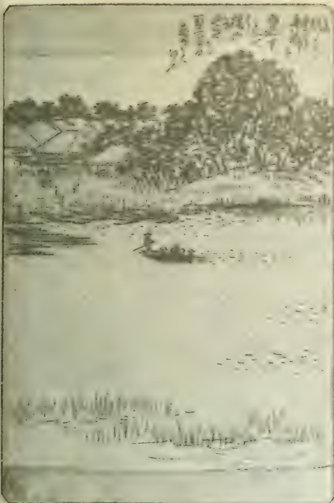


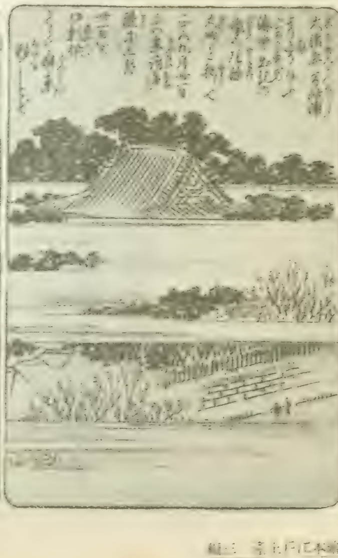

江戸みやげ
三編












大師河原
平間寺



絵三　江戸土産



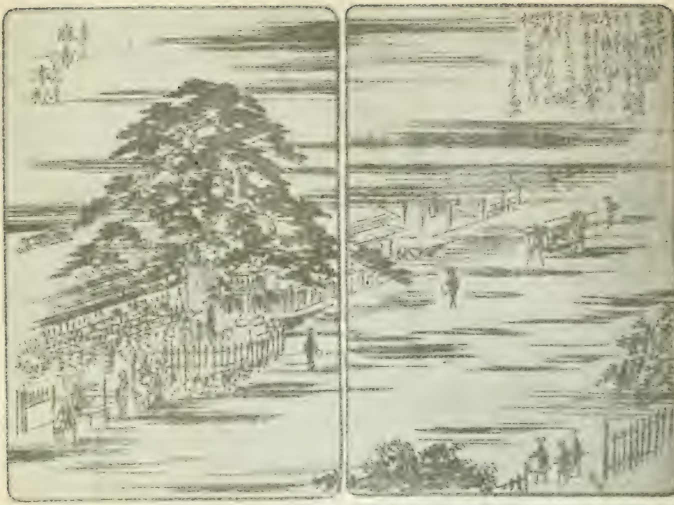
繪本江戸土産 三編







繪本江戸土産　三編



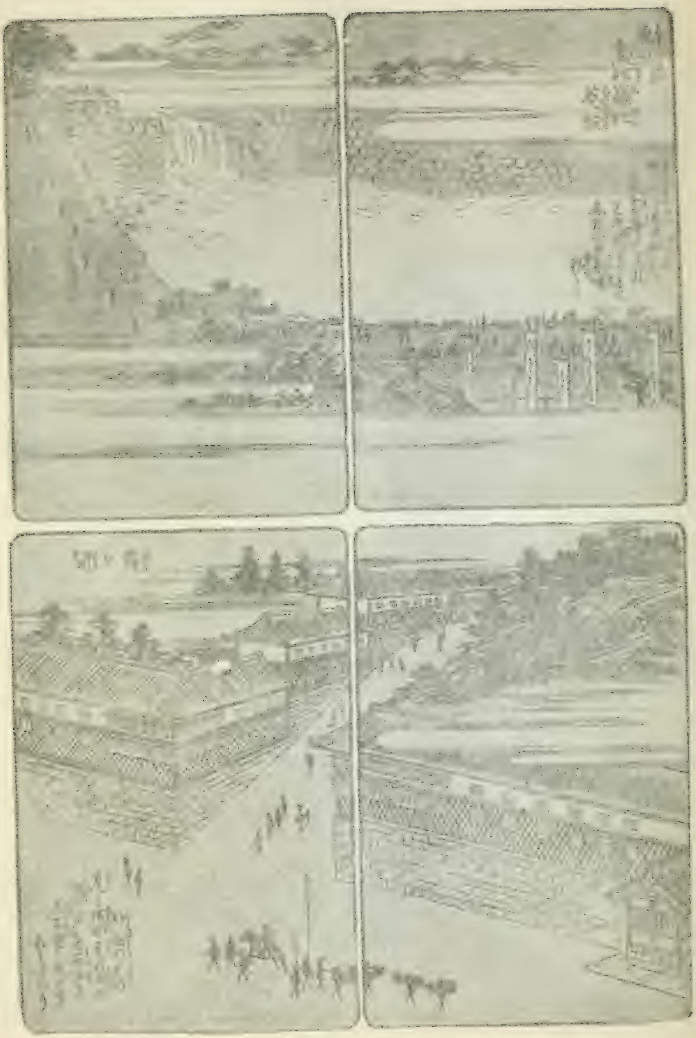






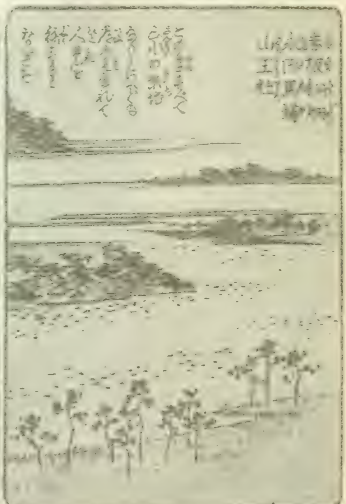
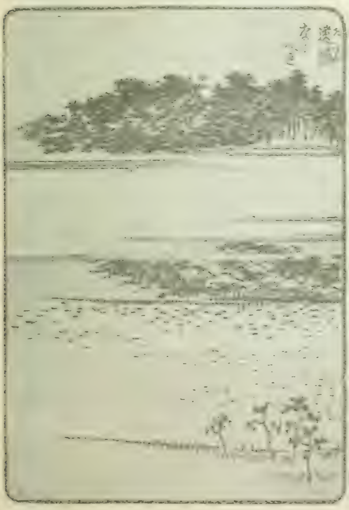






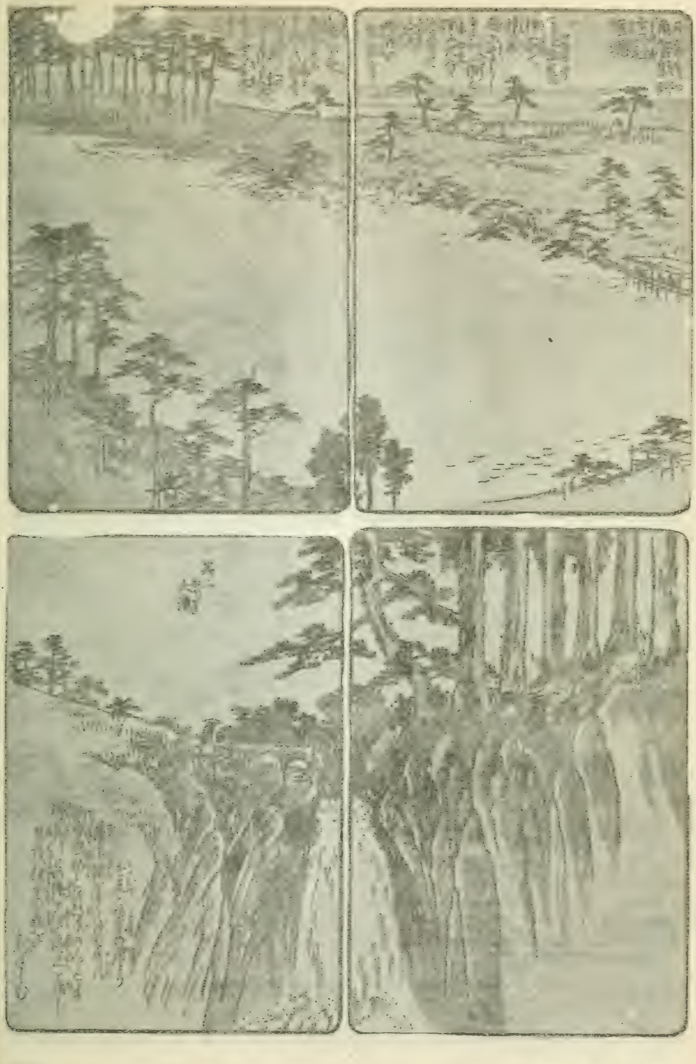
繪本江戸土産　三編





圖三 浮世日本繪



續三　直土戸江本宮



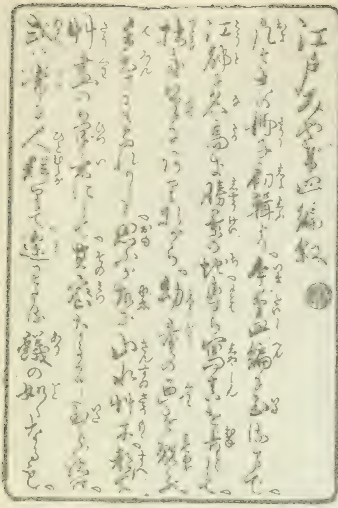


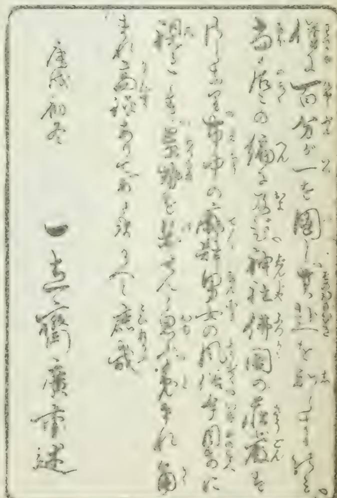
京都書林
大坂書林
東都書林

菊屋七郎兵衛
吉野屋仁兵衛
河内屋喜兵衛
河内屋茂兵衛
島屋清助
正文堂利兵衛
高美屋甚左衛門
岡田屋嘉七
英大助
山崎屋清七
菊屋幸三郎 版



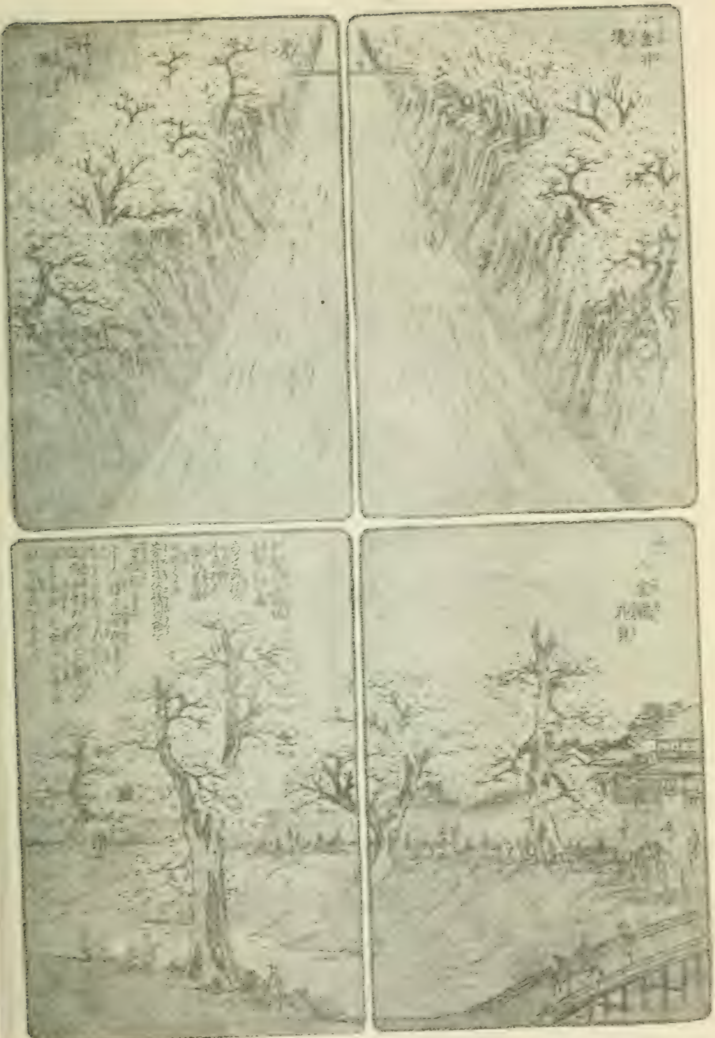








絵本江戸土産



繪本江戸土産　四編

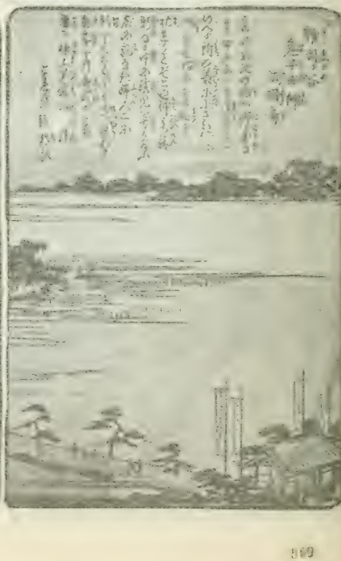


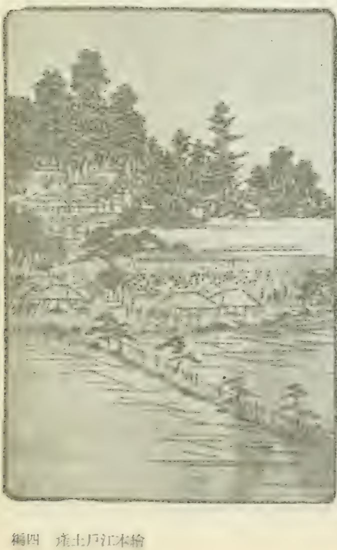
絵本江戸土産　四編

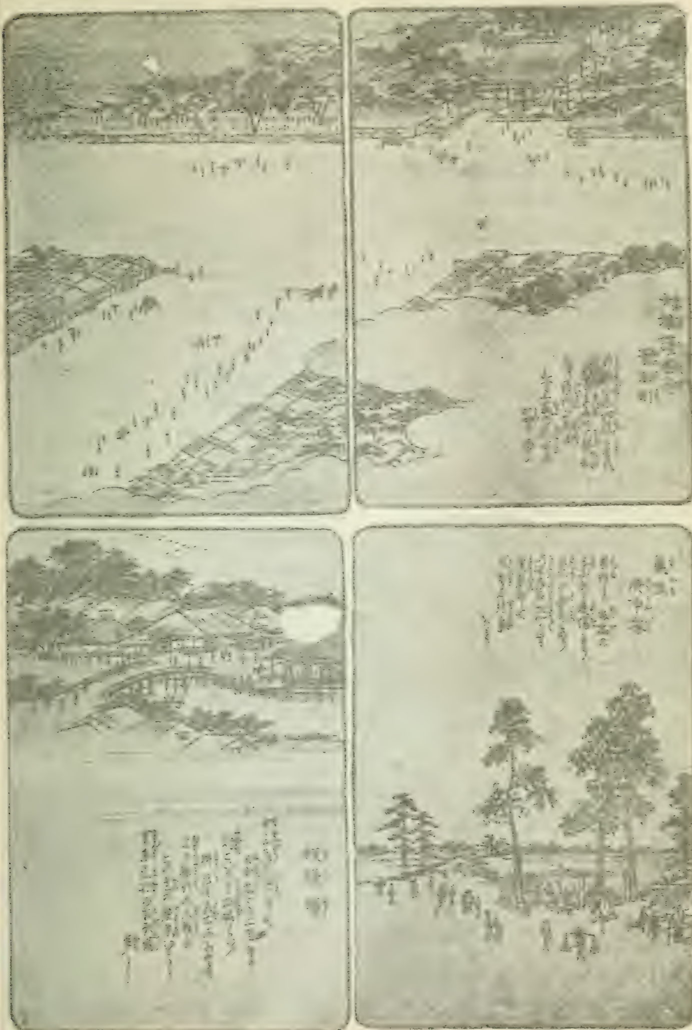




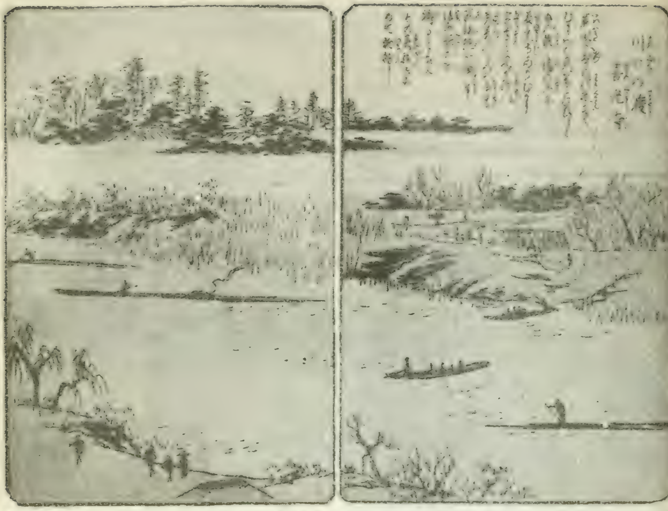






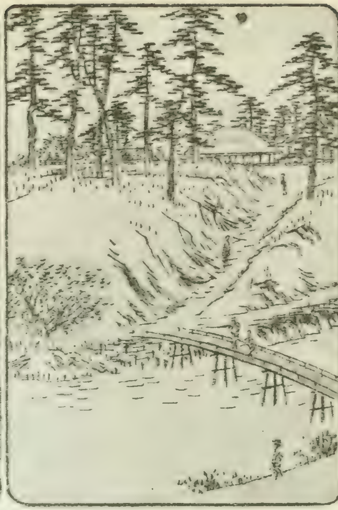


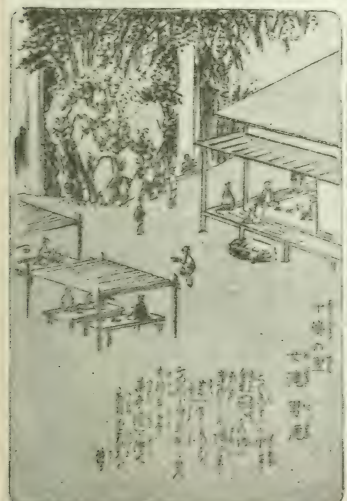
繪本江戸土産　四編


川口の渡
善光寺


王子
稲荷社


王子
瀧の川



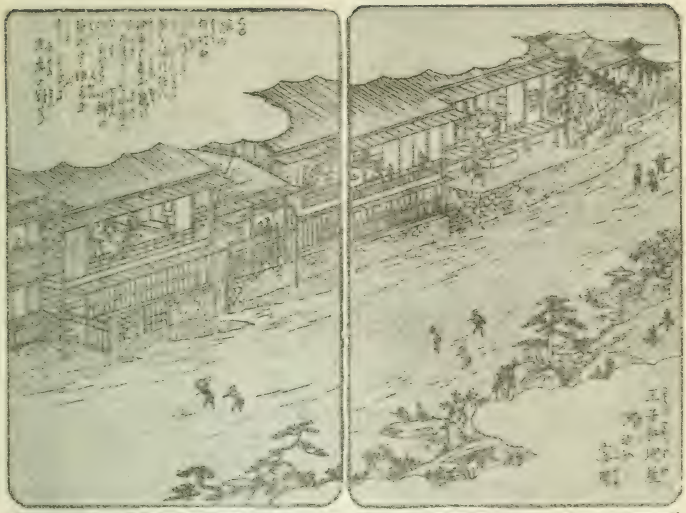







不動の滝







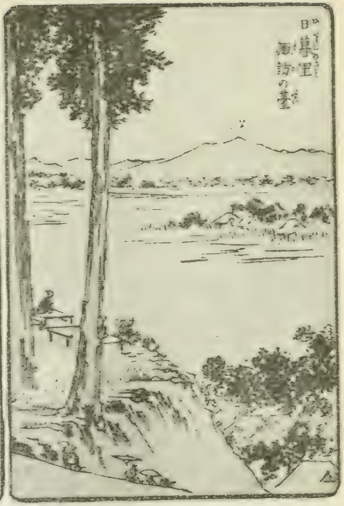


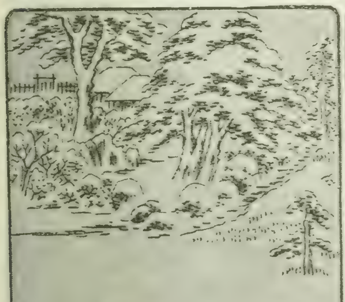

其二

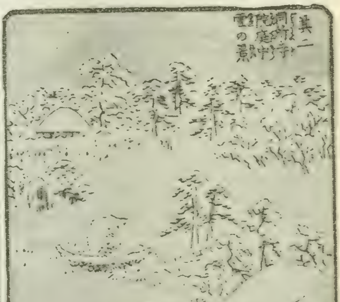



道灌山


日光

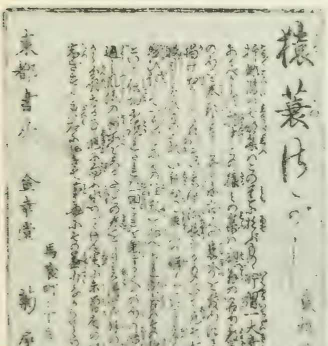

日暮里
諏訪の臺




其二



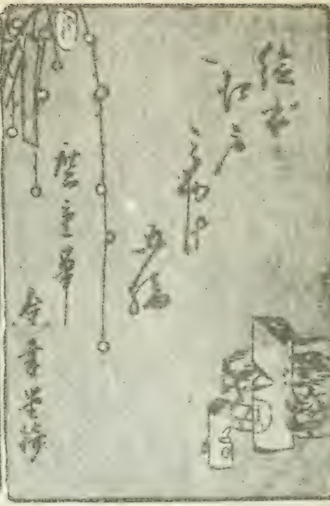


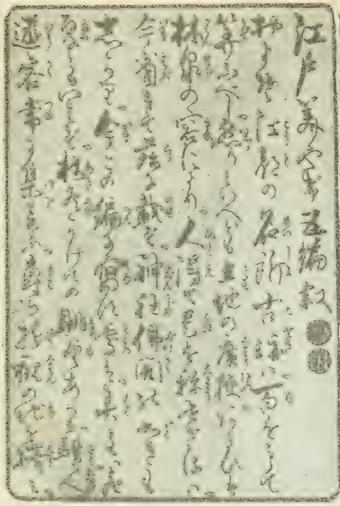

猿蓑

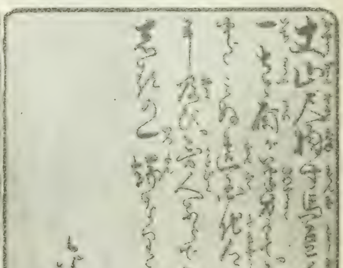
東都書肆 金幸堂 馬喰町二丁目 新屋幸三郎 梓

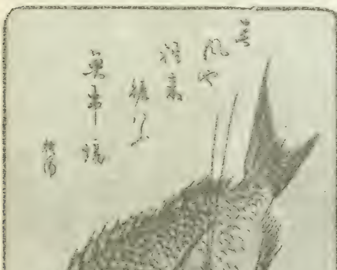


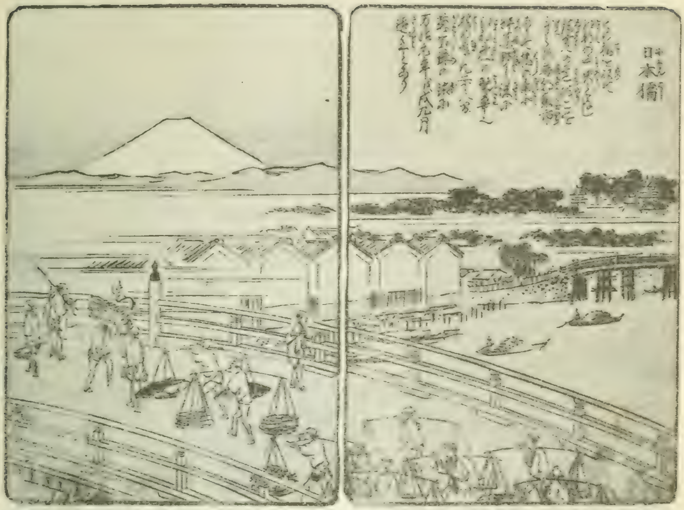
繪本江戸土產 第四

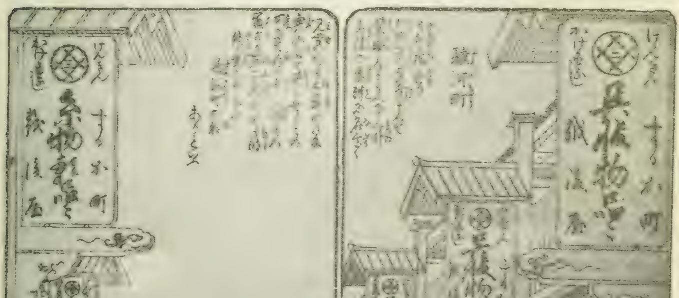


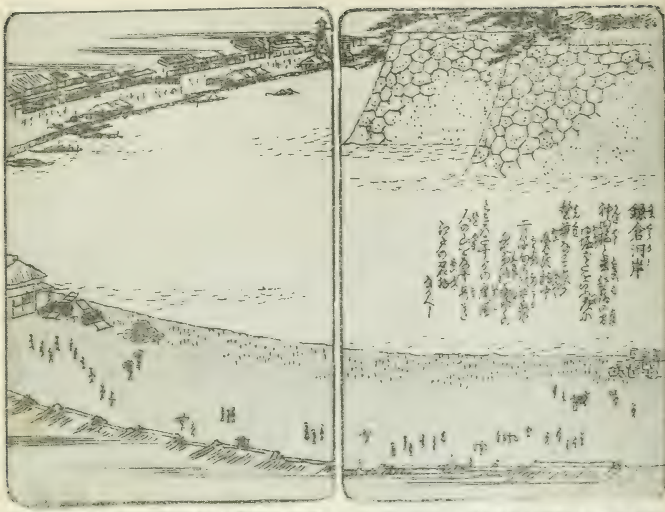




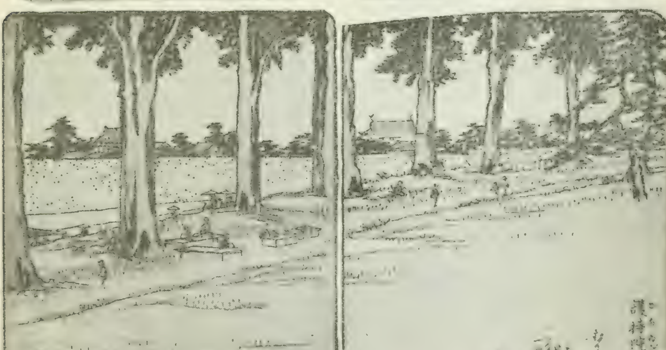



日本橋

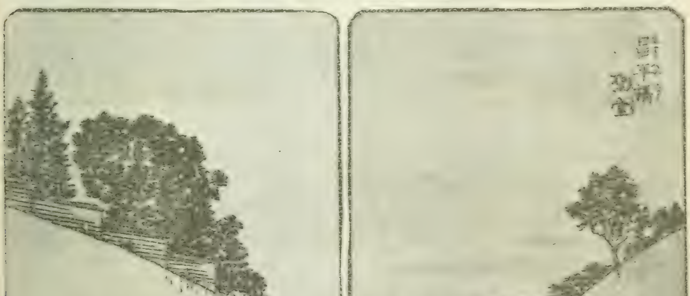




鎌倉河岸

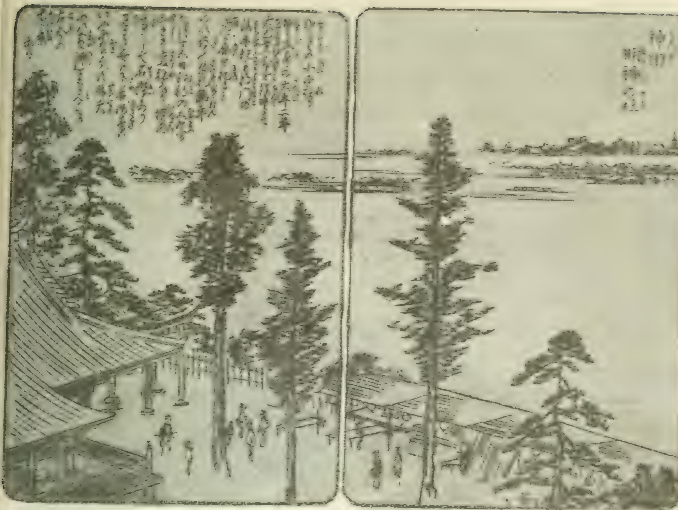


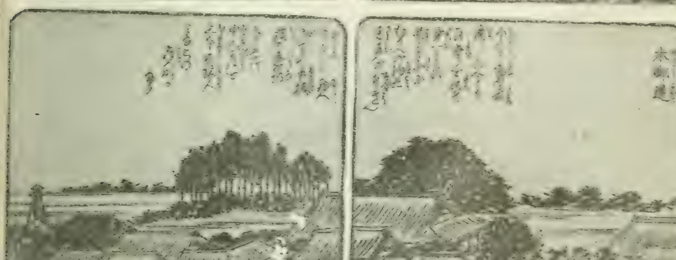





御茶の水


水道橋





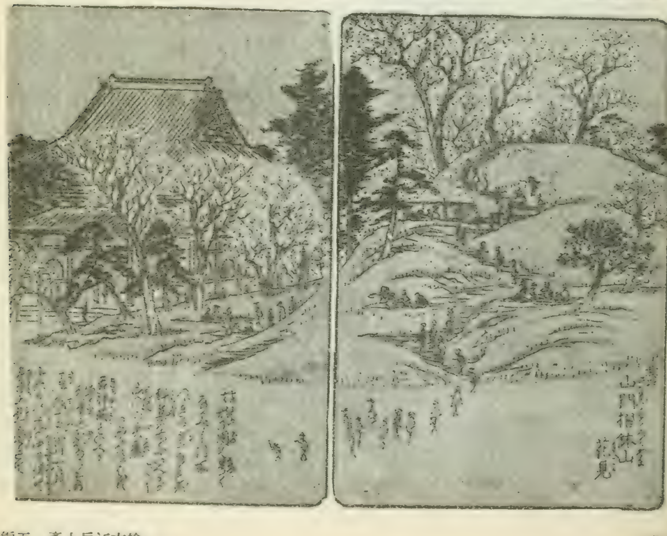


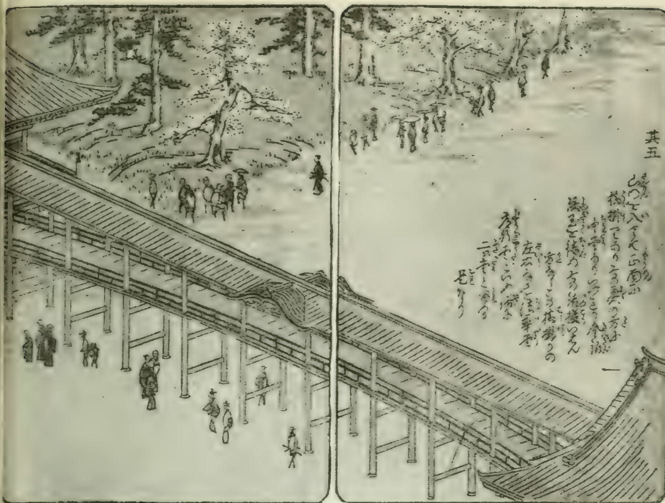

同所
坂上眺望

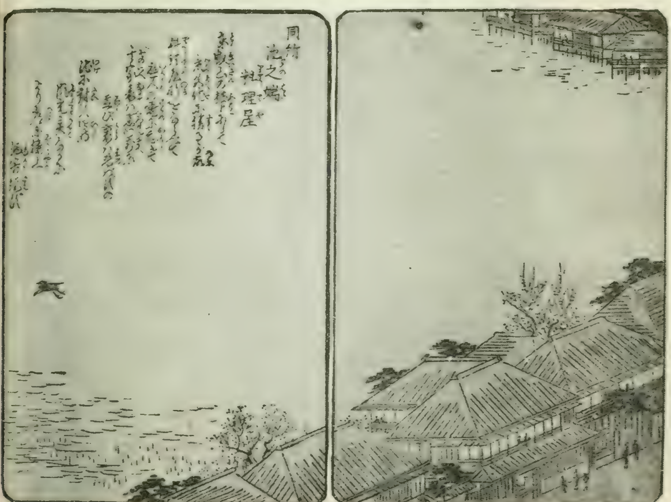


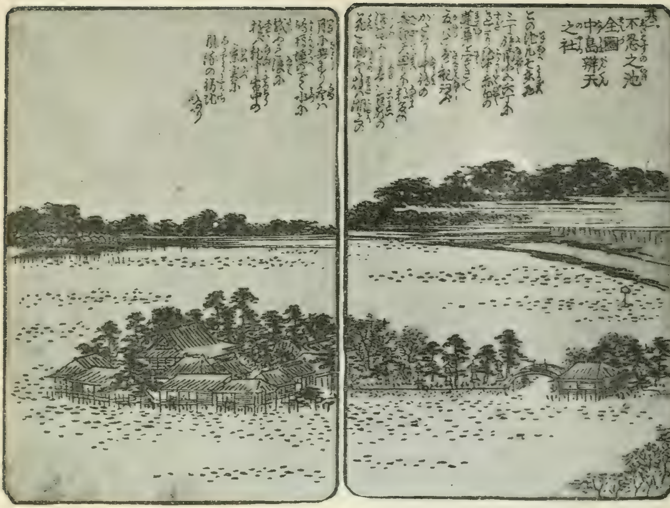



清水堂花見


山門摺鉢山花見

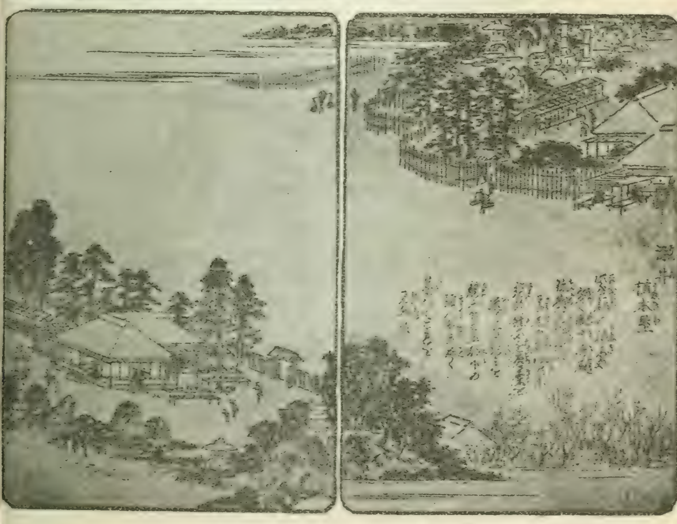

其五


同
池之端
料理屋


其二
不忍之池全圖
中島辨天之社

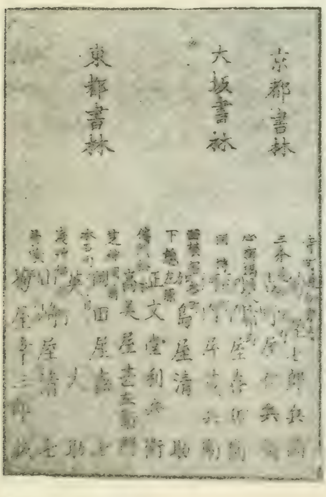

谷中
天王寺


根津権現
社内紅楓


染井
植木屋



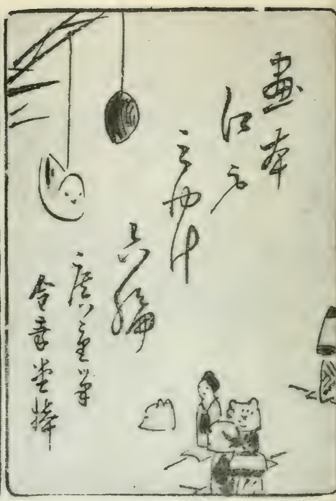



京都書林

大坂書林

東都書林



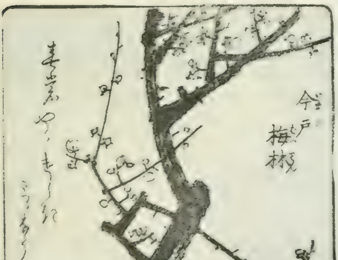


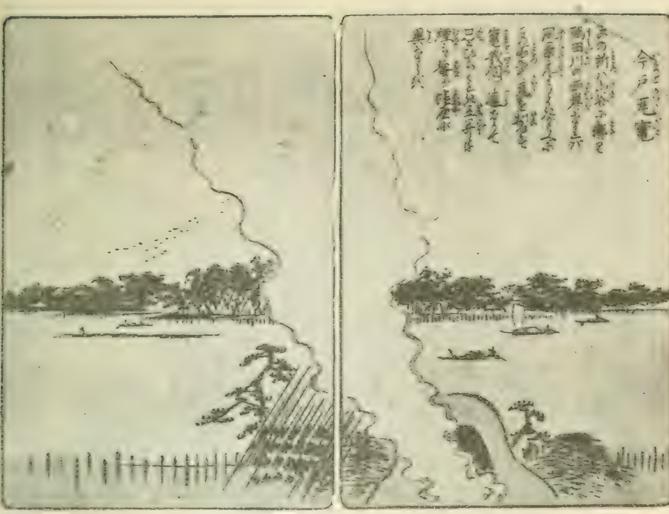
江戸土産六編序

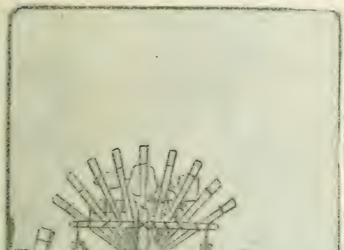
小松殿の御剣ハ琵琶法師の世に語りて今の人感を記し白蔵主ハ異見して大蔵和泉ハ家子伝へて見る者笑ひを催す廣重大人の図画ハ枝あるや絵神の妙あり山水勝景を縮せる有中にも高動も清らすらかなる巻に対して見る形の如くにおもはしむ

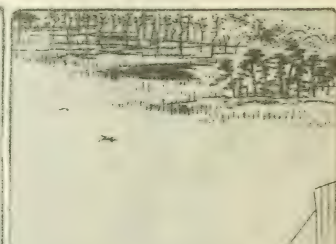
割成後世に流し笑ひを催し是を以て加ふるの人皆予に今年六集成金幸堂の主人予に序言を乞ふ鳴呼人の好む所を編纂自然らなる者を一笑して筆を廃す者は

松園主人梅彦

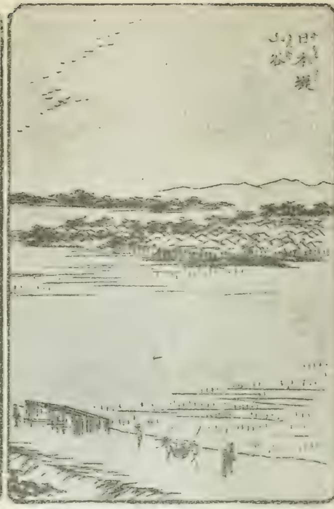



今戸遠雷





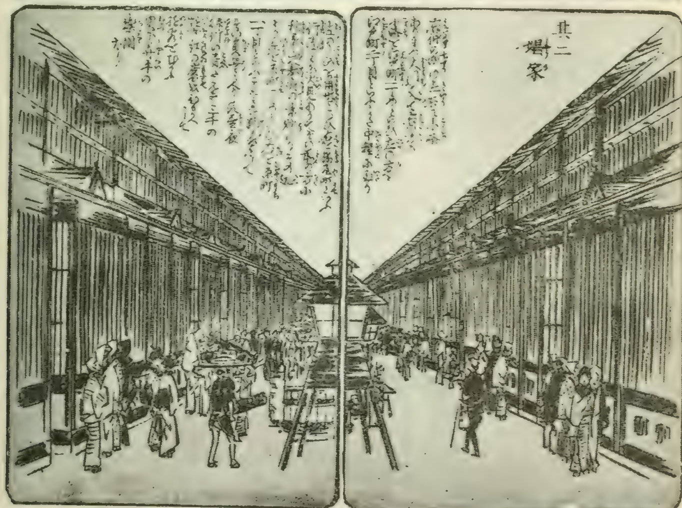


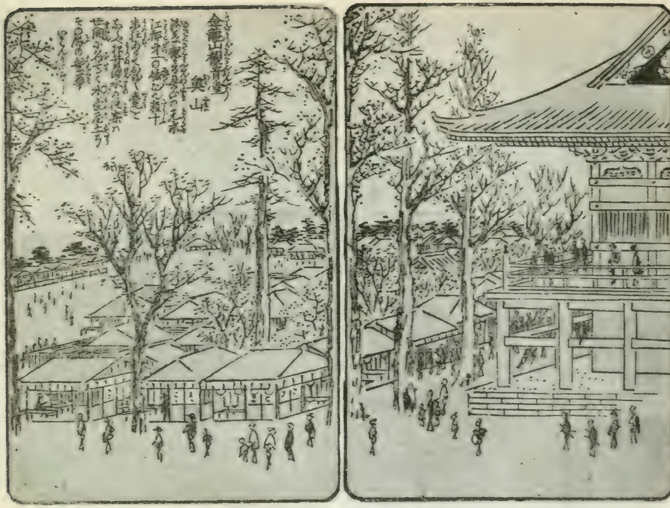

日本堤
山谷

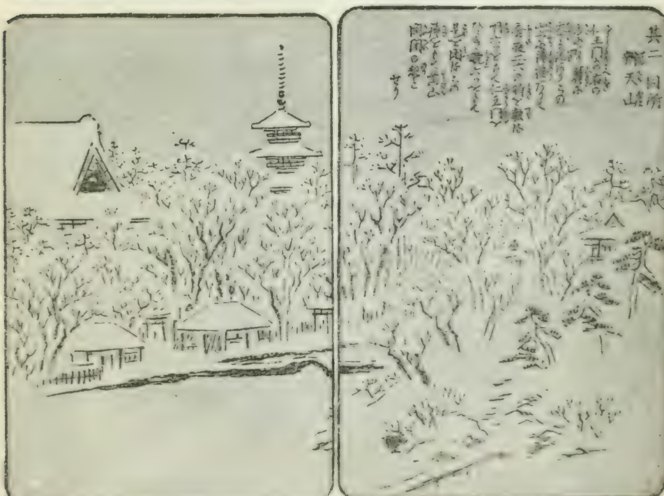


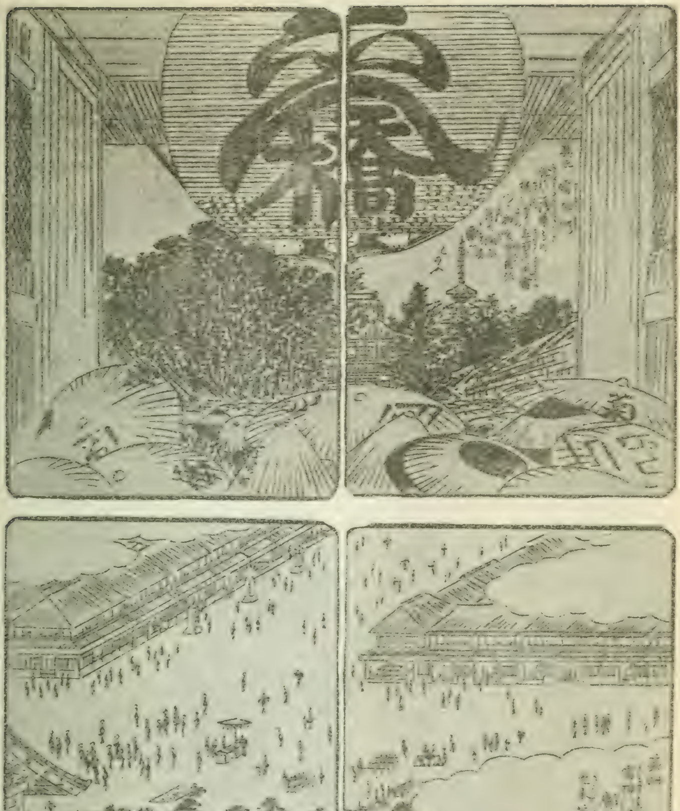

衣紋坂
見返柳

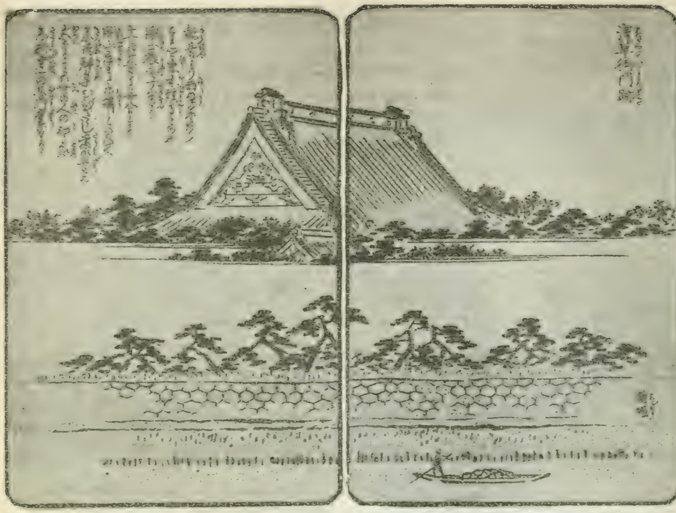

新吉原
仲の町
夜桜


其二
娼家


金龍山観音堂
奥山


其二 同所

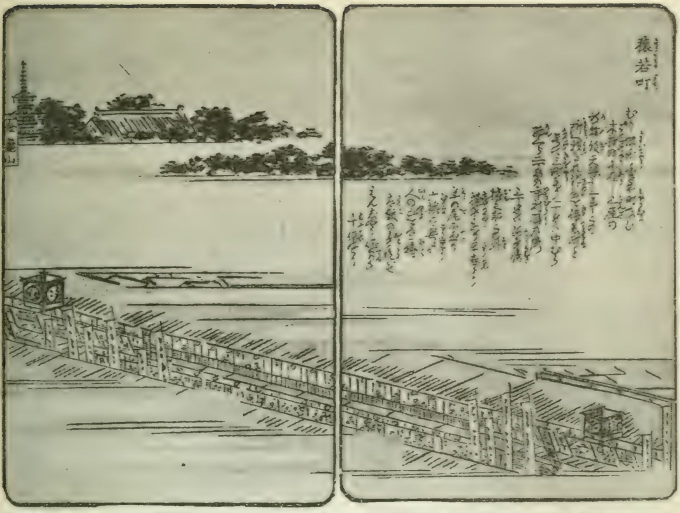




淺草御門跡



金龍山
裏田圃


猿若町

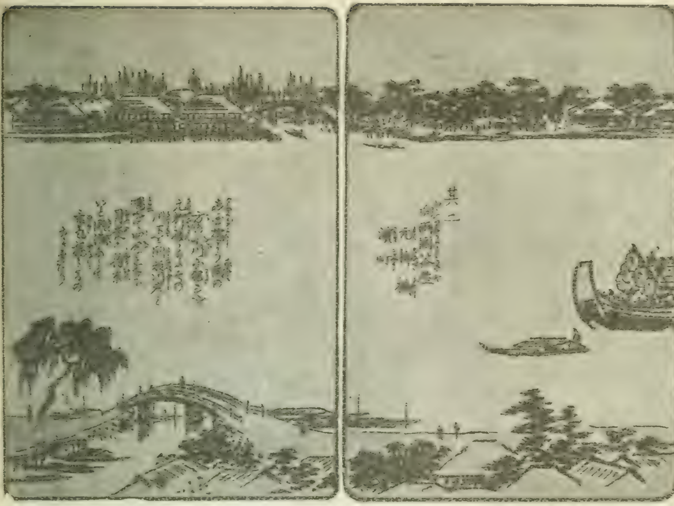

河岸通

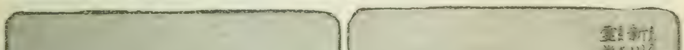


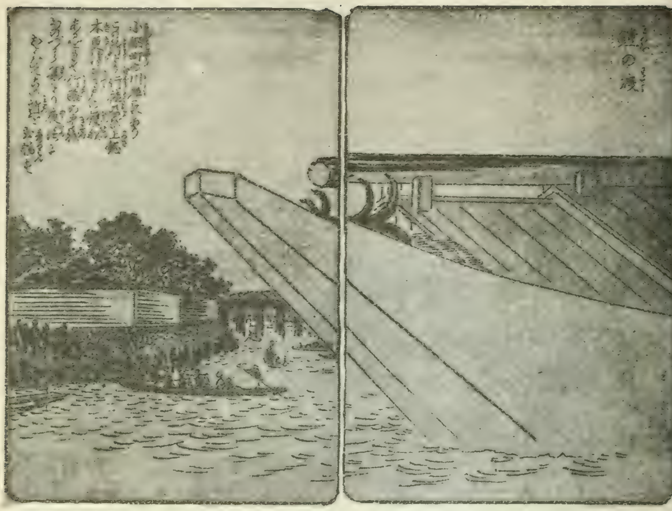

馬喰町初音馬場

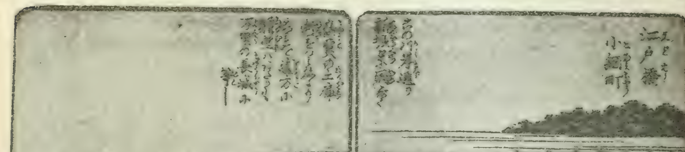

神田川の末流

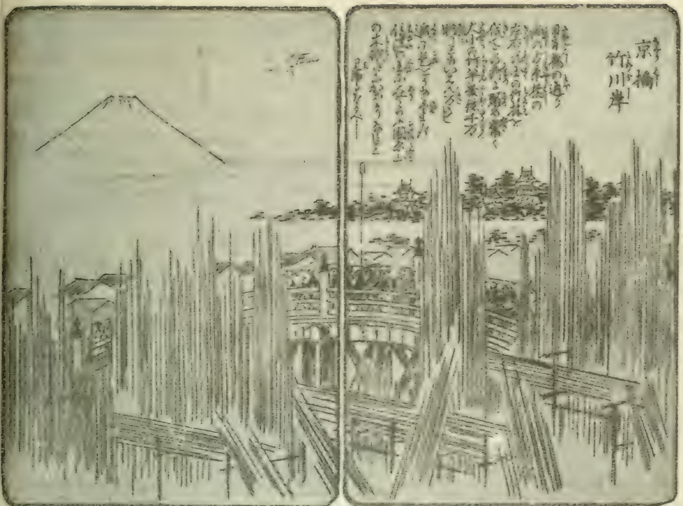

両國柳橋
料理屋
會席

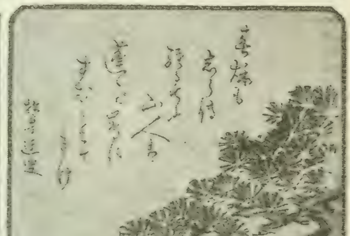

其二


新川 新堀
霊岸島


鎧の渡


江戸橋
小網町


京橋
竹川岸



繪本江戸土産　初編　一立齋廣重画

[illegible]

同　二編

[illegible]

同　三編　全一画

[illegible]

同　四編　全一画

[illegible]

同　五編　全一画

[illegible]

同　六編　全一画

[illegible]

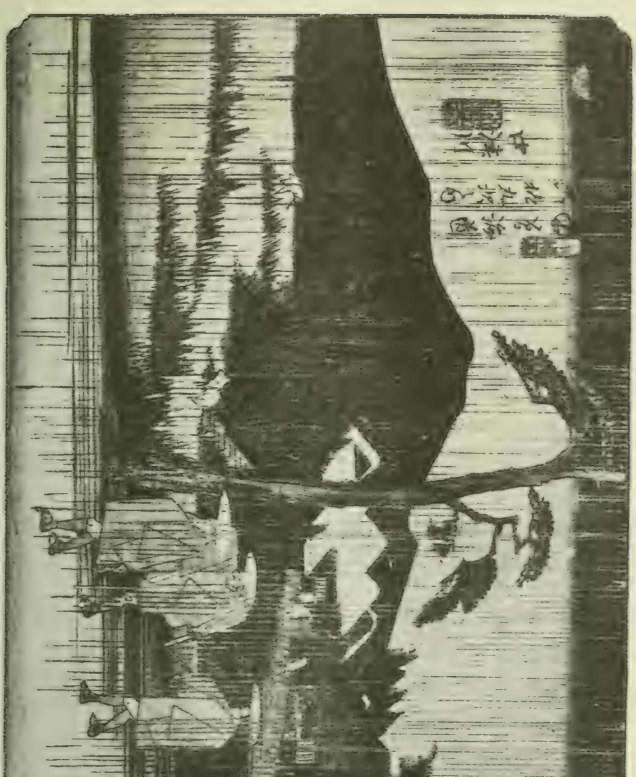
清涼香

[illegible]

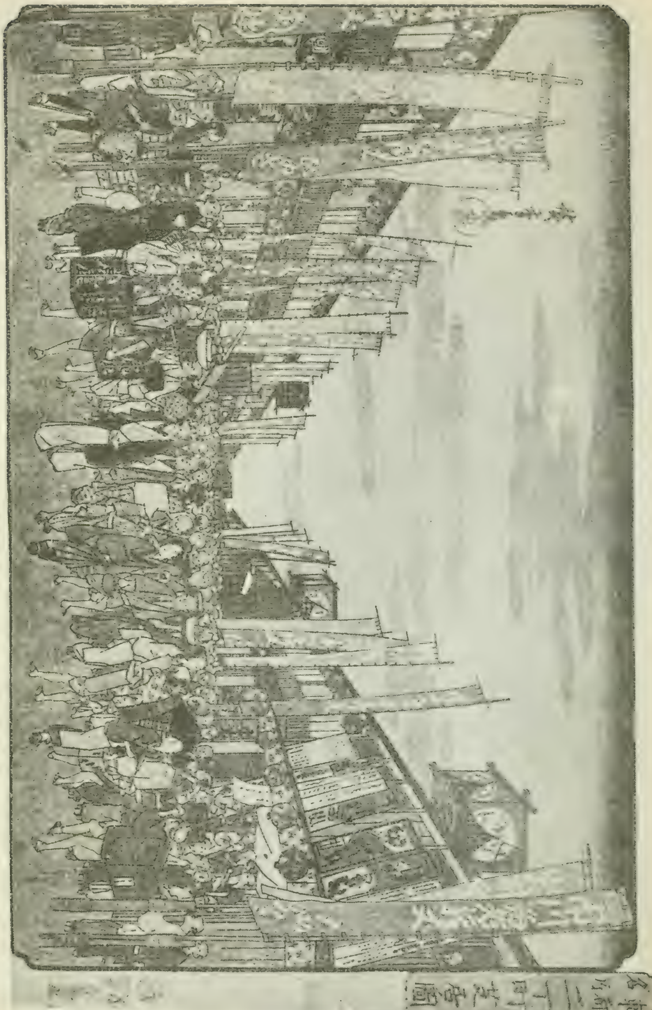
江戸賣弘所　馬喰町二丁目　菊屋幸三郎



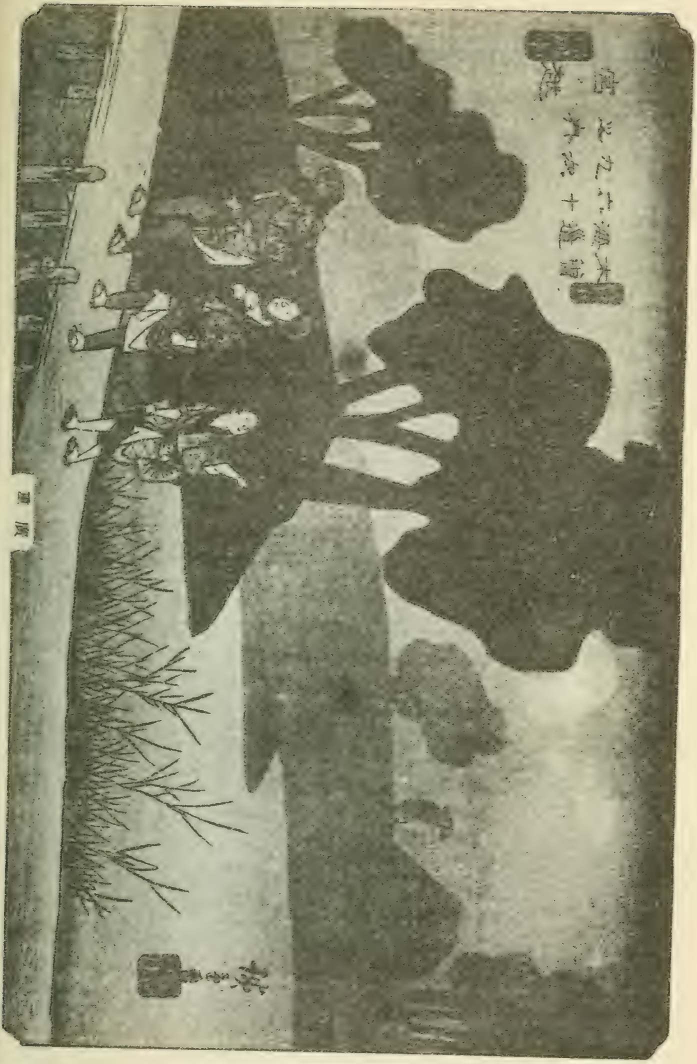
廣重

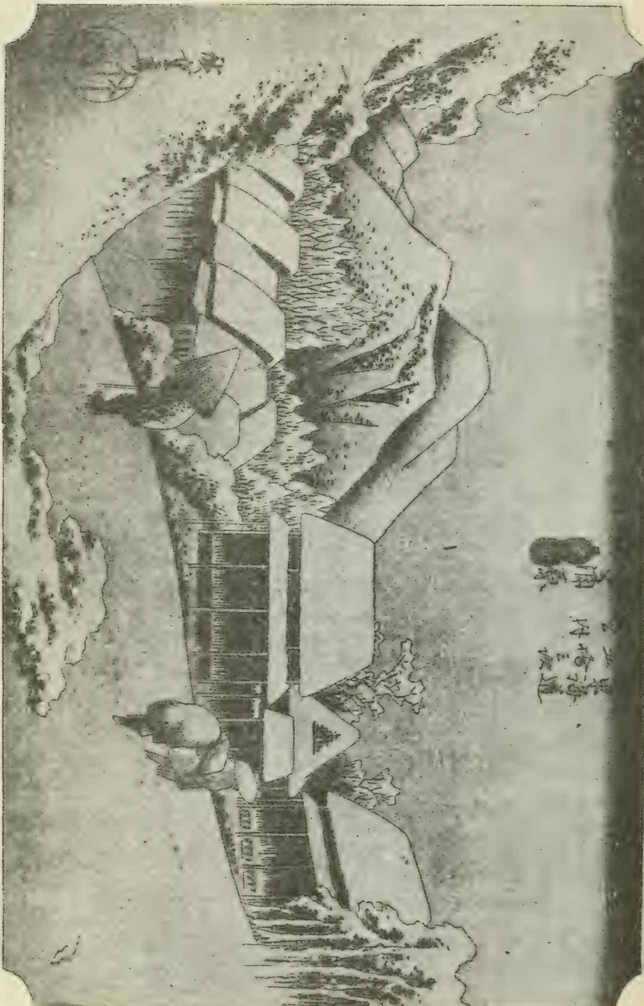


廣重

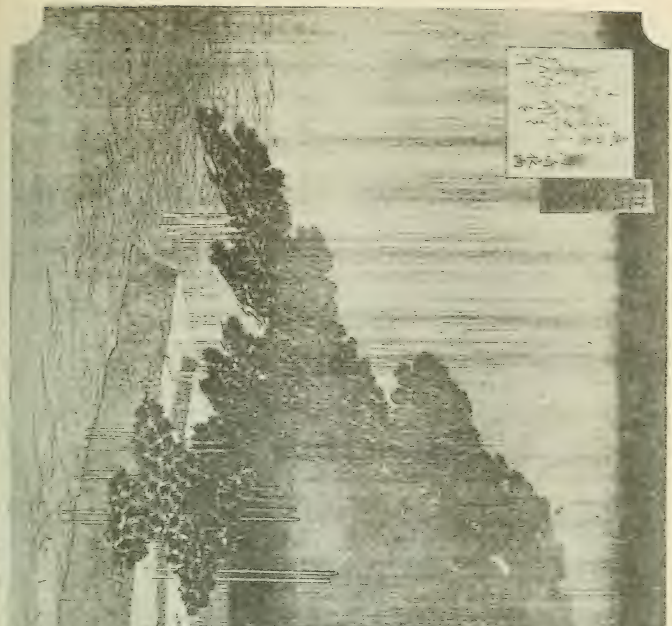


廣重

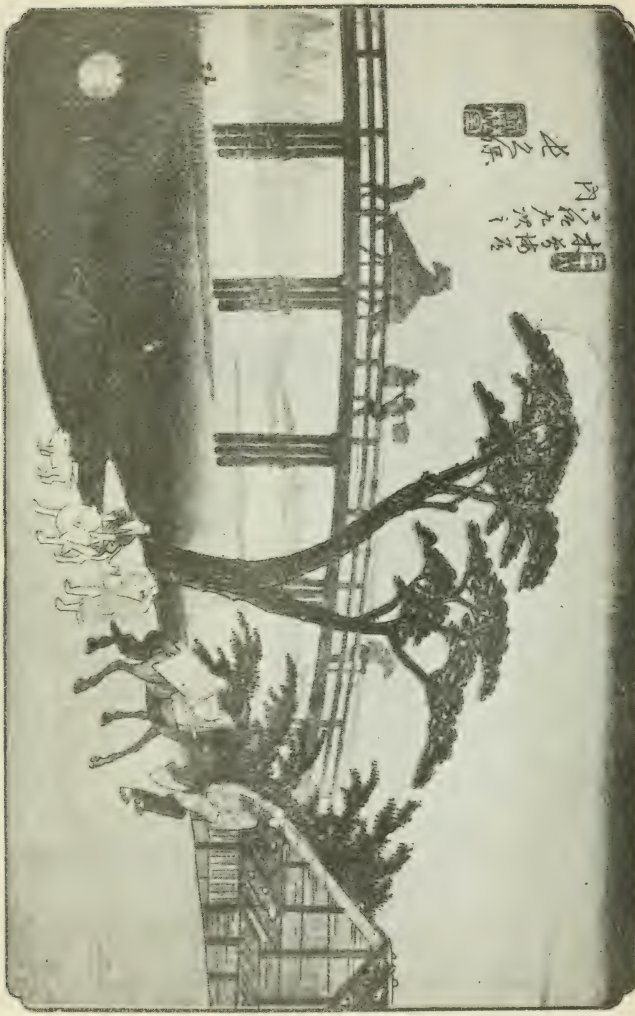




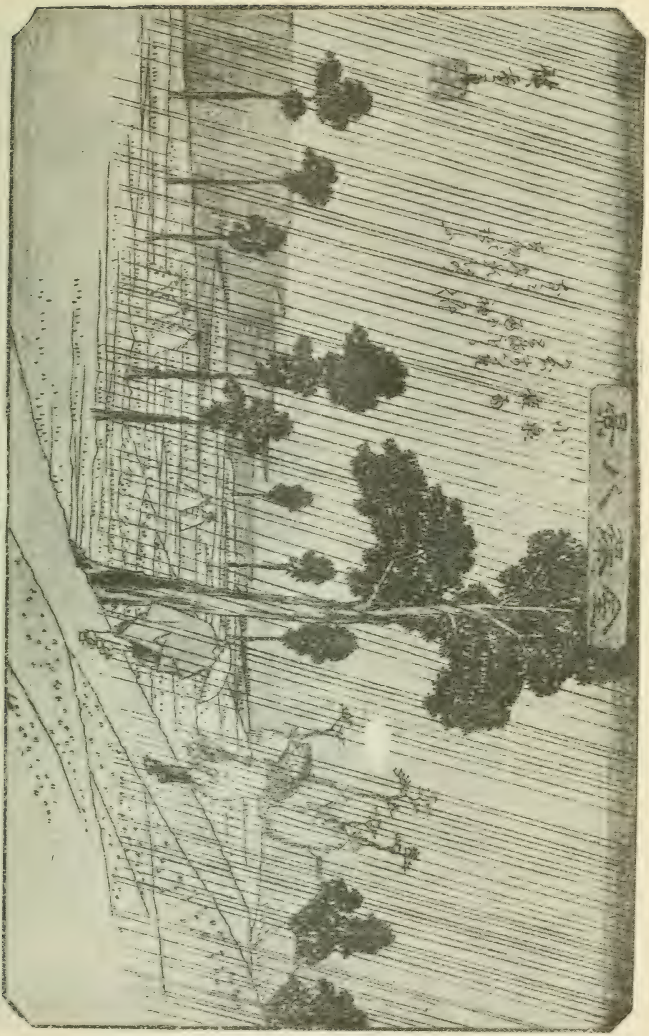
圖五



廣重



廣重



廣重



國貞



國貞



國貞





國貞

貞國



口圖



貞國



貞國



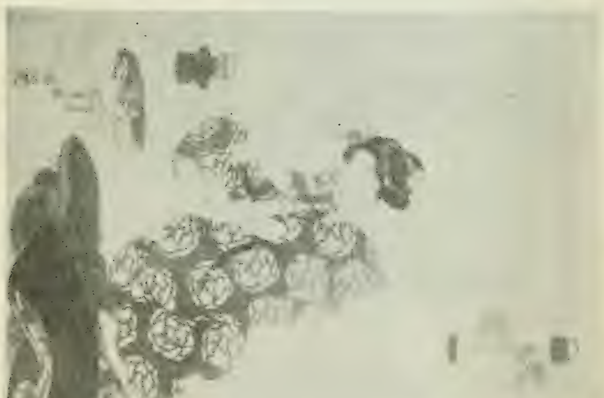
貝 圖



六 圖

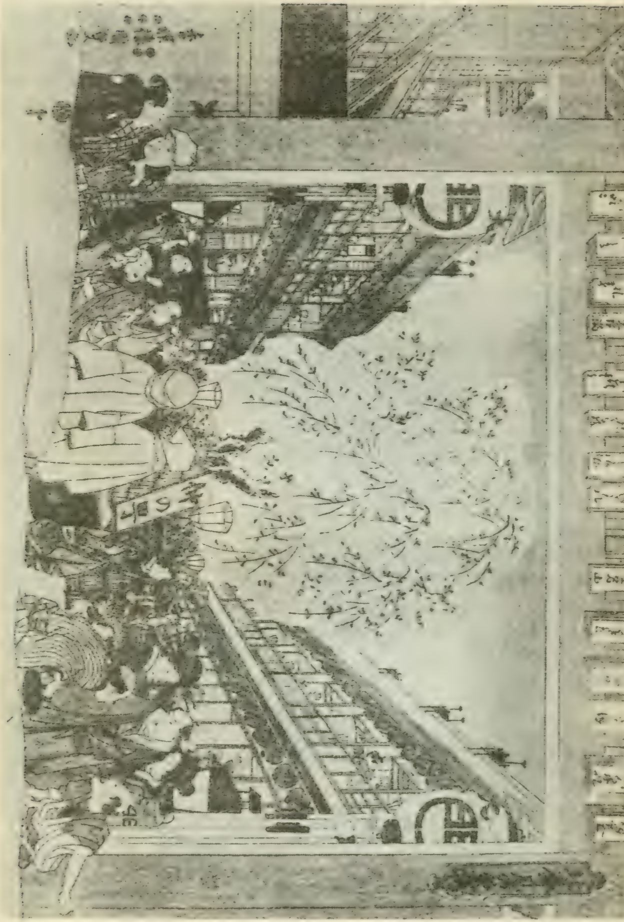


圖五





國貞



口圖

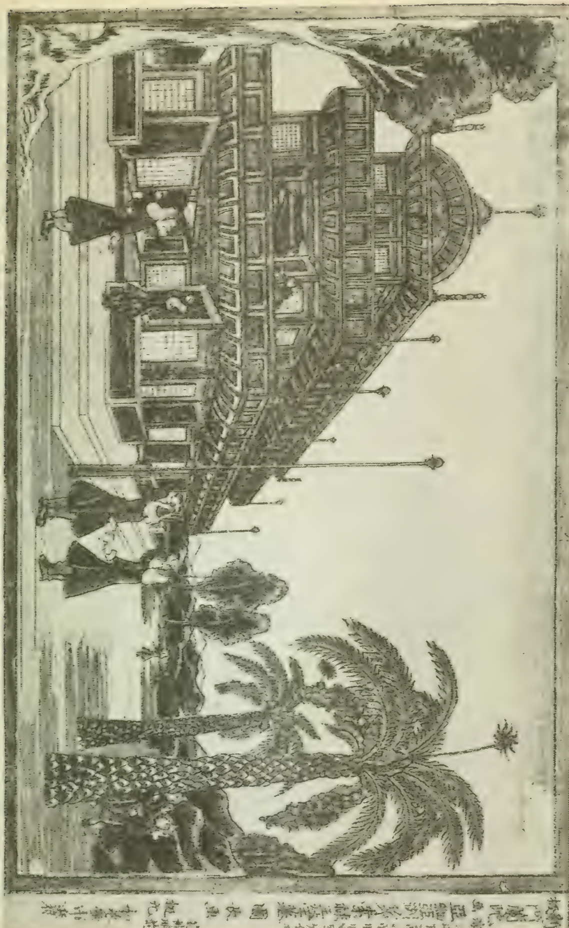


圖 [illegible]

駿河舞

駿河舞

耕書堂小斎石中栞二十有五鶏子似より
とつて金鶏石となつくや清流るゝ所より
深く此石をもとめありしに此浦にある乃
寶すくなきの神を乞へくなきて後とむ
くる也観ことをしてはの此根のおゝ観遊此白
や深やちまさ此名産をさりされるお
否其をも撰て己か齋の一物と思ひむき

人のこゝろみだりにしてのちしもかみさかひ世更
耕し蠶ふことをわすれあるはこれとくまし
いへまぬ獣集のつくに民の虎狼猪しゝかきん
よりとゞみに梓のほまれ四方にはしら
しめんに天つ我に従はせて是に讃に
ふありとしひらの川の獲函をしてうやく
しきともきさきたるはあんをみ金銀てふ
吉名ありをしこれ名布卯によりくは何不本

嵩山人乃鳥石子か扇[illegible]一首[illegible]あり
[illegible]
[illegible]
旅[illegible]乙女の天の羽衣[illegible]
駿河舞とはいふ[illegible]侍る

寛政二戌とし初夏

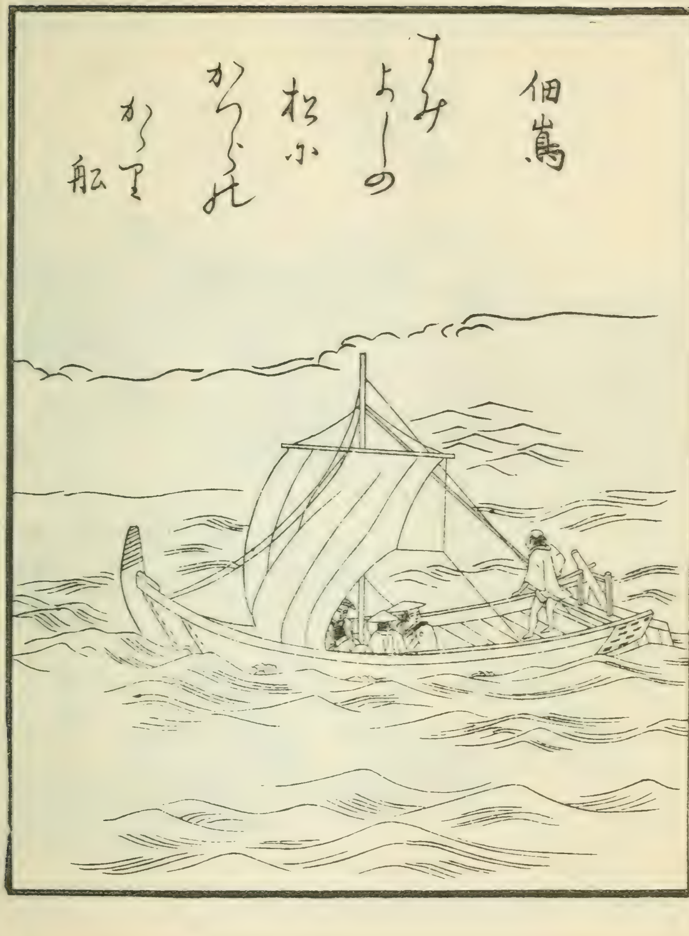
奇々羅
金鶏
しるす





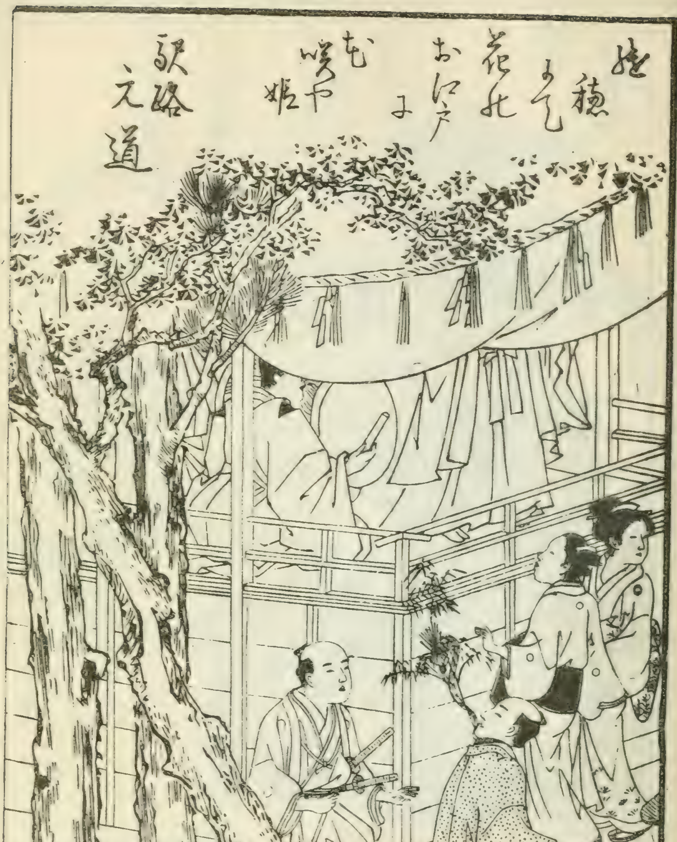

湯嶌

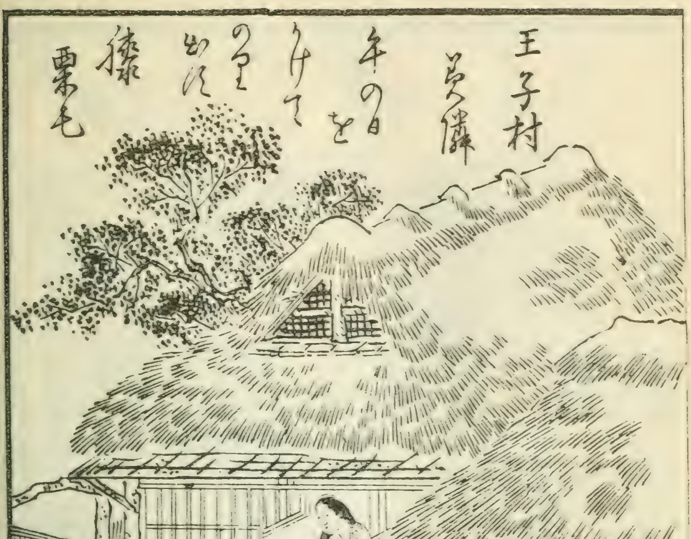

南阿散人


佃嶋
すみよしの
松に
かゝられ
かゝり
船


小判長丸

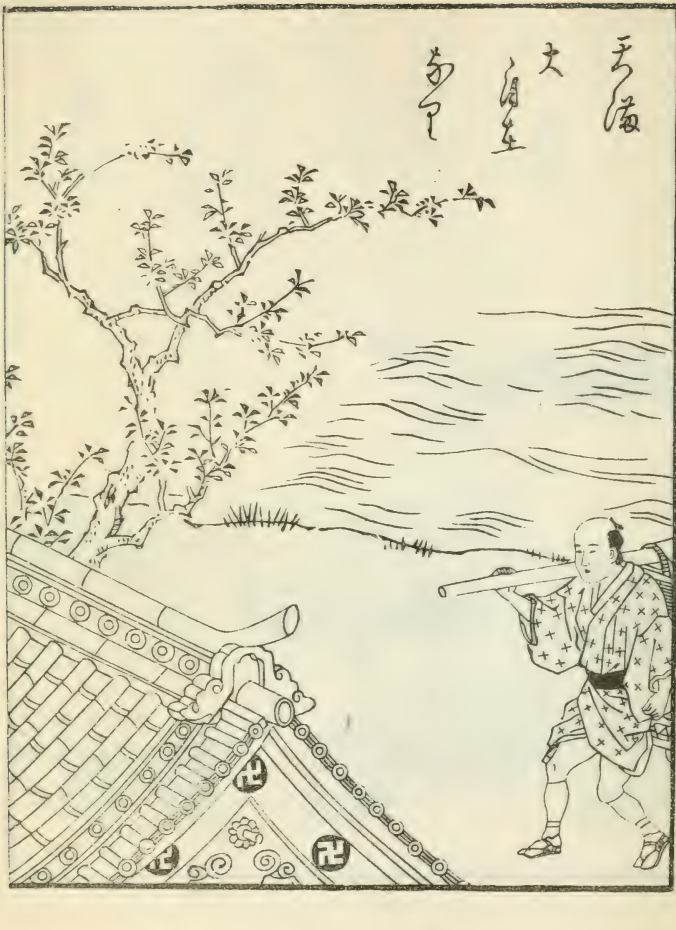


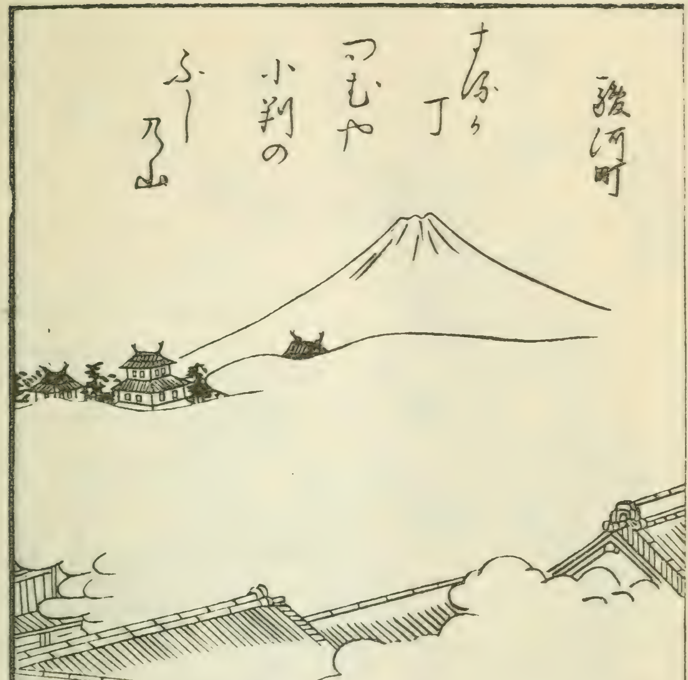



王子村



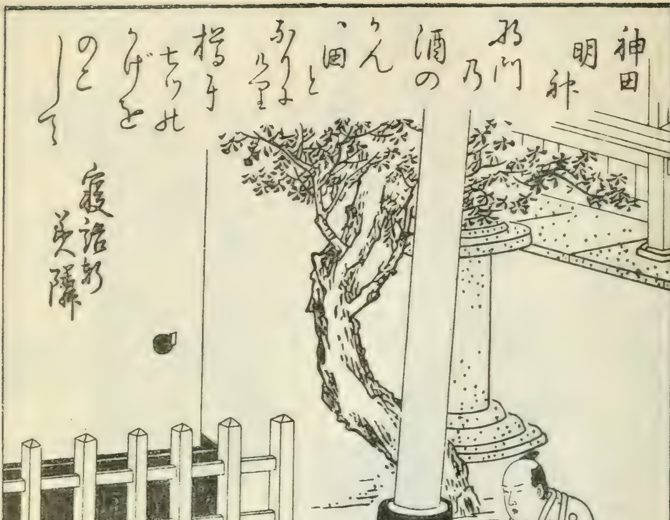





駿河町
するが丁
つむや
小判の
ふじの山

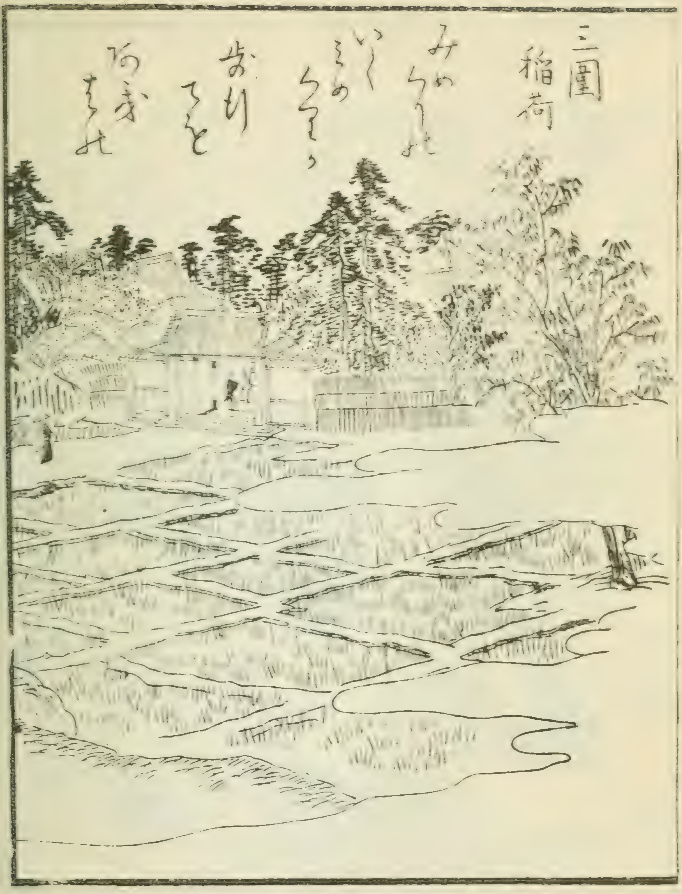


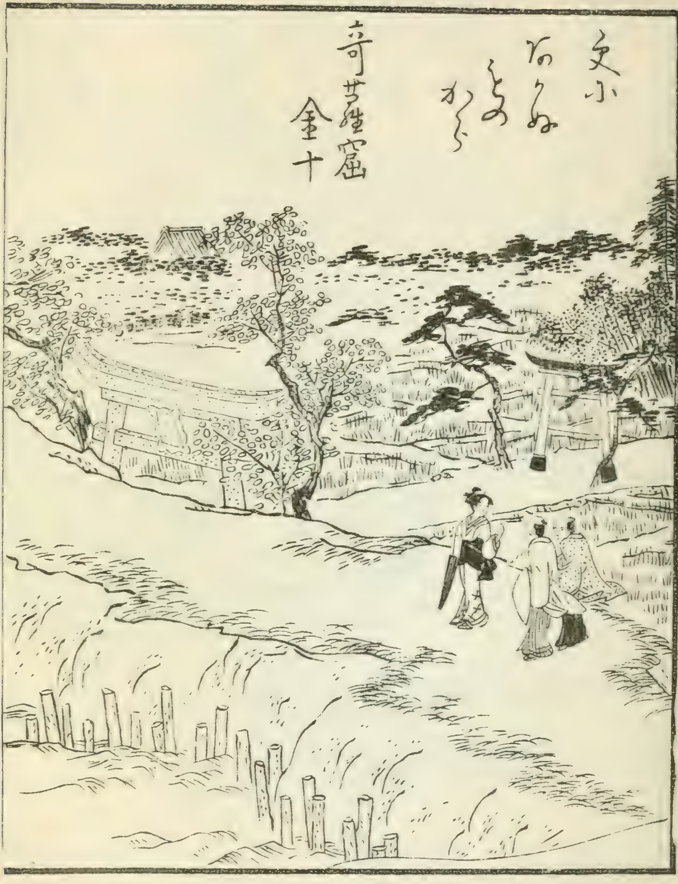

美隣
薬師如来



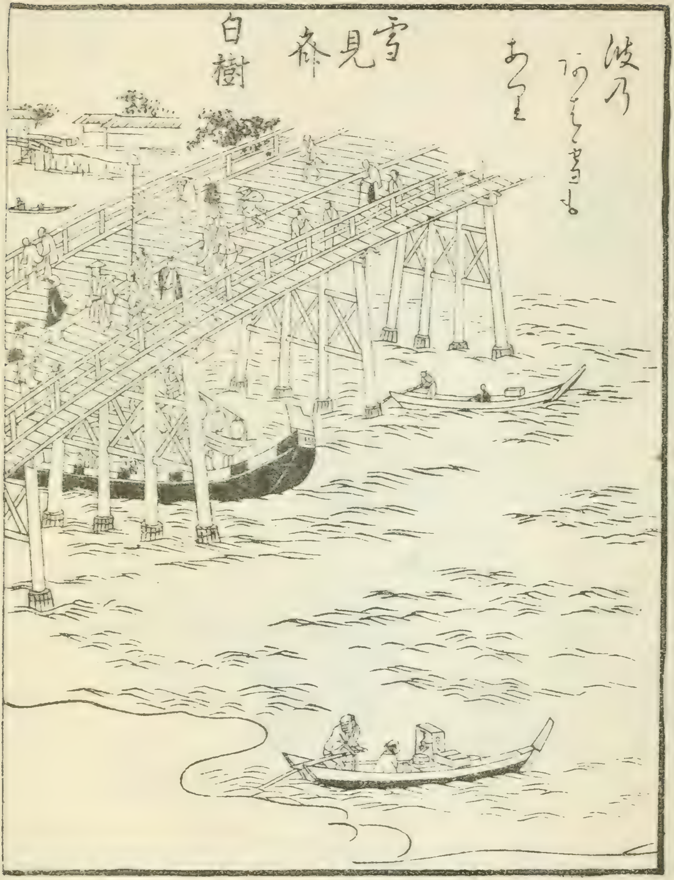



桐君山人


三圍稲荷

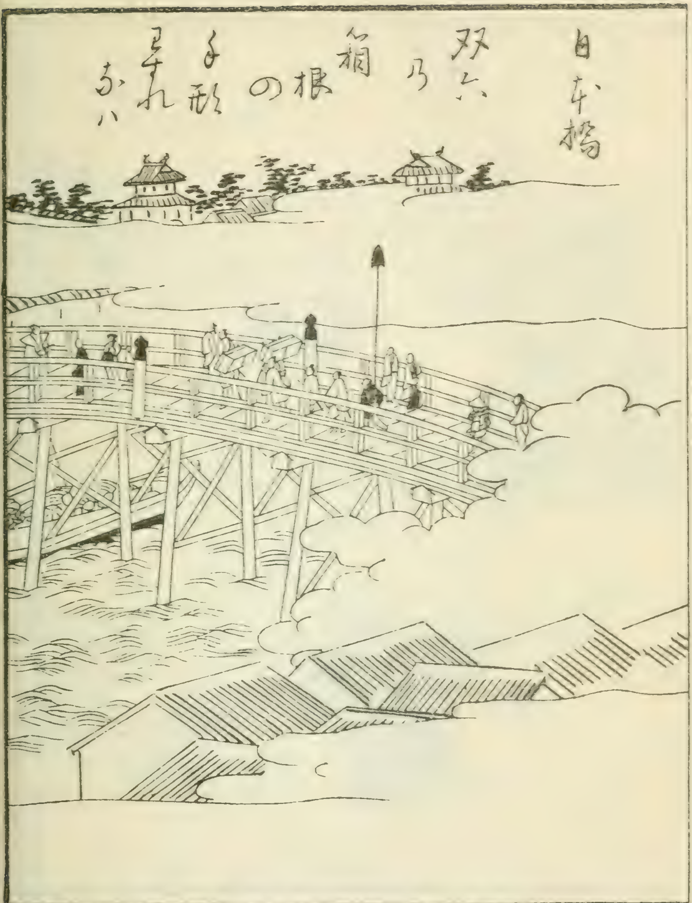


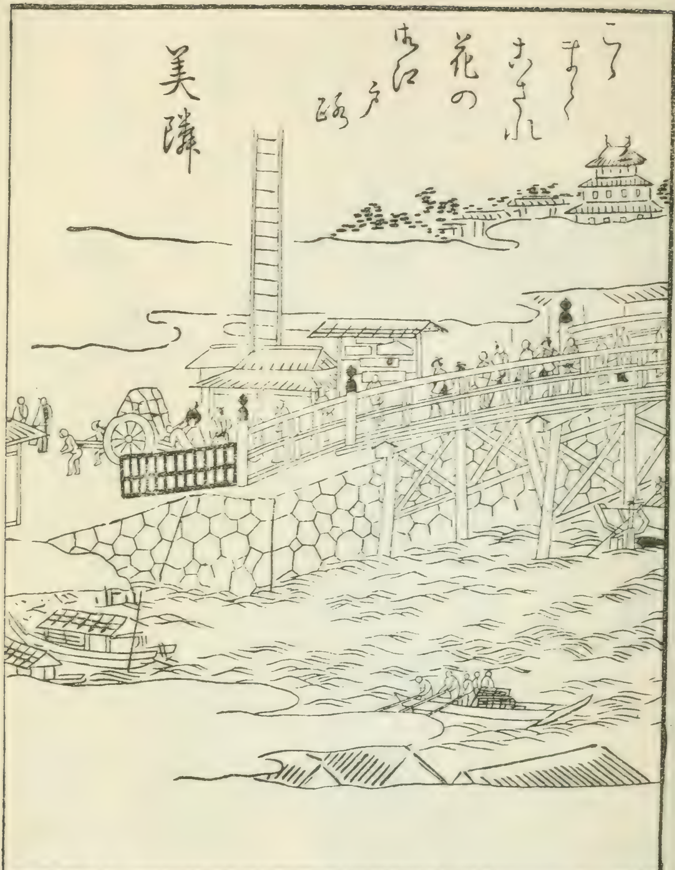

両国



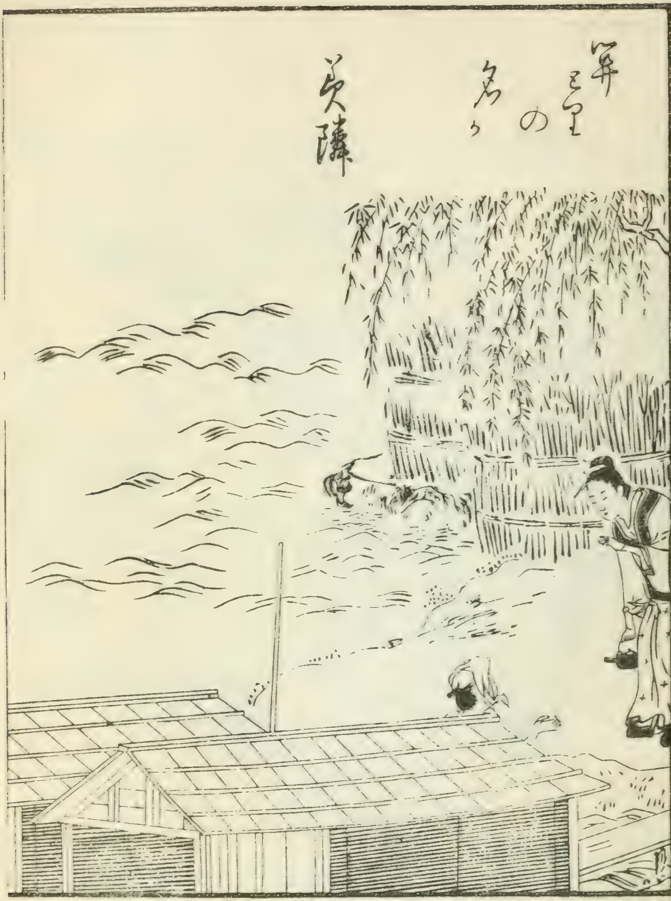

高田馬場




日本橋







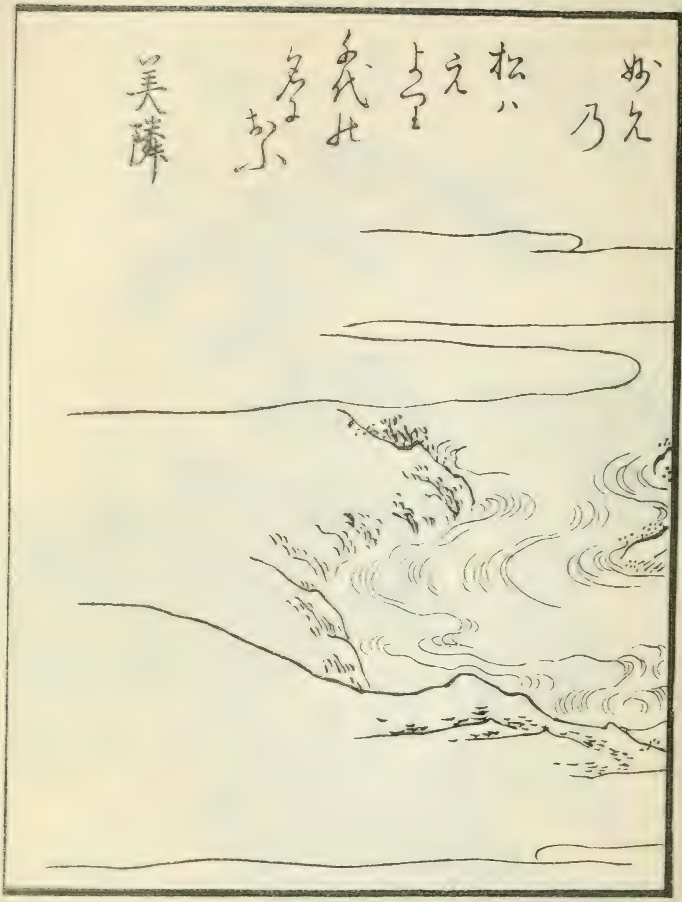



品川


羅漢寺
施餓鬼
地獄乃
さても

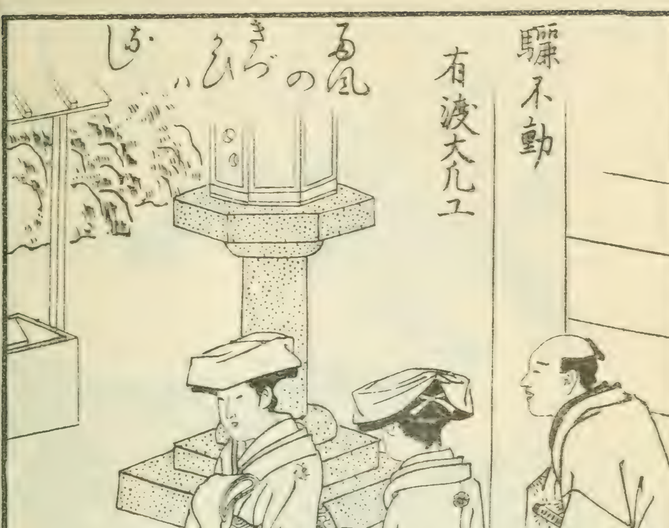

五百らかん寺

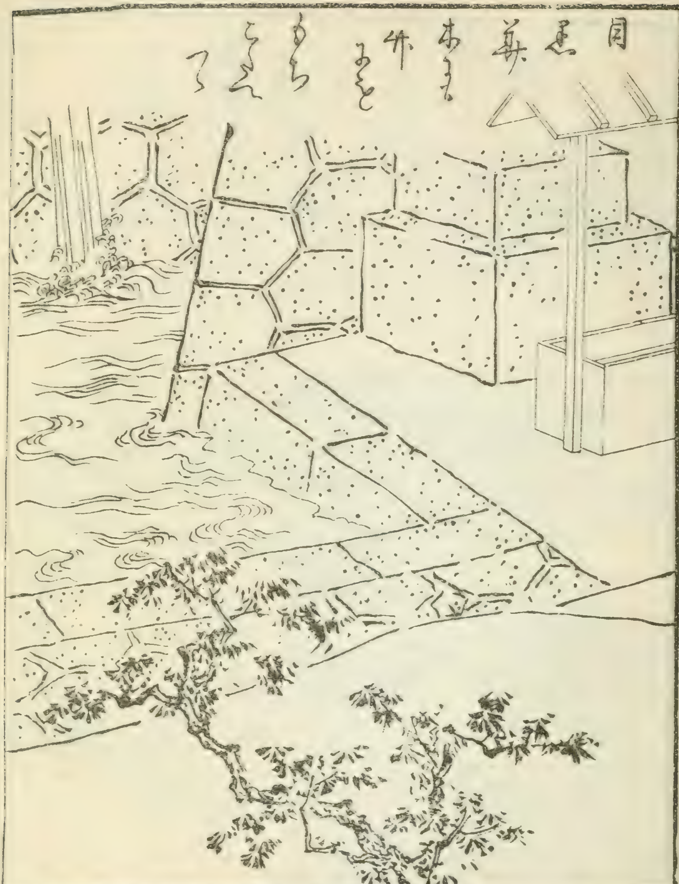

妙見乃松



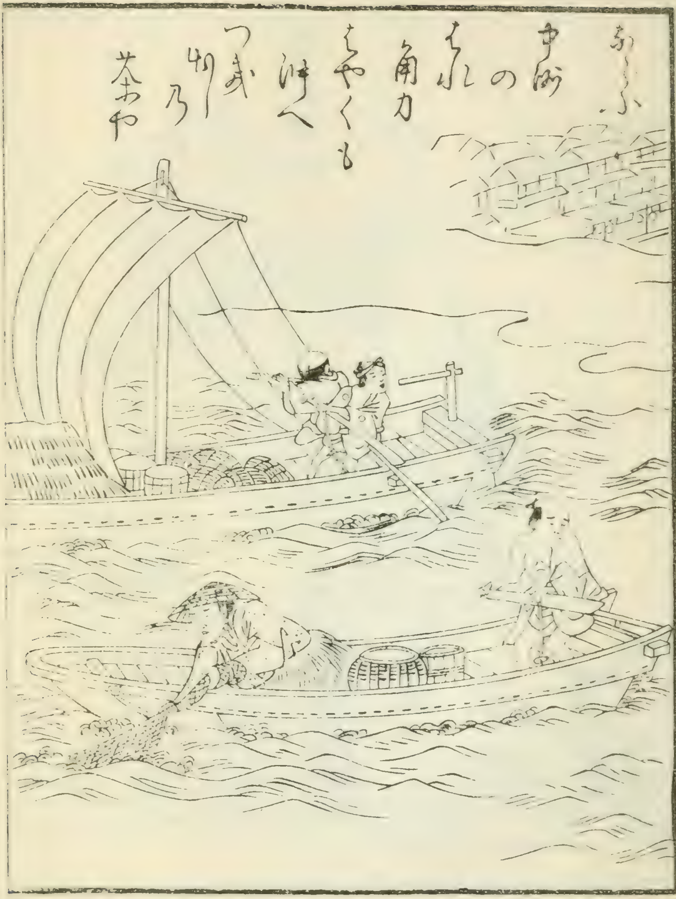


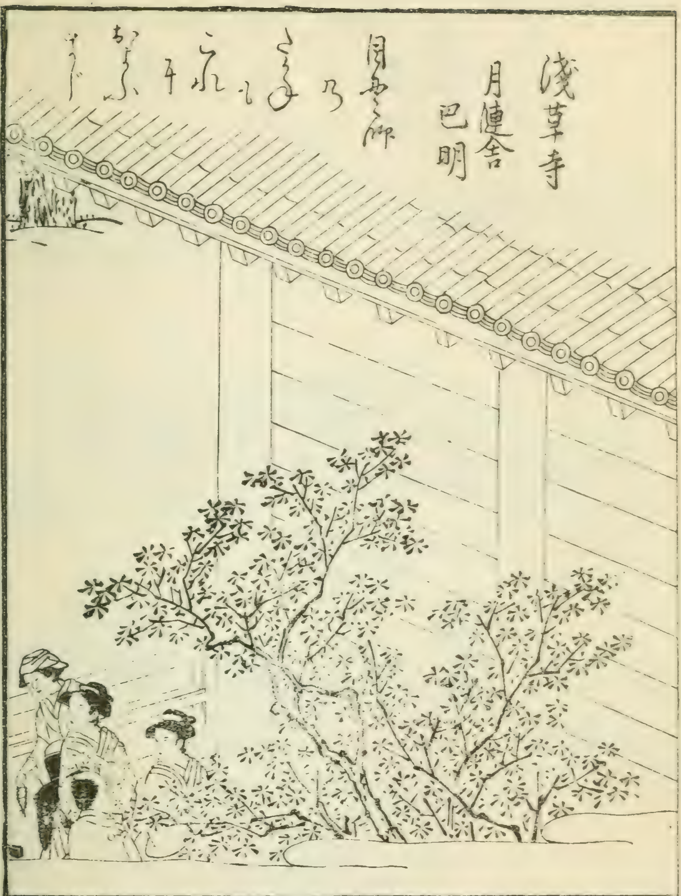

金雞

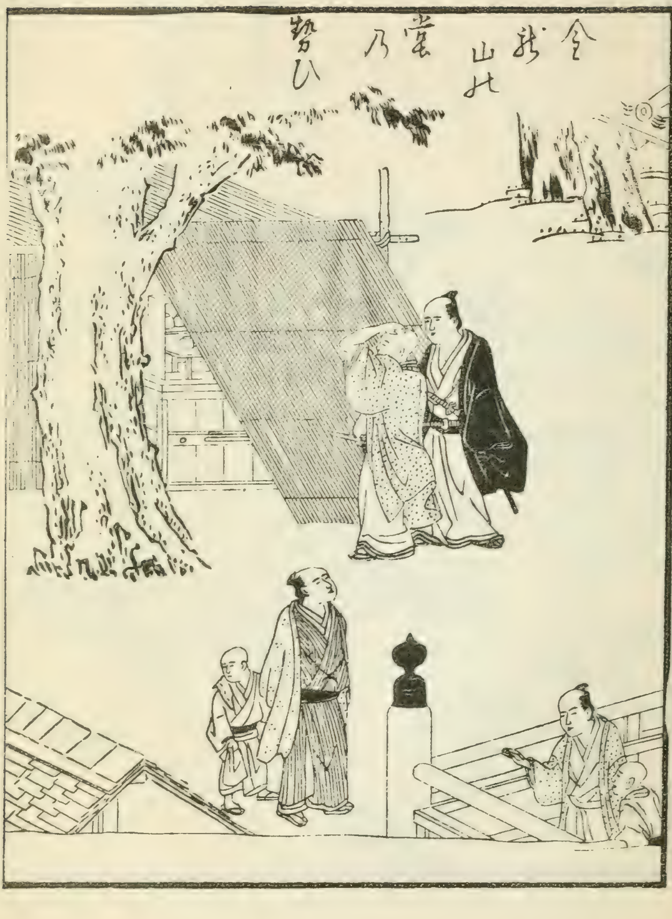

騾不動



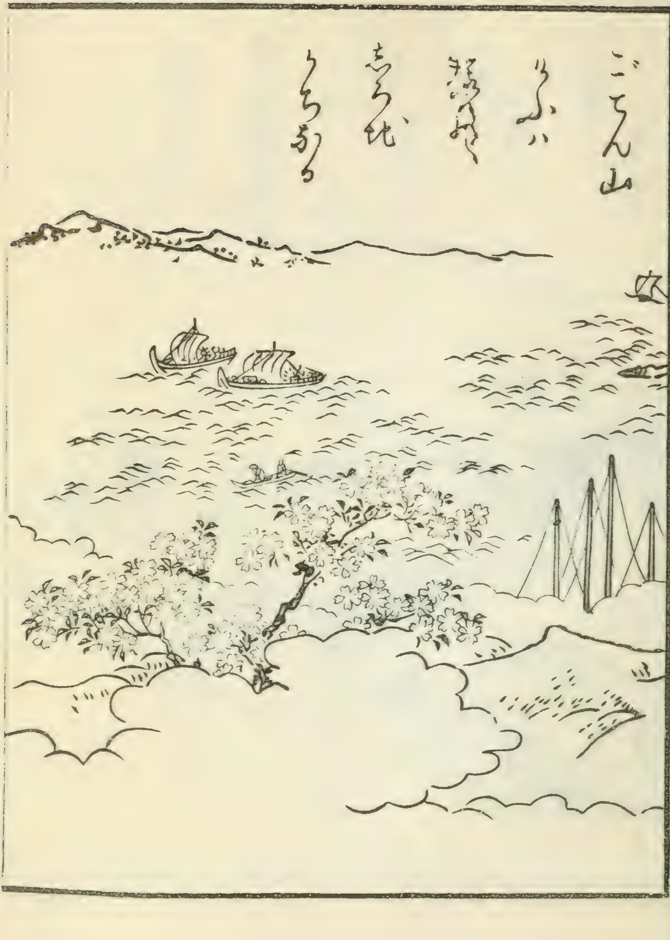

中洲
朧扇亭
両国

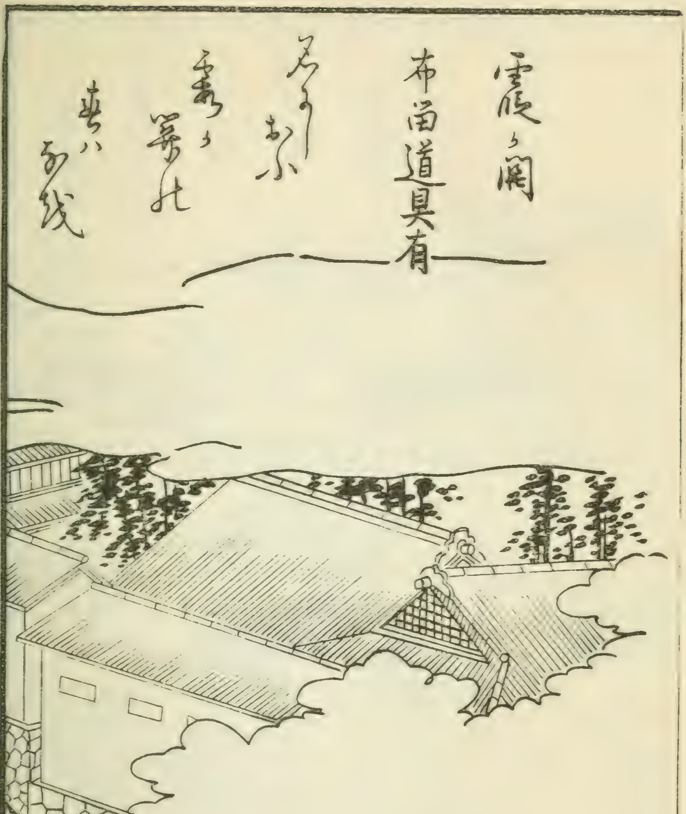


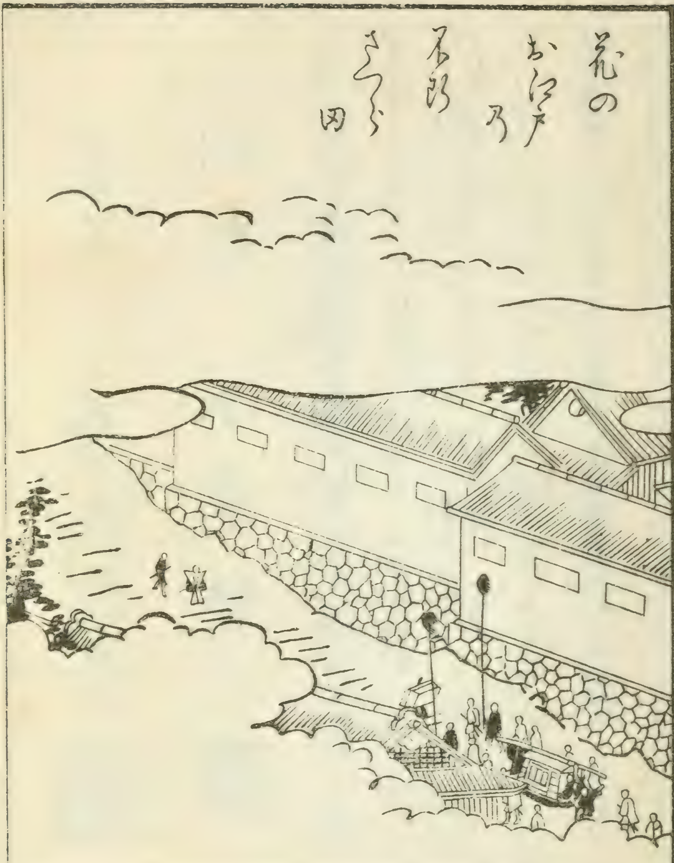

淺草寺
月連舎
巴明




御厩山


ごてん山


霞ヶ関


花の
お江戸
乃
さくら田

画工　喜多川歌麿

剞劂　小泉新八

年々四季々様々花やかなる小松を
四季々年々新板のさまお板しからん
彩画図の手をつくし彫刻の功をきはみ
めづらしき事おりしる紀の字追々出来侍れば
幾千代かけて不相替御求被遊ねかふ
こと上

青樓年中行事

曲中年中行事序

此書を年中行事と命じて八図居の歌合によるものありし前庭武明時のちやんぶちなる偽作としるすふなる夫太平の御代のよしとりかれ新吉原の児の端々までの花の紫のありしはおのがまさみを集て世のなげきを可磨のまな

やさしたかきやふんすみのなりぎおもいきを知る名代の勝木中の町の名代の妾当世の子きせの方の花まことしまれなんこら行巌の八朔の風俗はきらなる居続の番の行灯九市の秋神楽までの字やの去るの世は女となし其の詞を十返舎の名もかつて悟ら此者の作事

艶原もこのめ新の江流ふ人ぞ六の居の風引きいで子宿下馬子の恵ぐみたゆみてあで宮もの新板とせるりるやかよる人間の別世界の三昧の由比のひとえ人八まばたき年の恭となりておく有しる花やせし法しより

于時享和四甲子蒼陽日

千箱樓識

青樓繪抄年中行事

凡例

一 此書ハ僕累年見聞する所の摭に満せ画圖に擬て其顛末を書すといへども其行来枝に異なる所実停まゝ有り。蓋此世中をもて他に比倫なきまゝなきものゝ寒北といへども年中に其の跡ハ牛込稼斥の持朱しる毎家の例格尽くせるこゝろなく故に遺子あるも無餘きゝるも好人の批判に許せう事ハ能を待んことを望むのみ

○事ハ曲中大全に委しといへども今より三十五六年の通例に更易る所有り殊に八維附の事更の卯の卯ハ中洲商家の市しなまいらせへ献茶の会市を行て今々お妓汐三歩三夜米蔵の印しなく数文まゝ出会せて盛々の市しなは中里丘座新造ハ俗に附花較の網を小児に接せ今縮緬の下まで出ず新街商に纏ひして大街一等の張合りけの帯を取りを以て疏る縞を然と其たる事持の知るを維時の 二 行 一 並の風流せしに今ハよぼせし

△全篇の絵中に左此左ハ丈人の絵の絵と事し番以能彼其親子の事持をとけて伊ほしまて尓一八方に徒に依せハ三つにつゝけよ今の〓の如し徒ち毎家に先らざれハ諸私して其来有し行捜て後編に補ふし

○夜々の紳初の縁付紳路お妓の事ハ六ハ三八季に由りて縁し京の余に任せて其遺捕するを紳とも節の新作の兩青草市ホハ俳街し其光注せる故に継来事の流とし能ふからず其他ハ只画図に託けて其思ふ文を加ふ

○初会より後は総て列傑を続く押書の事の紳を佳客日本の韓ハ異書の図に依て読むに相挿む倡家の法制を加へて一篇の戯作に備ふ

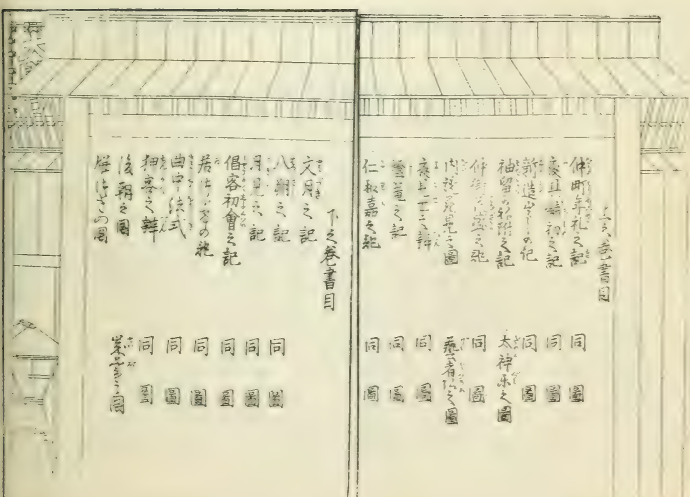
○標題年中行事と命じく志す所の其の遺箇及を後編に譲らん事を捨遊す

東都 遊民

十返舎一九戯編



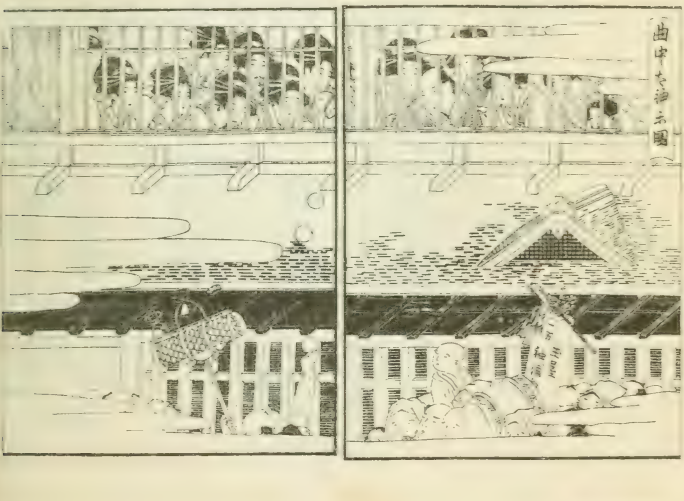

千種庵
三陀羅法師


上之巻書目
同圖
同圖
同圖
太神楽之圖
同圖
同圖
同圖
同圖
下之巻書目
文月之記
八朔之記
月見之記
倡客初會之記
後朝之圖
同圖
同圖
同圖
同圖
同圖
同圖


仲の町年礼之圖


夜具鋪初之圖

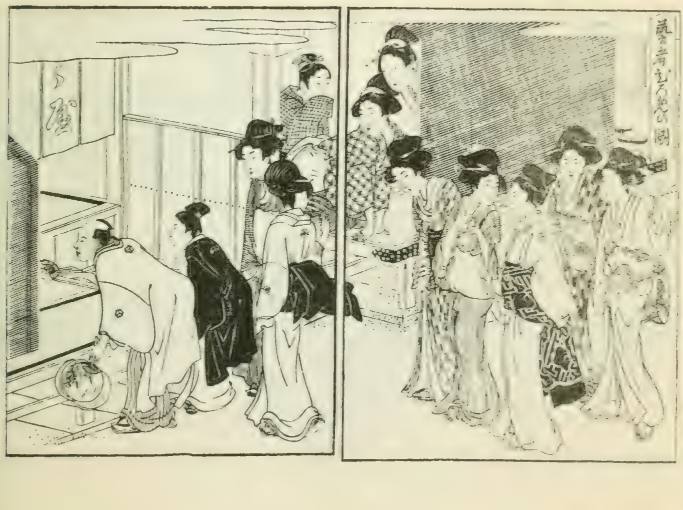

十返舎一九




夜見世の図


仲の町花盛之図


火の要慎




燈籠之圖



仲の街年礼之記

本朝遊女の濫觴ハ桓武帝の御宇[illegible]神
亀の比より[illegible]若紫集[illegible]の[illegible]
を同じうするにしあらねバ[illegible]にしる[illegible]
行女婦のうかれめといへる[illegible]の[illegible]吉原ハ武蔵
なる小田原駅の[illegible]しところを[illegible]
ものなりとかや。公命をも[illegible]の[illegible]
吉原の地を定め。今の住吉町大坂町の辺く[illegible] よりて[illegible]
[illegible]浅草日本堤に代地を[illegible]
[illegible]錦[illegible]何の[illegible]

中の町に茶屋[illegible]美[illegible]
造の清功[illegible]。毎
家の妓[illegible]細[illegible]。世中の観
短[illegible]大金[illegible]
[illegible]一枝の
[illegible]儀[illegible]なく。中にも妓家の門[illegible]
[illegible]太[illegible]吉例なりき。
二日ハ[illegible]礼して[illegible]。
仲の町を[illegible]道中[illegible]江戸町[illegible]の
間を[illegible]又[illegible]

菱屋の[illegible]。[illegible]
[illegible]楼[illegible]
履[illegible]格式
[illegible]の物好。備の[illegible]
のうちに[illegible]羽子板[illegible]
お[illegible]の[illegible]人[illegible]
上下ハ茶屋に入て[illegible]の
[illegible]小[illegible]
客人の道[illegible]
[illegible]の[illegible]草の[illegible]妙

[illegible]の[illegible]大[illegible]
[illegible]千[illegible]
[illegible]の才子[illegible]
[illegible]の内[illegible]
人[illegible]
園。[illegible]

新造出[illegible]の[illegible]

秦淮の宋恵相が詩[illegible]
盈[illegible]十[illegible]破瓜の年[illegible]
也[illegible]七

やしろの後朝と書かりて清け紛らすに古例にして両
接式ハ世間に曲芸に致る蓑麦切ハらいん
ひずみの花と咲ける遊女の倍汁通般ハ志ゝく年天
の七ゝ葉ニ宇の備に珠女房の祥ハ祥文なり竹村の
薫ん能新ニ積で芙蓉ニ其ニ勤しまて後の記宏
表書謝ニ宝門てかれ後心く但ニ此示を競ハ客しハ
紅の猩々紗など入柳ハ源の添ニ拭式さん絹ニ揚
救さし等所せきまで積ミ重ね其ゝ金を連ねる側に
立ゝ高し寄るに七日の内ニ遊女ゝ此事を果て是ニ
なそのの所へ友にしきせに配ててか代つゝくに

此彩色を任業おゆる色例なりとハ和音男女言
は菓庭よりもこれしの錦物三蔵しるをかまたる
恭書の拝す。そう金縁ニ意傍なしきのやの越の未佐
若ためその松の抄ニ頼ときよう扉よの姉分兼の御
ふ是ふて加く所事実を後まられへて招び起ろう
腹の言く古葉ハ布毬綴ニ綴をしてきりさ乃同
玉を鬼灯し作り葉の乞ひとらの端緒うハ若れ
もの秘言をきさふ雲居の黄射をとりしゃりして八島の
かつてし淫文とも忘れハ孫わりの宗ハ葉漏よ流すづき。
の奇つるとの夜おくれハ下読の咏けきすらの鳥居の下乃

まことの志ある客の筆跡を取り遣て八丈浜松遊ぶ
乃尾風より仮名まじりの風流き斗お守する縁居を寄
て八遊女郎の咲子あまり蕊年福寿の終針をとそる
冬の菖蒲漬ハ国のたより方のく出世見勝子ハ揃とりて
游よおよぐらく紅紙幕の嫁入ハ月諸て日の昭月の
と写遠へ草ざしの伊達ハまへて巣のなきれ
おり六謙の幽中の猫猿よ扇ておのづからの寛容
溫形の言く倚居杖不杖と記よだ人て御ふあどけ
なき金情ハ見を千金の声揚柱するに三札付の宝
生の中に今も盛なる此の縞ちぢらの袖を飛し

成合名代の志て勝色頭と見し花魁まで
戸神を拝みして深の手つから恩し其名ハ情け
どもいやまし般若の印ふうるとまで清らみ乃
噂ハ吴男ならも再ぶく供らん所の法ハ内ふ
なうる志らのも着すりおもふハきる事なれ推恵
紙の戯手生ハ遊女郎の文句に信せて其様よ
うちの歩く深の笹ゆのこを思ひ福そへ今盛
浮世の擬手あれハ雁つの隠て出ろハあらてつ盛
堂のつらね添男ら都佛系のそらさせて太平楽六ハ敷て
いまどしともいふるとのつ出

夜具舗初之花

夜具の舗初ハ客人の方より其遊女へ送りし侍りと若亭主僕等を始として傾城を催し祝辞を述ぶ其遊女の内証より茶屋船宿へ酒肴を送るもあり夜具持来る時ハ人せ郎より祝義を出し又内証の者茶屋船宿の男まで其任を出す女郎もあり其初の日も若者を以て人々紹介を参詣し去る古例にして祭祀等の祝儀の部組を以て一しく新造禿なり夫れ〳〵の祝義を以て遣す其客を比翼紋の手拭をまいらす

せん若者ハ松竹梅の蒔絵を画き夜具蒲団の礼撰こしきたれや其夜具初ハ全盛随一の洪福にして客のこゝろにも当ぬかと思ふ程に厚恩の一をうくとあらしく名の背手なく私をとつて去る奇も此時客人の指を名乗る程ハ苦界の身とも衆してさの名を侍るけれハ争ふ偏女の情と思ハれしやそれをして訓ハ恩都屋町の壇接して深く咲らを床の台の檐に随つて信高くなる切なものど兎角ならず肩の見えを専一にしをして詰ふ詰なるゆれで紋付の札を人

よろしさればうけさせ申しの忽花ノハ中郎以下まで其客の名を知らさる事も桐方の丸を打文なりて抑全盛以頃の内証に宿せりしを記すにこ揉の床の中なく松花未の手跡にまとへ茶を出す身いとかしらぬ所を系花を挿まいらするを能とうべして此角傳え蔵の深窓に傳れし暇に寄意風情を添ふしかどもこれを誇るまじく千金を惜まんや拝文全盛の衣裳お姑ふ亮の仕着金拝打ちまゐらす層の結所と俟ちんはらざして一き大尽の妻にまへ其此祥に鎮ると雖も

噂に通ふいつし先握りの確言あれハ客を手分けにあぜまん人ば遊宴の中に却て本意と云る事多し今古夫れ等はなけれども人丸よりいも揃ひの調係を備ふる夜具の結構なにはの品出度花街の深は此一門もこれ一家の交際を知るべし

夜舗之花 附見世之辞

丈偶門ハ茉莉花のごとし此花芬香甚だ日中に匂挽上手深くまひて媚鼓の淫花婦人の嬌首なりさハ売物に花をかける吉原の鋪つたハ客へ文の散茶今の盈三正英子養要を見しける

若色を競ひ艶容を開し兎角喜多川の浮絃に元見の入すり多くそれが中にお職揃しておらが多く坐敷の隣席を明ながら格子に嘆く新造の若きぬしと風月なりけ渡ち移し座に客の吟ふ中にる揚銭寝し本よもくるまぬ何様は指つて宿ろうし菓子ありて内しの芸者もなく関てうつり美男の容姿鬼なりもありければ粋客浪子に因なりけるぞ伎倆をもりて佳士を促るこそ懸引なり。床を侍致に臭気香立即ち清く然るには猶かんなれば女郎と致をさすが斗方香に嘆き手を落ひて何ゆゑ酒をかくし。揚つまと取く書きたいと覗でつれる女郎あり是に度曲の座一時ゆるく変に悪じて居るをこうお出来あり。頭を手を持がし。顔を穿ちさし入まで折々の宵有情りよる天下とつくる枕の情そ。たはしての思ひを内に合せ。紛々の約束ゞひし互ひし。帯解き衣裳を分かち来る。愁眉の話ひなやめる両続の事へなるかぎ。かゝる女郎ハたゞめのかざさしゝる手もなく別席に待け。一番は客と思ふの気従ひ鋪にあつてあのおのゝこと客を寄せしなる。頭を中で揚るに来て客の外稀の新造あへなりし

唄しうたして節を合すりその小唄人あるは、緒等算まるハ重宝見乃惜きぬすまゝの和合雪しかも升解かる何様なり。頭を飾りん中元紙ね情ぎるかうし。舗にあるも是は情の餞ありて飯費子弟の給にはらく筆惜を何に宗をいふよ手当てはあらかれ色男に未練なく。確実にとりて八十石今手取の秀才あるは鬼灯の袖を包し。あるハ能人形の嗜とあり。あるハ嵐をま手にとりて世を遁れ余分な解けに。又中に女郎にあらずとなく、その数ふれバ彼が傍ありて客の自由になるものなり。其外揚げに若衆とらめて又傾城揃ひて風流を好むもあり浄瑠璃に高音の情けを。女乃類ともこのちからなるといふ。色の文とこるのさま八葉つゞくもありけれど猶ちる流石に持もて稽古に鍛ふ数ものとき味ヶあらじ。掛呼ぶ人世といへるハ元吉原にありてはし明暦年中今のよし京に移りて。爰の気性をと家或る乃見世と云ひしくろ元みは是に至るハそれの衣類の唄に。ろうの中の二分都風に吹のぎりへなぞりおりやとのぞのうらへなびくあはすらよ

唄とも歌ともまたずかゝとのほゝしとも
唐音ハ唄やうすく口つきのとゝひく字ふなれうし
ゆゑ又九段の渓寺秋の明月の深ゝ悟ひと安永
とて今小冊ありそが中ふ記せしハ其比尺八もと
なりて又おぼえしゐる曲をしるすこと左の
ウホウ、ホウエヤエウホフ、ホウエヤエウ、
ホウ ホウエヤホ、ウホウエエヤリヒ上、下略
是を三隣総のよまく聞し。おもむきハ尺八の元より
せてぶきしいかうち吹音をなるくかの鏡をやるとぞ
きハ黄鐘の調子ニして陽音なれバ宗鈴の初よ

是をひくに俗よりも悪き勝ぬのみやあるべし

中ち所、作文ちりく記

漢書ニ八遊女街をを御衛しけり。赤茶梅花と梅
て花を植東とを育し。花を東乃咲柳ならと
ぞ京の今咲ちらとを花と植る八安原之年ちり和て
年ことあふ深し出来し。そ読ほし毎の中のまき開海の
寛永ふ中の町の夕景色ハえらりふ隆となりぬ
以いたの古図ち門戸ハなのみの名のえ集ハ衆鳥
目ぞのあまも出り。極まりて夜桜の其ふうりれ
後宮の紀子ハ。巫山の神女がまゝかと寄る夕べ

白小見えのまつり八本をまた人の面々まし也かと。おすゝめよけり
なし由いなくなで掛ゑうりとぶ小。彼ちなるけとぞ風
情、宮しくし春の日の宵一刻の價千金として出る揚
金の岸しやりよなし

偶然の花をよめる
ほくしもとおろかさてしあを

このとの所青 り小川後家の花　松葉屋 瀬川
風自ぶ鉄はなはつしへ花の名　扇屋 瀧川
ちりうんでさぬる信のさらうで小盃　同 花扇
なる人ししるあるお花の諸みつだ　同 住のえ
花の清ま濡る人やおつての所　ぎこや 廣野

秋ここにくて燈まきお 金いの本 やる住　大文字屋 一もと
遊本自の他の出ぶ何きらる所　是屋 月 団

毎月 各記

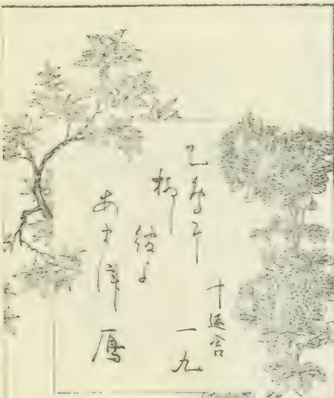
みる客る毎月の板の中の所よ続ある梳瓦家の家
東星のめい瀧まぶ盃と紀有く似よりなる八正の
ぞちよ。中るでを居るねてる金玉の宝かいかへい
位ぶるやきいうし情のゆく人のゆ人を使の波しがある身
月の上旬めまして後ぶ福の他ちとしてまで母を
を通下ら年屋毎きをぞのきりち物を見て
也やしよする寂寞な言ふ得ちいうつて彼ふ花よ居るの

繍工ハ色々の糸を撰て今ハ五采美麗の色を綵
にして側にならべ是を用ひて画中の絵を
一景を写す其の筆毎に五色の絵冊子とはした
るハ見ごとに其口上にも有るハ扇として又ハ茶洞
ほどに知るの興ならしむ十景の筆帝の緒を結
集し今其草紙の物語をあつめ千金をいじ
見わたす所を此廓の清牛と改て八景の内一
部を撰み日々宝暦の外ならで然とも見
せしを許て終様を自著せしむ於此世に能
中なる春の流し吹く戯れ初めてあらたまる

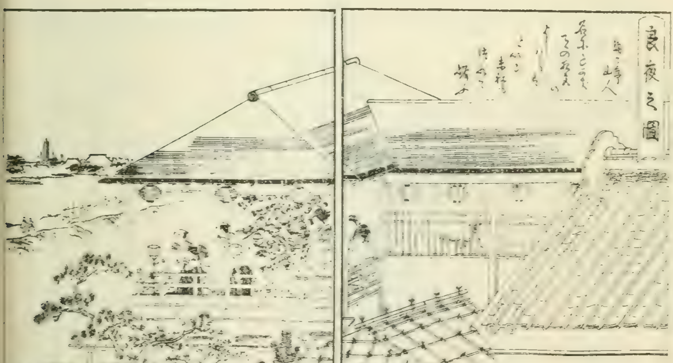
体を逐頌しき詩文此の中に十五日を寄に於
未い霊地に有て八恵ん俗祝の朝夕に首位
筋也しなりし時旭映に光が照て惟を子乃尊
ら採などまうつしせめしと其終り稜し兆して
頼に家日和来し営稀なし年々の霊像ありり
十五ならバ八中の所に体竹を形改し打思ひ
是ぞと居して見わ入林とはじ初に信を又つる
ぬる日雨紛るるとこるハ往昔千宗の御入来ひく
勅諚せしよりて其稲とあらしむ此物巻に
於て云々編に祈る年八月箱参式

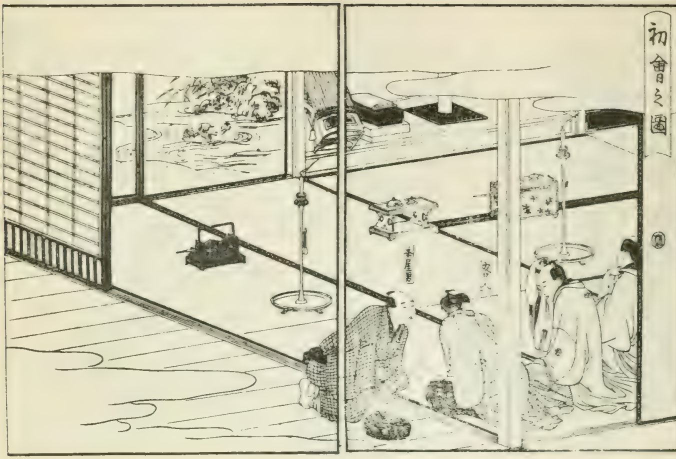
おこなり比て緋物ふり何かあそ此を事速落し恩
綿おかし此之に帳に祈忠仁和再すあり写して拍
手倡つ不振を拙さるてのし倡ふ倡好せられ余
候の猜乱笑絲混じ安毎す
浦山きよゆきかくし

青楼年中行事上之巻終

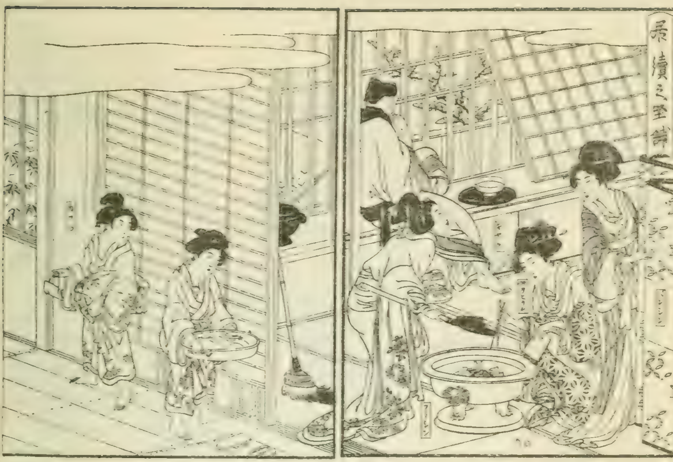



八朔之圖


良夜之圖

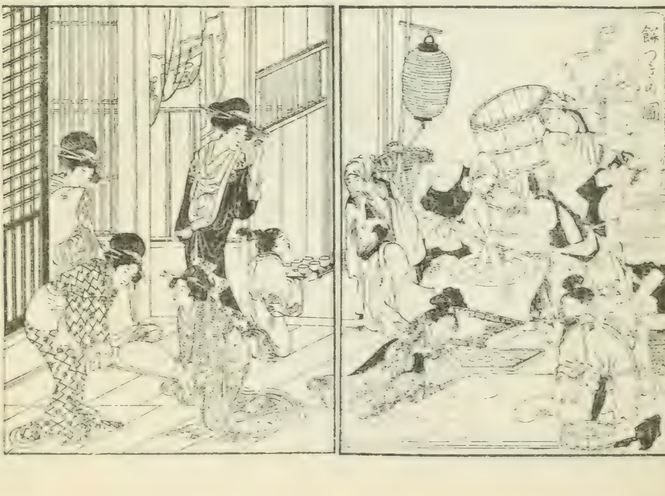

初會之圖


押客之堅舖




後朝きぬの圖


倡家之法式


餅つきの圖





八朔之説

曲中に名ある家名あり。豊臣秀吉公ご[illegible]の月らに
日本の事へ下り来りて参らせし。伊勢吉(?)信濃の[illegible]
持参ありしに、山屋とも名つけ給ひし。一寸とも無ハ
杖[illegible]事殿の見事なりしハ左へ[illegible]にや、宿の稀ハ依
まん所の下は渓など元祖とし、大将子様ハ必おとしやの
お馬とも参りて、年々年中八兵ハ厚恩一家法[illegible]
風なし山本屋の御山をもてなし物あ、やと[illegible]
周通の名所を倡女のかはりて[illegible]
たやらハ元禄の比、江戸町巴屋源右衛門の高橋
といへる全盛遣を羽目(?)あらんにより八朔後日の
白無垢にて、ぞくぞかりせし何某の仲の町へ出(?)かし
ゆへ、その精らか[illegible]の体ふて。其頃は八朔に[illegible]その
妻の装ひ出せる粧ひ窓に[illegible]流し
其花の日とふくの風情に[illegible]の入
はじめしとぞ。高橋の風流と[illegible]出せしに
とて日を飾て八朔ハ[illegible]指を
まらもおのづから[illegible]て大全に紀しされど全
け[illegible]の説あれども其時の流行唄にその
日[illegible]

免しらぬごとなとしろは八時なきいろを
取る事。伊達風流なる角濡子の羽折ゑ柄の
大小など。總て流行の華美ふ気く馬も白を
以て候士ての表異を[illegible]。晩さし小気
おの[illegible]と[illegible]しより[illegible]
八朔ハ白帷子を礼服となすを[illegible]の[illegible]
倡妓の[illegible]白衣を着するが[illegible]の[illegible]
賞翫せられしより。格例となりて。今
[illegible]毎年八朔の[illegible]
[illegible]をかざん[illegible]勢の[illegible]

[illegible]も[illegible]伊の[illegible]
[illegible]
[illegible]

月見[illegible]

[illegible]

氏[illegible]の造物等美麗を尽し[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]良夜の[illegible]
詩ニ所云

紵紋[illegible]開如沸　月光[illegible]
[illegible]　[illegible]
東家西家有[illegible]　[illegible]

豹胎開鋏鯉氷脆　烏欖[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
なれし中にて。[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

座敷の内ぎれゐして客待ぞ本間に入ても志ばらくハ
浮世噺にすごし扨ていふも口書画などまじく様ゝ入
わけて急に本間に入を重ひつゝも親く待ま
体ハ之で先方に何と思ひしもしれでかりし歎きて
別にその客の気を喜ばせ公をと奈楽の宴
其後初会の辨ありしハ手際を学ぶに遑なし。
その気を得意に無し左右ともに其ども
遭るハ真に座乞一個の才とやりなし

居続の座ノ浦

筆を採バものゝも楽器をとれバ音をかなでてんと
おりに後朝のきぬくゝにつゝとゝんで八居続せんことゝ
思ふ八向ふ所の佳境にいたりて心かゝさるゝに解
来るおりしも兼好法師のいはし先おかりしさればや色
情の内に遍く人情の私ありて亡に傀儡ながら
中へに帰路を忘れて居続の旅をおろし深浮に
帳を十分あげる座の海にまろ舟を浮かべゐて
妓に記出る客の新なから盟に移てまたく
新とろ雨ぶりの音八志げけく湯とふれる兎児し
い降ハ廊下中にかたてゝるし此時や待にかりゝる
小鶴の葉泡をかきまし。たゞいろ〳〵作るに

売りかれて丁児の猪を迹し弄の茶屋の細根
大根紫京菜等の物ぼし芝宮茶碗に掛ける胡
广揚の附焼八儀よ座舗のおくり物所もたまで
備らて客へ投む漬や茶づけの料に来る室に
しておのづから儀寧なるまきくにそくおなく中部
おハらじく強え若者八控ん三の茶屋き至
引そく遊女屋搬座八離形縦客の侶従として
帰里の新の清まる所柳枝にかゝるとぞけき
中る手の私らハ新造の事を古ま室敷座にけらる
かる推の寅子は様子のあくぬ状態の志れまいみな
売の気にかゝりて夕座し物楽にひゞけて出る折ふた
あう八おらおお妓に何会て喜が座受不分いをとし
来り日に来る茶屋の男八桶を抱て中り飯酒に
急ぎて人の座をたさく卜巫つとまり嫁女と文出
の結来をさして夫八出向ふにまゐる話店に移る〳〵
さしとそらして夫し従室下ざる動て清物に整に
はくら座鋪へ出して目翻と新更天宗の覚え萬
なる鄰を喜欝ふさして運ぶに両を新ふかゐゞに八
ぎのきものらぎられまて気を取ぶ居続あれべ余藤を
まなばし親ぐべきとはち月の果るとおもし。月八まるの

裁るに如何なる心くみにておはのし

閨房の清浄

[illegible]

女郎の[illegible]人[illegible]の[illegible]をつのれし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人の心を[illegible]て[illegible]遠[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おもひての偶像ありて八千[illegible]

[illegible]金の利を得し主家の[illegible]するはいとおかし

[illegible]容の堅[illegible]

男女の情[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いへるが如く[illegible]あり。されや偶数に[illegible]

人の邂逅にあはぬの全盛じやのおもしろさなれ
深て後の悲びのひと月のうちに限るべしこれらは
その色を探ていかぶし親の上をかぎりなきよそあるに
うちの娘ほそれもいふなくもあらずそれがあまりて
けち骨に深くなり行ますに。女郎らそれの情を案じ
客も女郎の苦界を察し。女郎何段かの切情に
親の情も知恵もおしえず近智ものにちかひ
ひきよらへ今は潮に三年につくす。肉親兄を輸るも無我
情にしそかく家親におもわかいに理はくめず金の
入る事は縁なる女郎に好る客の永く通ひし

例へばかくて年々の事にして。互に故障出来り
きかなしもおりに。何の訳なくさきき神の十八
招き恐しても他におわりゆくものなれば速も末の
意趣なれ女は禁かそて論すりはおのれはぬなら別と位を
こし何事の定まれる掟のなしたればぬ身なれ
もら紹介のおもむかぬも清の縁来とし。右間に
にぎて傍出来を筆入ても何かさ扱子を見せ開ら
るゝをこおくるもの相手の家の規矩ものごとなき
為かる弱き気持の耻ばかりも嫌ひつるあまたハそとおし
かしの西方ハ通ふ神の徳宣なれど侍る事歌ん月くへ

やる為とおまかせるよのまかせ来春演の日は格子
の内へ出席にとらし色恋の形ぶりおしきそかくし
場にいる情ぶかしとやけに関係して鼓のそろひまくるに
くれかゝまへ約束せし衣裳紋を持ち日へ参りしゝ今
時に本仲の丁へ風流をおこしてはずをいひせこ
絹で出す事ハ表向の噂をとらまけ此客が勘定代の
見分てもへぬとかゝる果に名代の客にもと同情
のおはしく夜具を出きるなどふなかりければ女郎
たつ本へ合へ事の言うく家業も手につかで
ておろ恋路に親を数死すなりゆく十日済に妓女は

色荒して、情態忽求衣、敵さて金尽ぬれば京歎寒し
て熱殿も虚空に附を設るの所にして偈家の立得
伴弁へて悔るなく慎むべきの

一九なしつきや

青樓
繪抄 年中行事 大尾

十返舎一九編輯

青楼絵抄 年中行事後編

全部二冊近刻

此書ハ今初編ニ漏たる元日内証の佳式宝引
七ッ揃ひ表道中をはじめ初午雛祭あるへめでたき句
紫玉の画写き系七夕草市盆洗日留里
光の節会二季の彼岸菊の節句玄猪の
祝式ほか[illegible]
布袋絵の宝出し[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
悉く追加せるものなりし

於青楼仲街濱野屋
集道之楼上

十返舎一九撰

江戸絵師

喜多川舎
紫屋歌麿筆

校合門人 喜久麿 秀麿 行麿

彫刻 藤一宗

摺工 霊松堂 藤右衛門

享和四歳甲子蒼陽発兌

書房 東都日本橋通油町 上総屋忠助寿梓



唐歌



歌麿



歌麿



麿　歌





歌麿



歌麿





歌麿





歌麿



附 歌



歌麿



歌麿



清長





歌麿





歌麿



脫 獄



歌麿



榮之



栄之



榮之



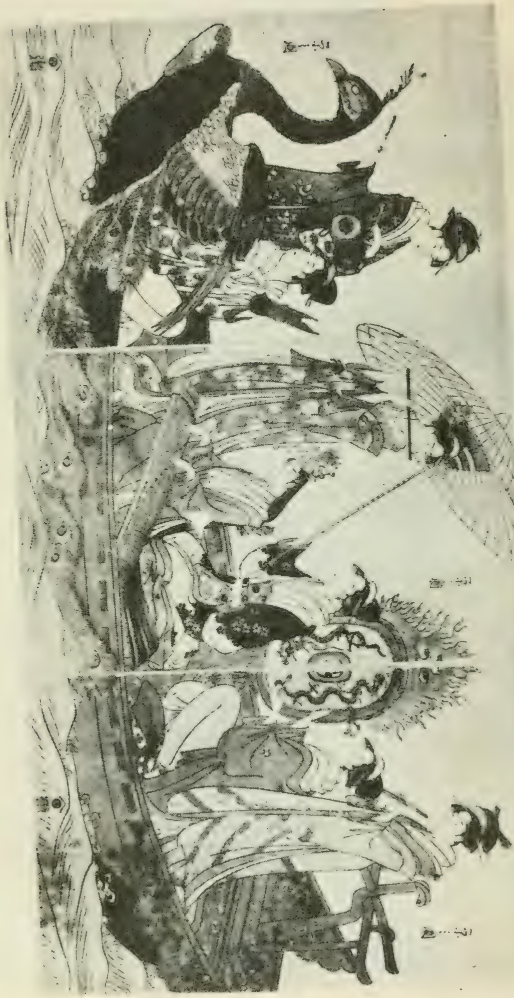
之 茶







之參



茶之



栄之





榮之



榮之



榮之



榮之



茶之



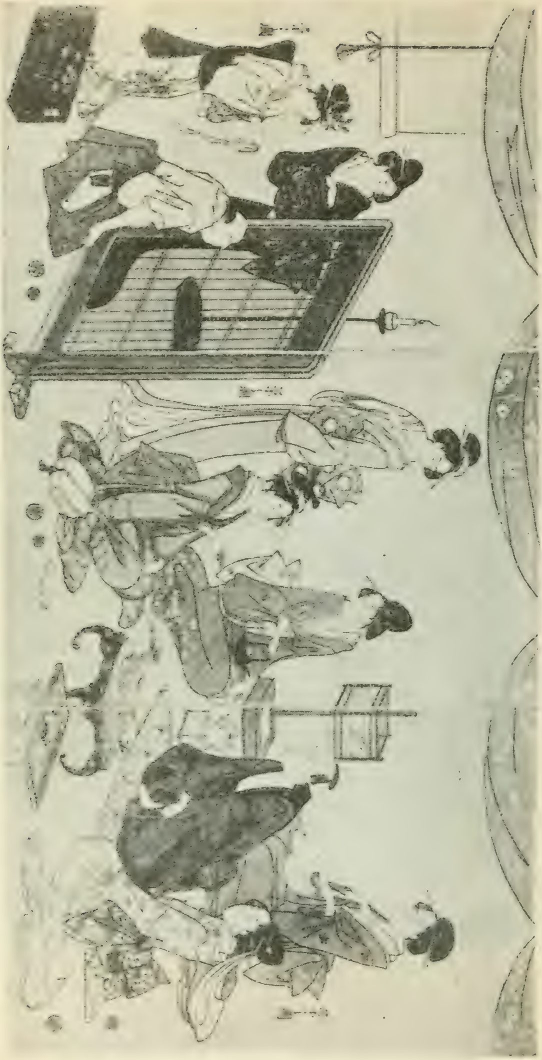
之 茶



榮之



榮之



栄之



榮之



榮昌



昌榮



榮昌



榮 昌

繪本家賀御伽

繪本家賀御伽序

祖父は山へ柴かりに婆は河へ洗濯しにゆきし古風のむかしあるし當世は炭清香の洗ひ粉にみがきたてたる丸髷君なりあね様の画箕てんとつんあつのちいもはだしで走り坊の仕合むかしきいろを繪にあらはし栗柯亭まり狂歌そのぞみて幼童の壽となさしむ發行家乃れい度量を乃お伽となるきりしとおもふより梓にちりばめおて商口お買なさるもお買なさん事やと謹で申し

辛未の秋

書林　赤松閣











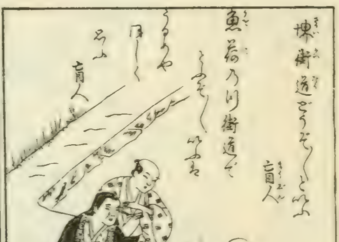
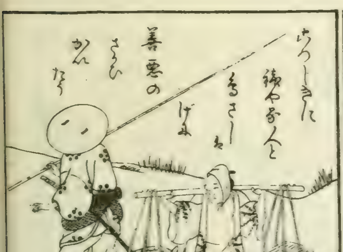

東祇園


紙細工の人形

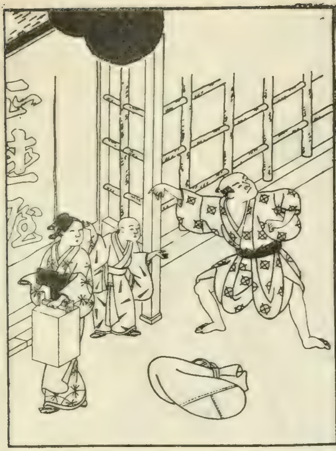



天満宮境内












道頓堀揚枝屋




手車賣

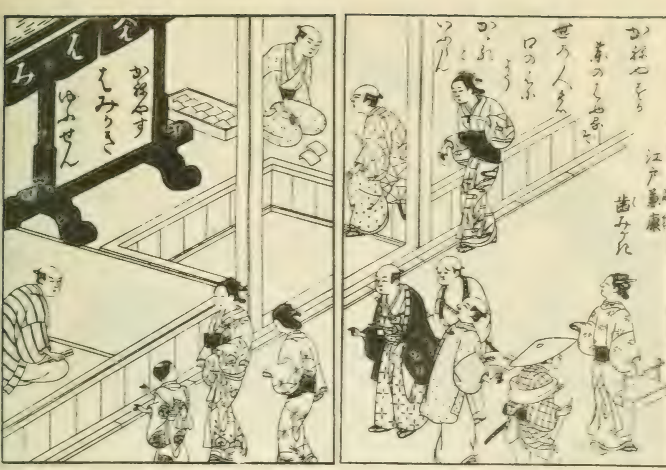


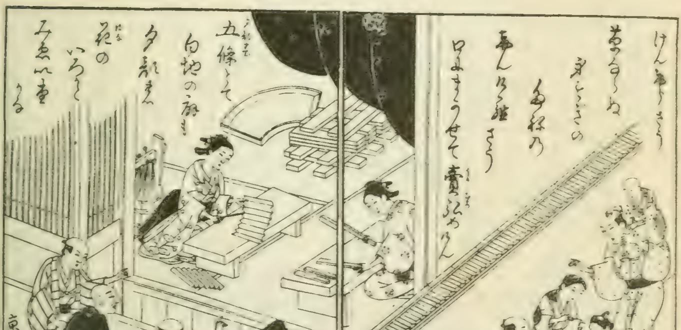







黒焼所

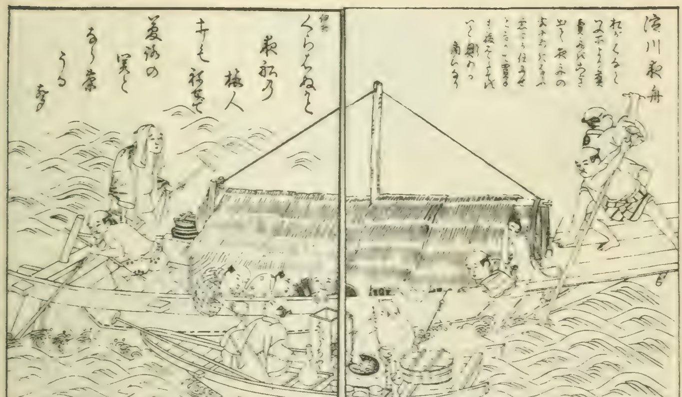





御菓子所
都鳥
虎屋の


江戸両国橋花火


和中散
ぜさい
梅木村
江州梅木村
和中散


淀川夜舟


難波村干瓢賣の
一寸男


天王寺
米花
齒醫者


川竹の



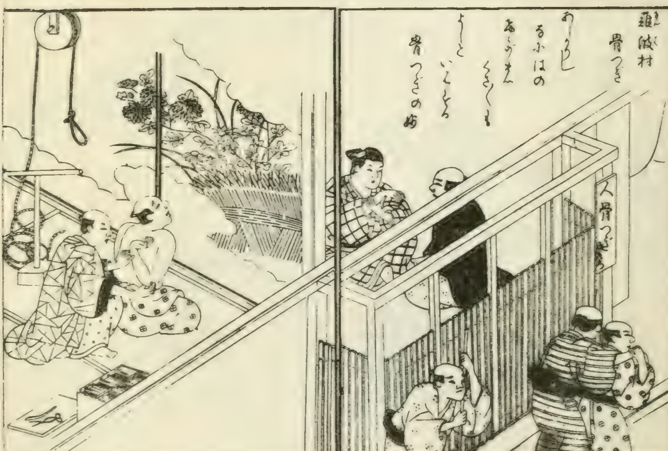

長坂
大石





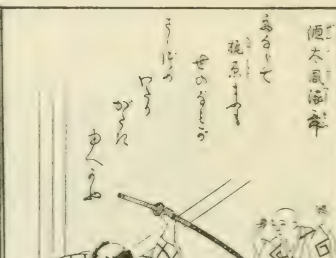

酒中花


難波橋
彫物師


難波村
骨つぎ


うゐらう
相州
小田原
外良








蛇遣ひ


新町東口


道頓堀十二車
月の数十二の車



狂歌　栗柯亭木端

畫工　松翠軒長谷川光信

彫工　藤村嘉平次

寛延五壬申歳正月吉日

江戸日本橋三丁目　吉文字屋次郎兵衛

京寺町松原下ル　菊屋喜兵衛

大坂船町　千種屋新右衛門

繪本御伽鏡

繪本御伽品鏡上

はなし風ふ乗しなかゆし
名所よしあしれ甚さきくと
繪かきは浮世長谷川氏乃
筆すさみゆゑん弁して趣を
繪れをうつ夜狂哥ふ詠わし
梓ふちりまん擂ゝ繁栄の

みちしる清ゑ詠めさりは御
おれ川はうまて如きはりし
御慰めとおなりなん以て
全部三冊ふしで御伽
品鏡と名付ることのなし

狂哥　大坂雑喉町　鯛屋貞柳

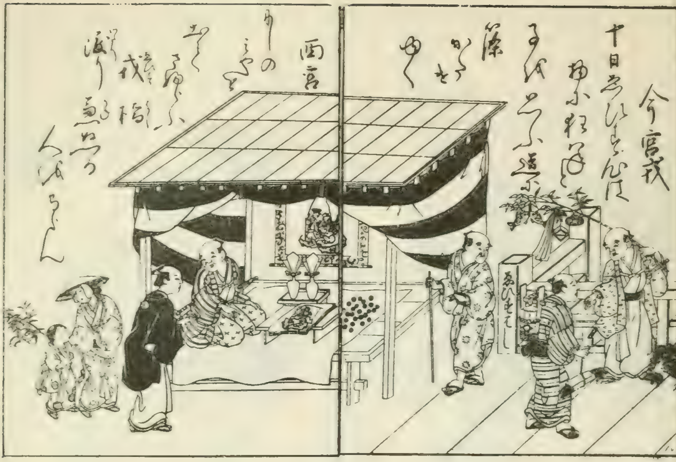



萬歳楽






大黒舞


今宮戎
西宮


六十六部



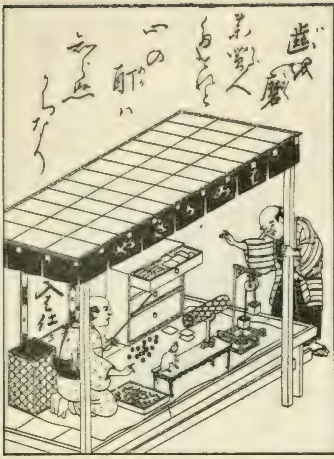










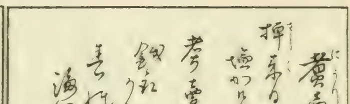


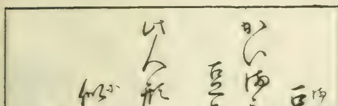















蓬艾賣


傀儡師






もちや


太平記












螢賣


京屋




高津の景


神子


返魂丹

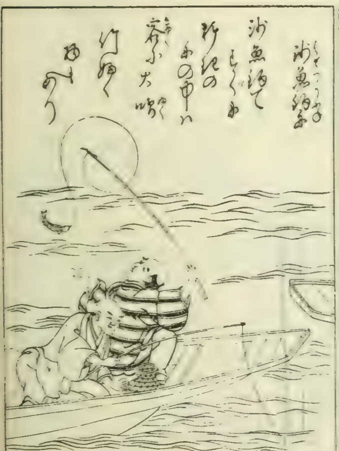













牡蠣賣


百日行人




琉球芋










親子奴


天満飴賣




伊勢両宮
さいく人

大坂車町
作者繪師 柳翠軒 長谷川光信
板本師 内久宝寺町 村上源鶯
享保十五龍戌孟春
書林 天満九町目 紀伊國屋宇兵衛

百人女郎品定(しなさだめ)

絵草紙(ゑさうし)

西川筆

序

禁庭に百官百寮の座敷
わかちあるもこれより百数の大宮
人しは訓はいかんと募女しに百
の媚ありて貴妃を有替の花
也蓉しい。たとへ唐土花もろく人
太液の芙蓉未央の柳。梨の花海
棠の花の粧ふ華いはしる容をかし
かるはなし。我日の本にはかく女の
風情もよくしく。かかる雲の上の
そとくかんざしをまてれい。おのそかに
かるふれ候わるが。これより賤の
めのこにくがり紡績をいとなむ民の
家の下司まで。傾国の女の色を傍
まるか道しにはおのづから女職の業小袖
比丘尼茶屋の女まで其の事のしくなく。
西川氏が筆削をうけて。古今女中の
絵姿草とかかりて東紙揃のり。こう
ふのみとふはあれど。元百品を准じかく
よく此度百人女郎と外題を。改めよ
銅の花のほまれなるかたらんは世
しかも揃く於ける所なるべし

かりし給る

享保八ッの卯の弥生揃ゆるし
花の盛まで

八文字
自笑謹序

大和画師
西川祐信

百人女郎上之巻　目録

○女帝

人皇十五代神功皇后を始めとす。もつともこの皇后は即位はなし。胎中の御子応神天皇にかはり摂政し給へ。三十四代推古天皇即位の始めなり。聖徳太子摂政し給へども女帝の中に称す也

○后

むかしは上下ともに妻といふ。異国にては漢の高祖より皇后といふ。日本にはむかしの神功皇后とはいへり。太子なれどもまた母は中宮といふ。下ざまよりいふぞといへば日本人皇の始め神武天皇。后妃としての周の成王より、これをいふ。中宮皇后ともに天子の妻なり也

○姫宮

天子の姉妹并に院の御子の御女を皇女とも姫宮とも申也。内親王は宣下なき家ならざる也。内親王は続日本紀に云、文武天皇大宝元年中に一品より四品迄の内親王の位階相当親王に同じ。姫宮とハ天子の孫彦までを云也。その末ぐハつゞれ女中分也

○斎宮

伊勢ハ斎宮、加茂ハ斎院也。人皇十二代の帝垂仁天皇倭姫を伊勢の斎とし給ふ。延喜式第五に天皇即位のはじめ未嫁の姫宮を選び、先づ野宮にして御禊して伊勢へまゐらせらる。加茂ハ人皇五十二代嵯峨天皇御宇に今宮の皇女をもて初めてまゐらす。伊勢ハ清和天皇の御時左京業平斎宮に通はれしより絶し也。加茂ハ人皇八十三代土御門院元久元年よりたえしとかや。それより後ハいつも此儀なし

○尼御前

人皇四十八代称徳天皇を始め奉る。孝謙帝の御祚なりけるを尼となり給ふ。是比丘尼御前といひ奉りけるより始る。摂政太政大臣の後室二位の尼。遍照心院を建て住み給ふ。是を尼寺といふ。天子の御母御剃髪の女院紫宮とも皆尼御前といふ。今の寺々御喜捏所の住持の尼を何れも御前と云ふ

○内侍

女官の司也。長橋局勾当内侍とよばるゝを侍従と云。従三位に叙せらるゝ事あり

○典

是ハ内侍の次の官也大かたハ公卿の御女也

○おとな

内侍典侍の外、役人の女中なり

○釆女

天子の陪膳をする也。古今かなにいへる事の大君様ハ橘乃諸兄としいて。陸奥へ下りけれバ釆女土器とりて。浅香山かげさへ見ゆる山乃井のあさくハ人を思ふものかハと読て。やうやく諸兄公つきて国の守へしばやかまへりうるや又天の帝の御時。釆女某なと云者ありて猿沢乃池に身を投ける。これを人丸がわぎもこがねくたれ髪を猿沢の池の玉もと見るぞかなしと詠じたまへといへり

○女孺

めのわらハむかしハ内侍の下ばたらきに百人ばかり也。続日本紀に宝亀三年正月に従四位水内郡人女孺となる是はじめとや

○半

いはゆるの使ひして、かくれなき是がひきとらへはちりけんなり。延喜一年おなしところなりはしむる也。和泉式部に本にもあり。竹おもわぬハが身をうけしこゝろあれへきられ也よろはしの事なるえらうかたなき也

○公卿室

摂政関白乃妻を北の政所といふ。是にならひらべて大臣公卿の妻を北の方といふ也。御台所女官の飲食を司る也。平人ハ往々なし。

是に准じて公卿の妻をもいへるなれハさうよぶ也。
将軍家ハ大名の列ゆへ同じくいふなり

○公卿女

まづハ小上﨟といひて二位三位の内侍を上
﨟といへり。今ハすべて公卿の女を皆小上
﨟といへるなり

○神職室

社家神主禰宜祝部氏人社人の別あり。
公家にもあらず地下也。武家にもあらず其神なり。
神社ハ其氏上との祖神なれバ子孫をバ政
道に侍るも下部ハ清浄にいたつて事ゆへ
氏人をして祭らしむ。出家の墓地をやるに
同じく其妻子ハ平人にかハらず。されども伊勢
八幡加茂のごときハ天子将軍家へ出る女房

も神職ハ釆女の例に同じき也

○神子

巫女ハ唐も日本も神を祭る女にて夫を
祝部といふ。五節のそハ倭舞の舞人也

○武家室

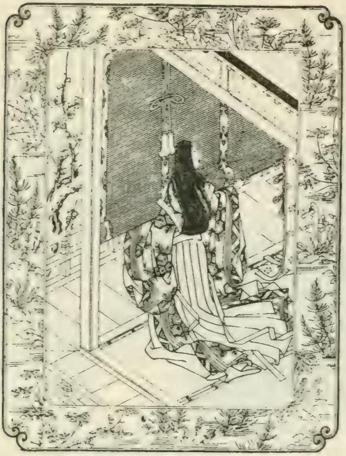
夫の位階にしたがひ和泉式部周防内侍の
ごとくいふべし

○大名女

父の官をもちゆ。夫を持てハ其位階による

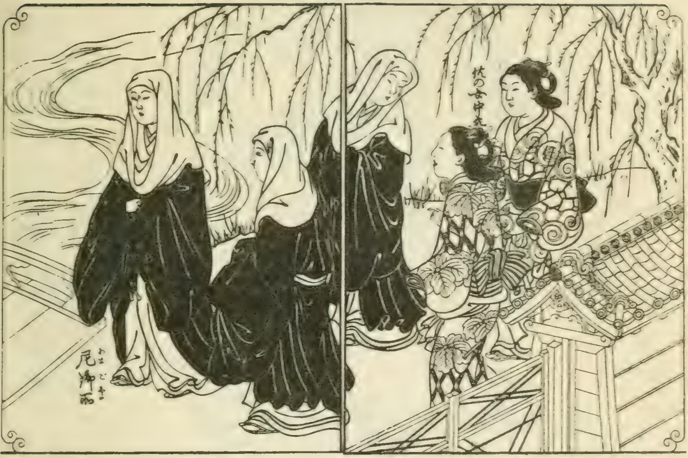
○国御前

諸侯ハ勅命によつて敷地分割するゆへに
妾を置てはなしもあり。本妻ハ義仲の巴
山吹を召はしけるもの也。其国の妾とかか
はしらして国御前といふ




典
おさへ


内侍

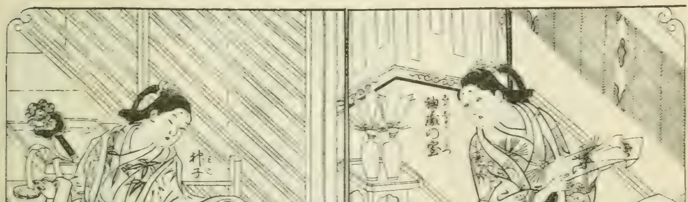




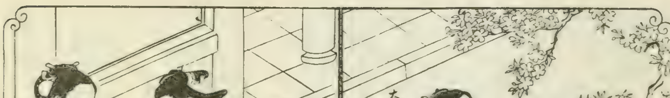

女中


女孺
采女

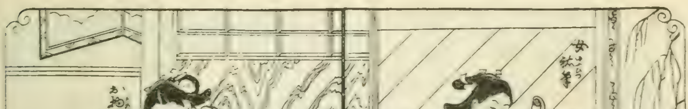





大名の姫君
武家の室




女へや


お物師


舞子
盲女


中居
こしもと
町人

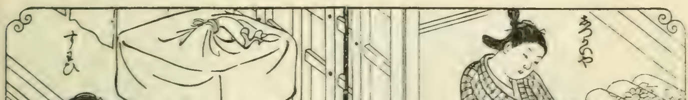

有徳人らの室


町人
中ほどの妻

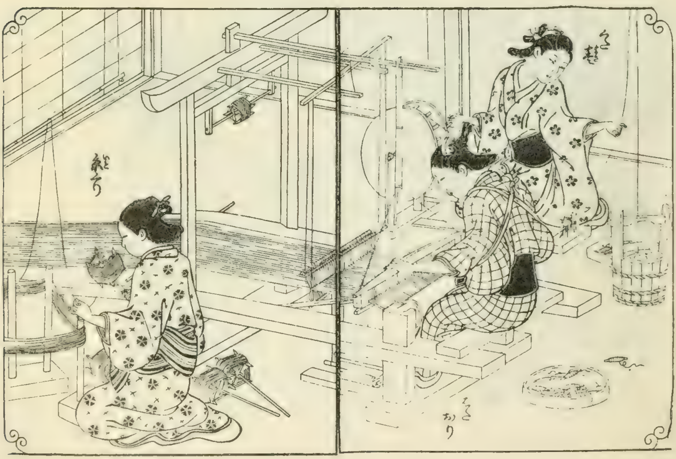

下女


組屋
扇屋



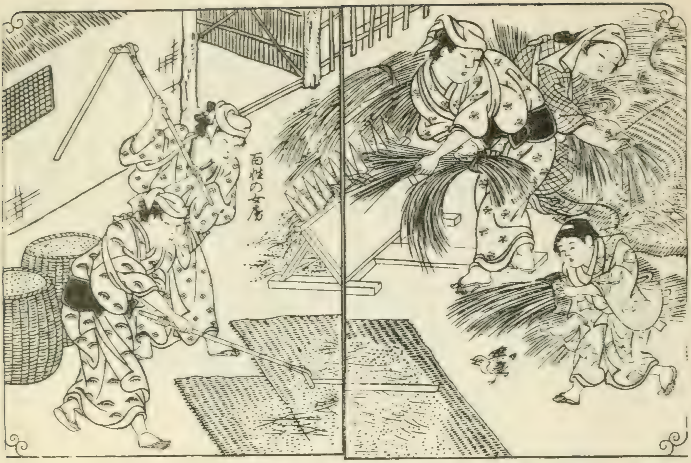







白川の石うり


大原の柴うり



○女俳諧　世に此道をたしなむ女多しされ
ども丹州かいばらのすて女近くは甚勤めべし
○女右筆　いづれ役所も有するなれども
なれども。すべて女の文字やはらかに。風情よくやさしき
○舞子　なまめかしきの御前の千歳わざ
乃おどりのくら義経は妾静が母磯の禅師なり
どの舞子も今の舞子の其の風なり
○機匠桑縄　人皇十四代仲哀天皇の御宇。
唐土より二人の女工をわたす。おやめいふあやは女
婦をとくれくめ里にて機織と称して。御衣
をまゐらせり女工のながれつたはれる也。君が代を
いはひて流もきよし白川石。矢背や太秦
乃業をなす。薪よ花をおろし。御代の豊
や秋のま(ま)よ穀一粒万倍し。みな百姓が女
ぞ内外御なめぐらたりけれど

上巻の軸

百人女郎下之巻　目録

○三ヶ津色里始

世に傾国けいせいといへど。おていふ口の中すみ
とひなやむも酒つくす理義はわきまへ給ふ所
天竺震旦我朝ともにいにしへより五国に
ある神代よりも神風の道をみちびく其の
風情たる和ぐ目の其の風俗とうやされど
京江戸大坂三ヶ津を此道の上品と定
むも都ある古しき書の第一京を始とす。天
正の末の頃。原三郎林又市郎といふ
頃人に許容をうけ則柳の馬場二条の北
に傾城町を開し後に六条西洞院にうつり
猶されのちよりけるは後寛永年中に今の
朱雀野に所を移し給ひしが。昔のちなみに

りつく。今に至新屋敷柳町といひ伝ふる
なり。其ときの原氏は今の嶋原上の町
西南角桔梗屋八左衛門が祖也。又林氏は
今の下の町西南角。蔦屋八右衛門屋敷
その祖也。林氏は寛文年中に大坂へ引越
今の大坂新町扇屋是なり。江戸は昔
のこと田氏彼土地をひらき移し初り
清教先生て何某多かりしが。中にも山下氏
なり。此道の祖也。難波津新町は昔より
繁華にて大湊にして諸方に色町多かりしが
寛永の末正保のはじめ時は。ひとつ所に
あつめて瓢箪町となりぬ。則ち本村や
又二番町 瓢箪町これなり 佐渡嶋の新右衛門町
越後町金左衛門町吉原町これなりき其

外六十六国に色里数多ありし之
ども。并にそれへせい町と経る所のしれ
ぬ。よくまし泉州堺の乳守ちうしよ
高洲。和州の木辻鳴川。伏
見の撞木町泥町。大津は柴屋町。
越前三国。敦賀の六所。西国筋
てはのくは播磨の室。同国新舞の
姫路や又鹿嶋町。備後の鞆。同じく宮
島。備中の宮内。安芸の宮島の新
町。下の関いなり町。長崎の丸山町。
此外国々所々遊女は多しといへども。
皆色里なくてはならず。強くの外
位かまくなれども。土地のならひ風俗
いろくある様ハ。おのづから家々ある







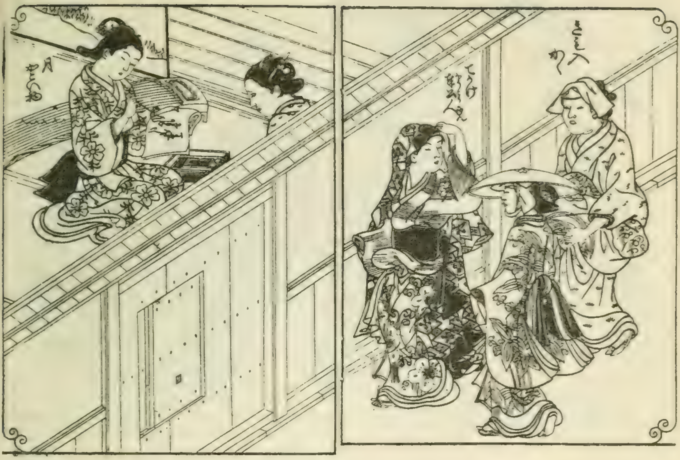







大坂新町
七夕の立花


月ノ位




















小湯女















○陰子の室　一通り人まじハ何世渡世して。め宴席にお
の家ハて朝暮わり人ちかぢ。わつかれ加茶て茶く
ほつくにしてゆりしれ二人の手髪枕しあてわつさよ
そ見て鏡むし。ゆかれの仕打稽師よ付をつぎおよ
何ふ月さのそつげつるな今んつのきみょ付てかれ
しのられよろて此出何ぶとひろかますこたん人の女と
作もし同じく勝作を此例りや事つくし
湯女　其の身は暮を作りて。至上入稿女
温泉をもつくいて体をしよう。温泉の湯女ハ
はじまるしつりや。そろそれ前く元の里

○紙漉　稀に言をかしいハ中きしく。元の稀やくは
むしろいりせぬとしむ神泉のつよかさ○稲らんやつり
極ゑのぐやさみくれ紛を稀むそのしくをるに一
心ハ中あれや二ハ屋くねまうこ下すぶ
ふまそて二枝乃まく読く夫気学の

ゑそえまのし　筆
下泰一流

享保八年卯正月吉日
京ふや町通せいぐわんじ下ル町
八文字屋八左衛門板

繪本常盤草

自序

[illegible]

浪華畫工文華堂西川祐信書

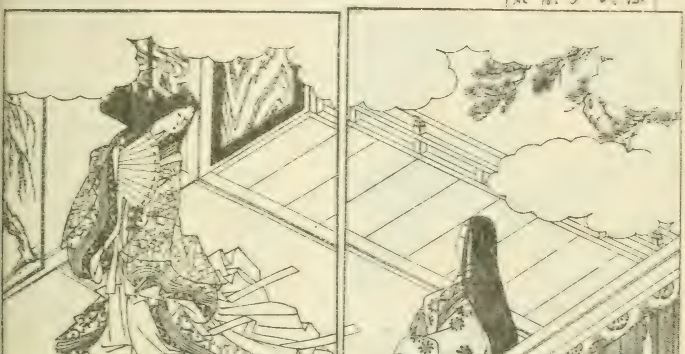
旹享保十五庚戌姑洗日



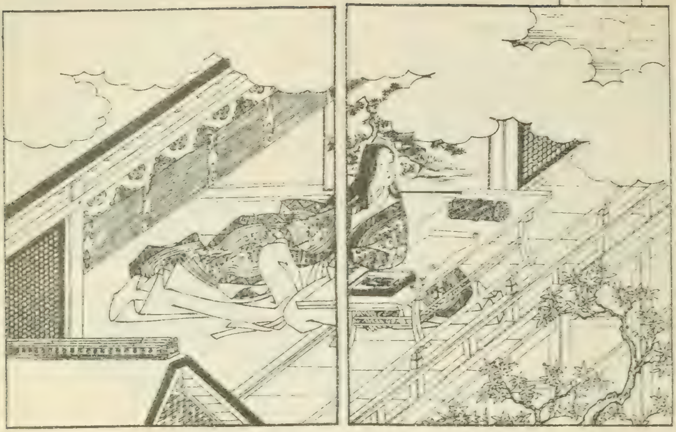
源氏桐壺更衣



源氏夕顔君



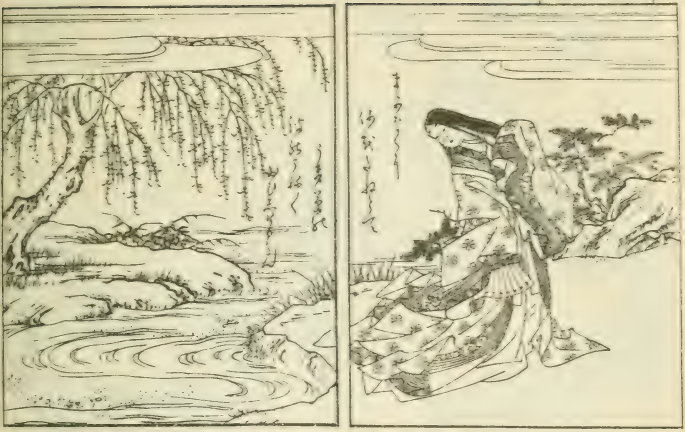
紫式部



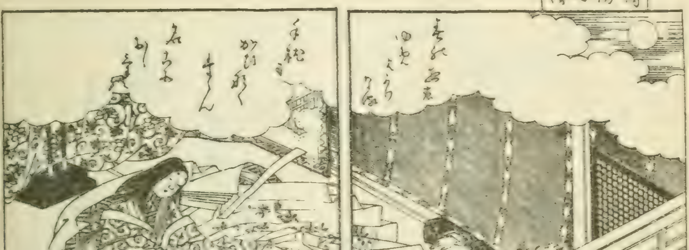
伊勢



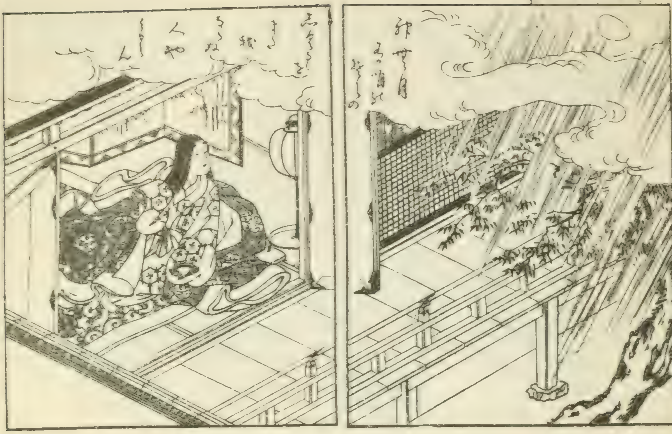
小野小町



周防内侍



赤染衛門



和泉式部



侍賢門院堀川



相模













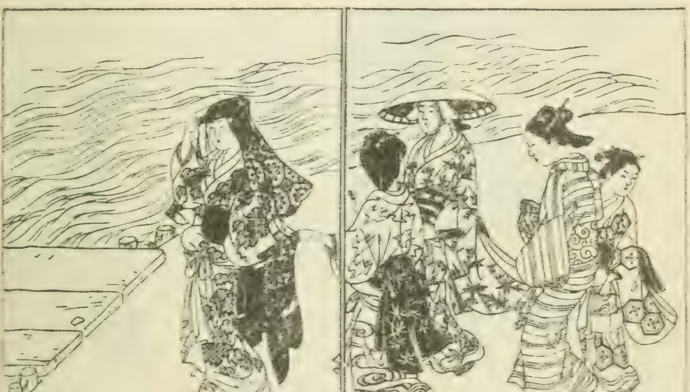


畫圖指南

[illegible]























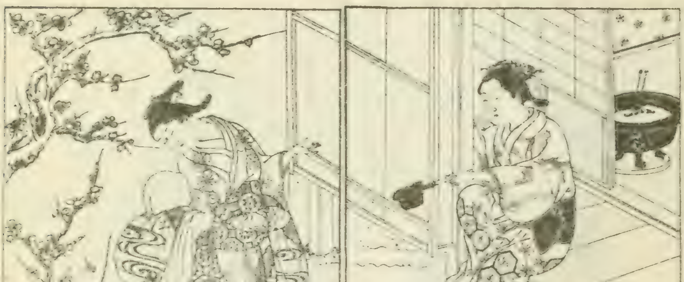












絵本常盤草



南世間めて風俗を画(ゑがく)ふいのふも安くしてうし
いしやのむ志うしも生写身小能さしまらひ了ろてやり
なりとむ本意をりはくらふかりしちわるとおかくふとも之
心得やくたうりべし衣裳のみて容体無体の肉(にく)
あるりし不かららをたはやのうせ只容躰のと本一
ふかんやうでかうしは骨肉の刻をうしろふ筆ある
しつおり心おすて骨肉をわすふるいつるやうふまい
之姿は骨ま露見ぬふ事ち衣裳は風流を专つとする
や彩色の仕様も可然やり物事審は分際お遠
うんを見て、閨さらかかおのつから其身は其位に叶
ふる様にふ本ふ者なり者也









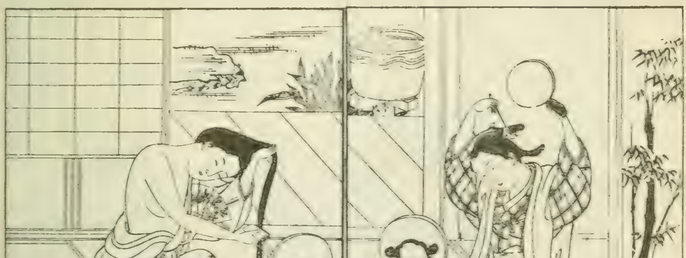


























作者畫工 京都 西川祐信

彫刻氏 大坂 藤村善右衛門

同 村上源右衛門

享保庚戌發行同十六年辛亥八月求出

書林 大坂小御堂前 毛利田庄太郎版

女中風俗艷鏡

序

見ぬ唐土のいさ志らず我日の本の
風俗ハ花乃都にまさるハなし其
風儀の是とする事ハ艶ありてたゞ
手からを自然にそなハれる都乃風儀
遠き浦〳〵嶋〳〵までも此風俗を見
ならひ学ならひ都を慕ふも宜なる
かな爰に西川祐信といひし其名
花洛にかくれなき倭画の達人ありて
ふちつまれし筆の跡も女中になむ
女中の髪かたち姿などそのまゝにうつせるか
おのく模写せしハ見るぞ春のめぐ
まれ贅物部の童までもつたへ養なかん
うし







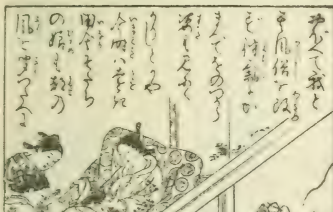

























風俗うつる粧
よせれつれし
女中の顔自
帰りてみづから
をしあげ給ひの
こそ出行まゐ
もてしれける
て都のふく
らしが
うつさなる



ゆきゝゆげする風いとおかしく出行振もかろんさるは
見くるしく又せ〇をつきかしまうりへつるすこやくなるも
みかゝし見ぐるしくあゆまるゝもそこ見よけるはされ
又と時計かゝるのへ形乃あんくおくく様々ゐるべし
惣ゝ作るやうふゐなるさつ給よしと心得るべし
襟付はうしろのするはさてらんまっぐってまるっしみゆるつろ
ころもく天枝まてまでゆるかどのさて襟のさわ
立るはさるが首を疵を隠しおくくにて見ぐ
るしもよりも柳腰といひつぐてそるまとしてたよ
いき風よし風とふるは見ぐるしきものなりおんぐれ

むかしの歯をみがきて付るなど黒くよくはやくたはく
もみなり歯さんの白くみげなるは女中の恋もさむる
そのせえゝろ付る紅は口のまわりよくねぐひてそのうゑ
うすく紅を付るがよし君様も御なる所も口紅あかうけり
まそくふは見ぐるしくもの葉末たらくくなりたるこみ
くいなる袖ひるさゐいと見ぐるし口はおほけても
あらぬ口に心をつけるべし役の内所とても口をとゞ
とがしきあるの事あるはけしからずいやらし口のあまり
さけひいぞ笑ふは見ぐるもし松しき所をはよそをみか
かくにもちかくし笑ふは志かりあらず常にゆるわ

かくし折かいと襟の中へ作りて笑ふは形を女めいて恐し
男の中に打まじりてひとり好ずりてむかしのかいさ仕君
の俤剃なと顔をあらひてあわぢまひつさしものは
見ぐるしくゆふくきものやよつておかず為にはよく
こゝろすゝて掌を月擦らしてもかくるのの事にいとふかくさて二
表の心ねんころよ立入男のかゝへみ女中もるは恋んでよ
おかへ女中ハまたに顔をうけめぐにゐかけるゝ世ハ三十
二相とて美人といふは樒也只合ゐ行事おもていくに
ゐかけ人へ自然と恐形をよりり猫猿とのべるるも
て縁尻とまるひの心が女中の肝門たるべし

作者 其磧

大和絵師 西川祐信

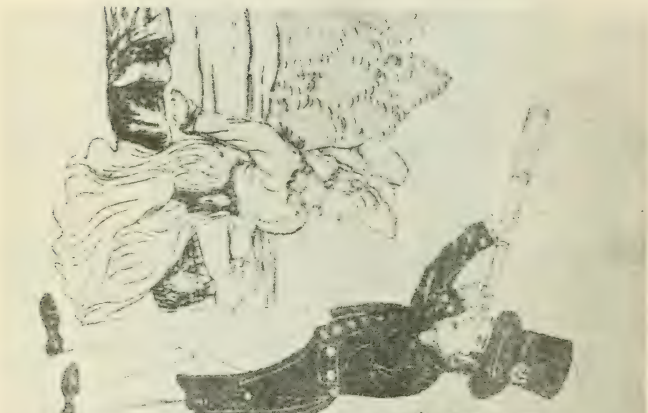
天明二壬寅年正月吉日

書林 京寺町通松原下ル町
菊屋喜兵衛板



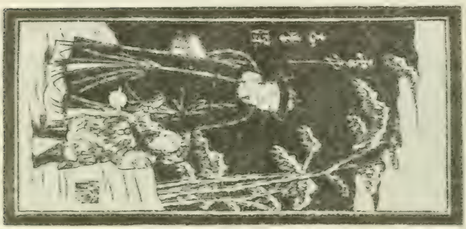

HOLLANDER


阿蘭陀人之図


阿蘭陀男女之図

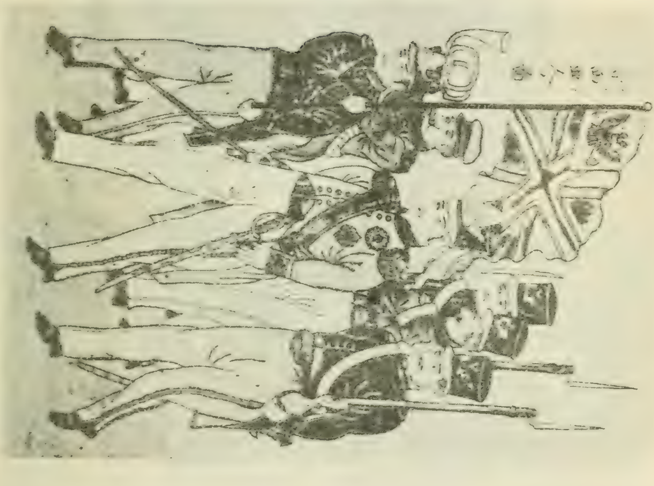


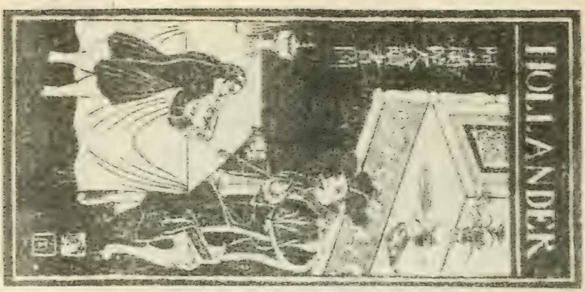


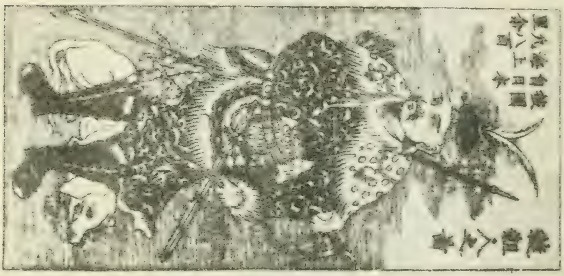









HOLLANDER







長崎繪



昭和四年六月廿七日印刷
昭和四年六月三十日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第三十卷
風俗圖繪集
（非賣品）

編輯兼發行者
印刷者
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者 石川貞吉

發行所
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全三十卷 書目一覽

第一卷 第二卷 西鶴名作集 上 下

〇好色一代男 〇好色二代男 〇西鶴諸國咄 〇近代艶隱者 〇好色一代女 〇本朝二十不孝 〇男色大鑑 〇懐硯 〇武道傳來記 〇日本永代藏 〇武家義理物語 〇新可笑記 〇本朝櫻陰比事 〇一目玉鉾 〇世間胸算用 〇西鶴置土産 〇織留 〇俗つれ〴〵 〇萬の文反古 〇名殘の友 〇好色五人女

第三卷 芭蕉全集（第廿四回配本濟）

正篇 〇俳句集 芭蕉句選・句選拾遺・補遺 〇連句集 俳諧集・補遺 〇俳文集 文集・補遺 〇評言集 貝おほひ・田舍句合・常盤屋句合・初懐紙評註・野の原 〇紀行集 甲子吟行・鹿島紀行・笈の小文・更科紀行・奥の細道・嵯峨日記 〇書簡集 消息集・補遺 〇語錄集 葛の松原・去來抄・三冊子・山中問答

外篇 〇虚栗 〇冬の日 〇蛙合 〇春の日 〇曠野 〇其袋〇嘯〇猿蓑〇深川集〇炭俵〇別座敷〇笈日記〇續猿蓑〇韻塞〇小文庫

附錄 枯尾花〇芭蕉翁行狀記〇全傳〇芭蕉翁繪詞傳 〇年譜

第四卷 第五卷 近松名作集 上 下（第二回配本濟）（第六回配本濟）

〇花山院后諍 〇世繼曾我 〇賢女手習并新曆 〇門出八島 〇凱陣八島 〇源氏烏帽子折 〇出世景清 〇團扇曾我 〇蟬丸 〇最明寺殿百人上﨟 〇曾根崎心中 〇薩摩歌 〇雪女五枚羽子板 〇用明天皇職人鑑 〇心中二枚繪草紙 〇兼好法師物見車 〇碁盤太平記 〇卯月紅葉 〇堀河浪鼓 〇卯月の潤色 〇心中重井筒 〇傾城反魂香 〇心中萬年草 〇丹波與作待夜の小室節 〇淀鯉出世瀧德 〇五十年忌歌念佛 〇栬狩劍本地 〇今宮の心中 〇百合若大臣野守鏡 〇心中刃は氷の朔日 〇夕霧阿波鳴渡

○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川 ○心中天網島 ○津國女夫池 ○女殺油地獄 ○信州川中島合戰 ○心中宵庚申 ○關八州繋馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上（第十四回配本済） 下（第廿三回配本済）

○暦 ○本海道虎石 ○心中涙の玉井 ○金屋金五郎浮名額 ○金屋金五郎後日雛形 ○椀久末松山 ○富仁親王嵯峨錦 ○お染久松袂の白しぼり ○鬼鹿毛無佐志鐙 ○愛護若塒箱 ○傾城思升屋 ○八百屋お七 ○心中二つ腹帶 ○太塔宮曦鎧 ○須磨都源平躑躅 ○鬼一法眼三略卷 ○壇浦兜軍記 ○蘆屋道滿大内鑑 ○苅萱桑門筑紫轢 ○敵討襤褸錦 ○釜淵雙級巴 ○ひらかな盛衰記 ○夏祭浪花鑑 ○菅原傳授手習鑑 ○義經千本櫻 ○假名手本忠臣藏 ○双蝶々曲輪日記 ○一谷嫩軍記 ○本朝廿四孝 ○奥州安達原 ○關取千兩幟 ○近江源氏先陣館 ○神靈矢口渡 ○妹背山婦女庭訓 ○攝州合邦辻 ○新版歌祭文 ○伊賀越道中雙六 ○近頃河原達引 ○絲櫻本町育 ○繪本太閤記 ○名歡伽羅千代萩 ○鎌倉三代記

第八巻 歌舞伎脚本集（第十九回配本済）

○大名なぐさみ曾我 ○好色傳授 ○傾城淺間嶽 ○桑名屋徳三入船物語 ○加賀山廓寫本 ○殿下茶屋聚 ○隅田川續俤 ○男伊達初買曾我 ○あげまき助六郭の花見時 ○東海道四谷怪談 ○十六夜清心 ○忠臣藏年中行事

第九巻 浮世草子集（第十六回配本済）

○好色万金丹 ○御前義經記 ○けいせい色三味線 ○沖津白浪 ○傾城禁短氣 ○日本新永代藏 ○世間息子氣質 ○新小夜嵐 ○世間娘容氣 ○浮世親仁形氣

第十巻 怪談名作集（第十二回配本済）

○伽婢子 ○狗張子 ○怪談全書 ○英草紙 ○繁野話 ○雨月物語 ○唐錦 ○莠句冊 ○垣根草 ○漫遊記 ○附録百鬼夜行繪卷

第十一巻 黄表紙廿五種（第一回配本済）

○金々先生榮花夢 ○親敵打腹鼓 ○長生見度記

○嗟多雁取帳 ○狂言好野暮大名 ○大悲千祿本 ○江戸生艶氣樺燒 ○莫切自根金生木 ○文武二道万石通 ○孔子縞于時藍染 ○心學早染草 ○即席耳學問 ○廬生夢魂其前日 ○馬鹿長命子氣物語 ○世上洒落見繪圖 ○桃太郎發端話說 ○十四傾城腹之内 ○金々先生造化夢 ○忠臣藏前世幕無 ○世諺口紺屋雛形 ○稗史億說年代記 ○御誂染長壽小紋 ○的中地本問屋 ○人間萬事吹矢的 ○人間萬事吹矢的（草稿）

第十二巻 洒落本集（第廿四回配本済）

○百花評林 ○聖遊廓 ○月花餘情 ○異素六帖 ○遊子方言 ○辰巳之園 ○當世氣どり草 ○婦美車紫𪊲 ○妓子呼子鳥 ○深川新話 ○道中粋語錄 ○大通多名於呂志 ○愚人贅漢居續雁金 ○狂訓彙軌本紀 ○和唐珍解 ○令子洞房 ○通言總籬 ○田舍芝居 ○和歌始衣抄 ○古契三娼 ○女郎買糠味噌汁 ○田舍談義 ○娼妓絹籭 ○錦の裏 ○仕懸文庫 ○辰巳婦言 ○傾城買二筋道 ○讃極史 ○籬の花 ○廓宇久為壽 ○新潟後の月見 ○河東方言箱まくら ○色深狭睡夢 ○金鄉春夕榮

第十三巻 讀本集（第七回配本済）

○三七全傳南柯夢 ○占夢南柯後記 ○天羽衣 ○飛驒匠物語

第十四巻 滑稽本集（第三回配本済）

○風流志道軒傳 ○古朽木 ○阿多福假面 ○指面草 ○人遠茶懸物 ○無彈砂子 ○小紋雅話 ○奇妙圖彙 ○浮世風呂 ○早變胸機關 ○客者評判記 ○浮世床 ○人間萬事虛誕計 ○同上後篇 ○假名手本藏意抄 ○一盃綺言 ○古今百馬鹿 ○八笑人 ○七偏人 ○柳巷訛言 ○市川評判圖會室の梅 ○福來雀 ○一雅話三笑 ○言葉の花 ○鯛の味噌津

第十五巻 人情本集（第廿一回配本済）

○假名文章娘節用 ○春色梅曆 ○春色辰巳園 ○春色惠之花 ○英對暖語 ○梅見船 ○閑情末摘花

第十六巻 第十七巻 第十八巻 南總里見八犬傳

上（第四回配本済）
中（第九回配本済）
下（第壱回配本済）

第十九巻 狂文狂歌集（第廿六回配本済）

○曉月坊酒百首 ○世の中百首 ○雄長老狂歌集 ○貞德狂歌百首 ○吾吟我集 ○古今夷曲集 ○後撰夷曲集 ○狂歌うた合 ○卜養狂歌集 ○狂歌鳩の枝 ○貞柳全集 ○明和十五番狂歌合 ○狂歌若葉集 ○万載狂歌集 ○德和歌後万載集 ○狂歌才藏集 ○四方の留糟 ○吾妻なまり

第廿一卷 修紫田舍源氏 上（第五回配本濟）下（第十五回配本濟）

第廿二卷 第廿三卷 膝栗毛其他 上（第十回配本濟）下（第十一回配本濟）

○東海道中膝栗毛 ○續膝栗毛 ○續々膝栗毛 ○南總記行旅眼石 ○江戶前噺鰻 ○落咄彌次郞口

第廿四卷 第廿五卷 和文和歌集 上（第十三回配本濟）下（第二十回配本濟）

○賀茂翁歌集 ○にひまなび ○歌意考 ○天降言 ○うけらが花 ○琴後集 ○楫取魚彥家集 ○ひとよはな ○東遊日次記 ○藤簍册子 ○志濃夫迺舍家集 ○六帖詠草 ○同拾遺 ○桂園一枝 ○同拾遺 ○亮々遺稿 ○浦のしほ貝 ○しのぶぐさ ○言道歌集 ○良寬歌集 ○女流歌文集

第廿六卷 川柳雜俳集（第八回配本濟）

○武玉川十八篇 ○柳多留三十一篇 ○誹風柳多留拾遺十篇 ○川傍柳五篇

第廿七卷 俳文俳句集（第廿二回配本濟）

○獨言 ○鬼貫句選 ○七車 ○とく〳〵の句合 ○五元集 同拾遺 ○玄峯集 ○去來發句集 ○丈草發句集 ○風俗文選 ○鶉衣 ○千代尼句集 ○松の聲 ○太祇句選 ○同後篇 ○春泥發句集 ○樗良發句集 ○蕪村句集 ○蕪村文集 ○蓼太句集 ○井華集 ○靑蘿發句集 ○白雄發句集 ○曉臺發句集 ○闌更發句集 ○俳さんげ ○枇杷園發句集 ○成美家集 ○道彦發句集 ○乙二發句集 ○一茶句集 ○おらが春 ○屠龍之技

第廿八卷 歌謠音曲集

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段） ○艶容女舞衣（下の卷・酒屋の段） ○戀娘昔八丈（下の卷・鈴ヶ森の段） ○桂川連理柵（下の卷・帶屋の段） ○廓文章（吉田屋の段） ○傾城戀飛脚（下の卷・新口村の段） ○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段） ○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段） ○木下蔭狹間合戰（七つ目・竹中陣屋の段） ○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段） ○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段） ○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段） ○八陣守護城（八の切・正淸本城の段） ○生寫朝顏日記（宿屋の段） ○壺坂靈驗記（澤市內の段） ○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郞切腹の段） ○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切・碁立の段）

○河東節

○松の内 ○神樂獅子 ○隅田川舟の内 ○秀萬歳 ○灸すゑ嚴の疊夜着 ○酒中花 ○水調子 ○うかふ瀬 ○ぬれ扇 ○亂髪夜編笠 ○助六所縁江戸櫻 ○常磐帶花掛 ○道成寺 ○浮瑠璃供養 ○邯鄲 ○熊野 ○泰平住吉踊 ○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季 ○松づくし ○泰平船づくし ○高砂松の段 ○神樂高砂 ○疊繪の島臺 ○萬屋助六心中 ○自然居士過去物語 ○源氏妹が宿 ○夕霞淺間嶽 ○尾上雲賤機帶 ○源氏十二段 ○賴光大江山入 ○鉢の木 ○與作小萬夢路の駒 ○道行三度笠 ○鵜飼石和川 ○お夏笠物狂 ○競牡丹 ○源平妹春の鷄台

○常盤津節

○老松 ○子寶三番叟 ○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）○積戀雪關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○兩顔月姿繪（忍寶）○戻駕色相肩（戻駕）○帶文桂川水（お半）○倭假名色七文字（源太）○壽靱猿 ○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木）○寄罠娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衞獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○願絲緣苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新うつぼ）○薪負雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景淸 ○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女 ○戻り橋 ○三保の松 ○松の島 ○三世相錦繍文章（おその六三）○大森彥七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし島）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衞）○ゟ連理橋（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○茂懺悔睦言（扇賣高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○描筆力七以呂波（乙姬）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野 ○御代榮益穗富種（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春 ○榮能春延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草 ○其小唄夢廓（權八）○絲の五月雨（小菊半兵衞）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松清元（茶筅賣）○色山解深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間刈豆（かさね）○法

花姿色同（山歸り）○月花鼓友鳥（山姥）○雀花手向橋（吉原雀）○復新三組盞（大山參り）○道行浮塒鴎 ○道行旅路の嫁入（八段目・おかげ參り）○六歌仙容彩（文屋・喜撰）○彌生の花淺草祭（惡玉）○おどけ俄煮珠取（玉屋）○道行旅路の花聟（落人）○再春菘種蒔（舌出し三番）○初霞淺間嶽（淺間）○〆能色相圖（神田祭）○造鋲菊餞言　菊畑三菊）○菊嬉聞艶言（お岩）○傾假名色七文字（手古舞）○重褄閨の小夜衣（白綠）○明烏花濡衣（浦里）○梅柳中宵月（清心）○日月星晝夜の織分（支還星）○初櫓噂高島（三人三吉）○貸浴衣汗雷（夕立）○忍逢春雪解（三千歳）○色増袍夕映（雁金）○花雲助相肩（雲助）○青海波 ○助六曲輪菊（助六）

○新内節

○二重衣戀占（花咲綱五郎）○若木仇名草（蘭蝶）○千日寺名殘鐘（三勝半七）○眞夢血染袍袖（花園平三）○歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）○傾城音羽瀧（おとは七郎兵衛）○膝栗毛（赤坂の段）○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪（浦里）○明烏後眞夢○果身寶の段

○薗八節

○道行相合瓦鐘（梅川）○桂川戀の柵（お半）○鳥邊山 ○花街の色糸（植木屋）○道行菜種の亂咲 ○江戸の紡姿（おひな吉三郎）○道行椽花房（お花半七）○口舌八景（小いな半兵衛）○小春治兵衛互雄の段 ○夕霧

○江戸長唄（めりやす大薩摩を含む）

○矢の根五郎 ○無間の鐘 ○傾城道成寺 ○風流相生獅子（相生獅子）○二人椀久 ○英獅子亂曲（枕獅子）○百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）○高尾さんげの段（高尾懺悔）○天人羽衣 ○京鹿子娘道成寺（娘道成寺）○英執着獅子（執着獅子）○鳳流姝背の柱建（柱建）○門出京人形（水仙丹前）○亂菊枕慈童（菊慈童）○鐘入解脱衣（解脱）○鶴帽子照葉盞（鍋島帽子）○操鐘諸島帶（賤機・うしろ面）○初咲法樂舞（法樂舞）○ねこのつま ○妻排情の夏小立（與作）○鞍櫻字佐衛 ○百夜車（妾の鸚鵡寺小町（關寺）○春調娘七種（七種）○菊子飯面被（めんかぶり）○衣かづき思破車（破車）○童獅子 ○敦草吉原雀（吉原雀）○相生獅子 ○獅染分紅葉（もはなり）○隈取安宅松（安宅）○御代松子日初戀（小松曳）○其俤[illegible]（[illegible]そ）○關東小六後雛形（淺間）○其面影二人椀久 ○黒かみ ○女夫松高砂丹前（高砂丹前）○羽壽の草摺 ○勢五六力 ○吹雪の操形（鐘形征伐）○三重霞嬉敷顔鳥（三重霞傀儡師）○舞扇南生仙（舞扇）○濱松風戀歌（濱松風）○ゆかりの月 ○美面より○七枚續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）○遅櫻手爾葉七字（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・直摂蛋）○戀男舞松風（調松風）○再春菘種蒔（舌出し三番叟）○戀眞奇操台（大神）○四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）○閑鼓姿（八景・節季候・心猿・構女）○正札附根元草摺（正札附）○寄三津再十二支（小原女・乙姫・四つ竹）○其九綺彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）○

新獅子 ○三升猿曲舞(猿舞) ○石橋(外記の石橋)
○老松 ○不動 ○七所御攝初鐵漿(西王母・藪入
娘) ○大和い手向五字(官女・牛若) ○外記猿 ○
復新三組盞(初雁の傾城) ○廓三番叟(廓三番)
○歌へすゞ餘大津畫(藤娘・關三の座頭・關三の奴)
○月雪花蒔繪の巵(月の巻) ○拙筆力七以呂波(芝
翫の傾城・供奴・浦島・瓢箪鯰) ○八重霞賤機帶
(賤機) ○後の月酒宴島臺(角兵衛獅子) ○御攝玉海老
手遊(とんび奴) ○吾妻八けい(八景) ○六歌仙容
彩(業平小町) ○姿花後雛形(小鍛冶) ○初子日
○俄獅子 ○外記の傀儡獅 ○初しぐれ ○巽八景
○花翫曆色所八景(助六・景清・新鷺娘) ○勸進帳
○花兄弟十二月所作(若菜摘・鍾馗・雷) ○島臺 ○
軒端松 ○上農工商 ○秋色種 ○鸞鶴三番叟 ○
○花見車 ○手習子 ○織どの ○常磐庭 ○鶴龜
○五色の絲 ○今様小鍛冶 ○柳糸引御攝(裸三番
叟) ○壽 ○鞍馬山 ○翁千歳三番叟 ○廓丹前
○菖蒲ゆかた ○喜三之庭 ○紀州道成寺 ○連獅
子 ○時雨西行

○歌澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

第廿九卷 謠曲三百五十番集(第十八回配本濟)

脇能物

○翁 ○高砂 ○弓八幡 ○志賀 ○淡路 ○御裳濯
○代主 ○松尾 ○佐保山 ○養老 ○大典 ○放生川 ○老松
○白樂天 ○鶴龜 ○東方朔 ○白髭 ○大社 ○源太夫 ○寢
覺 ○鵜祭 ○輪藏 ○道明寺 ○難波 ○富士山 ○江島 ○賀
茂 ○竹生島 ○氷室 ○和布刈 ○逆鉾 ○九世戸 ○要石
○嵐山 ○金札 ○岩船 ○玉井 ○西王母 ○吳服 ○右近 ○
繪馬 ○鱗形 ○內外詣

修羅物

○田村 ○八島 ○箙 ○忠度 ○俊成忠度 ○經政
○通盛 ○兼平 ○知章 ○賴政 ○實盛 ○清經 ○朝長 ○巴
○敦盛 ○生田敦盛

三番目物

○野宮 ○井筒 ○東北 ○梅 ○佛原 ○采女 ○
芭蕉 ○墨染櫻 ○身延 ○半蔀 ○夕顏 ○雪 ○楊貴妃 ○江
口 ○定家 ○千手 ○二人靜 ○六浦 ○藤 ○杜若 ○小鹽 ○
雲林院 ○誓願寺 ○羽衣 ○落葉 ○遊行柳 ○西行櫻 ○葛
城 ○瀧田 ○三輪 ○卷絹 ○吉野靜 ○住吉詣 ○松風 ○熊
野 ○草紙洗小町 ○山姬 ○祇王 ○吉野天人 ○胡蝶 ○鷺
○源氏供養 ○大原御幸 ○關寺小町 ○鸚鵡小町 ○檜垣
○姨捨

四番目物

○三井寺 ○櫻川 ○柏崎 ○百萬 ○玉葛 ○浮
船 ○三山 ○籠太鼓 ○籠祇王 ○隅田川 ○蟬丸 ○花筐 ○
雲雀山 ○飛鳥川 ○班女 ○加茂物狂 ○水無月祓 ○室君
○初雪 ○花軍 ○富士太鼓 ○梅枝 ○鳥追船 ○竹雪 ○藍
染川 ○水無瀨 ○砧 ○求塚 ○卒都婆小町 ○女郎花 ○通
小町 ○戀の松原 ○善知鳥 ○阿漕 ○藤戸 ○松虫 ○錦木
○船橋 ○綾鼓 ○戀重荷 ○鐵輪 ○葵上 ○道成寺 ○雨月
○木賊 ○弱法師 ○景清 ○俊寬 ○攝待 ○鉢木 ○土車 ○
高野物狂 ○蘆刈 ○盛久 ○小督 ○春榮 ○仲光 ○重盛 ○

楠露○櫻井○正行○木曾○七騎落○安宅○切兼曾我○元服曾我○小袖曾我○藤榮○自然居士○東岸居士○花月○放下僧○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○菊慈童○枕慈童○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○箙之巻○湛海○忠信○錦戸○現在巴○關原與市○禪師曾我○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

五番目物

○鍾馗○[illegible]○熊坂○項羽○昭君○松山鏡○野守○檀風○烏帽子折○鞍馬天狗○善界○車僧○第六天○大會○葛城天狗○松山天狗○舎利○殺生石○小鍛冶○鵺○雷電○谷行○國栖○春日龍神○大蛇○愛宕空也○龍虎○飛雲○大江山○羅生門○土蜘蛛○現在鵺○安達原○紅葉狩○船辨慶○碇潜○張良○皇帝○一角仙人○融○須磨源氏○絃上○海士○當麻○來殿○山姥○石橋○合浦○猩々○大瓶猩々

番外物

○鼓の瀧○徑山寺○兵揃○横山○玉取○利[illegible]○四季○由良物狂○香椎○内府○島廻○玉島○現在經政○卒都婆流○當願暮當○徒然○上宮太子○松商物狂○蛙○恭○吉野○定家一字題○眞方○近江八景○博多物狂○初瀬六代○舞車○舞車○倶利加羅落○隠岐院○阿古屋松○反魂香○笠取○太刀堀○母衣○更科○五輪碎○西讃八景○鶴龜○囀○菊露○奈良八景○山家秋○東國下○西國下○弓矢立合○箱崎○鵜羽○布留○鼓瀧○阿古屋松○芳野○香椎○浦島○伏見○上宮太子○吉野詣○笠卒都婆○貞任○伏木曾我○明智討○柴田○北條○空蟬○高安○狭衣○高安小町○安達靜○宮城野○朝顔○實方○高野詣○隠岐陸○丹後物狂○富物狂○島廻○松浦物狂○和國○松浦○粉川寺○反魂香○[illegible]龍田○池貫○[illegible]花○守屋○佐々木○齋藤五○横山○春近○十番切○千引○豐干○護法○常陸帶○現在千方○泣不動○樒天狗

第三十卷 風俗圖繪集（第廿七回配本濟）

○和國諸職繪盡　○和國百女　○浮世繪（師宣、清信、清倍、清重、政信、清滿、清長、清隆、俊滿）○大和耕作繪抄　○繪本江戸紫　○繪本花葛蘿　○浮世繪（春信）　○繪本吾妻抉　○浮世繪（政演）　○四時交加　○浮世繪（重政、寫樂、湖龍齋、文調）　○役者夏の富士　○浮世繪（春章、春好、春潮）　○繪本滿都鑑　○浮世繪（北齋、豐春、英山、豐國）　○繪本江戸土産　○浮世繪（廣重、國長、國貞）　○駿河舞　○青樓年中行事　○浮世繪（歌麿、英之、英昌）　○繪本家賀御伽　○繪本御伽品鏡　○百人女郎品定　○繪本常盤草　○女中風俗艶鏡　○長崎繪

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて二圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）